

【更新停止】 紅次元ゲイ
ムネプテューヌ 深紅
の呪血

APOCRYPHA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紅次元……幻想種の最後の勢力である吸血鬼達が住まう世界であり、同時に女神と女神の守護する人間達が住まう世界でもある。

そこに、遙かなる古より続く因縁……光と闇の争いへと、狂気に満ちた紅い月が……終わらない夜の申し子がどのような幕引きをもたらすのか

2019 1/8 22:44 諸事情により更新停止しました

目次

mk2編 序章く違えた世界のプレ リユードく	
プロローグ 改善後	1
第一章く血塗られたマーチく	
第一話 改善後	4
第二話 改善後	11
第三話 改善後	17
第四話 改善後	22
第五話 改善後	31
第六話	40
第七話	47
第二章く黒い二人のワンダーソングく	
第八話	56
第九話 改善後	63
第十話 改善後	67
第十一話 改善後	73
第十二話 改善後	82
第十三話	91
第十四話 改善後	94
第十五話	99
第十六話	106
第十七話 改善後	113
第十八話 改善後	122
第十九話 改善後	130
第二十話 改善後	135

第三十二話	234
第三十一話	225
第三十話	218
第二十九話	211
第三章く緑と白のララバイ	
第二十八話	196
第二十七話	188
第二十六話	182
第二十五話	175
第二十四話	165
第二十三話	158
第二十二話	148
第二十一話	141

第三十三話	239
第三十四話	245
第三十五話	252
第三十六話	257
第三十七話	262
第三十八話	269
第三十九話	274
第四十話	281
第四十一話	288
第四十二話	298
第四十三話	304
第四十四話	313
第四十五話	319

第四十六話	326
第四十七話	333
第四十八話	340
第四十九話	348
第五十話	361
第五十一話	369
第四章〜女神救出のワルツ〜	
第五十二話	378
第五十三話	387
第五十四話	392
第五十五話	397
第五十六話	405
第五十七話	410

第五十八話	419
第五十九話	426
第六十話	432
第六十一話	437
第六十二話	444
第六十三話	453
第六十四話	461
第六十五話	469
第六十六話	479
第五章〜呪いの剣のファンタジア〜	
第六十七話	484
第六十八話	491
第六十九話	497

第七十話	503
第七十一話	510
第七十二話	518
第七十三話	523
第七十四話	532
第七十五話	541
第七十六話	551
第七十七話	560
第七十八話	568
第七十九話	574
第八十話	584
第八十一話	592
第八十二話	600

第八十三話	611
第八十四話	620
第八十五話	627
第八十六話	641
Re ; Birth 3 編 第一章〜呪怨の オーベルテュール〜	
第一話	651
第二話	657

mk2編 序章く違えた世界のプレリユードく

プロローグ 改善後

——プラネタワー最上階

ここは無駄に発展しているプラネテューヌの象徴——だったか？まあ、摩天楼が並んでいるこの国の首都でも群を抜いて高いプラネタワー最上階、最近は何故か治安も悪いので矢鱈アクティブで街でサボっているあの女神が無事かどうかを観に気紛れでやって来たが……………

「両方とも留守……………か」

「はい、ただいまネプテューヌさん達は治安悪化の原因である組織の鎮圧に四カ国の女神様達と向かわれました」

……………この通り、ものの見事に当てが外れてすれ違つたらしい。目の前にいる妖精種？によく似た容貌——1mちよいで金髪ツインテールをして、背中には蝶っぽい一對の羽根があるにも係わらず、何故か本に載つて空中に浮いている教祖のイストワール曰く、ネプテューヌは妹のネプギアを連れて最近和解した他国の女神と共同戦線を張り大仕事をしているらしい。

しかしまあ、妹の方や他の連中はさておきネプテューヌが仕事をしている………か
明日は槍の雨でも降ってくるのだろうか？

「それで、何時帰ってくるのだ？ どうせ奴の事だ。能天気遊び倒して帰ってくるのだ
と思うが、他の連中もいる以上はある程度自重して帰ってくるのだろうか？」

それまでは適当に時間を潰してぶらついているとするか………幸いにも、この国は機
密が少ないのか他の国の教会と違い散歩の制限も少ない訳だし。

「……………なっ?!」

そんな事を考えていた時、目の前にいるイストワールが急に慌て出した。

「どうした？ 急に慌てて……………バグったのか？」

バグか……………だとしたら何処に修理に出せばいいのだろうか？

「違います！ ネプテューヌさん達が負けたんです!」

……………はあ？

「……………冗談だろう？ アレ等全員の相手とか、俺でもお断りなぐらいには面倒なのだが
……………」

実際に、あいつ等全員を同時に相手にするのに固有能力で壊す前提なら普通に勝てる
が、肉弾戦や魔法戦で競いたいかと聞かれると即答でNOだ。

「私はこんな冗談を言いません。急いで対策をしなければならぬので、私はこれで失

礼します」

そう言つて、イストワールはかなりの速さで部屋を出て、ドアを開けつばなしのままおそらく対策本部があるだろう階層に降りて行つた………何故か階段で

「……いや、急いでるならエレベーター使えよ」

そんな一言が口から出たものの、それを聞く者は既に居ないのであつた。

………これ、どう動くべきかねえ？

「取り敢えず、アイエフかコンパ辺りにここの端末からメールでも送つて知らせてやるか？」

我ながら意外と呑気な行動だが、そこまで慌てる気も起きないのでまあいいかと流しているのであつた。

「………さて、これからどうするか……取り敢えず、真祖の連中が嫌がらせの類で動くならとつくに干乾びてるだろうけど、連中は最近特に大きな動きが無い以上は関係ないだろうし、適当に散歩してるかな？」

そう呟いて、俺はプラネターの屋上へ出て、留めて置いたモンスター血で出来た非常食兼移動手段に潜り、プラネターから去るのであつた。

第一章く血塗られたマーチく

第一話 改善後

——ギョウカイ墓場

無駄にオドロオドロしいゲーム機やCDソフトの残骸と思われるモノで構成された山が複数……と云うか山のように存在する地。

ゲーム会社やごみ処理業者にとっては地獄絵図としか表現しようがない、ゴミ屋敷も真つ青なほどに積み上げられたそれらの残骸が溢れんばかりに散乱し、地平線の果てまで続いているその場所の名はギョウカイ墓場。

ゲームギョウ界で死んだモノは皆等しくそこに送られ朽ちていく。

だが、現在そんな場所に似つかわしくない生者達がさまよっていた。

そう！アイエフとコンパと呼ばれている二人の少女達だ。

「ふう……中々見付からないわね」

「そうですねえ……わたしは早くねぶねぶ達を助けて帰りたいですう」

「そうね……かれこれ数日は探してるけど、本当に見付かりやしないわ」

どうやら、二人は数日ほどさまよっているらしく、本当に疲れているような顔をして

ぼやいている。

その疲労具合を表しているかのように、心なしかアイエフは腰まである茶髪が乱れ、コンパはオレンジ色の髪とセーターに所々、周囲の残骸から付いたのだろう螺やプラスチック片が絡み付いていた。

「所でコンパ、今更だけどここ雰囲気つて結構オドロオドロしいけど……大丈夫なの？」
「はいです……ここに来る前に見たあなざーさんが戦った跡のせいでこのぐらいは大丈夫になってたです」

「……ああ、あのR18G指定確定の残骸見たらね……そもそも、アイツはこの非常事態に一体なにやってんのよ」

そう言って、アイエフは地面に転がっていた石を蹴り飛ばす。

どうにも、相当ストレスが溜まっているらしい。蹴り飛ばされた石はかなり遠くまで飛んで行った。

コンパはコンパで、アナザーと呼ばれた人物が戦闘を行った跡を思い出したのか相当気分が悪そうな顔をしている。

「全くアイツは……人に一方的に連絡入れて自分は何年も行方知れずとか、見付けたら扱き使ってやるわ」

「それに、幾ら悪い人達でもあんなにやることはないです。見付けたら真っ先にお説教

です」

そうして憤慨していた二人だが、しばらく憤慨していると時間の無駄だと思ったのかまた搜索を再開し始めた。

「……………」

暫く歩き、ゲーム機やCDソフトの残骸の山を幾つか越えた辺りで拓けた場所に出た。

そして、その場所にはコードらしきナニかに縛られR15位にはなりそうな格好をした5人の少女達がいた。

「ねぶ（子）ねぶ!!」

アイエフとコンパは探し人が見付かったらしく、自分達が立っていた山を駆け降り、コードらしきナニかに縛られた少女達に駆け寄った。

「ひどいですう……女神さん達がこんなことに」

「コンパ！助けるわよ。アレを出しと「そこだア！」なっ!?!」

不意打ちで叩き付けられた、斧の接続部分に髑髏の意匠があらわれた巨大な黒いハルバードの斧のような部分を間一髪で避けたアイエフは、青を基調としたコート袖口に収まっている両手の甲から一本ずつの刃物が付いた籠手のような武器———カタルを構えて迎撃する。

「コンパ！コイツは私が抑えておくから急いでアレをネプ子達に使って！」
「わかりました！任せてくださいです」

そう言つて、コンパがカバンから取り出したのは、光の加減で様々な色に光る球体の水晶だった。

「つまらねー牢屋番をさせられてたんだ！精々オレを楽しませろよおおおおお
!!」

「うるさいってーの！コンパ、そのシエアクリスタルを使って！ネプ子達を任せたわよ
！」

「はいです！アイちゃんも頑張つて下さいです」

「当然！それに、別に倒してしまつても良いんでしよう!？」

「アイちゃん！それ負けフラグですよ!？」

そう言いつつも、コンパはシエアクリスタルを掲げてその輝きを女神達に照射する。

「……………う……………う……………ここ、は?」

そう言つて目覚めたのは、腰まで伸びた長いピンク色の髪をした少女だった。

「ギアちゃん！良かったです。兎に角他の女神さん達も「キャアアア?」ですよ!？」

目覚めた少女に、嬉しそうに声を掛けたコンパだったが、その時、自称牢屋番を名乗る黒く攻撃的な見た目をしているロボットと戦っていたアイエフがコンパのいる辺りま

で吹き飛んできた。

「っ!? アイエフさん! コンパさん!!」

「イタタタタ……このぐらいは大丈夫よ。ネプギア、三年振りね? 悪いけど詳しい話は後にしてちょうだい」

そう言つて、アイエフは半ばからへし折られたカッターを構えて迎撃の姿勢を構える。

「弱い……弱すぎるううう!! この程度じゃオレの渴きは満たされねえ! 闘争の甘美な美酒で酔えねえんだよおおおおお!!」

「アイエフさん! 逃げてください!」

そこに、黒いロボットと思われる者が巨大な黒いハルバードを構えて突進してくる。その姿は、黒いロボットがとても攻撃的な見た目をしている事もあつて、まるで死神が命を狩り獲ろうとするかのような情景を思わせる。

それを見たネプギアは、アイエフを助けようと先程まで全身を縛っていたコードを振り払い、女神のみが保有する神器——マルチブルビームランチャー M P B Lを具現化させて、白を基調とした機体の銃身部分からビームの発射体制に入り、ビームによる迎撃を図る。

「これで……逝ってください!!」

「効くかそんなもおおおん!!」

そして、どうにか間に合って発射したビーム砲だが、敵を足止めする程度にしかならないうまく発揮していない。

それでも、時間稼ぎにはなっているのだが……………

「ゴフツ……………まだ……………」

発射しているネプギアもMPBLも、病み上がりで長くは持ちそうにない。

ネプギアは口から血を吐き、マルチプルビームランチャーMPBLは現在進行形でビーム砲を放っている汎用

機関銃のような部分も、その下部に接続されているエネルギーで紫色の刃が形成されている刀風味の部位からも煙を吐き出し、今にも爆発しそうである。

(なにか……………なにか無いの!?このままじゃジリ貧だよ……………そうだー)

ネプギアは、時間を稼ぎながらどうにかしようと考えて、何かを思い付いたように顔をあげる。

「コンパさん!それ」

「えっはい」

そう言つて、コンパが持っていたシエアクリスタルを受け取り空に翳すと……………

ピカーン!!(パリーン)

「ギヤアアアアアアアア!!目が!?目がああああああ!!」

周囲を強烈な光が強烈な光が包み、敵のロボットの目を潰すことに成功した。

しかし、その代償にシエアクリスタルは粉々に砕け散りその役目を果たしたかのように霧散してしまった。

「どうか……これ、で……」

「ギアちゃん!」

そして、ネプギアも力を使い果たしたのか倒れてしまい、死んだように眠ってしまった。

「悔しいけど、逃げるわよ!コンパ!」

「ですけど、まだ他の女神さん達が……」

「今はそれどころじゃ無いの!このままじゃアイツの手で全滅よ!」

「うおおおおお! テメエ等ア!! 目が戻ったら覚えとけえええええええええええ!! 全身を引き千切ってバラ撒いてやらああああああ!!」

そう言うってアイエフが指差した先には、怒り狂い見境なく暴れまわる黒いロボットがいた。

「うう………ねぶねぶ、もう少し待っててくださいね?」

「急ぐわよ!」

そう言うって、二人はどうか救出出来たネプギアを連れて転送ゲートがある場所まで一直線に逃げ出したのだった。

第二話 改善後

バーチャフォレスト

緑溢れる自然公園の大きな木下

元はスライヌを代表とする弱小モンスターの巢窟で、子供の遊び場として機能していたそこは、犯罪組織の横行とそれに伴った四女神の失踪により、幸いにも危険なモンスターが出た訳ではなかったが、スライヌ等の弱小モンスターの数が増大し狂暴化した影響でクエストの処理も追いつかなくなり、冒険者やハンターも駆け出しでは膨大な数の暴力により圧殺されてしまい、数が多くても問題なく討伐できる中堅冒険者以降の層からも、弱小モンスターしか居ない関係上旨味が殆ど存在しない事から放置されてしまい、すっかり廃れてしまっていた。

そんなバーチャフォレストでは、現在蒼い血が溢れて池のようになりスライヌやダイコンダー等の残骸が大量に溢れた凄惨な光景が展開されていた。

中でも特に凄惨なのは、殆どの死骸には同士討ちをしたとしか思えない状態で転がっている、数匹のスライヌの死骸だ。

その数匹のスライヌ達は、ある個体はその全身に牙で付けられたような歯形があり、

またある個体は名前の由来にも関係している犬のような口や耳、尻尾を耖り取られ、スライヌではなくスライムと化している。

そんな死骸が溢れた蒼い血の池の中心部だったが、そこだけはまるで平和そのものであり、一滴も血が溢れておらず、そんな台風の目のような場所には一人の紅い血のような長い髪をした男が立ち、やる気がなさそうに周囲を眺めていた。

「久し振りにここで昼寝しようとして来てみればうじやうじやと……雑魚の血は不味いから、適当な一体を汚染して内側からぶち壊してやったが、昼寝出来る環境じゃ無くなつたな……面倒な事だ」

そう言つて、男は暫く考え込むような動作をすると妙案でも思い付いたのか顔を上げる。

「取り敢えず、この奥地に雑魚の入り込まない良さげな昼寝ポイントがあつたはずだからそこで寝よう」

そう言つて、男は森の奥地へと向かつて行つたのだつた。

ギルド：プラネテューヌ支部内

一方その頃、女神救出に半分失敗したアイエフ達はどうにか救出に成功した『女神候補生』ネプギアのリハビリの為に、ギルドでスライヌ退治のクエストを受けていた。

「さて、このくらいならリハビリにも丁度良いでしょうし、スライヌ退治にバーチャフォレストに行きましょう」

「そう言えばアイちゃん、ギアちゃんを助ける前にバーチャフォレストに行きましたけど……………」

アイエフがバーチャフォレストの名前を出した際に、微妙に蒼い顔をしながらコンパは声を上げる。

「どうしたのって……………言うまでもなかったわね」

「はいです。あれはひどい光景だったです……………」

二人としては、余程思い出したいくない光景だったのか、微妙に吐きそうな顔をしながら遠い目をしている。

そんな空気の中、話に着いて行けないネプギアは心配そうな顔をして声を掛ける。

「あの、バーチャフォレストがどうかしたんですか？」

「ああいや、アンタは気にしなくていいのよ。寧ろ見ない方が良かった訳だし」

さあ、さっさと行くわよつと、アイエフはコンパを伴い、急かすようにギルドを出て目的地のバーチャフォレストに向かって行った。

「……………？…つて、待ってくださーい！」

不思議そうにそれを見ていたネプギアも、自分が置いて行かれそうな事に気が付き、

急いでアイエフの後を追い掛けたのだった。

バーチャフォレスト

「おかしいわね……何時もならその辺にうじゃうじゃ居るスライヌが、今日に限ってこんなに少ないだなんて」

「そうですね……犯罪組織が台頭してる影響で、モンスターさんも活発になつて、普段は人の影を見ただけで突進してくるのに、今日に限っては殆ど出て来ませんねえ」

そう言つて、二人は周囲をキョロキョロと眺めて目的のスライヌを探す。

「あの、アイエフさん。わたし達が捕まつてる間にそんなにモンスターがいっぱい出てくるようになったんですか?」

「ええ、普段はこの辺にも、広場を埋め尽くす勢いで溢れ返つて、とてもじゃないけど奥まで行けなかつただけど……」

「今日に限つてはモンスターさん達を少しも見ませんねえ」

救出されたばかりで、イマイチ状況が分からないネプギアはアイエフ達に問いかけているが、返つてきた答えと現状を比べた差異に疑問が深まつただけらしい。

チンパンカンパンとでも言いたげな顔で周囲を見回している。

実際問題、ネプギア達一行がバーチャフォレストに入ってからスライヌを含めて、モンスターに遭遇した回数はほんの数回ほどでしかなく、その過程でスライヌの討伐クエストはどうか達成したのだが、アイエフとコンパは状況がおかしいと言う事で、バーチャフォレストの奥地にまで向かっているのだ。

「……………」

そして、暫く森の中を進むと、今度は開けた広場のような場所に出たのだった。

……………厳密には、スライヌを筆頭にチューリップやダイコンダーを含めた残骸と、蒼い血が池のようになってい『広場だった』と思われる場所ではあったが

「アイちゃん……………これって…………？」

「ええ、そうでしょうね……………相変わらずエグイ戦闘跡を残していくわ……………まだ遠くには行ってないでしょうし、探し……………って、ネプギア？」

「……………」

二人して、気分が悪そうな顔をしながらコンパとアイエフが今後の相談をしている時に、一人呆然と立ち竦んでいるネプギアを見てアイエフは声をかけるが、異様に反応が薄い。

「……………キュ〜」

「気絶してるですう」

「仕方無いわよ。私だって前に見た時は吐きそうな位キツかったし」

そう言って、アイエフはネプギアを背負うと、コンパと共にバーチャフォレストの入り口へと向かって行くのだった。

……その後、意識を取り戻したネプギアは色々なショックから更にネガティブなオーラを纏いへこんだの言うまでもない。

第三話 改善後

ギルド：プラネテューヌ支部内

「……………ふう、報告完了つと」

バーチャフォレストから気絶したネプギアを連れてプラネテューヌに帰還したアイエフは、ネガティブな空気を纏っているネプギアをコンパに任せて教会へ連れて行って貰い、1人ギルドでクエスト達成の報告をしていた。

「今回のクエストでアイツが意外と近くにいる事がハッキリしたわね……………この三年間、一体何やってるんだか」

そう言いながらギルドを出たアイエフは、ネプギア達との合流場所に向かう道中で1人呟く。

「……………まあ、今はその事よりもゲームキャラの方が重要か……………なんか、その道中でばつたり会いそうな気はするけど」

そもそも、アイエフがギルドの報告を1人でしていたのには理由があった。

イストワールがネプギア救出成功の後にネプギア達へ語っていたゲームキャラの居場所がようやく判明したのだ。

なんでも、プラネテューヌのゲームキャラは非常に気紛れな性格らしく、長期間一か所に留まる事無くプラネテューヌ各地を転々としているので犯罪組織もこの三年間で一度も捕捉出来なかったとかで現時点では無事なのだが……ゲームキャラは現在地を報告をすると言った思考も無いようで、教会側まで居場所を知る者が居ないと言う事態に陥っていたらしい。正直、プラネテューヌらしいゲームキャラだと思った。

らしいと言うのは、アイエフ達諜報員の仕事は対犯罪組織班として全員組み込まれており、ゲームキャラの居場所捜索にはイストワールが行方不明のアナザー（最大戦力）捜索を隠れ蓑にして同時進行で極秘裏に進めていた為に詳しい事は殆ど知らないのだ。

「ネプギアは精神状態が不安定だし、アナザーはアナザーで行方不明で音信不通だし……^{ダンピール}半吸血鬼組合は数少ないマジエコンユーザーになってない正常な戦力だけど街の防衛戦力としては外せない……と言うか、プラネテューヌ防衛戦の際かネプ子の言う事以外聴きそうにもないから酷く扱い難い……ギルドの上級冒険者はマジエコン漬けで殆ど働かないし中堅以下の冒険者は戦力としたら不安が多い」

これまで、アイエフは現時点までのプラネテューヌの戦力と勢力図を頭に描きこれからどうすればネプテューヌ達を助けられるか考えていた。

そもそも本来ならプラネテューヌには女神であるネプテューヌを筆頭に大きな勢力や個人戦力が多数あり、シエアの量こそ四カ国一少ないが、単純な戦力比で言えばル

ウィーを除いた国2つと同時に戦争しても勝てない戦争になる事は殆ど無いのだ。ただ、今代に到るまでの女神達の様々な方針から結局一度も本気で戦争する事は無かっただけで……

しかし、犯罪組織が台頭してからは何処も彼処もガタガタで、最悪の事態である首都陥落は熱心な人間の首都防衛部隊やうっかりネプテューヌが防衛戦だけ頑張つてと言う歴代女神からのお願いを解除し忘れてとっ捕まっている為に継続している半吸血鬼組合の首都防衛隊により防がれているが、冒険者達を筆頭にした一部の戦力のマジエコンューザー化が主な要因でモンスター退治に手が回らないでいる。

その結果、幾つかの村が壊滅に追い遣られ、生き残った難民達が中規模以上の街に集まり出来たスラムから治安も悪化の一途を辿る事態に陥り、治安の悪化から生活の苦を忘れようとマジエコンューザーが増える悪循環が発生している。

それらを解決する為に救出したネプギアのリハビリに力を入れる事になったが、今回のネガティブなネプギアの姿を見てある決心をしていた。

「結局の所、私が頑張るしかなさそうね。変身も出来ないぐらい精神的なトラウマを受けてるあの子を無理に戦わせて死なれたらとうとうこの国も終わりでしょうし……」

一通りの考察を終えたアイエフは、コンパとネプギアを連れてゲームキャラの現在地であるバーチャフォレスト奥地へ向かって行くのだった。

——ネプギア視点で凹む——
同刻、プラネテューヌ教会

「はあ……」

(憂鬱です……)

バーチャフォレストで無数の残骸を見て、ふつと意識が飛んでいくような感覚を覚えてからどれだけの時間が経ったのか……

何時の間にか^{プラネテューヌ教会}プラネタワーの最上階に在る自分の部屋で目覚めた私は、ベットのうえで膝を抱えながら蹲って、こんな調子でお姉ちゃんを助けられるのかと独り黄昏ているのでした。

「スライヌが合体して、アイエフさんに促されるまま変身しようとしても失敗して……」

挙げ句の果てに気絶……ははは……」

なんでか分からないけど、変身は出来ないし……スライヌには鼻で笑われるし……
挙げ句に気絶するし……

「……こんな事で……お姉ちゃんを助けられるのかな……?」

でも、私が助けないと……私が、三年前に足を引つ張つちやつたから、こんな事になつたのに……

「ううん……頑張らないと……私が、お姉ちゃんを助けるんだから……!!」

(……でも、私なんかにそんな事が出来るの……?)

「ギアちゃん! アイちゃんが帰つて来たので、ゲームキャラさんの所に行くですよー?」

「あ、はい! 今行きます!」

……きつと、ゲームキャラさんから力を借りれば、お姉ちゃんだって助けられる……よね?

こうして、私達は、いーすんさんから聞いたゲームキャラさんの今の居場所——バーチャフオレスト深部へと向かうのでした。

第四話 改善後

バーチャフロレスト最深部

ガン！ガリツ！ ガンガン！！ギヤリギヤリ！

ウオーーローン！！ ギチギチギチギチ

バーチャフロレストの奥深く。

普段は静かで、蟲の鳴き声や木々の葉が擦れる音位しか聞こえず、犯罪組織が幅を利かせている昨今では数少ない『平和』な森の奥だったのだが、現在は森の獣やモンスターが暴れ回り、木々は倒れて花は散り、地面には光ながら粒子に変換されかけている植物の残骸や獣の血と肉と臓物が散乱する神秘的ながらも凄惨な風景と化していた。

そんな森の中、1つのディスクを囲んで立っている人間が2人居た。

「チツ……頑丈なディスクだなアオイ」

「確かにな……面倒な仕事を引き受けてしまったよ。本当に……」

1人は、ネズミをモチーフにしている灰色のパーカーを着て鉄パイプを肩に担いだ灰色の肌の少女？で、もう1人は蒼い服を着てその上から純白のコートを羽織っている銀色の瞳が特徴的な黒い表紙に金色の刺繍が施された分厚い本を持つ蒼い髪の青年だっ

た。

「……急ぐぞ。アイツに見付かったら私でもただでは済まぬ」

「わーってるよ！だから急いでんだろが!!これ以上急げってんならテメエも手伝いやがれ」

「断る。何故、私が下つ端程度の指示に従わねばならん」

「誰が下つ端だ誰が!!」

「構成員は下つ端だろうに………不服なら部隊長にでもの上がつて出直して来い」

そんな風に言い争いながらも、下つ端と呼ばれた少女？はディスクを殴る手を止めないし、蒼い髪の青年も周囲を異様に気にしている。

2人は何かに怯えるように焦っていて、任務でなければ疾うに逃げ出していると言わんばかりに周囲を警戒しながら全力で紫色のディスクを殴り倒していた。

そして、そんな2人の必死の努力も間に合わず、死神の鎌が振り下ろされようとしていた。

「………最後の言葉は、それで良いかあ？」

「?!?!」

そして、周辺一帯に大きな爆音が響き渡った。

同刻 バーチャフォレスト最深部 入り口

一方でその少し前、プラネットユーンの教祖イストワールからゲームキャラの情報を受け取ったネプギア達は、バーチャフォレストを抜けてその最深部の入り口に居た。

「ここに、ゲームキャラが……」

「どこから探せばいいんでしょうか？」

「さあ？奥まで行けば分かるんじゃないかしら」

そう言つて、ネプギア達を先導しようとアイエフが先頭に立った瞬間、バーチャフォレストを揺るがす程の爆音が響き渡つた。

「な……何?！」

「分かりません！でも、急がないと……ゲームキャラさんが危ない!!」

「ツツ!!急ぐわよ!」

アイエフ達は、先程の爆音である最悪な結末を想像した。

即ち、犯罪組織によるゲームキャラの破壊だった。

それを考えたネプギア達は、全速力でゲームキャラが居るだろうバーチャフォレストの奥地へと駆け出して行つた。

バーチャフォレスト最深度 side???

「ハア……はあ……殺ったか？」

先程まで緑豊かだったバーチャフォレストの最深度は、蒼い髪の青年が咄嗟に放った爆裂魔法によって灼熱の大地へと変貌を遂げていた。

燃え上がる火の手は周囲の巨木を燃やし、吹き飛んだ土は周囲に飛散する。

当然、モンスター達も例外ではなく、その身を焦がした黒い塊が周囲に四散し、光の粒子へと変換され続けていた。

「……………チツ……………もう、魔法は打ち止めだな。これ以上は帰還用の転移魔法にも支障をきたす」

本来、青年にとって先程の爆裂魔法は奥の手の1つであった。

少なくともこんな序盤の序盤に使用する魔法ではなく、ましてや帰還用の転移魔法を使うのに必要な最低限の魔力を除いた全魔力を使用して使うのは論外の一言であった。

しかし、命に変えてまで隠し通すようなレベルの切り札ではなかったので青年は爆裂魔法と言う奥の手を切ったのだ。

(しかし、本格的に乖離しているな……既に『知識』に頼るのは不可能か?)

このような思考から分かる通り、青年は所謂転生者……それも、神様転生と言われる分類に入る人物だった。

青年は前世ではしがない一般人であったのだが、心臓発作で急死した結果、神を名乗る老人の暇潰しに付き合う対価に2つの特殊能力を得ていた。

そして、生前愛用していたゲーム『超次元ゲーム ネプテューヌmk2』の平行世界に転生を果たしたのであった。

「しっかしまあ、相変わらずバカみたいな威力の魔法だよな？ 固有能力持ちつてのは皆こんなバケモンばつかなのかよ？」

「知るか……いいから下つ端は下つ端の仕事を全うしろ」

そして、青年は得たチート能力で無双してハーレムなり荒稼ぎなりをしようとしたのだが、非常に残念な事に、そこまで目立つような行いをするとう教会に目を付けられてしまふ可能性が非常に高く、うっかり自分の目的がバレると粛清されかねない状況が既に出来上がっていた。

（全く、前に俺のような存在を送り込んでいたのならそう言えと言うのに……お陰でこちらは予定が丸潰れだ）

どうにも、過去に自分と同じように神様転生をした存在がいたらしく、そのご同類は非常に『無茶苦茶』な輩だったらしい。

教会へお祈りに行った際に、偶然転生者への注意書を記した書物を観ていなければ多種多様な意味合いでアウトだった。

書物を見た限りでは、一般的な良識の範疇での行動を心掛けていれば消される心配は無いようだが、自分の目的は『あらゆる』魔法の研究とホムンクルス数体の美少女を侍らせる事なのだ。人間の美少女でも良かったが、はつきり言つて面倒な人間よりも法的には人形でしかないホムンクルスの方が色々都合がいい。

ただ、研究したいあらゆる魔法については禁術も含まれているし、ホムンクルスの方も製作には取得が難関な資格と莫大な設備費用に、一体製作する度に面倒至極極まりない書類審査が待っていた。

(だからこそ、私は犯罪組織に身を寄せている訳だがな)

そして行く行くは、幹部に出世して得た資金の裁量からホムンクルスの製造に手をかけて、犯罪神が復活した瞬間に組織を裏切り、どさくさに紛れて行方を眩ます際に眠っている犯罪神へ強烈な禁術を叩き込んで犯罪神の器を破壊するのだ。はつきり言つて、折角ホムンクルスを造つたのにゲームギョウ界諸共滅亡とか、溜まったものではない。

「しかし、先程の男は一体何だったのだ？」

「ああん？ テメエ、大隊長なのにそんな事も知らねエのか？」

(……ウザイ。やはり、人間の女などクソだな。こればかりはトリツクのロリペド野郎と同意見だ。)

私が先程の血のような男の事で疑問を口に出すと、訳知り顔で下つ端のリンダが長々

とウザイどや顔で説明を始めた。

曰く、あの男は何人もの犯罪組織の部隊を滅ぼしている。

曰く、あの男は今捕まっている女神達への信仰心はないらしいが何かの約定があるらしく、人質としての効果はない。

曰く、あの男と殺し合った者は発狂して血祭りにあげられる。

曰く、あの男は吸血鬼ツアンバイヤの系譜らしく、とある軍団長が死力を振り絞って付けた怪我がその場では再生しなかった事から半吸血鬼ダンピールではないかと噂されている。

以上の事から、無闇に接触する事を禁じられていて、接触した者への援軍はどんな理由があっても禁止されている。

「へへっ……まあ、結局はあの様だったかなア？」

「……へえ？そんな噂されてるんだ？」

「ああ！何でも、『血ナイトメア・ブラッドの彩りの悪夢』とか『血塗れ悪魔ブラッディ・デーモン』とか呼ばれてるらしいぜ？なにアツサリくたばっちまってよオ！マジでダツセエよなあ！」

「おい、今のは私ではないぞ!？」

「へ？」

ギギギギギギ……

そう言うのと、下っ端は声が聴こえてきた方向……つまり、私が居る場所の反対方向へ

た。

「チツ……転移魔法か!？」

そして、そんな声を最後に私の視界は白く塗り潰され、転移魔法による離脱は成功したのだった。

第五話 改善後

side アナザー

「ちっ……………逃したか」

周囲を強烈な光が包み、俺は敵を逃がした事を理解した。敵は意外に強固な魔法障壁まで張って身を護っていたのだ。

勿論、あと少しの時間があればあの程度の障壁はぶち破れたのだが……………勘が良かったのだろう。相手は事前に用意していたらしき転移魔法を使って逃げて行った。

『アナザー……………あと少しの時間があればここに女神候補生がやって来るでしょう。その時まで時間が稼げれば十分です』

「……………まあ、それもそうだな。でなければ何の為に三年間も森の奥に引き籠ったのか……………うん？」

その時、俺は先程の男達相手に自分が何をやってきたかを思い出して顔を蒼くせざるを得ない事に気が付いた。

「……………あ」

side out

side フェンリスヴォルフ

その日、フェンリスヴォルフは酷く不機嫌だった。

元々棲んでいた縄張りを二人の人間ゴミに荒らされ、襲い掛かった所を妙なディスクに押し込められてしまったのだ。

しかし、そんなフェンリスヴォルフにチャンスが訪れた。

己を捕獲した二人組が、これからやって来る男を殺せば己を解放すると確約したのだ。

本音を言えば、己を捕獲した人間ゴミに従えられるのは嫌だったが……だからと言って他にやりようも無かった。

プライドと自由の2つを天秤に掛け、結局は従う事を選んだ。

故に、今日の前にいる男を殺す事に理由はない。あの二人組が指定した人間ゴミかどうか等は論外である。

ただ単純に、目の前に男が来たから殺す。それだけでしかなく、己にとってはそれ以上の情報は必要ない。

何で危険種に襲われてるんですかあああああああああああああ!!!

いやそりゃあ、確かに道を間違えたかなって思いましたよ!? 思いましたけど!?

だからっていきなり何でフェンリスヴォルフに襲われるのくく!?!

そして、私達の息も絶え絶えな時、フェンリスヴォルフ追っ手も止まって私達の周囲を旋回し始めた。

「くっ……ネプギア! コンパ! アンタ達は先に行きなさい!!」

「そんな!? アイエフさん?!」

「いいから! ネプギア! コンパを連れて先に行つて!!」

「ダメです! アイちゃんを殺されちゃうですう!!」

「大丈夫よ! それに、早く行つてくれないと私も逃げられないじゃない!」

そんな時、アイエフさんが囹を買つて出てくれた。

しかし、あのフェンリスヴォルフは絶対にただのフェンリスヴォルフではない。明らかにヤバイ奴だ。

目は(元々紅いけど)血走って血の涙まで流しているし、口からは今も、呻くような声を上げて唾液のようなものを垂れ流しにしている。

これとアイエフさんが戦えば、万が一もなくアイエフさんは殺されてしまうかもしれない……でも、私が戦つてもそれは同じ事だと思ふ。

……いや……死にたくない……

「とにかく！私が時間を稼いでる間にアンタ達は逃げなさい！！アンタ達が逃げ切ったと確信したら私も逃げるから！！」

「アイちゃん！アイちゃん！！」

アイエフさんはあの明らかにヤバイフェンリスヴォルフに目掛けて突撃してしまっ
た。

でも、私にはどうにも……本当に、出来ないの？

そう思った私は、改めてフェンリスヴォルフ（？）を観察し始める。

そして、冷静になってよく視るとあのフェンリスヴォルフには、蒼い毛皮に血管にま
で届くような無数の裂傷が在る事に気が付いた。

おかしい……あれだけ強いのなら、あそこまで傷付いている筈がないのに……

他のダンジョンなら兎も角、ここは最近まで自然公園として親しまれてきた場所なの
だ。アレに傷を負わせられるモンスターが居ない事は、ギルドでも確認されている。

そもそも、私達がここに来るまでに戦ったのはパツクンやホイニン等、駆け出しの冒
険者さんでも倒せるようなモンスターばかりだ。

そして、私が考察を続けていると、アイエフさんと戦っているあのフェンリスヴォル
フに異変が訪れた。

ブチブチブチ……ブシュウウウ

「VOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOON」

なんと、フェンリスヴォルフ自身が自壊し始めたのだ。

アイエフさんの頭を喰い千切ろうと大きな口を開いて後ろ脚に力を入れたのですが、その後ろ脚と口がいきなり大きく裂けて、そこからモンスター特有の蒼い血が噴き出し
たんです。

「アイエフさん！退いてください!!」

「なっ……ネプギア、アンタ……」

それを確認した私の行動は、普段よりも数段早かった。

この時は気が付かなかったのですが、後で聞いた話によると私は無意識の内に変身して
いたらしい。

「M・P・B・L、オーバードライブ!!」
マルチブルビームランチャ

(体が軽い……これなら、行ける!!)

そんな事を考えながら、ネプギアはM・P・B・Lマルチブルビームランチャを構えてフェンリスヴォルフを
力尽くで跳ね上げる。

「これが、私の全力全開!」

そして、跳ね上げる行為によって出来た隙に、フェンリスヴォルフの先程出来た後ろ
脚と口の端、そして元からあった前脚と横腹の裂傷に刃を当てながら、剣舞の如く素早

く斬り刻んで行った。

「あなたの様な存在は、ゲームギョウ界にはいらないます！」

そして、高速の剣舞が終わるとネプギアのM^{マルチプル}・P^{ビームラン}・B^{ランチャー}・Lは銃形態に変化してフェリスヴォルフにビームを放ち、ネプギアの必殺技——プラネットイツクデーバは終わるのであった。

side out

side ???

何処とも知れない闇の中、暗がりの中にそれは在った。

(ふーん……こんな感じで変わってるんだ……)

それは、この世界の事をよく知っていた。

そして、その知識では女神候補生ネプギアの対犯罪組織に於ける初陣の相手は断じてフェリスヴォルフ擬きではなかった。

つまる所、それが知っているのはこの世界の原型の知識である。

(……まあ、別にどうでも良いんだけどね。俺^{アズラン}としては、こっちの方が気になるかなー?)

そう言つて(？)それはネプギアの変化から目を逸らすと、急いでネプギア達の居場
所に向かう紅い髪の男……アナザーの方を妙に熱っぽい目で観ていた。

(さてさて、お前は俺にとつてどれだけの未知を魅せてくれるのかな？俺はそれが一番
知りたい！)

そのような事を呟いて、それは何処へともなく存在感を揺らがせる事で全ての認識か
ら完全に外れてしまった。

s i d e o u t

第六話

side ネプギア

「……………ギアー…プギア!!」

「……………アちゃんー……………ギアちゃん!!」

(……………アレ? 私、生きてる?)

よく分からないが、私達はどうにか生き延びたらしい。

暫く意識が飛んでいた私は、ボーっとする意識をどうにか覚醒させて、周囲の状況を把握する事に努める。

(確か私は……………バーチャフォレストの最深部に居るゲームキャラさんに力を借りに行つて……………そこで、フェンリスヴォルフに襲われて……………!?!?)

ガバツ

「「キヤアツ!?!」」

「アイエフさん!!無事ですか!?!」

「ちよ……………ネプ、ギア……………ギブ……………ギブ……………!」

私は、飛んでいた意識で記憶した最後の記憶を思い出すと、慌てて意識を覚醒させた。そして、コンパさんの隣にいるアイエフさんに駆け寄ると、必死に肩を掴んで揺らしていた。

「あ……すみません」

「アイタタタ……いいわよこれぐらい……まあ、それだけやる元気があるなら大丈夫そうね」

（うう……恥ずかしい）

穴があつたら入りたいとはこう言う気分なのだろう。慌て過ぎてアイエフさんを振り回していた私は、罪悪感から全身を小さくして縮こまっていた。

「やあね……そんなに落ち込まないの。アンタは無事にトラウマを乗り越えて……変身して私を助けてくれたのに、これじゃあ私がアンタをイジメてるみたいじゃないの」

本当に、やめてよねと言わんばかりに手を軽く振るアイエフさんを見ると、本当に無事だったんだなと思う。

（……でも、私に変身?）

そう思い、私は何気なく髪を一房掴み、目の前に持つてきた。

変身前の私なら、薄紫色の髪が目の前に映る筈である。

しかし、私の目に映ったのは何処となく見覚えがあるピンク色だった。

背後からいきなり声をかけられた私達は、声が聞こえた方に顔を向けたのだった。

side out

side アナザー

散々迷いながら、どうにかネプギア達を見付けた俺は……出るタイミングを完全に逃していた。

と言うか、ネプギアが変身してフエンリスヴオルフ駄フエンリスヴオルフ犬をしばき倒していた。予想外にも程があった。

寧ろ、何でこいつ等あんなにボコボコにしている癖に悲鳴を上げたと思わずにはいられない程にボコボコにしているので、ちよっぴりフエンリスヴオルフ駄フエンリスヴオルフ犬が可哀想になってきた程だ。

「……………あ……………そう言う事な」

しかし、周囲をよく見るとボロボロのアイエフとそれを治しているコンパが目に入っ
た。

どうやら、あのフエンリスヴオルフ駄フエンリスヴオルフ犬は変身前のネプギアには荷が重かつたらしく、アイエフが暫く時間を稼いでいたようだ。

……………まあ、それでも荷が重いのは変わっていないが、幾らか可能性があったのも確かなのだ。

どうにも、大声で聞こえる話を聞く限りでは、ネプギアは自分が変身していた事に自覚が無かつたらしい。

正直、それでよく駄フエンリスヴオルフ犬を倒せたなど思うが………ぶっちゃけるとどうでも良い。

それよりも、早い所出て行くタイミングをくれと思いつつと………漸くタイミングを確保出来た。

「そうだ！ゲームキャラさんを早く見付けないと!？」

「………その必要はないぞ？」

「「キヤツ?!」」

（………何故驚く？）

side out

side ネプギア

えー………ネプギアですが、誰か助けてください。

「………それで?言いたい事はなんかある?」

「………?言いたい事など別に無いが?」

（………場の空気が最悪です）

どうしてこうなったんだろう……？

そう思わずにはいられない程に、目の前に居る男性——アナザーさんの再会は最悪の空気だった。

「……………そう……………そこに正座しなさい!!」

「……………はあ？なんでまた」

「悪い人だからって、あんな風に慘く殺す事は無いです!」

(……………どうしてこうなったんだろう……………orz)

「いや……………ゲームキャラはいいのか？お前達はアレを回収に来たのだろうか?」

(私としては早くゲームキャラさんに会って力を借りたいんだけど……………出来るかなあ?)

「……………いいわ。今はそつちを優先してあげる。案内しなさい」

私は、アイエフさん達の様子を見て少々心配になっていたが、どうやら杞憂だったようだ。

一旦ではあるが、怒りを呑み込んだアイエフさん達を背後に、私はアナザーさんの先導に任せるのだった。

第七話

side アナザー

「さて、ハハハ」

俺は、現在割と感慨深い思いを抱いている。

理由は単純

三年近く続けていたゲームキャラ防衛を完了したからだ。

幾ら俺が400年生きていようが、変わり映えのしない日々の消化は非常にキツイ……退屈過ぎて死にかねないからだ。実際問題、永く生きた真祖トゥルーヴァンパイア吸血鬼達の死因では一番多いらしいので笑えない。

勿論、それなら辞めればいいと言う者もいるだろう。しかし、これは俺のプライドの問題なのだ。

なんせ、俺は『約束』してしまったのだから………

『二年半前』

当時、女神達がギョウカイ墓場に捕らわれた事を偶然にも聞いた俺は、非常食も兼ねた移動手段である血の池に乗って今後の事を考えていた。

と言うのも、俺は女神と無暗に人間を襲わないで教会から回される強力なモンスターを討伐すれば女神の血を貰う契約をしていたからだ。

その上で、得た死体からどれだけ大量の血を持って行っても自由と言うオマケ付きでだからこそ、あの駄女神がとっ捕まった事を聞いた俺は、これからどうするかを考えなければならなくなった。

と言うのも、俺はあの駄女神が嫌いではないが……特に好きと言う訳でもない。あくまでも契約によって互いを律して利用し合うだけの関係だったのが大きい。

勿論、乞われれば犯罪組織撲滅でもマジエコンユージャー殲滅でも協力はしただろう。しかし、あいつ等は俺に何も言わずに犯罪組織に特攻を仕掛けている。

……まあ、返り討ちに遭っている以上は栓無き事だが……何をすればいいかの指示さえ忘れるとは思いもしなかった。

お陰で俺はこうして何を考える必要に駆られている。

ゲームは……面倒だ。そこまで興味が湧かん。

モンスター狩りは……散々狩ったが、プラネテューヌのは弱いし血も不味い。教会か

ら紹介される程の危険種ならともかく、そこ等の雑魚は不味過ぎる。

なら、素直に別の国に行けと言われそうだが……他の国は俺の入国許可を発行する際に、女神か女神候補生が一緒になければ面倒な手続きが発生するから却下だ。

例外はルウイーぐらいだろうが、あそこは吸血鬼ヴァンパイアの巣窟だ。下位や中位程度ならともかく、夜中の上位や、古代エルダーに真祖トルルに遭遇したら流石に手間だ。

そんな風に、半年間延々と考え込んでいた俺は気が付けばどこぞの工場の奥地に居た。

「……………つて何処だ此処は?！」

当時、考え事に没頭し過ぎた影響で道を憶えていなかった。

しかも、非常食兼乗り物の血は飲み干していた為に消失。故に、新しく血を確保するまでは歩きだ。

……………まあ、んなもの使わなくても俺自身が走った方が速いのだが……面倒だろうか?

誰にともなく言い訳をしていた俺だが、暫く工場内を歩いていると、なんかよく分からんが一枚のディスクを寄って集って大の大人が殴り倒しているアホみたいな光景に遭遇した。

「へへっ……………こいつを破壊しとけば俺様は組織で幹部になれるぜエ……………!!」

「ヒヤッハー!!出世の為に、ゲームキャラは消毒だアー!!」

『……………』

(……………どうしよう?もの凄く帰りたい)

その光景は、どう見ても世紀末なモヒカン共が一枚のディスクを殴って出世がどうか言ってる明らかにヤバイ薬をキめたかのようなアレな光景である。

「……………うむ、どうしようもないアホなチンピラ「誰がアホなチンピラだゴルアア!!」
……………面倒だなオイ」

なるべく小声で喋っていたが、どうやらアホなチンピラと言う単語に反応したらしく、こちらに襲い掛かってこようとしていた。

「アアン?誰がアホなチンピラで社会のクズだ!アア!？」

「殺っちまいましたようぜ!アニキ!!」

「おうともよ!!このガキには社会の厳しさってヤツをよーつく叩き込んだかねえとなア!!」

「ギャハハハ!!お代はテメエの持ちもんと命で勘弁してやんよオ!!」

(いっそ、清々しいぐらいのチンピラだったが……………どうやら敵らしいのでブチコロシは確定だな)

そして、チンピラA……………アニキとか呼ばれてたゴミは俺に向かって拳を振り被り、襲い掛かって来た。

他のチンピラはそれをニタニタと無性に気色悪い笑みを浮かべながら眺めている。

「……………滅殺を開始」

「ヒデブツ!!」

俺は、拳を振って来たチンピラAの下に回り込み、顎の辺りへ体内から引き出した血で作った刃を刺して、そのまま股下まで一気に斬り割いた。

「……………穢い」

しかし、流石はゴミ虫とでも言えればいいのか……斬り割いて溢れた血は、腐ったような臭いがする程に不味そうで、俺はこのチンピラAに接触した俺の血を含めて、俺から切り離して遠隔操作する事に決めた。

「ヒィィ!!? 化け物?!?!」 ドスッ

「逃げる! 逃げるお?!?!」 ザシユッ

「死にたくねエよオ?!?!」 ブチッ

そんな言葉を聞きながら、俺は目の前のチンピラを殺し回った。

あるチンピラは矢の様に形状を変えた血で心臓と脳髓を射貫き

その反対側のチンピラは首を刎ね

最後のチンピラは、両方の三匹のチンピラから奪った血で全身を覆い、圧縮して殺した。

「……………さて、出口でも探すか」

『待って!』

「ぬお!?なんだ?誰か居るのか?!」

当時、チンピラを血祭にしたので誰も居ないと思っていた俺は、何処かで聞いた気がする声が聞こえて動揺してしまった。

別にどうと言う事でもないのだが、そんな動揺をうっかり興味と間違えた俺は、その声の言い分に耳を傾けていた。

要約するところだ。

①自分はゲームキャラと言い、目の前のディスク（紫色）である。

②先程のチンピラ達のような連中が所属している犯罪組織に狙われている。

③とっ捕まってる女神達が来たら誰であれ力を貸すから助けて^{Help me}

……………面倒臭そうだな。

『今、面倒臭いとか思いましたね?一応、あなたにとってもメリットはある筈ですが?』

「心を読むな……………それで、メリットとは?」

『はい……………具体的には、暇が潰せますよ?』

……………こいつ、何で俺が暇だって分かったし

『こんな所まで来る人なんて暇人以外に居ませんから……………まあ、先程のモヒカン達も

暇人だったようですが』

「……………アレと同列の扱いは不愉快だな。しかも、また心を読んで……」

『いえ、顔に出ていますから……………それで、どうしますか?』

「……………まあ、いいか。うむ、引き受けてやるよ」

『それはどうも……………取り敢えず、これで死なずに済みそうです』

俺は、それから今日に到るまでずっと……………このディスクの防衛に従事するのだった。

『さて、では行きますよ』

「何処に?」

『取り敢えず、安住の地を探してですが?先程のモヒカン達が消えたポイントとして探

しに来られては面倒ですし』

「……………それもそうだな」

「……………色々な話をしながら暇を潰して

『回想終わり』

『では、女神候補生ネプギア——この激動の時代に貴女が何を成すのか……………或いは、どのような秩序を齎すのか……………何処かで愉しみに待っていますよ』

「はいー！」

『最後にアナザー……………平和になったら一緒にゲームで遊ぶとしましょう』

「「え？」」

「ああ、良いからとつとと雲隠れしておけ……………ぶっ壊されたくはないだろう？」

『はい……………では、また今度』

それだけ言つて、ゲームキャラは身体（？）を粒子に変換し、別の亜空間へと移つて行つた。

（今度会つたら絶対に白黒付けてやる……………）

（……………ねえ、ゲームキャラつてゲーム出来たの？）

（さ……………さあ？どうなんでしょうか……………？）

（さっぱりですう）

その後、暫く余韻に浸っていた俺は教会への帰りの道中にアイエフとコンパから三年間も行方知れずだった事と、犯罪組織の人間を無残に殺した事でお説教があったのは言うまでもない。

第一章く血塗られたマーチく完

第二章く黒い二人のワンダーソングく 第八話

side アナザー

(……………懐かしい……………か?)

バーチャフォレスト最奥から三年振りにプラネテューヌ教会に到着し、イストワールの待つ謁見の間へと向かう最中に、俺はそう思う。

別に、ゲームキャラとの日々は嫌いではなかったが……………ゲームぐらいしかする事が無かったので、逆に犯罪組織からの防衛が娯楽になっていた程だ。

(……………しかし、犯罪組織マジエコンヌ? 何処かで聞いたような覚えがあるような……………?)

「ほら、着いたわよ」

「む……………了解した」

そんな事を考えている内に、謁見の間に着いたらしい。

アイエフから声を掛けられた俺は、一旦思考を打ち切って謁見の間に入って行ったの

だった。

side out

side アイエフ

「では、無事にゲームキャラの力は得られたのですね」

「はい。ただ、アナザーから聞いた話によると、マジエコンヌの連中は二年以上前からゲームキャラを襲い続けていたようです」

「ああ……それと、アイツは亜空間に姿を隠したから、この国に加護を与える事は殆ど出来ないが壊される心配は無いぞ」

(……………それを早く言いなさいよ?!)

私は、謁見の間でイストワール様に今回の任務の報告を行っていた。

……………そもそも居るとは思っていなかったアナザーを連れて、だが

しかし、イストワール様は最高戦力アナザーの奴と一緒に帰って来た事を喜んでいた。

そして、私自身もアナザーが居た事を悪く思っていない節があった。

と言うか、聞いた話によると居なかつたらとつくにゲームキャラが破壊されていたでしょうし、そうでなくても途中で見た破壊の後を見る限り、私達が焼却されていた可能

性は高かった。

敵に英雄級から女神級の魔術師が居たらしく、道中は所々修復されていたが——
——あまりの熱量に頑丈な筈のダンジョンが融解し、天然ガラステックタイトが出来上がっていた程だ。

アナザー自身もネプピタンを飲んでいる間は動けなかったと言うし、相当な人外であつたと言える。

そこまでの被害を齎した人物は、転移魔法で下つ端共々逃げ帰つたらしいが………現時点では絶対に戦いたくないと思う。と言うか、遭遇したら即撤退モノだ。

「さて、これからの方針ですが、各国を回ってシエアの回復とゲームキャラを………」

「後は、他の女神候補生や強者から力を借りたらどうだ？」

「そうですね………では、順番はどう致しますか？」

敵の事を考えていると、これからの方針がどんどん決まっていって行つた。

しかし………国を回る順番か………

「取り敢えず近いし、ラストイションからでいいんじゃない？ どうせ、犯罪組織の行き先なんて知らないんだし」

「そうですね………その方がよきそうですね」

そうやって話しをまとめていくと、順番が決まっていって行つた。

【ラストイション↓ルウィー↓リーンボックス】

こんな感じだ。

「……………ああ、それから、俺は暫く戦わないから」

いきなり、アナザーが訳の分からない主張をして会議は混迷を極めるのだった。

side out

side ネプギア

「……………ああ、それから、俺は暫く戦わないから」

その言葉は、これから各国を巡ってゲームキャラの力を得る方針に決まった私達にそれなりに衝撃を加えた。

「は……………はあ!?!なんでよ?!」

「弱いから……………と言うか、ネプギアの弱体化が甚だしい。お前達二人も弱過ぎる。以上だが?」

「……………それもそうですね」

しかし、アナザーさんからの返答は私を納得させるに足るものだった。

今回、私は犯罪組織に捕まる前よりも遥かに弱くなっている事を痛感した。あのフェ

ンリスヴォルフ？だって、後から反芻したら犯罪組織に捕まる前なら変身しなくても一太刀で倒せた筈なのに、実際には変身してギリギリだ。

アイエフさんもコンパさんも、お姉ちゃん達と一緒に戦ってた時に比べれば弱くなっている。

だとしたら、アナザーさんの主張は間違いではない。

しかし……………

「ああ、それから……………絶対に勝てない相手が出たら代わってやる」

「……………仕方ないわね。確かに、私達も大分弱くなってるし」

「でも、どうして戦わないのに着いて来るんですか？アナザーさんならてつきり、別行動だぐらいは言うと思ってたんですけど……………」

「……………」

私がそう思って、質問したら、アナザーさんは顔を顰めて非常に言いたく無さそうな……………でも、言おうか迷ってる顔をして考え込んでしまっていた。

「……………」

「あ、あの……………言いたくないなら無理して言わなくても……………」

そして、暫く考え込んだ後、言い難そうに口を開いた。

「……………ゲームキャラとの賭け……………つまりは、罰ゲームの一環」

「「「……………はい？」」」

「だから、二年間の防衛時に暇な時間はゲームしてた。その勝敗で色々賭け事やって、その結果の罰ゲームの一種に女神か女神候補生の救出に着いて行くか行かないかを賭けたゲームをやった。以上」

「え……………えーつと……………つまり、罰ゲームとして着いて来てくれるって事でいいんでしょうか……………？」

「……………そう言ったが、何か問題でも？」

『うわぁ……………』

「とにかく、俺は先に待ってるから早く準備を済ませてラステイション行きの駅に来るようにー！」

そう言つて、誤魔化すようにアナザーさんは謁見の間から出て行ってしまった。

……………何と言うか、いいんでしょうか？色んな意味で

【いいと思いますけど？俺的アシにはあの羞恥から朱く染まつてる顔も中々……………（ジユルリ）】

……………何か、幻聴が聞こえた気がした。

……………何だったんでしょうか？今の幻聴は

「……………まあ、私達も早い所準備して駅に行きましようか？」

「そうですねえ。えーっと、回復薬ヒールゲラスを買い込んで来ますです」

「あ、私もお手伝いしますね」

「はいです。よろしくお願いしますです」

「では皆さん、気を付けて行って来てください」

「はい。イストワール様も頑張って下さいね」

私達は、ラストイションに行く前にこれからの準備に向かう事になったのだった。

第九話 改善後

side アナザー

それぞれの準備を終えた俺達は、プラネテューヌ駅ラステイション行きの列車に乗り込み2時間程の時間を費やして、矢鱈ときっちりした区画整理が成され、工業地帯からは黒い煙が昇っているラステイションに到着したのだった。

因みに、何年か前に環境の改善があつたらしく、空気清浄機が工業地帯周辺には配備されている。なので工業地帯^{爆心地}は兎も角、住宅地には煙害が出る事はないらしい。詳細は知らん。

「わあ、ここがラステイション……本当に機械がいつぱいな街なんですわね！ ああ！ ♡ 楽しそうだなあ。色々見て回りたいなあ……☆」

「……アイエフ、こいつはどうしたんだ？」

「ああ、そう言えば、アンタはまだ見てなかったわね」

ラステイションに着いて早々に、ネプギアは普段の大人しそうと言うか、根暗そうと言うか……とにかく、普段の静かな雰囲気をぶち抜いて矢鱈とテンション高くはしゃい

でいた。正直、気持ち悪いぐらいテンション高い。

その辺をアイエフに聞くと、どうやら機械オタクと呼ばれる人種だったらしい……………いや、女神種？

……………まあ、そんな事は棄てて

「ほら、後にしろ……………ラストイションには姉の女神を助ける準備に来てるのに、機械を観ている場合か？」

「そ、そうでした……………私達がんばらなきゃ、此^{ラストイション} 処も無くなっちゃうし……………よし。今日は、ガマン、ガマン……………(泣)」

(……………泣く程嫌か)

「そう言えば、あなごーさん、これから行くアテはあるんですか？」

ネプギアの行動にちよつとイラつと来た俺は、このコンパの言葉に少しだけ救われた気分になった。

……………本当に、ネプギアはやる気があるのか？

そう思いはするものの、よくよく考えたら姉のネプテューヌはもつと酷かった記憶があるのでもまだマシだと思ふ事にする。

「あるぞ？ 教会の教祖だな」

「……………ゲツ」

行き先を提案したら、アイエフからすごい嫌そうな顔をされた。解せぬ

「……………何か問題でもあるのか？」

「いや、まあ……………この教祖ってあんまりいい噂を聞かないのよね」

……………正直、否定のしようが無い程にまともな理由であった。

「……………なら、俺は一人で教会に行く。お前らは好きにしろ」

「えつちよ……………」

そんな声を尻目に、俺はラストেশヨンの教会へ急ぐのだった。

side out

side アイエフ

「……………行っちゃいましたね」

「……………ま、アイツもまあ言ってる事だし、私達はギルドにでも行きましょうか」

そう言つて私は、ネプギア達の先導を始めた。

「そう言えば、教祖の人への悪い噂って何ですか？」

「いやまあ……………気にしないで？所詮は噂だし」

……………道中、……………この教祖の事での噂をどうにか誤魔化しながら

……まあ、アイツが殆ど反論もせず教会に向かった事から察するに、殆ど真実なんだろうなあ……『ラストイシヨンの英雄に首輪を嵌めて馬車馬のように働かせてる』とか『休日無しで何十時間も低賃金で働かせてる』とか『偶に鞭でしばいてる』とか言うアレ過ぎる噂………何でそんなのが教祖してるんだろう？

第十話 改善後

side アナザー

アイエフと別れた俺は、ラストイションの教会で教祖の……いや、ここは気を利かせて憐れにも変態の餌食にされた不憫な輩と言っておこう。

何故いきなりそんな事を言うのかと……？それは現状が……

「教祖ケイ。私としてはこの百倍の仕事を回して欲しいのだが？」

「無茶を言わないでくれないかい?!これ以上僕の印象を不本意な方向に悪くする気は無
いんだけど?!」

「……………?」

「そんなにも不思議そうな顔をして首を傾げないで貰えるかな!?」

「……………?何を今更」

「だからって口に出すのも止めて貰えないかい?!」

……………病的に仕事を熟す黒髪の青年とそれを咎める銀髪ショートヘアで子供用の黒い礼服に身を包んだ少年のような教祖(女)の言い争いが勃発しているからだ。

机に文字通り山のように積まれた書類の山（複数）が在るにも拘らず、それ以上の仕事を要求している青^{ラストインジョンの英雄}年と、教祖の神宮寺ケイはそんな言い争いを謁見の間の外にも響く勢いで続けている。

「寧ろ、ノワール様であれば嬉々として大量の仕事を回して頂けるし、出来なかつたら鞭でしばいて頂けると言うのに……………これだから等価交換を旨とする心無い輩は……………」

「ノワール!!!」

「バカ者!! 仮にも教祖が大声上げて女神様の名を呼び捨てにするとは何事か!!」

「君の趣味に付き合わされるのもどうかと思うんだけどね!!」

「……………取り敢えず、話を進めてもいいか?」

「どうぞどうぞ」

この光景は一見、仕事の邪魔をする上司^{教祖}とそれを咎める青年に見える事だろう。そうなれば青年の言い分は真つ当に聞こえるから性質が悪い。実際に一部の単語さえ聞き流せば、真つ当なのは言うまでもないが

しかし、このままでは話も進まないと思ひ、俺としてもそれは不本意なので声をかける事にする。

先程から変態的な発言を繰り返している男の名は『グロウ』と言う。

ラストイシヨンの英雄と名高い、女神に匹敵するとまで言われてる英雄級の強者だ。書類全般にも有能で、文武両道で通っている。

(……………本当に、有能なのだがな……………)

「時に、アナザーよ……………」

「なんだ？」

「ここには何用で来たのだ？お前がここに来るなど、随分と珍しいではないか」

「来たくて来ると思うのか？」

思わずそう返すと、その横で教祖の神宮寺ケイは何度も頷いていた。

思えば、こいつも初対面の際から随分と変わったものだ。初対面の神宮寺ケイは、どうにも人形のような側面が目立つ人間だった。

しかし、女神ブラックハートがマジエコンヌに捕まって数日後、ふよふよと浮いて流離っていた俺にコイツから問い合わせがあった。当時の俺は住所不定にも拘らず、どうにかして見付けたらしい辺りに切実さが現れている。

因みに、質問の内容だが……………

『ノワールがラストイシヨンの英雄を鞭でしばいて過酷な労働をさせたのって本当かい？』

との事だ。勿論、YESと返しておいた。

アイツも、最初の数日はストレスを溜めていたが……それ以降は開き直って鞭打ちをするレベルになっていたな。うん

まあ、そんな感じで出来た伝手があるので、今回、俺はラスティンヨン教会ここを頼った訳だ。

「……………しかし、よくあのような噂が流れているな……ノワールの時には完璧に隠蔽をした癖に」

「うむ、どうにも教祖ケイの下は好かぬ。そして、隠蔽へのやる気が失せる」

「……………この嘗て無い程の怒りを、僕は一体どうすれば……………orz」

「……………ハッ」

「(#。∩。)ビキビキ#……………喧嘩を売ってるのかい？だとしたら、高く買うよ？」

そんな感じに、凹む教祖を鼻で晒った青年だが、その青年への怒りは収まらないらしく、神宮寺ケイはまた怒りを露わにし出した。

その挙句に、またも言い争いを始めたケイとグロウである。正直、話が進まないのも迷惑極まりない。

「そんな事は良い！早々に話しを終わらせるぞ!!」

「そんな事とは何だ!!」

……………ほう、そう来るか

俺としては、実に矯正し甲斐がある返しに思わず怒りが降り切れてしまっていた。

「……………そうか、それが答えか」

「ヒイ?!」

そして、振り切れた感情から表情の消えた俺に怯えている二匹の駄犬の矯正の時間は続いたのだった。

『しばらくお待ちください<m ((m >』

「……………と、言う訳だ。分かったか？」

「YES!!」

暫くしばき倒した後に、漸く話しが進める準備が出来た。

これだから、ラストインジョン教会ここは嫌なのだ。手間がかかり過ぎる。

「とにかく、私はお前達の旅に着いて行けばいいのだな？」

「……………やつとこの日々から解放されるんだね」

「そうなるな」

そんな感じに話が纏まったのだが、その時、またも面倒事が発生してしまった。

「神宮寺教祖！緊急事態です!!」

「なんだい？僕としては休憩を挿みたいんだけど…………」

「言ってる場合ではありません！ユニ様及び共にクエストを請けられたネプギア様御一行が犯罪組織所属の英雄級に負け、捕らえられました!!」

「……………ハア!?!」

思わず、白目を剥かずにはいられない程の大惨事と共に……………

s i d e o u t

第十一話 改善後

side ネプギア

「それじゃあ私、お仕事貰ってきますね」

そう言つて、私、ネプギアはアイエフさん達と別れてギルドのカウンターに向かつて歩き出しました。

(……………でも、なんでアイエフさんはあんなにも話を教祖さんから外そうと必死になつてたんだろう?)

そして、考えるのはアナザーさんと一旦別れてから、ギルドに辿り着くまでのアイエフさんの言動だった。

正直、あんなアイエフさんは見た事がないから、少し心配だ。

(……この教祖さんつて、一体どんな人なんだろう……………?)

ドンツ

「きやつ?!」

そんな事を考えながら歩いていたのがダメだったんだと思う。

私は、目の前を歩いている女の子に気が付かずに正面からぶつかって、転んでしまった。

「いたたたた……もう！ 気を付けなさいよ!! 危ないじゃない!」

「ご、ごめんなさい!!」

私は、凄いい剣幕で怒られたものだからつい謝ってしまっていた。

うう……ちよつと怖いよ……

「ちよ……そんな泣かないですよ！ アタシが泣かせたみたいじゃない!」

「う……うん。ごめんね？ 私、考え事をすると外が目に映らない性質みたいで……」

「……ううん、アタシこそ、考え事をしてたから……ちよつとイライラしてたみたいなの。ゴメン」

そう言って、目の前の女の子は、クエストのカウンターへと向かって行った。

……クエストのカウンター？

「あなたもお仕事を貰いに来たの？」

「そうよ。アタシはアイツを一日でも早く追い抜かないといけないの……!」

そんな感じで燃えている女の子だったが、私の言い回しに思う所でもあったのか、意外そうな顔を向けてこう返してきた。

「『も』? ……アンタもクエスト受けに来たの?」

「うん。そうだよ」

「ふーん……………大丈夫なの？まだ子供なのに」

酷い言われようだった……………否定し切れないけど。

正直、独りだったらアナザーさんの方が普通に強いし……………あれ？

「それを言ったらあなただって子供じゃない」

「アタシはいいの。これでも結構強いし……………それに、アンタってなんでか鈍臭い印象があるのよね？」

「そんな?!」

正直、普通にシヨックだった。そして、自分自身でも否定し切れないのがキツイ。

「まあ、そんな事より、アンタはなんでクエストなんて？」

「そんな事って……………街の人を助けて、少しでも女神のシェアを回復させるためだよ」

「うわ、優等生発言。アンタって結構生真面目なのね。」

「えええ？そ、そんな。真面目で何が悪いの？」

どうしよう……………更にシヨックだよ。

私が、二重のシヨックに耐えていると、目の前の女の子はいきなり笑いだして、謝ってくれた。

なんでも、同じぐらいの年代の子と話すのが久しぶりだったから口が軽くなっちゃっ

たみたい。

確かに、私も久しぶり……つとと言うか、周りが大人ばかりで、こう言った経験は初めてだったので、割と新鮮だった。

「ねえ、アタシはユニ。アンタは？」

「ネプギアだよ。よろしく、ユニちゃん」

「ネプギア、ね。ねえ、折角だしさ、これから一緒にクエスト行かない？」

すつごく嬉しい提案だった。

折角友達になれたんだから、もう少し一緒に居たかったからだ。

「うん！いいよ。一緒に行こう！」

「じゃあ、行きましょう！」

そうして、私達は一緒にクエストを請ける事になったのでした。

side out

side ユニ

「へえ、それでギルドでお友達になったんですね」

リビートリゾートに来たアタシ達は、途中に出くわすシカパーダー改やヤンキー

キヤットを殲滅しながら奥にと進んで行く。

しかし……………

「なーんだ。そつちは一人でクエストしてる訳じゃないのね？まあ、しようがないか。アンタ超弱そうだし？」

アタシとしては、もう少し強いと思ってたんだけど…………？

勿論、現状では変身しない場合、三対一で戦えばアタシが負けるのは認める。悔しいけど、多勢に無勢ってやつだし

ただ、一対一ならネプギア達の誰と戦っても、変な油断さえしなければ変身するまでも無く勝てる。

「そ、そんなこと……！ま、まあ……確かに強くないけど…………」

「あ……………面倒くさいから落ち込まないの。現状でアイツと比べるのは間違いよ」

(……………アイツ?)

アイツって誰だろう…………？

アタシとしては気になるけど、多分、ネプギア達の保護者かと思い、深くは気にしない事にした。

(だって、アイツに勝てる人類なんて各国に一人ずつ居るかどうかだから…………!!)

少なくとも、少しだけ見た感じだとネプギア達の強さはパーティーで冒険者達の中堅

処が精々だし、大方上級冒険者の誰かに師事して修行中なのだろうと思い、アタシはスルーしておく事にした。

「さあ！4人がかりならこんなクエスト楽勝でしょうし、ぱぱっと終わらせちゃいましよう！」

そして、アタシ達はリベトリゾートの奥地を目指して行くのでした。

side out

side Free

「ミラージユダンス！」

「魔界粧・轟炎!!」

ネプギアは、手に持っている白い棒状の物体からビーム状の刀身を出し、ボスリザードに高速の剣舞を叩き込む。

そして、それによって出来た隙を突いてボーンフィッシュが突進してくるのを、アイエフが魔界粧・轟炎による火柱で周囲に居た雑魚諸共蒸発させる。

それを観ていた周囲のモンスター達は、勝てないと悟ったのか2人の傍を全力で離れ出したが……

「逃がさない！」

「行つくですよ♪」

それを、ユニとコンパが見逃す訳も無く、狙撃銃による三発の銃弾と巨大な注射器による攻撃で、カブリカエルやシカベーター改などの雑多な雑魚は敢え無く殲滅されてしまっていた。

「ふふん♪楽勝楽勝♪」

「やったね！ユニちゃん♪」

「当然よ！あんな雑魚に殺られるアタシ達じゃないわ」

ネプギアとユニは、機嫌良さげにハイタッチを決めて、新たなモンスターを探し始める。

そんな様子を見ていたアイエフとコンパは、苦笑しながらもどこか微笑まし気にそれを眺めていた。

「この短時間で急に仲良くなっちゃって……」

「そうですねえ……微笑ましいです」

そして、2人は先へ行くネプギア達を追う為に、歩みを進めるのだった。

「よおー！ラストイシヨンの女神候補生と……その他諸々!!」

しかし、リビートリゾート奥の方から、粗暴そうな声が掛けられた事により、そんな

平穩で楽しい時間は終わりを告げるのでした。

side out

side ユニ

「よお！ラスティションの女神候補生と……その他諸々!!」

(っ?!またこいつ?!)

アタシは、数日程前に遭遇して、辛くもグロウと退けたこいつの声を聞いて、動揺が隠せない。

「今日はテメエの保護者は居ねえのかア? あんときガタガタ震えて何も出来なかった雑候補生さんよオ!」

「っ?!」

否定できない……確かに、アタシはあの時、アイツの援護さえ出来ない程の力の差から、何も出来なかった。

下手な事をする、変身してもなお、目で追えない程の高速で戦っているアイツに弾を撃ち込みかねなかったから……でも

「そう言うアンタは、あの時あの場で誰の手で海に落とされたのか……もう忘れちゃっ

たの？随分と空っぽな頭よね？」

「あア!？」

幸いにも、こいつの足は遅かったので、エクスマルチ^Xプラスター^Mをフルチャージ^Bで叩き込んで足場を蒸発させてやったんだ。

そうしたら、足場が蒸発したのにこいつは蒸発しなかったけど……足場が蒸発したおかげで、こいつは下の海へと落ちて行った。

「……お知り合い？」

「ええー！こいつはマジエコンヌ⁴天王直属の幹部よ！」

「……まあ、いいかア……オレの名はイヴェルト！ジャツジ・ザ・ハード直属の大隊長つてヤツらしいが……んなもんでもいい！オレを愉しませろやアアアアアアアアアアア
!!」

「っ!?!散開して！こいつは足が遅いわ!!」

そして、戦いの火蓋は切り落とされたのでした。

第十二話 改善後

side ユニ

「イイイヤツハアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「あぶな?!」

奇声を上げながら、イヴェルトは拳を振り、アタシ達へと突撃してきた。

しかし、幸いにもイヴェルトの早さはたいしたことは無いので、銃弾を撃ちながらでもどうにか避けられる。

けれど、アイツの体は相当硬いらしく、至近距離で放たれた弾丸は、まるで分厚いコングリートにでもぶつかったかのように四方八方に跳んで行く。

不幸中の幸いと言おうか、アイエフ達は既に十分な距離を取っていたので、跳弾による誤射は無い。

「ち……本当に、厄介なぐらい硬いわね! アンタ」

「ギャツハハツハハツハハハ!! どオしたア? さっきまでの威勢は何処に行きやがったんデスカアアア!!」

アタシは、隙を見て手早く変身し、どうにか上空へと飛翔した。

「ほんと、勘弁して欲しいわ……」

「ユニちゃん！私も手伝うよ！」

アタシがあまりの面倒くささにボヤいていると、ネプギアは空を飛んでいるアタシの隣にやって来て……………ん？隣？

「ユニちゃんがラストイシヨンの候補生だったんだね！一緒に頑張ろう！」

名前といい、容姿といい、似てるだけかと思えば……………プラネテューヌの『女神候補生』……………か……………他人の空似だと思いたかったけど……………

「……………いいわ。アイツを倒すまでは共闘してあげる！」

アイツはエクスマルチ^Xブラスター^Mに限界までエネルギー^Bをチャージするまでは、誰かに前衛に——壁になって貰わないと撃退さえ出来ない。

だから、ここでは一旦我慢してあげる……………

side out

side アイエフ

「ユニちゃん！私も手伝うよ！」

「……………いいわ。アイツを倒すまでは共闘してあげる！」

私達がどうか距離を取った頃合いを見計らってか、変身してユニの元へ飛んで行ったネプギアは、さつきから大暴れしてる、自称マジエコヌ又四天王直属の配下『イヴェルト』を倒す為に、ユニに共闘を申し出ていた。

しかし、私が見た限りでは、少しだけユニの表情が不穏だと感じたが……まあ、気の所為でしょう。

「ユニちゃん！私はどうすればいいの？」

「時間を稼いで！その間にエクスマルチブラスター^X_M^Bを限界までチャージしてるわ！」

そして、その言葉を皮切りに、ユニは変身してから両手で抱えている黒い鉄塊のような武骨な巨銃———当人曰くエクスマルチブラスター^X_M^Bと云うらしい———のチャージを開始した。

「あいちゃん……わたし達も」

「ええ、私達は魔法でネプギアを援護しましょう」

「はいです！」

そうして、私達は、コンパの回復魔法と私の攻撃魔法の射程範囲ギリギリにある岩まで近寄って、息を潜めるのだった。

「ほんと、とんだ厄日ね」

「へへっ……そうだろうなア？」

「ふむ、これで我らの任務は終わったな」

ゴンツ！ガンツ！

「……な……な、に……が……？」

「キュウウ〜」

背後から衝撃を受けて、振り返った私が見たのは、何か棒状の物を振り被った、妙に小物臭がする灰色の肌とネズミっぽいパーカーをした粗暴そうな女と、本を片手に持ち、蒼い髪を伸ばして純白のローブを羽織った気障な雰囲気を纏った男だった。

そして、そんな光景を最後に、私は意識を失ったのだった。

side out

side Free

ネプギアは、空中に滞空しつつも時折飛んでくる瓦礫や岩を回避しながら、イヴェルトを攻撃し、彼の気を惹いていた。

マルチブルビームランチャー ソードフォーム
「M・P・B・L、剣形態開始！」

「効くかよ雑魚がア!!」

しかしネプギアがどれだけ攻撃を繰り返しても、イヴェルトの強靱な肉体には傷一つ付きはしない。

いや、それ所か、イヴェルトが纏う衣服の端にさえ、攻撃が徹つたとは言いがたかった。

「クカカ……不思議かア？ テメエの攻撃がオレの服の端にさえ効果がねエのはよオ!!」
「ハアアアアアアアアア!!」

そうしている間にも、ネプギアは剣形態ソードフォームに変形させたM・P・B・Lマルチプルビームランチャーでの攻撃を続けているが、イヴェルト自身が言うように、服の端さえ焼き切る事が出来ないでいた。

確かに、ネプギアの攻撃性能は決して高くはない。寧ろ、どちらかと言えば速さを武器にして手数で攻めるタイプではある。

しかし、それは女神や女神候補生と言う枠の基準での話だ。女神で在る以上は並みのモンスターよりも高い身体能力を保有している。

幾ら捕虜として過ごした日々の影響で、三年前よりも弱体化したとは言っても、生半可な力の差ではこうはならない。

しかも、ネプギアは女神化までしているのだ。その力は上位の冒険者に匹敵するレベルにまで膨れ上がっている。

「無駄だつつウのオ!! 本当に、プラネテューヌの連中は良い仕事をするよなア!!」

「プラネテユーヌ?!その服はプラネテユーヌ製なんですか!」

「オウよ!!少しばかり脅し付けてやったらヒイヒイ言いながら必死扱いて作ってくれたぜえ?」

そう言つて、イヴェルトは下卑た高笑いを挙げながらも纏う衣装の解説に入りだした。

ネプギアにとつては、ユニがエクスマルチブラスタ^Xを限界までチャージする時間を稼げれば良いので、大人しく乗つて聞き手に回る。

曰く、『耐熱・耐火・耐水・防刃・防弾等の多種多様な攻撃への耐性』

曰く、『非常に頑丈ながらも特殊な繊維を特殊な織り方で織っている為に、行動を阻害しない柔軟性を保有する』

曰く、『直径6mのビーム砲の直撃でも壊れない頑丈さ』

それらの解説を聞きながら、ネプギアはその衣服の弱点に気が付き始めていた。(もしかしたら……これなら行けるかも?)

「あははははア!テメエ如きじゃアオレに勝てねんだよオ!!」

「アナタなんかには、負けません!!」

そう言つてネプギアは、M^{マル}・P^{チフル}・B^{ビーム}・L^{ランチャー}の剣形態を維持しつつも、ビーム状になつて

いる刃の形状を細く、鋭く変えて、イヴェルトへと突撃を開始した。

(もしも、前に聞いた通りの織り方で編まれてるなら……!!)

「今度は自棄起こして特攻かア? もう少し工夫して来いやア!!」

そう言いながら、カウンターを狙って防御したイヴェルトの隙を突く為に、ネプギアは突撃を続行した。

「カハツ?!」

「あア、言つてなかつたなア……」

しかし、現実是非情である。

確かに、ネプギアがやったような、刺突武器による攻撃はイヴェルトの衣服には有効だった。

「そん、な……確かに、あなたの、服に……使われた、技法は……構造、上の……問題、で……」
「なア? 何時から、オレがオレの服より脆いと言つたんだア?」

そう……単純に、イヴェルトの肉体が極端なまでに頑丈だったと言うだけでしかない。
い。

数メートル程殴り飛ばされたネプギアは、絶望したかのような顔をして、呆然として
いる。

「エネルギー充填完了!」

「ツ?!」

その時、ユニの最大の攻撃が完成した。

その言葉に、これまで平然としていたイヴェルトは、遊びが過ぎた事を少々後悔しながらも、近場にある岩を拾う為に、全速力で走り始めた。

しかし、先程までネプギアへと投げ飛ばし続けた岩は少々遠くにまで飛んで行ってしまうっており、数秒程度では、とてもでは無いが取れそうもなかった。

「さあ！これで終わりよ！！エクスマルト！「油断大敵……」と言う言葉を知らぬのか？」カハッ?!」

あと少しで、イヴェルトを退ける為のレーザーが発射されようと言う時、背後から、気障な雰囲気をつらつら纏った男の声が聞こえ、後頭部に強い衝撃を受けたユニは、衝撃から気を失った際に変身まで解けてしまい、十数メートルの空から、大地へと墜ちて行くこうとしていた。

「ククク……ここで死なれては困るのぞな」

「アレイスト……!!邪魔すんなって言っただろうがア!!」

しかし、意識のないユニを、背後から掴み、支える事で落下を防いだ男——アレイストは、皮肉な顔をしながらか、イヴェルトへの皮肉を返した。

「ハ……先の失態を忘れたか？脳筋風情が」

「黙れ！てめえからブツ殺されてエのかア!？」

「はいはい、後にしましょうや？これからメインディッシュがあるんですし、こんな所で体力を使う事もねエでしょう？」

そう言つて、どうにか喧嘩腰な二人を宥めた妙に小物臭がする少女——リンダ下っ端は、間に入つて仲裁に奔る。

「チツ……まあいい、オイ下っ端！こいつ等を拠点に運べ!!」

「ふん、そうだな。バカに付き合つて体力を浪費する暇があるのなら、トリックと談義でもしている方が数段マシだ」

「誰ガバカだ誰が!!テメエからブチ殺すぞゴラア!!」

「はいはい！それじゃあ、自分はこいつらを運んでるんで」

険悪な雰囲気の中、下っ端の少女は一人、疲労から溜息を吐くのだった。

第十三話

side ケイ

「神宮寺教祖！緊急事態です!!」

「なんだい？僕としては休憩を挿みたいんだけど……」

「言ってる場合ではありません！ユニ様及び共にクエストを請けられたネプギア様御一行が犯罪組織所属の英雄級に負け、捕らえられました!!」

「……………ハア!?!」

やあ、画面の前の君達

まだ一秒も経ってないけど、凄く久しぶりだとボクは感じたよ。なんでだろうね？

「その情報……確かなのかい？」

「ハイ！念の為にとユニ様に隠れて警護させていた情報部の《銀》曰く、以前グロウ殿がユニ様と協力して撃退なさったコードネーム《バイサーカー狂戦士》及びに最近までプラネテューヌで活動していた《サウザンドウィザード千魔の繰り手》が犯人であるとの事です!!」

(……成る程、確かに彼女では無理だね)

いや、別に情報部の彼女を侮辱している訳じゃない。寧ろ、仮に敵が《狂戦士》バーサーカーだけで彼女と情報部で双壁を成している《妖精の影》と二人掛りでユニを護ろうと戦つても、精々数十秒稼げれば良い方だろう。

《狂戦士》バーサーカー単体でそれなのだ。犯罪組織で《狂戦士》に並ぶと言われている《千魔の繰り手》サウザンドウィザードまで居れば、彼女が単独で戦わなかつた事を責める事は出来ない。情報を持ち帰ってくれただけ、上出来だと言える。

「そうか……ならば、即刻連中の足取りを調べ上げよ！但し、手は出すな!!命を無駄に散らすものではない事ぐらい、女神ブラックハート様の下で働く貴君等で在れば理解しているようが、敵は英雄級の實力者だ！見付かれば一貫の終わりと思ひ、極力気取られぬように常に一定の距離を保て!!」

「ハッ!!ラストイションに栄光の輝きがあらん事を!!」

そんなやり取りの後に、ラストイションの情報部門室長の地位に就く男はグロウ——
—『漆黒人機軍団長』の指令を部下に伝える為か、全速力で走り去つて行つた。

しかし、ボクとしてはそれを複雑そうに見るしかない訳で……

(……本当に、こうして仕事をしていけば、英雄的なカリスマ性さえ感じる美青年だと言ふのに)

普段、ボクが見ている彼は非常にアレだが……国民から見れば、彼はラストイション

が誇る英雄なのだ。正直、勘弁して欲しいとさえ思う。

しかし、彼自身は（趣味的な意味で）絶対に認めないだろうが、ノワールよりもグロウに心酔している人物は……ボクから言わせれば意外だが非常に多い。噂では、最近フアンクラブのメンバーが6千人を超えたとか……まあ、非公式な集まりなので実態は完全に掴めないが、彼が率いている漆黒人機軍を中心に、民間人や教会職員など、様々な層からの支持が集まっていると言う事ぐらいは掴んでいる。

「さて、教祖ケイ。私はこれより陣頭に立ち、捕らわれた女神候補生達を救助に向かう。故に、後は任せたまえ」

「ああ、任せられたよ」

「なら、俺も手伝おうじゃないか………一応、駄女神との契約はまだ続いているしな」
「うむ。卿の協力に感謝する」

そんなやり取りをして、グロウとアナザーの2人は、教会の外へと向かって行くのだった。

side out

第十四話 改善後

side ユニ

「……っ……」(やられた……まさか、あんな所で伏兵にやられるなんて……)

気が付いたはいいけど、ご丁寧に猿轡まで噛まされたアタシは、薄暗い工場で一人、剥き出しの地面に転がされていた。

周囲に監視らしき姿は見えないけど、アタシの武器も周囲には無かった。まあ、当然でしょうけど

(そして、ネプギア達の姿も見えないけど……ううん！ネプギア達を気にしてる場合じゃないわ!!)

アタシは、頭を振るってネプギア達の事を頭から追い出す。

此処に居ない人の事よりも、アタシ自身の心配でもしている方が建設的だとアタシは思う。

(こんな時、お姉ちゃんやアイツならどうするのか……)

こんな時アタシが考えたのは、アタシが知る限り完璧に近いお姉ちゃん達の事だっ

た。

勿論、お姉ちゃんは犯罪組織に捕まってる事ぐらいは分かっている。アイツも、人間である以上は限界もある。

しかし、それでも今のアタシより上なのには違いない。

(……考えてもしょうがない、か)

しかし、格上だからこそアタシじゃあ二人の採るだろう手は読めなかった。

だからと言って、思考放棄して自棄になる訳じゃない。それでも、読めない相手の行動を考えるより、何が出来るかを考えた方が良いと言うものだ。

——そんな時だった。

「ふむ、目は覚めたようだな」

「っ?!」(誰?!)

背後からドアが開くような機械音が聞こえたかと思うと、そこには蒼い長髪と銀色の目の特徴的な……何て言うか、似非貴族風な衣装でも着せてみれば妙に似合いそうな感じの人がいた。

(……けど、この声……何処かで聞いたような気が……?)

「ククツ……不思議そうな顔だな? まあ、それはどうでも良い」

そう言って、目の前のこいつが話を打ち切ると、アタシを中心にした魔法陣が顕れた。

「つつ?!」(何よこれ!?)

「喧しい。別にお前に害がある訳ではない……いや、ある意味では害があるかもしれないが………」

「んぐぐぐ?!」(それを聞かされて安心できる訳ないでしょうが!?)

喋れない事がこうまでもどかしいなんて……せめて拘束だけでもなんとかかなれば……!!

そんな事を考えながらも、魔法陣は少しずつ完成に近付いていた。

もう駄目なんだなって思ったその時――

シューーン……

「ふむ、成る程な」

「……………」(あれ?何ともない……?)

そんな間抜けな音を立てて、魔法陣はその機能を停止してしまった。

てつきり、魔法陣から炎が上がって来たり、『地下の魔神』とか呼ばれてる龍珠の神殿みたいな形状をして目が幾つもある奴に目から電撃バチバチな感じにされたりしないの????

しかし、事態はアタシが思ってた以上に深刻なようで……

「えーっと、女神候補生ユニ。身長：149 cmで体重は39 kg」

「むぐう?!」(ブツ!?)

「スリーサイズは上から順に B : 77 / W : 55 / H : 81 のカップ B」

「うゝうゝうゝうゝうゝ!!!」(ちょ?! やめっ?!?)

「健康状態は良好で膜は………残ってるな。うむ」

「ガルルルル!!!」(許さない! 絶対にぶちのめしてやるわ!!)

「うむうむ。他の連中と言い、中々に良いデータが集まるな」

「どうにも、あの魔法陣の効果は身体測定だったみたいで………気が付けば乙女の秘密を盛大にぶちまけられていた。

(けど………他の連中?)

しかし、こいつはそんな事を考える暇も与えてくれず……

「さて、女神化した際の違いはと……」

「むううううううう!!!」(ちょっ?! そっち!? 今度はそっちも計測されるの?!?)

「身長は 148 cm で体重は 38 kg ……体重が減った?」

「ふうう!! ふうううう!!!」(ちょっ?! せめて口に出すのはやめ?!?)

「スリーサイズは上から……… B : 75 / W : 54 / H : 80 のカップ A ……成る程、縮んで………」(憐憫の眼差し)

「ぐううう?!」(ちょ?! そんな憐れんだ目を向けないでよ?!)

正直、ダメーじを受けると衣装が弾けるアクションに参入させられる以上の屈辱だったわ……（泣）

……何よ?!泣いてなんかないんだからね!?!……誰に言ってるんだろう?アタシ

「さて、必要なデータは集まった事だ。こいつは元の場所に還しておくでしょう」

「ムグ?!」（ひどっ?!）

そんな適当な感じに、乙女の秘密をぶちまけられたアタシはこいつの展開する魔法陣の効果で、別の場所に跳ばされつつも、意識まで飛ばされるのでした。

……アイツ、絶対にぶっ倒してやるわ!!

s i d e o u t

第十五話

side グロウ

(さて、これからどうするべきか……………?)

ユニ達が犯罪組織に捕まったと報告を受けた私達は、漆黒人機軍の本部があるラステイション郊外の平地にて調査の報告を受け取っていた。

(よりにもよってミッドカンパニーに立て籠もっているとは…………面倒な話だ)

因みに、ミッドカンパニーとはモンスターの大量発生が原因で廃棄されてしまった廃工場である。

当然、そこに住まうモンスターも非常に厄介であり、下級モンスターの大群に加え、^{R41SDHC}『下位危険種』^{キラーモーション}『中位危険種』^{シユジンコウキ}『上位危険種』が揃い踏みだ。当然、掃討には私を含めた漆黒人機軍が総出で掛かっても相応の被害が出る。…………何故、それなら早々に退治しなかつたのかと?

勿論、私とて被害を出す事を恐れて放置していた訳ではない。ただ、犯罪組織が健在な上に女神を欠いたラステイションの現状では漆黒人機軍の手が足りていないのが問

題なのだ。なにせ、人間と機械の割合が2対8なのでな。

それに、機械とてタダではない。修理にも時間を要する事を考えれば、『当時』必要が無かった場所の掃討などしている場合ではあるまい?……………私は誰に説明をしているのだ?

……………まあ、それはさておき、だ。

(私としては、あの単純バカが態々人質を捕って立て籠もるとは思っても見なかったのだが……………まあ、籠ってしまった者は仕方あるまい。生身でそこらの要塞よりも頑丈な奴だが、そう言う日もあると思つて諦める他にない)

「さてさて、こんな時に面倒を持ち込んだ虫けらは血祭よろ?つてなオチに持つて逝きますかねえ……………」

「殺してどうする!今回は捕らわれた候補生達の安全が最優先だ!!」

「あく……………はいはい。了解しましたよつと……………めんどいけど」

「何か言つたか?」

「いや何にも?」

そう言つて、協力者であるアナザーは目的地であるミッドカンパニーへと向かつて歩み始めた。

(全く、物騒な所は相変わらずか……………まあ、あれで戦力としては非常に優秀なのは知つて

いる。私としても、阿呆の様に頑丈な狂戰士バーサーカーや、上位危険種シュジンコウキは手に余ると思つていたので。どうか手綱を握つて誘導する他あるまいな……)

そう思い、私はアナザーの対応を抑制から誘導に切り替える事を決めた。

元より、アイツとて契約事は守るので必要以上に心配はしていないが、同時に必要以上に抑えが効かないので抑制など出来はしないのだ。

しかし……

(思えば、随分と遠くに来たものだ……)

思えば、前世では親の手で机に齧り付かされてまで勉強に励まされたと言うのに、いざ就職してみれば早々に営業方面に廻されたのは予想外が過ぎた。

運動すら殆どしなかつた身には日々を過労気味のオーバーワークで全身に疲労が溜まり、ふとした拍子にした些細なミスが元で大事に発展した所為で会社をクビにされ、その頃にちょうど親も死んでいた所為で頼る身寄りも無く、就職難で次の職場も決まらずにホームレス生活が始まり……挙句に、そんなホームレス生活に慣れてきた頃合いで最後は路上で寝ていたら居眠りしていた大型トラックに轢かれてお陀仏である。恐らく、大多数の人間は不幸だと思ひ同情ぐらいはされる人生だったと客観的には思う。

実際、死んでから出て来た人の運勢を決める担当の神とやらも不幸な手違いでしたとお悔やみ申し上げられた程だ。恐らく、自分の生涯は客観的に観て比較的不幸な人生で

はあったのだろう。

その後、あれよあれよと転生する事が決まり、一般的に観ればシヨツパイにも程がある『天才は無理でも秀才には成れるだけの才能』だけが与えられ……恐らく、一般的な感性をした人物であれば怒り狂って大暴れしたのではないかと思う酷さだ。

ん？らしいとか恐らくとか、酷く他人事のようなだなと？

……まあ、他人事ではあるな。実際に、私は己が不幸だと嘆いた事が無いのだから（寧ろ、前世で死んだ恩恵で私は最高の職に就いているのだ！給金が多いのは玉に瑕だが、それを用いて我が至高の女神の守護せしこの国に奉仕せよとの事であったのだろう！！やはり、私は幸福な生涯であると断言出来る！！）

そう！やはり、人生とは多大な苦痛が無ければ成り立たぬ！！幸福な絵面？鞭を持った美少女な上司が薄給で休日無しの長時間労働で私を抜き使う事だが何か？

（そもそも、その点から言つてあの教祖は———《長い上に変質的な内容を含むので省略します》———しかし、あんな者でも我が至高の女神が任命したのだ。仕方あるまい……しかし、鞭を渡した程度で動揺することであろうか？全く、これだから合理主義者は困るのだ。寧ろ、どうせならばその無表情な顔で目だけ塵でも観るようなモノに変えて———《長い上に変質的な内容を含むので省略します》———

———……うむ。このような思考をしている場合ではないな。早々にユニを救出して、

ノワール様をお救いせねば……!!)

そうして、私は日課として日誌へ記す内容を脳内で纏め終えた頃に丁度ミッドカ
ンパニー前に到着したのだった。

(さてと……イヴェルトよ。私は今、生きている!!)

side out

side イヴェルト

「おいアレイストオ！テメエどこ行ってやがったあ!？」

「貴様には関係あるまい？私には私の、貴様には貴様の目的がある」

そう言つて、アレイストの野郎は、下^尾端が事前に用意したらしいソファーで寛ぎ始
めた。

(だあクソ!!あの野郎!このオレ様を嘗めやがって……!!腐れ英雄をぶつ殺したら次は
アイツを……!!)

そもそもオレは、あの腐れ英雄をぶつ殺すまではこんなムカつく野郎との行動でも我
慢しなきゃならねえ現状に非常にムカついていた。

はつきり言つて、籠城なんざオレの趣味じゃねーし人質はもつと趣味じゃねえ。寧

ろ、あの腐れ英雄と正面から殺り合ってる方がまだ性に合っている。

しかし、ジャツジの野郎はオレにこいつと協力しろと、態々オレの肉体に刻まれたシエアを送る為の刻印まで使つてあの野郎に従えと命令しやがった。正直、アタマがイカれてやがんじゃないかねーかと一瞬でも心配した程だ。

しかし、あのイカレ野郎がああ腐れ売女のクソババアとクソガキにしか発情しねえ万年発情期の変質者に暇潰しでしやがった賭けポーカーで負けたのが原因でオレにとばつちりが来ただけだった。死ねボケナスが

しかしまあ、面倒な話しながら、あの刻印まで使われている以上、命令には逆らえねえ訳で……

(しやあねえ、とつとと敵をぶつ殺したら返す手でアレイストの野郎をぶつ殺して、次にジャツジの野郎をぶつ殺す!!)

オレは、分厚い鋼鉄製の扉越しにでも伝わってくる殺気を感じながら、渴きを癒してくれる血戦の気配を堪能していた。

side out

side
???

ミッドカンパニーの近くには、二つの小柄な影が在った。

「ここにアタシの嫁が捕まってるんだね！いつくよー!!」

1つの影は、そんな頭が悪そうな声を上げると、ミッドカンパニーの内部に突撃して逝った。

「潜入か……ワクワクするわね！よおーし！いつくぞー!!」

そして、もう1つの影は目にも留まらない速さで、ミッドカンパニーの天井より中に侵入したのだった。

ンスターと、アレリストとイヴェルトの緩衝材として共に待機していたリンダ以外の構成員の断末魔と思われる悲鳴が鳴り響く。

「……来たかア」（フルフルニイ…）

「……（怖っ?!）」

そんな地獄絵図としか言いようのない状況が同じ建物の中で繰り広げられているにも拘らず、イヴェルトは一人、この後の闘いを想像し、某クレイジーサイコホモを彷彿とさせる凄絶な笑みを浮かべていた。

「アツハハハハハハハハハハアアアアア!! イイゼエ!? 早くコイよ……!! 野郎ぶっ潰してやらあアアアあアア!!」

「……アレリスト……マジでコイツ怖えんだけど……?」

「……まあ、いきなり我々に向かつて来る事は無いだろう……多分」

「いや多分って……確かに、昼間の公園に赴いてるトリック様並みにキモイけど」

そんな風に、イヴェルトが狂喜乱舞している横で下っ端とアレリストは結構本気でドン引きしていたのだが……そんな不安の声も、どんどん近寄って来る爆音に掻き消され、ケタケタと嗤い続けるイヴェルトには届かなかった……

side グロウ

「ふむ……協力者の選定を誤ったか？」

私は、目の前で繰り広げられている惨劇をどのように対処するかに思考の大部分を割かざるを得なくなってしまう現状に、強烈な頭痛を覚えていた。

事の始まりは、内側から鍵付きできつちりと閉められた頑丈な分厚い鋼鉄製の扉をどのように攻略するか作戦会議からだった

——回想始め——

「ふむ、物理と魔術の両面から強固なロックが掛けられているか……」

「はい。しかも、どうにか傍受した無線で拾った音声によると、我々がどちらか一方の鍵に対処した時点で銃弾や矢などが雨の様に降り注ぐような段取りが組まれているようです」

如何なさいますか？と、目の前の部下は私に問い掛けた。

私は、意外と考えられている敵の作戦に、敵の危険度を一気に引き上げた。

「今は漆黒人機軍の人手も足りぬ。故に、少数精鋭と機械による奇襲で「必要ないよ」

……なに? 必要ないとはどう言う事だ?

「言葉通りだが? 態々時間掛けて雑魚を集めてまで人数と兵器を使う程の脅威か? あの工場」

そう言つて、アナザーはミッドカンパニーの扉に向かつて歩き始めた。

「おい、勝手な行動を「ああ、そうだ」……なんだ?」

「邪魔だから、その小娘は早々に逃げた方が良いよ? 何だったら、グロウも逃げてくれて構わないしよ?」

そう私の言葉を遮り述べたアナザーは、懐から紅い何かを取り出し、それを握り潰した。

「……まあ、そこに居なければ精々死なないようにねエエエエ!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンンンンンンン!!!

「アツハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

そして拳を分厚い扉に叩き付けければ、一体その細腕の何処にそんな力が有ったのか……軽く数十tは有るだろう巨大な扉は、数m程向こうにまで吹き飛んで行った。

……途中に居た犯罪組織の構成員やモンスターの群れまで巻き込んで、轆き潰しながら

「おい! 停まれ!! 捕らわれた人質までつら「ギャハハハハハッハハッハハハハハハハハハッハハハハッハ

ハッハアハアッハハッハアッハッハアアアア!!」……………クソが!完全に暴走してるか……………」

「あ…………あの、団長?わたしは一体どうしたら…………う?」

そう困惑しながらも、ミッドカンパニー地獄の釜の入り口血塗れの地獄に突入させられないかが不安なのか、そこをチラチラ見ながら次の指示を仰いだ部下に、周囲一体に近寄る人間の避難を優先させ、私はこの状況をどの様に対処するかを思案せざるを得ない。

何故なら、仮にも女神一行の者が敵とは言え、人質の考慮もせずに虐殺をするのは些か外間が悪過ぎるのだ。シエアが大きく減衰しても文句は言えぬし、最悪の場合、我が至高の女神の妹御が死ぬ可能性さえある。

(と言うかだ。あやつ、救出系の任務には不適切過ぎぬか?)

どう見ても虐殺とか大規模な破壊活動にしか向いていないアナザーを見ながら、私は現実逃避気味にそのような事を考えるのであった

——回想終わり——

「…………仕方あるまい。あやつが人質を潰す前にどうにかしてこちらで回収するとしよう」

そんな感じで、現在進行形の惨事をどのように誤魔化すかに頭を悩ませていた私ではあるが、そんな事を考えている場合ではないと思い、待機していた部下の数人を率いて人質にされてしまっているユニ達の回収に臨むのであった。

「……まあ、幸いにも扉は破壊された。後は、人質にされたブラックシスター様及びにパープルシスター一行を救助に向かう！ 卿等も付いて来い!!」

そう言つて、どうにか怯える部下を奮い立たせる為に先陣を切った私は、破壊の限りを尽くされた上に敵の残骸である肉片や脳漿が混じった血の海が溢れるミッドカンパニーへと足を踏み入れた。

……しかし、敵影さえ見えない現状ではあるが私にはどうしてか嫌な予感が抑えきれないのであった。

side out
side ???

何処とも知れない極光の中、俺は分体の視界を通して映している紅い塊を観る。

(クスクス……相変わらずの力だよな？ ああ、やっぱり俺はお前が欲しい……)

俺は、それだけを胸に、俺を覆い続ける極光の封印を破ろうと暴れ続ける。

(そして……貴女^{アタシ}も大概強情ね? 貴女^{アタシ}の一部を棄てた人間なんかの為にそこまで頑張るなんて……いいえ? それとも、既に意識も力も殆ど失ったからこそ、そこまで愚劣に抗い続けられるのかしら……? ……まあ)

そのような独り言を呟きたくもなる俺は、そう言つて少し溜めた後に、俺^{アタシ}を封印し続けて来た貴女^{アタシ}へと、嘲る意味合いも兼ねて闇から一つの影を投影した。

その投影された影は人の姿を成すと、紫の髪にオレンジ色の髪飾りを付け、黒っぽい男物のシャツとスカートを身に纏つた少女の姿をしていた。

(結局は、最後は全てがこうなつてしまふのにな? ……あの子も、貴女^{アタシ}の最後の光も全て)

そして、俺^{アタシ}はあの子が起こす悲劇と惨劇に心を躍らせ、分体である影を無数に配置して観戦に洒落込むのです。

(……まあ、後で時空間事切り取つて永久保存するんだけどな)

side out

第十七話 改善後

いきなりだが、犯罪組織に所属する一構成員の俺は、仕事で滞在しているミッドカンパニーの通路で命の危機に直面していた。

(クツソ！何が簡単な仕事だ!!)

今回、俺はこの仕事を受けた事を本心から後悔している。

目の前には高さ3メートル程の巨大な紅い塊——その全てが仲間の血で構成された血の塊が迫つて来る。

「アツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ?!?!」

「ホロビヨ!!」

……しかも、あの紅い塊から紅い血を浴びせられた仲間は人間もモンスターも問わずに発狂して殺し合いを始める。

更に、その殺し合いで死んだ奴から流れている血まで集めて肥大化を続けた結果、触手のような形状まで取り始めた。

ミッドカンパニー

(こ) (こ)を人質の交渉が終わるまでの間防衛するだけの簡単な仕事だった筈なのに……なのになんてこんな事に……(?)

既に逃げる事は試みた。

しかし、どう言う訳か足が一切動かない。

心では逃げたいと思うのに、身体の操作が効かねえ……!!

(クソ！クソ!!動け……動けよ!!!)

そう思つて、必死に足を動かそうと考えるが、身体が一切言う事を聞かない。

それどころか、寧ろあの紅い塊バケモノに向かつて足が進み始めてさえいる。

(い……嫌だ……！死にたくn)

そして、そんな思考を最後に、紅い血を頭から引つ被せられた俺の意識は何処かへと消えて逝つた。

「アツハハハハはははハハハははははは!!!」

狭イ通路ヲ俺ハ移動スル。

眼前ニワラワラト蛆ノ如ク涌イテ居ルゴミヲ轆キ潰シ、奥へ奥へと進破ン壊テ行ク。

「死にたくnアアアアアアアああああああ嗚呼aaaaa?!?!」

眼前ノ比較的高イ性能ヲ保有スルゴミヲ中心ニ、狂乱ノ渦ヲ撒キ散ラス。

俺ノ周圍ニ満チル紅い鎧ブラッドアーミーハ既ニ、十数mニ到達シタ。

コレヨリ敵主力ノ殲滅ニ移行スル。

「aaaaハハハッハハハッハアaaaaハハハッハハハハハハ」

紅い塊となったアナザーが敵の主力を求めてその場を去ってからも、その紅い血を浴びた人物は狂ったように暴れ続ける。

その狂乱っぷりは、敵も味方も関係ないと言わんばかりの暴れようであり、アナザーを追いかけて突撃し、挽肉のような姿になった者も居れば、味方である犯罪組織の構成員やモンスターを相手に、理性を代償に得た本来の実力以上の戦闘力によって複数の味方^{犯罪組織の構成員やモンスター}を殺し、その死体にさえも破壊の限りを尽くし、己が討たれた時か、その肉体が自壊し果てるその時まで、ただひたすらに破壊の限りを尽くした。

そして、紅い血の塊が通った後には、腕も足も眼球も臓物も頭蓋も脳漿も金属部品もオイルも………血以外の全てが入り雑じった無惨な死体——否、死骸が残るのみであった。

アタシは日本一！ゲームギョウ界の悪を蹴って蹴って蹴り倒す正義の味方だよ！
憧れのグロウ様が動いたと聞いて………（ゲフンゲフン！）

じゃなくって、女神様が犯罪組織に捕まったと聞いたアタシは、独自に探し出した女

神様の居場所に華麗な潜入を果たして、女神様救出作戦を敢行した。(コラそこ！ご都合主義とか言わない！)

ただ……………

「……………なによ、これ」

女神様が犯罪組織マジエコンヌに捕まったと聞き、ミッドカンパニーこの屋根裏から華麗に潜入を果たしたアタシは、狭い排気口を破壊して降り立った通路の惨状に血の気が引く思いを抱かずにはいられなかった。

「大丈夫なの?!生きてる人が居たら返事をして!!」

そして、そう言いながらもアタシの冷静な部分は生きてる人なんて居ないだろうなど判断してしまっていた。

なにせ、これだけの惨状にも関わらず《何故か血液だけは無い》が、一番軽傷だろう人でさえ、全身に一目で致命傷だと言い切れるような裂傷が複数あった。

そして、酷いものだと死体が原型を無くしているものや、全身をバラバラに分解してグチャグチャに潰したとしか表現しようが無い腕や足が幾つも転がっていたんだ。

これで生きてる人が居ると言い切れるのは、流石にアタシも無理だった。

「酷い……………一体誰がこんな……………」

「キュ〜」(バタン)

「ちよ……ネプギア?!」

「ツ?!誰?!」

そして、誰かが倒れたような物音を聞いたアタシは、念の為に愛用のプリニーガンを構えながら、物音がした方向を警戒しながら顔を向けた。

「……………私達は敵じゃないわ」

そして、観念したかのような溜め息が聞こえると、アタシが助けに来た女神様の一人を背負った茶髪の女の子を始めに、気分が悪そうな顔色をしたオレンジ色の髪の毛の女の子（胸が大きい）や、世が世なら踏み台にされそうな感じがした赤髪に白いメッシュが入った女の子（この子も胸が大きい）と、周囲をしきりに警戒している黒髪の女神様が現れた。

「取り敢えず、ここを出しましょうか。このままここに居たら凄く危険よ」

『何が遭ったかは道中で話すから』と、そう言った茶髪の女の子——アイエフの言葉に従って、アタシはミッドカンパニーこの地獄のような場所から脱出する事になった。

時は少々遡り、日本一が排気口を彷徨っている最中の話

犯罪組織に捕まった私達は、武器を取り上げられて縛られた状態で牢屋の中に押し込

まれていました。

「……………ロス」

「……………（ちよつと、何が遭ったの?）」

「……………（さ…さあ?なにが遭ったんでしようか?）」

狭い牢屋の中で、何かを呟き続けているユニちゃんの周囲には可視化出来る位の濃密などず黒いオーラ——多分、怒りだと思う——が、陽炎の様に漂っていて、正直、怒り狂ったブランさんを彷彿とさせるような恐怖が私達を襲っていた。

（恐過ぎるよ……一体何が遭ったの?）」

しかし、どれだけ怯えてもこの狭い牢屋の中では逃げる事も儘ならず、私達に出来る事はそのとぼつちりを受けないようにと小さくなってジツとしている事だけでした。

「……………騒がしいわね」

「え?」

しかし、そんな時間はアイエフさんの一言で終わりを告げました。

「何かあったのかしら?」

「この場合、アタシ達への救援って言う線が濃厚だと思わよ?」

（あ、元に戻った／わね／です）

いつの間にか、『しようにきにもどった』ユニちゃんは、凄く自信と誇りと信頼に満ちた

様な表情をして語りだしました。

「グロウは有能なもの！相変わらず手を打つのが早いわね！」

しかし、いきなり扉が開け放たれて、そんなユニちゃんの背後から黒っぽい影が突っ込んできた。

「嫁ええええええええええ!!!!とったどー！！！！」

「ギャフン!？」

『……………』

えっと……………誰でしょうか？

「あたしはREDちゃん！嫁を探して、ゲームギョウ界を旅してるんだ！」

「そう言えば、最近嫁を探して旅をしてる女の子がいるって変な噂を聞いた覚えがあるわ……………まさか、アンタの事？」

「おおー！アタシってそんなに噂になってるんだー！うんうん、アタシ凄いい!!」
 （……………変な所はスルーなんですね／のね）

「……………ん」

しかし、そうしてのんびり話をしていたのが不味かったんでしようね…………

「いい加減に、アタシの上からどけええええええええええええ!!!!」

『はい!!!!』

そんな私達にユニちゃんの雷が落ちて来るのに、そう時間はかかりませんでした。

それから少しして、ユニちゃんの怒りも治まったので私達は牢屋の外から脱出を図る事になりました。

「しかしまあ、武器を近くの看守が持つててくれて助かったわ」

「そうですね。流石に無手じやどうにもなりませんでしたし」

とは言え、一体どうしたものでしょうか……

武器こそ回収出来ましたが、非常に嫌な予感がします。

「ん〜……コッチ！コッチなのだ!!」

「……本当に合ってるのかしら？」

土地勘も何もなく、取り敢えずREDさんを先頭に置いた私達は前にと進んで行きます。

途中、ゾウっぽい見た目のドット絵な姿の『ゾウベーター』や、鈍色で丸い、真ん中に黒いラインが入った『ビット』等のモンスターさんに襲われていますが、それらをどうにか切り抜けながらなので、どうしても多少は時間が掛かってしまうのですが……幸いにも、モンスターさんの数が少ないので何とかなっています。

「……………?!止まって!!」

「え……………キユ〜」(ボタン)

「ちよ……………ネプギア?!」

唐突に目に入った凄惨な光景に、思わず私の意識は飛んでしまいました。

……………やっぱり、慣れないよ…お姉ちゃん(ガクツ)

第十八話 改善後

ミッドカンパニーの通路半ばにして、運良く冒険者（漆黒人機軍に勧誘したら日本一と言う黒いライダースーツを着ている紺色の髪をしたヒーロー志望の《少年》が新たに入団したので、新たに《魔勇士》のコードを与えて銀に任せた）の救助によって脱出に成功していたユニ達と合流した私達は、ユニを除けば比較的情報の整理が巧いだろう『プラネテューヌの諜報員』アイエフからミッドカンパニーの外で詳しい話を聞き、情報の確認を行っていた。

「……成る程、それで無事だったのか」

「ええ……所で、アナザーの奴はやっぱり……」

「ああ、お察しの通りとだけ答えておこう」

そう、私が答えると、アイエフは頭痛を堪えるかのように、双葉のリボンがトレードマークな茶髪の頭を抱え始めた。

まあ、それも仕方がないだろう。詳しい被害を確認した訳ではないが、アナザーがミッドカンパニー入り口で犯罪組織相手に叩き出した大規模な破壊活動を見た私としては、同情の念を禁じ得ない。

「……………」(ムスツ)

しかし、私としてはプラネテューヌの女神候補生一行以上に、我が至高の女神の妹御の機嫌を損ねてしまっている事の方が何億倍も重要な事である。

(……………ふむ、一体何が原因で機嫌を損ねてしまっているのだろうか?)

最悪な事に、思い当たる節が欠片も存在しない。

我が至高の女神が妹御を非常に大事にしていたのは周知の事実であり、もしも知らぬ間に妹御を傷付けていたのだとしたら、我が至高の女神からの失望は決してあり得ぬ未来ではない。

もしもこれが基で怒りを買ひ、死を命ぜられたならば私は喜んで死のう。元よりこの生涯は余生のようなモノであり、私は至高の女神に仕えたその時から命も能力も何もかも我が至高の女神ノワール様に捧げているのだから……………

だが、失望されて他国に鞍替えさせられる事だけは断じて避けねばならぬ。それは、我が忠義にとって最悪の結末と言えるだろう。

「……………分からぬ。一体私は捕虜になつて疲れているだろう妹御にどのような失態を犯したのだ……………!!」

「……………後々、国際問題になつたりしないわよね? いや、冗談抜きに……………」

「……………ム……………!! (何でアイツはアタシには何にも聞かないのよ……………!?! アタシだって

当事者の一人なのよ!!」

そして、気が付けば私は隣のアイエフと一緒に頭を抱えていた。

そんな入り口のほのぼのした雰囲気と反比例するかのように、ミッドカンパニーの奥地での空気は最悪の一途を辿っていた。

「アアア a a a a a A a A a A a A a A ああアアア!!」

「ギャハハツハハハアアア!!!! 良いね良いねエー! 最ッ高じゃねエかアア!!」

「……最上位爆裂魔法」

「ぎゃああああ!!?! 危な……危な?!?!」

紅い血の障壁がアナザーとイヴェルトを覆う中で、暴走するアナザーがイヴェルトを殴り、イヴェルトは深紅の血に塗れながらこれまでの人生で殆ど負った事がないダメージに歓喜して殴りかかり空振っている。

そして、紅い壁の外からイヴェルト諸共に最上位爆裂魔法でアナザーを爆殺しようとして、殆ど効果がない魔法を撃ち続けるアレリスト……と、同様に壁の外で逃げ遅れて右往左往しながら戦いの余波で吹っ飛ばされたり降ってくる資材を避したりしながら必死に逃げ回り続ける下っ端は……意外としぶといで、もしもこの戦いが終

効いていやがる。

「アあ……何時以来だろうなア?!この最高の気分はよオ!!?」

「オオオオオオオオ○○○○○○○○○○オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!!」

「だろうなア!知るわきやねえよなテムエがよオ!!ギャハハハハハハハハハハ!!!」

何時の間にか背後から飛んでくる鬱陶しい炎系魔法は消えてたが、オレはそんな事は
どうでもいい!もつとオレを愉ませろやゴラアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

……………なんだこの状況は?

私——否、俺はこの状況に対して折れそうな心を保護する為か、何時の間にか防御
魔法以外の魔法の行使を全て停止し、現実逃避を始めていた。

正直、『私』と言う仮面を維持するのも放棄するのは、犯罪組織の大隊長に昇って以来
初めてではなからうか?

——回想——

「死デスフレイムの焰」

私の放った白い焰は、先程放った爆裂魔法と同様に、紅いナニか化け物とそれに取り込まれてい

るイヴェルトに直撃した。

しかし、イヴェルトは言うまでもなく、紅いナニか化け物もその体積を微量に削っただけで、未だに健在であった。

その化け物紅いナニかの核に相当するらしき部分は、イヴェルトの拳を普通に回避し、その上で（軽傷だが）傷付ける破壊力を持った攻撃を振るう………ここまでではない。

犯罪組織内で大隊長の……不本意ながら私の上司であるトリックに匹敵する防御力を持つとは言っても、格上のマジックや四女神一の破壊力を持つ俺の出身国であるルウイーの女神ホワイトハート辺りなら傷付ける事は十分に可能だろうし、イヴェルト自身も弱かった時はエンシェントドラゴンに殺られかけた事もあると口走っていた事もあった。故に、そこは良い。

しかし………

「グランゼウス・フォーリン雷天よ！我が敵を撃て！」

「オオ
おおお!!!」

「つらああああああああああああああああああああああああ!!!」

私が試しに放った貫通に特化した雷撃魔法は、激突する化紅いナニかと物イヴェルト達に衝突しても、大した成果が挙げられないでいた。

多少は焦げ臭いので、効果が無い訳ではないようだが……こちらに向けて血の散弾が跳んでくる辺り、範囲攻撃ではなかった為にその膨大な質量から雷撃魔法は当たらなかったのだろう。

——そう、思っていたのだが

「く……ククク………なんてザマだ。この程度で犯罪神を潰そうと考えていたのか？ 私
は……………」

防御魔法による結界を削られながらも、血の散弾を防ぎ切った私の視界が雷撃魔法によつて空けられた孔から見えた紅い塊の中身である血塗れた悪鬼が煙を上げながらもダメージが見られない無傷な姿を収めて、私はシヨックからそのまま防御魔法以外の全ての魔法の行使を止め、呆然自失としていたのだった。

——回想終わり——

「ギャハハ……ゴフツ………ま、だ……まだア……!!」

「A a a a a a」

「……………潮時か」

どうにか俺が私を取り戻した時には、既に戦いは紅い化け物の優勢で決まっていた。
ていた。

先程空けた穴から見えた限りでは、全身から血を流していたイヴェルトの状態を見る

に自力での逃走は不可能だろうし、そもそも転移魔法自体が発動に数秒程の時間が必要なのだ。

その隙を餌も無しにあの紅い化け物が見逃すとは思えない以上は、紅い化け物の領域に取り込まれているイヴェルトを助けている余裕など存在しない。

幸いにもイヴェルトは頑丈なので後数分なら持つだろう。

ならば、囷として紅いナニかの内部に居るイヴェルトを盾にしつつ下つ端を回収して逃走するのが現状での最善手か？

そう、逃走の手段を考えていた私だったが――

「ふむ……妙に帰りが遅いと思えば、このような状況になっていたか」

(……………神はまだ私達を見棄ててはいなかったらしい)

巨大で重厚な純白のボディを見付けた私は、大して信じてもしないければ、恐らくは破門されているだろう故郷の女神ホワイトハートでもなく、ましてや原作を見た限りでは信者に破滅は与えても絶対に恩恵は与えないだろう犯罪組織の神である犯罪神マジエコンヌの事を思い、皮肉にもそんな事を考えていた。

第十九話 改善後

「ふむ……妙に帰りが遅いと思えば、このような状況になつていたか」

ギョウカイ墓場より、厄介なラステイシヨンの英雄と教祖を潰そうと女神候補生達を人質にミッドカンパニーに立て籠つた同僚達の部下達の帰りが余りにも遅く、犯罪神様のシエアの恩恵を与える為に刻まれている刻印が危険な信号を発している事を察知したマジックより仲間の救出作戦が出され、直属^{我が}の部下^{盟友}共々転移魔法でミッドカンパニーに転移した俺達は、道中で散々見た仲間の無惨な死体と、恐らくはその仲間達から何等かの手段で搾り取つたのだらう紅い血の塊が、ボロボロの状態で気絶しているジャッジ^{部下}の部下イヴェルトを取り込み、その付近では息が上がっているアレイス^{トリックの盟友}ト………仲間の構成員の疲弊し切つた姿を見て、死者を冒瀆するかの如き余りの惨劇に激しい怒りを憶えると共に、1人でも多くの仲間が無事であつた事に俺は喜びを禁じ得なかつた。

「勇者様、わたくしはどのようなにしましょうか？」

「いや、俺は勇者ではないのだが……まあ、いい。生き残つた仲間達に治癒魔法を掛けた後に、お前達は我等が家であるギョウカイ墓場に帰還せよ」

「Yes. Master……仰せのままに」

かのような動きを見せる仲間の血で造られた紅い塊は、獣型や竜型モンスターの呻くような声をその中心部から響かせながらも、周囲に散っていた無数の細かい血液を浮上させ、その形状をまるで針のように、細く鋭く変化させていった。

それらの針は、俺にとつても当たればそれなりのダメージを覚悟する必要が感じられる。

「……成る程、侮辱を理解する程度の頭は有ったようだな？だが、所詮はその程度……か」

「G a A a a Aアアアアア嗚呼ああああ a a a A A A A A A 亜鏢亜鏢 a a a a a !!」

狂ったような絶叫を上げながら突撃して来た紅い血の塊は、背後に展開した血の針と共にその巨体からも無数の血を弾丸のように射出してくるが……

「なんの！これしきの事、大した事ではないわ!!」

「A A A A A 亜鏢 a a a a a Aアアアア嗚呼ああああ a a a a a !!!」

確かに、現状使えるのがこの剣一本しかない俺にとつて広範囲攻撃は鬼門だ。しかし、物事には限度と言うものがある。

こいつの攻撃はそもそも遅過ぎるのだ。如何に俺のボディを傷付ける威力を持とうが、そもそも当たらなければどうと言う事はない。

飛んで来る無数の血の針と弾丸を、俺達に当たりそうなものだけこの愛 ブレイブソルト 剣で時に弾

き、時には斬り捨てて粘りながら、俺は転移魔法で脱出しようとしている背後の仲間達の気配が消えたのを確認した。

「今度はこちらから行かせて貰う！俺の仲間はず返して貰うぞ!!」

呻くこやつに突撃した俺は、先程よりも多少はサイズが削れた紅い血の塊から、イヴェルトを救い出す為にブレイブソードを構えて斬り掛かった。

【おやおや、この状況は少し拙いかな?】

『イタ痛いアア嗚呼ああa a 亜亞鏗吾a a 吾a a a?!?!?』

極光の中で、漆黒の闇よりも尚、深く暗い闇の球体は、分体の1つから送られて来た光景と紅い塊と化したアナザーの莫大な負の思念を確認し、次の手を思考する。

『半宰紫N認m絵亡i滅s uメツス滅州滅S U琉ウウウU Uうウウう!!!』

【あの子を直接制御するのは……流石に暴走が激し過ぎて、『今』の俺には不可能でしょうし……】

とは言え、どうにかしない事にはどうしようも無い状況である事には代わり無いのだ。

ただ単純に、現状では手立てが殆ど残っていないだけで

『勇イブ負冥イイ尹イイイ異いいい!!?!?』

【まあ、最悪の場合は——の俺に——かな?】

そして、俺は暴走するあの子と^{アタシ}役立たずな^駒の^駒ザ・ハードの激突に対処する為に行動を開始した。

『いぎッ?!異偽亜亞鏢吾 a a 吾 a a アア嗚呼ああ a a 亜亞?!?』

【全ては大願成就を成す為にと………】

最後に、そんな不吉な言葉を残しながら——

【あ、今斬り飛ばされた肉片が飛んでった……^{役に立たない駒から生まれた役に立つ駒}ブレイブ・ザ・ハードGJ!取り敢えず

時空間から切り離して鮮度も状態も最高の状態にして永久保存しないと……!!】

………不吉な言葉(意味深)を残しながら——

第二十話 改善後

空中を漂うような浮遊感によって飛んでいた俺の意識は、激しい痛みとそれ以上の膨大な殺意によって、無理矢理に目の前の幻実に引き戻されていた。

しかし、何時の間にかよく分からないモノが目の前にいる。

視界に入ったそれは目の前のカス共を仲間と呼んで白い金属幾つかの種類が混ざった塵と肉の塊塵に回収を命じていた。

不快に感じたが、目の前の白い金属塊不快感の強い塵芥が邪魔で潰せない。

『イタ痛いアア嗚呼ああa a亜亞鏗吾a a吾a a?!?』

ああ、しかし、頭がイタイ。目の前の白い金属塊不快感の強い塵芥を見ると、なぜか頭痛が激しく止まらない。

なんだこれは……頭がイタイ。鬱陶しいぞ消えて無くなれ

「ふむ、存外に空気は読めるのだな? ……否、獣並みの頭だからこそ彼我の実力差を弁えていると言った所か?」

『半宰紫N認m絵亡i滅s uメツス滅州滅S U琉ウウウU uうウウう!!!?』

……ハカイする。

あハ……アハツツハツツハハハハ!! 殺す壊す潰す滅す認めない許さない赦さない引き潰す!!

引き巻つてカスも残さずバラ撒いてやらアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

何故か目の前の白い金属塊不快感の強い塵芥を見ていると異常に湧き上がる憤怒を原動力に、背後と胸部に相当する位置から千や万にも迫る数の血で出来た弾丸と針を作成して、目の前の白い金属塊不快感の強い塵芥に射出する。

「なんのーこれしきの事、大した事ではないわ!!」

『いぎツ?! 異偽亜亞鏗吾 a a 吾 a a 吾 a a a 嗚呼ああ a a 亜亞??!』

しかし、俺が放つた無数の弾丸も針も、目の前の白い金属塊不快感の強い塵芥がその巨剣を振るつただけで消し飛び不快感の強い塵芥白い金属塊には当たりもせず、何の効果もダメージも与えられはしなかった。

それ処か、放たれた斬撃の余りの破壊力に、纏っている膨大な血液が一部消し飛んでしまい、右肩の一部を抉り飛ばされた程だ。

「今度はこちらから行かせて貰う! 俺の仲間はず返して貰うぞ!!」

『汚埜レ悪野れ於乃 re o 廻レ荏獲得多重工エエえ!!!』

そう言つてこちらに向かつて来る白い金属塊不快感の強い塵芥は、両手!で持つ馬鹿の様に巨大な両手剣

を盾のように構え、巨体であるにも拘らず、非常に素早い動きでこちらに迫って来た。当然、その間も俺は血の弾丸や針を射出し続けるのだが、その悉くはその白い鋼鉄の巨剣に阻まれて届きもしなかった。

「むん!!」

そして、俺の空間である血の中に沈めていたやたら頑丈な敵を、無駄に巨大な両手剣で血の壁を斬り裂いて出来た隙間に押し込まれた白い鉄腕は回収して行った。

「さて、ここからが本番だ！覚悟するがよい!!」

『子寝紫値師子紙涅氏音死煉重枝獲餌依慧衛娃依工!!?』

認めない。断じて認められるものか

何故、俺が犯罪神本体なら兎も角、こんな——この程度の、■にも■にも行けないようなどっち付かずな半端者の端末四天王一体に負けなければならぬ?!

「オオオオオオオ!! 餓えず！ 渴かず!! 無に還れ?! ブレイブソード!!! 昇華!!」

『名瀬奈是那世南豺何故拿攻納皆蛇亜唾吾蛙充嗚呼!!!?』

しかし、何れ程憤怒を滾らせても、埋め難い程の膨大な力の差はどうしようもなかった。

不快感の強い塵芥不快感の強い塵芥の白い金属塊が振るう焰を纏った大剣から飛んで来た焰の斬撃は、咄嗟に防御に回した血の壁の9割を蒸発させ、俺の肉体を腹部から横一文字に斬り裂いた。

『グッ……アアア……』

何故だ!? 何故攻撃が効かない!? 一体、の?? †となにが違う!?

……いや、待て

違い? 一体、何が違うと言うのだ?

そもそも、目の前の白い金属塊とは何時戦った?
不快感の強い塵芥

……思い出せない。分からない。しかし、ナニかジウヨウナジヨウホウガ——

(ザザツザザザ……) 『はいはい、お前はもう少し後に全てを悟悟ちて来てねってね? じゃあ、オヤスミナサイ——』

そんな思考に急なノイズと意味不明な幻聴が混ざると、俺の意識は腰から上半身と下半身に別けられる程の大きなダメージからか、急速に暗闇極光の中へと沈んで逝った。

——なあ、結局、オレハドコデマチガエタ? 『◆◆◆?』

(……ふむ、存外にあっけなかつたか?)

俺は、自分自身でも慢心のように思うが、この結果にはそう思わずにはいられなかつた。

勿論、目の前のコヤツに対して過小評価したつもりはないし、油断したつもりもない。

寧ろ、結構本気で怒っていたので全力を以って叩き潰した程だ。

しかし、実際に蓋を開けてみれば紅い怪物の正体であるコヤツは俺に傷一つ付ける事も出来ずに、こうして倒れ伏している。

(これは……やはり、犯罪神様のお力がそれだけ強大だと言う事なのか?)

俺自身も不思議に思うが、コヤツを見ていると不思議と本能が身構える。

初対面で間違いはなかったのだが、戦いの最中も不思議とコヤツのやる事が頭に入ってくるのだ。

丸で、焼き直したテープを再生するかのよう——

「GURU……Guraaaaa……」

「っ?!コヤツ、まだ生きて……!?!」

俺は、何故か未だに生きているコヤツに止めを刺そうとブレイブソードをコヤツの頭に振り下ろすが……

「……何のつもりだ?マジック」

「……………」

それは、突然現れたマジックが、愛用の戦^{バトルサイクス}鎌で防いでしまい、不発に終わるのだった。

第二十一話 改善後

「……何のつもりだ？マジック」

「……………」

突然現れたマジックは、マジックにとつて神器である戦バトル鎌サイズを用いて、敵である筈のコヤツを護る為に俺のブレイブソードを止めた。

その行いは当然、犯罪神様を裏切る行いであり、如何に四天王のリーダーと言えど、到底赦される行いではない。

「……………」

「どうした！何も言えぬと言うのか!？」

そうしてマジックを問い詰めると、溜め息を吐きながらも重々しく口を開き……

「…ハア……犯罪神様より『この者を次の器に』と神託が下された」

「……なん……だと……………」

信じられない内容が飛び出て来た。

無論、犯罪神様や仲間を疑う気はない。だが、これは……………

「何かの間違いではないのか？」

「……………私が犯罪神様からの御言葉を聴き違えるかと？」

「……………いや、そう言う訳ではない。些か信じ難い内容だったものでな」

そう、俺一人で潰せる程度の雑魚を器にする等と……………どのようなお考えの基でそのような結論に至ったのかは知らぬが、何れにせよ俺には理解出来ない事に代わりはない。

そのような考えがマジックに伝わったのか、更に補足が加えられた。

「……………安心しろ。犯罪神様も弱者を器になどはしない」

「と言うと？」

「この瀕死の状態から生還し、このまま強くなれば、との事だ」

「……………成る程、将来性に期待しての話であつたか」

納得の話ではある。

だがしかし、それは逆説的に犯罪神様と並び得るだけの潜在能力がコヤツに秘められていると言う事ではあるまいか？

(ならば尚の事、今この場で仕留めておくべきではあるまいか……………?)

「……………ああ、それとだ」

ブレイブソードの柄に加わった力を見咎めながら、マジックは思い出したかのように口を開き始めた。

「犯罪神様はこうも仰つておられた——『我が器候補を器として覚醒させ、献上した者

の願いを1つだけ叶えよう』——とな」

「……………っ!？」

その言葉に、俺の心は大きく揺れ動いた。

犯罪神様のお力は強大だ。それこそ、我ら四天王では出来ない事であろうと、犯罪神様のお力添えさえあれば、大抵は叶ってしまう程に……

そう、子供達の幸福も、相棒を蝕み、今もなおその命を削り続けている病の完治も、犯罪神様のお力があれば十分に可能ではある。

しかし、叶うのはどちらか一方のみ

(……………俺は、どうする? 一体、どちらを叶えたい?)

これが両方共に叶うのであれば、こうも悩みはしない。

しかし、叶うのは一方のみ……その事が、俺を苦悩が苛んでいく。

「……………帰るぞ」

「……………ああ、そうであるな」

そして、願いを叶えると伝えられた時に俺の脳裏を過つたのは果たして一体どちらだったのか……俺には結局分からないままだった。

「…………ギア……グア……」

【ダメージ大

損傷率……不明。しかし、上半身と下半身が切り離された事によつて失血死の可能性が大

パッシブスキル：『生命維持：流血』を発動

肉体の周辺に残存する全血液を支配、それに伴い操作を開始】

「ガフツ……」

理解出来ない不明である……一体、何が遭つたのだろうか？

何時の間にか、気が付けばどこぞの工場の中に居た俺は、かなり鋭利な刃物で一刀両断にされただろう身体を見て、訳が分からないと言う思いで溢れていた。

（確か、俺は犯罪組織にとつ捕まつたネプギア達の救助にミッドカンパニーにまでやつて来て……………それから、どうなった？）

思い出せない。何かが突然、俺の意識を侵蝕したかのような……いや、どちらかと言えば、不快な力の波動を感じたような……

（……………一体、何が遭つたと言うのだ？）

その思考は、静まり返つた工場にネプギア達が現れるまで続いた。

どうやら、俺は相当酷く暴走していたらしく、出口にまで運ばれる最中でも、ミッドカンパニー内部は大量の死体と光に分解されかけている機械系モンスターを中心としたモンスターの死体が散乱し、出入り口では扉が拳大の痕を中心に、まるでティツシュのようにグチャッと潰れていた。

恐らく、暴走が原因で記憶が曖昧なのではないのかとの事だったが……

(しかし、俺の記憶が曖昧なのは、本当に暴走した事が原因なのか?)

その辺の記憶も無い以上は、どうしようもない事ではあるが………一体、どうなっているのだろうか?

………因みに、これは完全に余談だが

この後、滅茶苦茶アイエフに怒られた。

光に包まれた闇の中で、黒い影が蠢き続ける。

【本当に、今回ばかりは焦ったな】

その影は、汗を拭く真似のような動作をしながら、誰に聞かせる訳でもなく、ただ独りで光に覆われた闇の中で呟いた。

【しかし、確かにあの子を生かせと命じたけど……まさか、あの使えない駒、俺アタシからあの子を……】

そうして、黒いナニかの動きが数瞬だけ止まると、そこから堰を切ったかのように激しく燃え盛る。

【アハ……アハハハハハハハハハハ!!!あの使えない駒が!!あの子を俺アタシから奪う?アハ♪……潰してやる!滅却してやる!!引き拵こしらって最後の欠片になるまでバラしたらもう一度あの悪夢と絶望の狂気を骨の髄まで……イェ!魂の髄まで叩き込んでやる!!!】

そうして、激しく暴れ、周囲の光を喰い破ろうと暴れ出した闇だったが、暫くすると、急に大人しくなった。

【……………そう、貴様は、そうまでして俺アタシを阻むんだな】

そうして、一旦元の立ち位置にまで戻った闇の塊は、何処までも冷めた冷淡な声で言い放った。

【なら、この気色悪い極光の中から魅せて貰おうじゃない。あんな女神劣化品如きになんか変えられるのか……400年前の女神雌芥の焼き直しにならなきゃいいけど】

そう言つて、極光に抗い続けた闇は、中心にある闇の中へと潜つて行つた。

【……アツハ♪そうね。取り敢えず、新しくいっぱい手に入れたあの子の写真や吐息や足跡や肉片に雑じりつ気のない純度100%の血や唾液e t c.でも整理して並べ直

すとしましようか【

.....(汗)【

.....潜って行った。

第二十二話 改善後

……………頭が痛い。

それが、ミッドカンパニーから助け出された私達の感想だった。

ラストアクションに助け出されてから暫く、獣か何かの雄叫びみたいな咆哮が響き続いていたミッドカンパニーが静かになったので、状況を探る為に漆黒人機軍の人と協力してミッドカンパニーを探索し、奥地で何故かプカプカ浮いてる下半身がないアナザーが見付かった。

訳が分からないけど、これで詳しい事が解ると思い、近くに在った下半身をどうにかくつつけようとしながらお説教混じりに色々と問い質した訳だけ……………

「……………本当に、何も憶えていないのか？」

「ああ、さっぱり全く分からない。と言うか、どうして俺は腰から叩き斬られてるんだ？」

「いや、知らないから」

……………これだ。

どうにもミッドカンパニーに辿り着いた辺りから記憶がないらしくて、一体どうして

上半身と下半身が腰の辺りから斬り別けられてるのかとか、そもそも何があったのかとかが全て謎になってしまった。

因みに、ネプギアはバイオレンス過ぎる光景（下半身がないアナザー）を見てまた気絶したわよ。私？……………この位で気絶してたらキリがないわとでも言っておこうかしら（震え声）

（……………と言うか、どうして上半身と下半身が別れてたのに生きてるのかしら？）

「ふむ……………まあ、先にお帰り戴いたユニ様と、捕らわれた女神候補生一行が無事だっただけ良しとしよう。漆黒人機軍、撤収だ！」

『Yes, sir!』

そう言つて、漆黒人機軍の面々は、ラストイシヨンの方角へと撤退して行った。

……………グロウ以外

「……………さて、これからの方針についてだが」

「ああ、そう言えば、お前も付いて来るんだっけ？」

「うむ、その事だが……………」

（……………なんだがさらつと私達の同意もなく話が進んでいる気がするけど、實力は私達よりも上みたいだし、仲間になってくれるなら心強いから、一旦スルーするわ）

実際、感じる気配からして私とコンパが束になっても勝てないでしょうし

「……………そう思っただけで、事態は結構ヤバイみたいで……」

「すまんが、私はこれからこの事件の隠蔽と捏造に掛かりきりだろう。暫くは傷や疲れを癒す為に逗留してくれても構わぬが、仲間になるのは当分不可能だ」

「……………？　そうか、好きにすればいいと思うが」

「……………あー、それもそうよね。確かにこれは拙いわ」

記憶が無いアナザーは理解していないようだけど、確かに今回の戦いはやり過ぎてたわね。

幾ら女神を人質にしたから言っつて、女神様一行のメンバーが犯人グループ相手に降伏勧告も無しにいきなり大虐殺をやらかすのは……………あまり褒められた事じゃないわ。

「……………まあ、とっ捕まってた私達が言えた事じゃないんだけど」

幾らアナザーだって、せめて私かコンパのどちらかが居ればまだ暴走なんてせずに言う事を聞いてくれてたでしょうし

ただ、この事実が大々的に漏れると一般人から非難轟々で女神のシェアが大暴落するのは目に見えているわ。

実際、犯罪組織の構成員とは言っても、元は一般人が近年の貧困から抜ける為に犯罪組織に入ったって人も大勢いるだろうし……………まあ、幸いにもミッドカンパニーに配置された敵の大部分はここで始末した訳だし、後は現場を秘密裏に処理すれば……………ま

あ、大丈夫でしょう。多分

「私としては、ルウイーよりも先にリーンボックスの女神候補生に協力を仰ぐ事を奨めよう。もしも先にリーンボックスへ向かうのなら、私の方からも向こうの教祖へ根回しをしておく」

「……………」

「……確かに、それもそうね」

「気絶したネプギアを背負った私を見てリーンボックス行きを勧めてくれたグロウの言う通りかもしれないわね。」

「アナザーは物凄く嫌そうな顔をしてるし、今回は私達にも問題があったにせよ、流石に次暴走されたら私達じゃあ手に負えないわ。」

「あのお、なんでリーンボックスなんですか?」

「ああ、コンパは知らないのね」

「まあ、この辺の情報はある程度の立場や許可が無いと閲覧できないし、コンパが知らなくても無理はないか」

「ふむ、では後日、資料を届けさせよう。暫くはラスティションの教会でゆるりと休むがよ」

「私の方からも簡単になら説明しておくわ」

「そうしておいて貰えれば助かるな」

「アイちゃん、ありがとうございます」

「いいのよ、気にしなくて……資料を見た方が詳しく書いてるんだし、本当に簡単な概要を教えるだけなんだから……それじゃ、教会へ向かうとしましょうか……あ」

教会へ向かうとした私は、よくよく考えたらこのままじゃあ街に入れない事に気が付いた。

「所でアナザー、アンタはどうするの？」

「……………何がだ」

「いや、万が一応急処置した下半身が街中で取れたら大騒ぎになるわよ」

「……………そうだった」

私がそう指摘すると、アナザーはちよつとポカーンって顔をしてすっかり忘れてたと言わんばかりに頭を抱え出したわ。

「一応、この場でも大量の血かそこそこ強力な回復魔法を掛ければ修復は可能だが……………出来るか？」

「悪いけど、私はそこまで強力な回復魔法は使えないわ……コンパはどう？」

「ごめんなさいです。わたしもまだ、そこまで強力な回復魔法は使えません」

（本当ならR.E.D.にも聞いた方が良かったんですけど、話が意味不明な方向に拗

れる気がして、先に帰ったユニに付いて行って貰ったのは早計だったわね)

多少は後悔してるけど、もうどうしようも無いわね。

仕方なく、私とアナザーでちよつとモンスター狩りに行って血を集めようかと思つた所で、グロウからこんな提案があつた。

「二応、そこに装甲車を用意してある。教会に帰ればラステイションで指折りの治癒魔法使いも詰めている筈だから、そこで治して貰うが良い」

「そうね。それなら下半身が街中で取れても騒ぎにならないでしょうし、そうしましうか……いいわね？アナザー」

「……………ああ、別に構わん」

「では、付いて来るが良い」

こうして、ラステイションの教会までグロウが用意していた装甲車で向かい、教会に詰めてるって言う治癒魔法使いの手でアナザーの上半身と下半身は再度くつついた訳だけど……………結局、アイツの上半身と下半身をあんな風に叩き斬つた犯人は判らないままだった。

けどまあ、よつぽどキレイにスパツと斬れていたらしく、くつつけるの自体はそこまで難しくなかったのは、唯一幸いと言つてもいいんじゃないかしら？

正直、一緒に旅をするのにデユラハンみたいなのと一緒に言うのは流石にちよつと

困るし……まあ、この場合は首なしじゃなくって腰なしなんだけど

(……………腰なしって、腰抜けみたいでそれはそれでなんか嫌な表現ね)

「……………う、ううん……」

おっと、ネプギアが気絶から回復したみたいだから、ここで私の視点は終わりよ。
……………でも、トラウマになってなければいいんだけど

「……………う、ううん……」

……………()は？

確か、私は……………うっ!?

「うえ……………」

思い出しました。

確か、私は……………

「ちよつと！大丈夫なの？ネプギア!!」

「だ、だ、い、じ、よ、う、ぶ、で、ず」

「いや、全然大丈夫そうに見えるから！ほら、エチケツト袋」

「あ、り、が、と、う、ご、ざ、い、ま、す」

気持ち悪い……それだけが、今の私を支配する唯一の感情でした。

「大丈夫なの？」

「……うつぶ……はい。なんとか」

「とにかく、無理しちやダメよ。なにか食べたいものはある？して欲しい事は？」

「……あの、少し、話を聞いて貰ってもいいでしょうか？」

「ええ、いいわ。何の話し？」

「はい……」

——これまで私は、言つてはなんですけど結構いい暮らしをしてたんだと思ひます。

候補生とは言え、同じ女神が絡まない限り滅多な事では死なない——いいえ、殺されない力を持った身体と、生活に困る事は無いだろう環境

勿論、危ない事は在りました。

でも、お姉ちゃんに助けて貰つてどうにかなつていたので、死ぬなんて思ひもしなかつたし、犯罪組織が台頭して守護女神ハド戦戦争が中断になつてからは、ますます死ぬなんてあり得ないなんて思ひは強くなつていつたんです……勿論、犯罪組織の四天王の人にあつさりめられたお姉ちゃん達を見て、死ぬなんてあり得ないなんて思ひは恐怖に取つ

て代わられてしまいましたけど

ただ、アナザーさんと再開する直前に遭遇したあのおかしなフェンリスヴォルフを倒してからは、お姉ちゃん達の敗北あんな光景はた少し油断があっただけで、シエアさえ戻ってくればあり得ない……………心の何処かに、まだそう言った慢心のような考えがあつたんだと思います。

そして、そう言った考えは、下半身が斬り離されていたお姉ちゃんと同じかそれ以上に強い人アナザーさんを見た時に、全て砕けました。

正直、言つてはなんですが、アナザーさんの事は苦手です。

何時もムツとしてて怖い顔だし……………モンスターは倒せたのにキツイ事言われた事もあるし

けど、ハーイド守護女神戦争戦が中断されて数カ月の間、お姉ちゃんと一緒に各国を回つてたアナザーさんの戦いを見て、この人は何が遭つてもまず死ぬ事はないんだろうなと思ってんです……………思つて、いたんです。

「あつはは、こんな話なんてされても困りますよね……………ごめんなさい。少し、1人にして貰つてもいいですか?」

「……………ええ、分かつたわ」

私がそう言うと、アイエフさんはお部屋の外に出て行ってくれました。

それを確認した私は、お布団を頭にまで掛け直して、アイエフさん人の前では抑えていた感情が堰を切ったように溢れて来ました。

「うう……怖い……怖いよお……お姉ちゃん」

——助けて、お姉ちゃん

第二十三話

「くあ……やつと治ったな」

ラストイシヨンの教会に着いてから数時間、当初は直ぐに治るなどと嘯いていた治療だったが、思いの外難航してしまい、結局あれから8時間も掛かって漸く、何時の間にか斬り別けられていた下半身と上半身が治ったのだった。

結局、あれから一晩中起きていたので眠くて仕方がない。

しかし、まだやる事がある以上は呑気に眠る訳にもいかんか……………

「ゼエ……ゼエ……アンタ、どんだけ魔法抵抗力が高いのよ！」

「ハ……雑魚が、お前が弱過ぎるだけだ」

「ムツキー!!人を!しかも乙女を一晩中付き合わせといてその態度は無いでしょうが!!その態度は!!」

……それに、近くで息を荒くして喚く乙女(笑)が五月蠅くてとてもではないが眠れそうもない。

一瞬、血を搾り取ろうかを迷ったが、現状でこんな雑魚一匹の為に態々ラストイシヨンに喧嘩を売る気はない。面倒だが、殺した方が面倒なのだし放置しておくか……ウザ

イガ

「キーキーと喧しい虫けらだな。いつその事治療師など辞めて音響系の魔術師にでもなつたらどうだ?」

「余計なお世話よ!夜更かしや徹夜はお肌に悪いんだからね!!」

そうして、近くでキーキー喚く雑魚治療師の発する雑音に耐えていると、扉からノックの音が聞こえてきた。

「あーもう!今度はなによッツ?!」

「早朝から失礼、緊急の話があつて訪ねさせて貰つたのだが……お邪魔かね?」

「……………何の用だ?俺も暇だ」はくい!何の御用でしょうか?治療がご入用ですか?はつ?!まさか何処かお怪我でも?!早速治療致しますので、脱いでください!!さあ!さあ!!……………なんとという変わり身の早さだ」

「いやなに、すまないが彼の方に用があつてね。後でまた訪れる故、少し待っていてはくれぬかね?」

「はくい♪……………あの方に無礼を働いたり私の素を話したりしたらブッコロスからな?」

最初は少しドスが効いた声で返事をしていたのに、入つて来たのがグロウだった事を知ると、もの凄い勢いで変わり身を發揮し気色悪いぐらいの猫撫で声を発した雑魚治療師だつ

た。

と言うか、さり気にもその媚びたような笑みはそのままにして小声で脅迫までしてきた辺りに清々しきを感じた。

「……………まあ、いい。移動しながらで良ければ聞こう」

「うむ、それで構わぬよ」

「またのおこしをお待ちしていきま〜す♪……………今度は、グロウ様が怪我して来ますよ
うに（ボソツ）」

最後に不穏な事を呟いていた治癒術師（維魚）を努めて無視しながら、俺はネプギアの気配が
する辺りまで歩き出した。

そもそも、色々（誘拐とか）遭つてすっかり忘れていたが、今回のラスティション訪
問は各国の実力者の勧誘とゲームキャラの確保ないし保護の前座だ。

それを終わらせない事には、リーンボックスにもルウィーにも行けない。

「それで？何の用だ……………言っておくが、あまり時間はとれんぞ」

「ああ、私の用件だが……………まあ、ネプギア殿の元に向かうならば、共に聞くが良い。彼女
にも関係があるのでな」

「ふーん……………別にいいが、邪魔だけはするな」

結局、一体コイツは何の用で来たのか分からないままだが、別に興味もないからどう

でもいい。

……………ああ、ちょうどいいか

「所で、ゲームキャラの居場所は知っているか？」

「うん？無論、知っているが……まあ、暫し待て」

そう言つて、グロウはネプギアの気配がする方向へと足を進めた。

当然、俺もネプギアに用があるので、グロウの後を追う形になつてしまつたが、ネプギアの気配がする方へと向かつて行つた。

ミッドカンパニーに起こつた惨劇の隠蔽と処理を終えた私は、治癒術師のステファニー女史が詰めている保健室（正式名称は集中治療室だが、ステファニー女史の要望で保健室と呼ばれる事が多い）に向かい、アナザーの行き先を聞こうとしたのだが

……………

「……………なんだ？」

「いや、なんでもないともし」

「ふーん……」

どうやら、ステファニー女史は私がアナザーに用があると察して引き留めてくれていたらしく、アナザーは保健室に滞在していた。

私は、ステファニー女史の評価を二段階程上げて感謝し、今度ボーナスの支給でもしようかと考えたが……まあ、今は目の前の事案であるな。

どうやら、アナザーは……と言うよりは、ネプギア殿一行はラスティシヨンのゲームキャラに用があるらしい。

……まあ、ネプギア殿一行がラスティシヨンで聞き込みをしていたのを漆黒人機軍の一般兵が察知していたので、神宮寺教祖共々知っていたが

神宮寺教祖は、この情報を元になにか女神級の者が必要な難題をやらせようとしていたらしいが……私としては、別にくれてやっても構わんとさえ思う。

無論、ゲームキャラ自身が拒否すれば話は別だが、そこまでは私も知った事ではない。「ネプギア！居るか？入るからな！」

「ちよ……?!」

……済まぬが、ネプギア殿の部屋に着いたようだ。

故に、私の視点はここまできさせて貰う。

後で聞いた話だと、私が挙げた悲鳴は、結構広いラステーションの教会全体に響き渡ったそうです。

……うう、結構致命的な所まで見られちゃったよ……………(泣)

第二十四話

……………現在、俺は黒っぽいのに何故か豪奢だと感じるラスティシヨンの説教部屋（懺悔室はなんか嫌）に居る。

何故か？……………決まってるだろうそんなもの

「まったく！前にも人の……………特に、女の子の部屋に入る時は必ずノックをしなさいって言ったわよね？」

「いや、ノックはしたぞ？声もかけたし「黙らっしやい!!」……………」

「そうですよ？あなざーさん！ちゃんと反省するです！」

……………コンパとアイエフに説教されてるからだよ。

確かに、ネプギアにはちよつと悪い事したかなとは思うが……………何故興味が無いものを見せられてこんな長い時間をクドクドと説教部屋に押し込まれて説教なぞされねばならんのか……………と言うか、確かに女神だけあつて整つてはいるが、幾らなんでもこの歳にもなつて10代^{ガキ}相手に発情する程色に呆けてはいない。

人間的に例えるなら、幾ら^歳キレイでも可愛くても2歳のガキ相手に発情するのかつて話だ。もう少し成長^喰してから出直して来い。

……いや、そう言えば前にルウィーには7歳か8歳辺りの容姿をした女神候補生や同じぐらいの人間のガキ相手に発情のような反応をしている変態ロリコンが大勢居るとか噂で聞いたような………？

「聞いてるですか？」

「あーはいはい。聞いてるよつと………と言うか、こんな時間があるなら鍛錬の一つでもしてた方が建設的だと思うが………」

『なにか言った／いましたか？』

「なんでもない………ハア」

「これは、相当長引きそうだった。」

………本当に、何故こんな無意味な時間を過ごす破目になっているのだろうか？

(………俺吸血鬼やネプ女テューヌ神と違って、お前人間らは有限なのだろう？なのに何故、こんな無

意味な時間の使い方が出来る？………有限だからこそ、時間は有効に使うべきだろうに)

「今度からちゃんとドアを開ける前はノックをしてから了解を取って入る事！良いわね？」

「後、声を掛けるのも忘れちゃダメですよ！」

「はいはい………ハア(訳が分からん)」

本当に、勘弁して欲しいと心の底から思った。

教会の最上階にあるアタシの部屋にまで聞こえるすごく大きな悲鳴を聞いたアタシは、悲鳴の中心らしき現場に急行したんだけど……………

「……………(こ)、ネプギアの部屋よね？」

現場は、グロウから聞かされてなんとなく(なんとなくよ！なんとなく！)憶えてたネプギアの部屋だった。正直、結構気まずい。

ここはお姉ちゃんの教会なんだから本当なら気にする事なんてないんですけど……………

「合わせる顔があるの？あんなに大見得切ったのに？」

……………ムリムリムリムリ！会える訳ないじゃない!!ネプギアが頑張つてあんなの相手に稼いでくれた時間を、油断して不意打ち喰らつて無駄にしたのよ？アタシ

「……………でも、あの悲鳴はネプギアのじゃないかもしれないし……………うん、きつと偶然違う人が入っちゃって、クモか何かでも見ちゃって悲鳴を上げちゃったかもしれないのよね？」

……でも、ほんとにネプギア達が居たらヤだし……………って!!

「あーもう!どうしてアタシがここでこんな悩まないといけないのよ!!こうなったr
『ユニちゃん?居るの…………?』……………」

……………居た?!居たの?!?!!こうなったら最終手段、居ないフリを——

『……………えつと、そこに居るんならだけど、少し、相談に乗ってくれないかな?』

「え……ええ、いいけど」

……………しまったああああ!!うつかり反応しちゃった!?ヤバイ……………これ、もう居ない
フリとか無理があり過ぎるじゃない?!?!?

もう、こうなったらヤケよ!女は度胸!気まずいとか言う前に、借りを返すと思って
相談にぐらい乗ってあげようじゃないの!!

こうして、覚悟を決めたアタシはネプギアがいる教会の一室に突入したのでした。

「……………ここは相変わらず暗くてジメジメしてるね」

やあ、画面の前の諸君、久々に登場した神宮寺ケイだ。

今ボクは、教会の地下に巧妙に隠された地下室に居る。

その地下室は、ボクが数年前にノワールに誘われて教祖を始める前に造られ、以後はグロウとノワール以外の許可を持たない人物は基本的に存在さえ知らされず立ち入りも禁止のエリアに指定された訳だが……………ん？なんでボクがそんな部屋に居て、そもそも場所を知ってるのかって？

そこはまあ、禁則事項とさせて貰おうか……………とてもじゃないけど話せたものじゃないし(ボソツ)

……………わかったわかった、じゃあ、せめてなんで居るかって部分は教えてあげよう。

……………グロウの目撃情報がこの辺りで出たからだよ。凹んでもいいかな？良いよね？ぶっちゃけると、こうして強引にでもテンションを保ってないと死にそう。憂鬱で

憂鬱になるのに何で態々グロウを探してるのかを詳しく言えば、あの仕事中毒の権化が今日と明日にしなければいけない最低限度の仕事を超特急で片付けて、急に一日有休を捻じ込んだからだ。

……………いや、それは別に良いんだよ？良いんだけど……………

あまりにも急過ぎたからなのか、今は教会中がてんやわんやの大騒ぎさ……………職員の手

分が（終わってないのに）仕事を投げ出して「グロウの状態を知ろうの会」を開いた所為でね！と言うか、キミ達はグロウを目標にしたいんならせめて自分の仕事を片付けてからそんなふざけた会議を開いてくれないかな？ いやほんと……お陰で、ボクに回って来る仕事が天変地異みたいな量になったじゃないか

（……………まあ、そんな怖い事はとてもじゃないけど言えないんだけどね）

罷り間違つて彼グロウファンクラブ会員らにそんな事を言つたら最後、間違いなく呪い殺されかねないし

実際、（何をしてたのか詳しくは知らないけど）グロウを慕う美女美少女目当てに適当な気持ちで入会して強引なナンパをしたとある『元』男性会員数人は全裸で全身の毛を筆られて公共の通路に吊るされ、去勢されてた挙句に過去の不正や浮気話に恥ずかしい過去等の諸々まで詳細にネットに晒され、同様の内容をその身体に彫り込まれて社会的にも男性的にも仕事のにも家庭的にも永遠に再起不能にされてたし（因みに、未だに時折ネプッターやブログで晒されては巧妙に可哀想とかの気持ちを潰して再度再起不能にさせられてるよ）

そんな連中に喧嘩を売るとか、実質自殺みたいなものだね。ボクは御免被る。

そんな事を考えていると、何時の間にか目的地に着いていた。

『100、101、102、103……………』

(……………やつぱり、ここだったんだね)

……………これは酷い。

そう表現する他無いぐらい、ボクの目に映った光景は、酷いものだった。

(変態も大概にして欲しいんだけど……………ノワール、マジで早く帰って来てくれないかな)

「111、112、113、114、115……………」

そこには、何故か上半身が裸な上に片手の親指一本で倒立腕立てをしながら、他の余った手足を使つて作文用紙になにかを素早く書き込んでいる変態グロウの姿があった。

しかもおぞましい事に、作文用紙の中に書かれた文字は無駄に丁寧な上にきつちり枠内に収められ、別々の文字を三枚同時に書いているのに普通に文章として成立している。正直言つて、人間技じゃない。

「……………」(ドン引き)

「122、123、124、12g……………む？神宮寺教祖か、何か用かね？」

余りにも酷過ぎる光景に、思わず後退りしたボクの足音や気配を察知したのか、倒立腕立ての姿勢だけは絶対に崩さないが、こちらに気が付いたらしいグロウが声をかけてきた。

「いや、何か用か？じやないよ。君が急に「いやなに、些か早急に有休を振じ込んだのは申し訳なくも思うのだが、私はこれより反省文を書かねばならないのでね。少々忙しい。余程の緊急事態でなくば後に回して貰いたい」……………いや、聞けよ」

最後まで言い切る前に強引に話をぶった斬り、再度倒立腕立てを再開してしまったグロウだった。

(と言うか、仮にもボクは教祖なんだけど……………流石に雑過ぎないかい?)

余りにも雑な扱いに心が折れそうだった。が、しかし、ここで引き下がる訳にはいかない。

「反省文とは言うけど、なにを反省してるんだい？」

「144、145……………ああ、実はアナザーと共にネプギア殿の部屋へ向かってね……………アナザーが急に扉を開けたらネプギア殿が全裸だったのだよ……………」

「ああ、そう言う事……………」

……………ああ、そう言えばそんな話があったね。

仕事が怖いぐらい増えていったから、すっかり忘れてたよ。

「……………つて、じゃあなんで倒立腕立てをしながら書いてるんだい？時間の無駄じゃないか」

「……………ふふふふ」

ボクが倒立腕立てをしている理由を聞くと、凄まじく暗い顔をしながら、急に不気味な笑い声を上げ始めた。

「聞くかね？聞きたいかね？では教えようじゃないか！」

（あ、これ長くなるやつだ）

「いや、最初は普通に書いていたのだよ？だが、よく考えてもみよ。普通に書いた場合、作文用の用紙が200枚程度など、一時間もあれば十分片が付く。それは、些か非礼が過ぎないかね？そも、確かに私はノワール様以外には欠片も興味はない。寧ろ、唾棄すべきナニかとしか感じぬ。しかしだ、それでも女性を相手に（以後、もの凄く長くてくどい言い回しでノワールの名誉を傷付けたくないと言う内容が語られる）——と、言う訳なのだよ。ご理解をいただけただかね？」

……………もの凄く長かった上にも良く、なんだかもものすごい滅茶苦茶な事を言いつ出した。

ボクとしては、ノワールの名誉にそこまで配慮できるならもう少しボクにも配慮して欲しいと思うし、そもそも君がユニ以外には適当な隠蔽をしている所為でボクの胃は一日一回の胃薬が必須なんだけど……………

それに、常人ならそもそも作文用の用紙200枚は一時間では終わらない。と言うか、そもそもそこまで書けないだろうに

……まあ、何時もの事だけどね（遠い目）慣れたよ。色々と

「ふう……まあ、いいけどね。今度からは有休を取るなら一言説明をしてからにしてくれるかい？」

「ああ、了承したとも……尤も、あまり休暇など取る気は無い故に、無用の心配であろうがな」

「なんだか、またボクにとって不本意な悪い噂が悪化しそうな気がしたけど、なんか疲れたし、どうでもいいや。」

「……（聞かなかった事にしよう）じゃあ、ボクはここで失礼させて貰うよ」

「うむ、私は明日までにこれを終わらせる故、ゆつくりと休むが良い」

こうして、グロウが急に有休を取った謎は解決？した。

……え？グロウの状態を知ろう会議の問題はどうしたって？

…………あんなの、解決する訳ないじゃないか

こうしてグロウを探しに来た時点で会議も終了してたし、なによりもボク自身、関わりたくないとの心の底から思うよ。

第二十五話

お説教から早一日。

やっとコンパとアイエフから解放された俺は、説教が終わったら何時の間にか部屋の中に居たグロウと昨日の用件を終わらせる為にネプギアの元へ足を運んでいた。

「……………二徹か」

「ククツ、私は二徹程度、何時もの事……いや、寧ろ朝食のオマケ以下だが、卿は少々キツそうだな？」

「喧しい。普段は森の中で暮らしているからな。二徹も三徹もする必要性が長い事無かっただけだ」

ああ、ほんとに眠い。

欠伸を噛み殺しながら、早くネプギアに話を押し通して寝直そうと歩みを進めていると……………

「そのの2人！ちよつと待ちなさい!!」

「……………んあ？」

「これはユニ様、如何なさりましたか？」

……………目の前に、なんか黒っぽいのとネプギア？が居た。

(……………とと言うか、アレ、ネプギアだよな？なんかすごい顔してるけど)

「ちよつと明日の修行に付き合いなさい!!」

「ええ?!ユニちゃん？なんかすごい色々端折ってるよ!」

そう言つて、ネプギアが変な顔のままツツコミ、おそらく説明でもしようとしたのか、

口を開くが……

「ごめんなさい!えつとこゝr「はい。喜んで、拜命を受け賜りました」ええ!?説明とか

いらなかった?」

変買者
グロウの速答に対してこの様である。

「いや、説明はやれ」

「それが女神様の御望みならば、何も聞かずに受けるのは当然であります」

……………一瞬、色々つぶん投げて隣のグロウをぶつ殺してやろうかと思つたのは秘密

だ。

「えつと……説明はちゃんとしますから、2人とも落ち着いてください」

そう言つて、ネプギアは顔芸を止め、神妙な顔をしながら、語り始めた。

「えつと、あれは昨日の夜の話でした」

時は少し遡り、懺悔室でアナザーが説教をされていた時のネプギアの部屋

——回想始め——

現在、ラステイションの教会でネプギア達に割り当てられた部屋ではネプギアとユニの2人が、それぞれベットと椅子に座り向かい合っていた。

そして、沈黙する2人の顔は、それぞれ理由こそ違うものの、神妙なものであった。

「……………で、相談ってなによ」

「うん…………あのね、ユニちゃん」

先に沈黙を破ったのは、相談を頼まれたユニの方であった。

恐らく、この沈黙に耐えかねたのだろうユニの表情は、気まずさと苛立ちが滲んでいた。

「……………えっと、なんて言ったらいいのかわからないんだけど…………」

「…………なによ？いいからはつきり言いなさい」

そして、そんな微妙な空気を感じ取ったのか、ネプギアの表情もまた、微妙な言い難さが滲んでいた。

「あのね…………怒らないで聞いて欲しいんだけど…………」

「…………なによ？怒るような事でも聞くの？」

「……ううん……そうじゃ、ない……と、思うんだけど……」

「だったら、とりあえず聞かせて……怒るかどうかは聞いてから決めるから」

「そこは、怒らないって言い切ってくれないんだ……」

「当たり前でしょう？アタシにも許せない事ぐらいあるんだし」

ほら、早く言いなさいと急かすユニに対して、ネプギアは静々とその心の内を語り始めた。

「……あのね、ユニちゃん……」

『ユニちゃんは、戦うのが怖いつて思った事は無い？』

「………は？」

それが、ユニがネプギアに返せた唯一の反応だった。

「えっと……」

「………正確には、死ぬのが怖いつて思った事なんだけど……ね」

その言葉を聞いた時のユニの表情は、よく分からない事を聞かれた際の困惑したものだっただけだ。

それもそうだろう。本来、女神と言う存在はただ女神と言うだけで、基本的に死ぬ可能性など無いに等しい。

生まれ付き強靱な肉体に、天性の幸運と溢れんばかりの魔力

周囲の一般モンスターはそれらから幸運を除いた1つを適当に振り回すだけで死に至るし、一、二発は耐え得る危険種も、少しだけ戦いの経験を積めば余程の力の差が無い限り、ダメージを負うかもしれないが……しかし、所詮はそれだけだ。女神の敵為り得ない事に変わりはない。

勿論、女神でも危険な敵に成り得る存在は居ない訳ではないが………同族故に同格為り得る女神は守護女神戦争が終わって以来闘う事は無くなり、種として同等以上に当たる最高位二柱の吸血鬼達はルウィーのダンジョンや山の奥深くだ。

「私は……怖いよ……間違はなくお姉ちゃんは助けたのに、怖くて動けない………死にたくない………ねえ、私は………どうしたら良かったのかな？」

せめて、守護女神戦争に参加するか周囲の人間が死んだ場面を目撃した事があれば別だったろうが………そこまで早く生まれた訳でもなく、かと言って女神生が長い訳でもないユニは、そんなネプギアの問いに対する明確な答えを持ち合わせてはいなかった。

「……………っ!？」

パアン！

「え…………？」

しかし、ユニは答えを持ち合わせていないなりに答えを出していた。

叩かれた頬を抑えながら、呆然とユニを見上げているネプギアに対して、ユニは怒っ

たような……或いは、なにかを抑えているような表情でこう言い放つ。

「ふざけないで……いいわ！そうやってうじうじへこんでる位なら、いつそ迷わず国に——プラネテューヌに帰りなさい！そこで、アタシがお姉ちゃんを助けるのを指をくわえて見てれば良いじゃない!!」

「……っ?!」

「それがイヤなら……一緒に強くなりましたよう？もう、誰にも——お姉ちゃん達にも負けないぐらい!」

誰にも負けないぐらいに強くなる。

これが、ネプギアの問いに対するユニの答えだった。

当然、簡単な事ではないだろう。姉の女神達は、何百年も同格の女神相手に戦い抜いた果てに^{100Lv越え}あれ程の力を得たのだ。^{レベル}

それを、たったの十数年しか生きていない2人が越えるのは困難の極みと言ってもいいだろう。

「さて、そうと決まれば早速行くわよ!!」

「え？ちよ……ユニちゃん!？」

こうして、ネプギアはユニに引き摺られ、教会中を歩き回る事になったのでした。

「と、言う訳なんです」

「ネプギア！今日はもう寝るわよ!!」

「あ、うん！ユニちゃん……じゃあ、また明日！」

そう言つてネプギア達が出て行つた後、俺は妙な高揚感に包まれていた。

「……………珍しい事もあつたものだな」

「そうかね？私としては、別段珍しいとは感じないのだが……それに、卿も修行を付ける気だつたのであろう？渡りに船ではないか」

グロウはそう言うが、俺としてはやはり、珍しいと思う。

修行を付けるなんて言つておいて難だが、俺は人に闘いを教えるのは苦手だ。

勿論、出来ない訳ではないが……まあ、当たれば発狂と幸運の反転を叩き付ける血が主要な武器な時点で、お察しと言う奴だな。

「……………一応言つておくが、ユニ様を発狂させたらクロスからな？」

「頭の隅には置いておこう。さて、俺は明日の用意で忙しい」

「うむ、万全の状態で教えるがよい。と言うか、万全な教え以外は断じて認めん」

こうして、明日の修行の用意をする為に、俺は一旦ラストেশヨンの教会を離れた。

第二十六話

あれからまた一晩経った。

ネプギア達を引き連れながらラスティシヨンの教会が保有する森の奥深くに移動した俺は今、非常に眠かった。

「……………眠い」

「えっと……………よろしくお願ひします！」

「ちよつと！本当にコイツで大丈夫なの？」

「ユニ様、申し訳ありません。私はアイエフ殿とコンパ殿をゲームキャラの元へと送らねばならなくなりました……………今日限りですので、これも経験と思つて挑んでいただければ幸いです」

結局、修練の準備に一晩中追われ続けた俺は、あれから一睡もしていない。三徹だった。

正直言うと、意識が落ちそうだ。眠い。

「では、ユニ様、ネプギア殿……………御武運をお祈りしております」

「あ、はい……………ユニちゃん！頑張ろうね！」

「え、ええ……死なないように頑張るわ」

(……………何故殺す前提でやるような言われようなのだろうか?)

訳が分からない。幾ら眠くても、相手が女神でも、俺が『女神候補生』程度を相手に本気で殺し合うような輩に見えるのだろうか? 甚だ心外だ。

「……………準備はいいか?」

「ええ!……………それで、どうするのよ?」

「……………なに、簡単な話だ」

グロウが教会の方に向かった事を確認した俺は、一晚中殺し回ったスライヌから絞り出した血と、その血を支配できるギリギリの濃度にまで川の水で薄めて蒼い塗料(血ではない)で色付けした大量の液体を背後に浮かべ、無数の弾丸を形成した。

「……………?なによ、それ」

「無理ですダメです死んじやいます?!死にますよ?!死んじやいますからねこれ?!」

「……………落ち着け。これはただの水……とは言い切らんが、昨晚の間に雑魚を塵殺して血を搾り取り、川の水で薄めながらモンスターに浴びせて実験した結果、この濃度ならスライヌ程度でも余程大量に浴びなければ酒に酔うのとそう変わらんのは確認済みだ」

そして、何故か慄いているネプギアとよく分かってなさそうな顔をしている黒いのに

対して、俺は今回の修行の内容を伝えた。

「俺はこの液体弾丸以外は一切使わん。お前等はお前等で、逃げるもよし、その手に持った武器で撃ち落とすもよしだ。持てる全てを使い限界まで抗え」

「……つまり、前方方向からの回避と迎撃の訓練って事？嘗めないでよね！そんな基本中の基本、とつくにマスターしたわよ!!」

「ユニちゃ……これ、まゝ」阿呆か貴様は……誰が前方からだけと言った……全方向から一面数十発が基本に決まっているだろう？」……あ、マズいんじゃないかってダメですね。これ」

ネブギア^空がなにかを言っているが、知らぬ存ぜぬ。纏めて心底どうでも良い。

「さて………精々、長い時間を踊れ」

「ふん！やってやろうじゃないの!!さあ、どこからでもかかって……痛い痛い!!まさかの一斉射撃?!?!」

「い……いやああああああああああああああああああああああああ!!!」

こうして、俺もやった事が無い、単なる液体（水）同然にまで薄まった血液（実質水）操作での弾幕ゲームが始まったのだった。

「ちよ……せめて開始の一言ぐらい言ってから撃ちなさいよー!!?」

「知るか………実戦で敵が待ってくれるかとも思っているのか？」

……動かし難いな。

えっと……皆さん、お久しぶりです。それとも初めましてでしょうか？コンパです。今現在、わたし達はぐるーさんの案内でラステイションのゲームキャラさんの元へと案内されてるんですけど………

「さて、ここだ」

「……成る程、ラステイションのゲームキャラはもうとつくに保護してたつて訳ね」

なんと、ゲームキャラさんは教会の地下深くで保護されてたんです。ビックリしちゃいました。

「道理で、あれだけいっぱい聞き込みをしても見付からない訳です」

「いやコンパ？普通はこんな機密情報なんて一般人に聞き込んだだけで手に入るものじゃないからね？」

……え？

「そうだったんですか?! プラネテューヌだと、町の人や職員さんに聞いたらねぶねぶの

居場所や次の政策や会議の内容とかを普通に教えてくれるから、てつきり、聞けば教えてくれるものとはばかり思ってたです?!」

「……………コンパ、それってどこの誰? 特に、教会職員については詳しく教えてくれないかしら?」

「……………アイエフ殿、流石に同情するぞ」

(あいちゃんが……………あいちゃんが怒ってるです)

なんだかうむを言わせずって感じのあいちゃんに迫られてつい誰に聞いたかを言っちゃったですけど……………大丈夫ですよね?!

「……………さて、話しも終わったであろう?」

「ええ、待たせて悪かったわね」

「うむ、気にする事ではない。卿等が話をしている間にゲームキャラ殿には話を通しておいた。存分に交渉してくるがよい」

そう言つて、ぐろうさんはゲームキャラさんの居るお部屋の扉によくあいちゃんがやるみたい凭れかかってお休みしてしまいました。

「……………いや、あんたは着いて来ないの?」

「うむ、着いて行ってやりたいのはやまやまだが、生憎とゲームキャラ側からのオーダーだ。どうやら、卿等2人に話があるそうだ」

「お話しってなんででしょうか？」

「さあ？……まあ、そう言う事なら行かせてもらおうわ」

「うむ、私はここで待っている故、存分に話し合ってくるがよい」

こうして、わたしとあいちゃんはゲームキャラさんの待つ、ラステイション教会地下の一室に入って行ったのでした。

……でも、この時はまだゲームキャラさんのお話しがあんなものだったとは、わたしもあいちゃんも思いもしませんでした。

第二十七話

……これ、どうしろって言うのよ。

今現在、アタシ達は森の中で水にボコボコにされています。

訳が分からない？アタシも訳分かんないわ……………

「ツ!? エクスマルチ」そうやって技名を叫ぶ時間があるなら迎撃しろ。特に、こんな風に周囲を囲まれた状況下で溜め技を使うな。時間の無駄だ」イタ!? 痛い?!

最初は、ここまで一方的じゃなかったのよ? 全方位とは言っても十数発しか撃ってこなかったし、そのぐらいならネプギアと協力して（最初のはノーカンよノーカン!）被弾せずに撃ち落とせまし

「ユニちゃん! 大丈夫」他人の心配をしている場合か? 随分と余裕だな」ネ…………ネプギャアアアアアアア?!

「ネ…………ネプギアーーーーー!!」

けど、一定時間が過ぎて水の奥に居るアイツが『そろそろ良いだろう』とか言った直後に、全方位を無数の水弾に囲まれて鬺り殺し状態に……………

「そら、今のでお前達は蜂の巣だな。どうした? これで死亡回数がネプギアは71回で

ユニは54回になったぞ」

「ツツ!!!!嘗めないで!!」

痛みに耐えながら、アイツが遊び半分で撃つて来た12発の水弾をアタシは自前の銃で相殺した。

て言うか、確かにミッドカンパニーでアイエフから聞いたように発狂はしなかったんだけど……痛いわ!!痛過ぎるにも程があると思わないのアイツは?!

散々水弾に撃たれた部分から感じる痛みに耐えながら、アタシは普段は粒子変換してある弾丸のストックを確認してただけ……

(けど、本当にジリ貧ね……そろそろ、残弾も心許なくなってきたし)

「……………(眠い)」

まさか、残りが100発しか無いなんてね……

「……………飽きたな」

「なんですって!?!」

「飽きたと言ったんだ。『お前』の銃術もネプギアの『剣技』も、もう見飽きた……弱過ぎて話にならない。女神化しろ」

「ツツツツ!!!」

弱過ぎる? 飽きた? 言うに事欠いて女神化しろ?

ふざけんじやないわよ!!人を舐めてんの?!

(良いわ……そっちがその気なら、アタシだって……………!!)

「いい加減にしてください!これの一体何処が訓練なんですか?!こんなの、ただのな
b
「殺るわよ……ネプギア」ユニちゃん?!

「変身するわよ……アイツに一泡吹かせてやりましょう!」

「……………(くあ)」

「……………ユニちゃん、本気なんだね」

「当たり前よ!あんなふざけた事言われて、黙って引き下がるものですか!!」

「……………(早く終わらないかな……この無駄話)」

「わかったよ……ユニちゃん……………一緒に、強くなるって決めたもんね」

「ネプギア……………!!」

こうして、目の前で呑気に欠伸をしながらぼさつと突っ立ってる目の前の女顔に一泡吹かせる為に、一矢報いる為に、アタシとネプギアは真正銘、本気の本気で戦う為、変身する事を決めた。

『括目してください!／プロセスサユニット、装着!』

そして、アタシとネプギアを眩い極光が覆い、0と1が入り乱れるなか、全身をより完全に、より優れた形状へと変換していく。

「……………」

『女神ネプギア！ここに参上です！／装着完了ね！』

その後、アタシとネプギアを覆う眩い光が晴れると、そこには変身して女神として力を極限にまで高められたアタシ達の姿があった。

「今までのアタシだと思わないことね！」

「えっと、覚悟してください！」

「……………まあ、こんなものだろうな。……………所詮、同じ候補生でもアイ

ツとは比べるのが間違いだっただか（ボソツ）」

『行くわよ！／行きます！』

こうして、今までの鬱憤を晴らす為……じゃなくて、アイツの指示通り、女神化したアタシ達は、アイツの作った水弾を時に避かし、時には撃ち／斬り落としながら、協力してアイツへと近付いて行ったわ。

（とつちめて泣くまでメてやるから、覚悟しなさいよ！）

「……………まあ、こんなものだろうな。……………所詮、同じ候補生でもアイ

ツと比べるのが間違いだったか(ボソツ)」

『行くわよ！／行きませす！』

現在、ラストイシヨンの森の中で先日とつ捕まっていた候補生達の修行を付けているアナザーだ。眠い。

正直言うと、二轍三轍は堪えている。怠いし重い。

「このM・P・B・Lで！」

「蜂の巣にしてあげるわ！」

「……………」

今は変身したからか、先程までの亀が歩いているかのような鈍い動きではなくなったが、それでもまだ遅い。

亀が蝶になろうが、誤差のようなものだ。結局、退屈な時間である事には変わらない。

ネプギアが振るうM・P・B・Lマルチプルビームランチャーに4発の水弾を叩き付けながら、同時に背後より

その倍の8発の水弾を撃ち込んだ。

「ツ?!」

「アタシの事を忘れてんじやないわよ！」

「……………生憎だが、記憶する必要がある程の脅威ではないのでな」

ネプギアを撃墜した直後に、エネルギー弾を何十発も撃ち込んできた黒いのだが、弾数に重点を置き過ぎて威力が不足している。籠められたシエアエナジの密度も薄い。

俺の血弾のような特殊効果毒でもない限りこれで殺れるのは、精々が格下の雑魚程度だろくに……………つまらん。

「ケホッ…ケホッ！」

「大丈夫？ネプギア」

「う……………うん、なんとか、大丈夫だよ。ユニちゃん」

「……………そうだな。今のお前達に点数を付けるとすれば、精々が60点だ」

はつきり言って、落第点だ。

揃いも揃って変身してもこの程度でしかない上に、この修行の趣旨を何も解っていない。
い。

「なんですすつてえ!？」

「ユニちゃん！冷静になつて!!」

「つ……………そうね。ネプギア、ありがとう」

「ううん、それより、もう一回行くよ！」

「ええ！」

そう言いながらも再度突撃してくる候補生を見ると、この修行の意義が何故分か

らないのか？が心底不思議に思えてくる。

この修行は、格上との闘争ではなく格上からの逃走を達成させる為のものだ。

なのに何故、こいつらは揃いも揃って抗う事しか考え付かない？逃げると言う選択肢はないのか？

折角、全方位に弾幕を張っていながらも、背後の弾幕だけは薄めにしてやっていると言うのに………やはり、所詮は候補生と言う事か

(………しかし、謎だな)

目の前に迫る候補生を片手間で捌きながら、俺は考え事をしていた。

(何故、俺はここまで直ぐに水弾に慣れた？最初は操作にさえ梃子摺っていたと言うのに、これほど大量の水弾を撃てる程の練度が直ぐに身に付くものだろうか？)

そう、つい先日、この修行の為だけに大量の水と雑魚の血を使いながら、操作可能なギリギリの濃度を見付け出し、殆どぶっつけ本番で運用しているこの水だ。

最初は、大量の水を浮かせて数発の弾丸を操作するのが精一杯だった筈だ。血の能力は酒と同程度にまで零落れ、威力もそれこそ相当な格下にしか通用しないレベルのそれだ。

(だが、今はどうだ？この数時間程で薄まった特殊効果こそ戻らなかつたが弾数の最大展開数は数百発になり、威力は準同格レベルなら通用するレベルにまで跳ね上がった)

はつきり言おう。これは可笑しい。

数百年前、俺が最初に血弾を形成した際はまず形の維持に困った。

大きな塊で形成する分には支障はなかったのだが、どうにも小型化して亜音速程の速度で射出すると形状の維持に支障が出た。それを数年掛けて試行錯誤をしながらどうにかしたら、今度は展開数の問題と威力の問題が併発し、解決に至るまで更に相応の時間が掛かった。

なのに、この水弾はほんの数時間程度で時間を掛けて解決した問題をクリアしてしまった。

確かに、前回の経験があれば必要とする時間は減るだろう。だが、だからと言って数時間はない。

(……………まあ、だからどうしたと言えはそれまでだがな)

そう、そんな事はどうでもいい。

今の俺に最も重要なのは、何故か突撃ばかりしてくる女神候補生2人をどうやって逃走路線に切り替えさせるか

ただ、それだけなのだから……………

第二十八話

ああ……憂鬱ね。

……いきなりなんだって？そうね。ごめんなさい。

今はちょうど、ラストセッションのゲームキャラと交渉中なんだけど……

『ふん、お前達がこの条件を呑めないと言うのなら、私もお前達に力を貸す事は出来ぬ』

「だから、なんでそんな事をしなくちゃいけないんですか?!理由を教えてください!」

『言えぬ』

……交渉は難航しているわ。主に、ゲームキャラの無茶苦茶で意味不明な条件の所為で

「……せめて、理由ぐらいは聞かせてくれないかしら?じゃなきゃ、私達だつてどうしようもないと思わない?」

『生憎だが、理由は断固として言えぬ』

……強情なディスクね。

「そう、生憎と、私達だつて理由も解らずに仲間を殺せと言われてはいそうですかとはいかないのよ」

『ならば、引き下がるが良い。そのぐらいの温情は持っているつもりだ』

「ツ!？」

コイツ……足元を見て……!!

『……………だが、私も鬼ではない。お前達がどうしても出来ぬと言うのなら、妥協案ぐらいいは出してやろう』

「なんでしようか？」

『……………なに、そう難しい話ではない』

「ツ!?! コンパー……は一旦『遅い』…………」

私は、急激に変化したゲームキャラの雰囲気になにか嫌な予感を感じ、急いでコンパを連れ逃げようとしたんだけど…………

『……………そう、難しい話ではない。私があのクソ野郎を破壊するまでの間、私に身体を明け渡せと言うだけの話だ。あのクソ野郎を破壊した後は、その身体も返還してやるし力を貸す事も約束してやろうではないか! アツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!』

「…………………………」

逃走は間に合わず、ゲームキャラの高笑いを最後に私の意識は急速に眩しい光の中に沈んでいった。

アナザーさんに直撃したシエアエナジーのビームは、凄まじい爆発と共に周囲の木々を吹き飛ばし、ついでに私達も吹き飛ばされながらもその中心部分には凄まじいエネルギーが渦巻いているのでした。

「はあ、はあ……やった?!」

「ちよつ?!ユニちゃん、それやってないフラグだよ?!」

「……あ」

そして、うっかりフラグを建てちゃったユニちゃんがやっちゃったみたいな顔をして、土煙の上がつている爆心地を見てるけど……

「……お前達、本当にこの鍛錬の意義を察せなかったのだな」

「……………」

そこには、大きな怪我こそありませんでしたが、見える範囲だけでも身体中が火傷や煤に覆われたアナザーさんの姿がありました。周囲に有った大量の水は、跡形も無く蒸発してしまっただけです。

「……まあ、いい。この威力の攻撃が出来るなら十分だろう……鍛錬はこれで終わりだ」

そう言つて、アナザーさんは教会がある方向へ1人で帰って行ってしまいました。

「……………えっと、鍛錬の意義ってなによ?そんなのあったの?」

「……さあ？なんだろうね？私もてつきり、何も考えずに戦えば強くなるみたいな考えだと思ってたし……………」

結局、訳が分からない事ばかりでしたが、これだけの力が有ればお姉ちゃんを助けられると思うと、嬉しくて仕方ありませんでした。

【ピコーン♪ネプギアとユニはスペリオルアンジェラス（未完）を習得した】

鍛練が終わった夜

ラストイシヨンの教会に用意された一室で、俺は寝台に寝転がって鍛練の最中に感じた疑問を纏めていた。

……………しかし

「……………くあ」

……………眠い。非常に眠い。

頭も上手く働かないし、起きているのも限界だった。

「……………今日はもう寝るか」

そう思つて床に就こうとしたその時だった。

バタン!!

「……………む?」

「……………」

急に扉が蹴り開けられ、その扉の向こうには鍛錬の始まる前にゲームキャラとの交渉に向かったアイエフとコンパの2人が居た。

「……………いや、流石にこれだけ時間があれば決裂であれ締結であれ、結果は出ているのだろう)……………それで、どう言った用件だ?」

そう思つた俺は、比較的話し易いアイエフに声をかけてみたが……………

「……………」

「……………おい、聞こえているのか?」

なんの反応もない。

こんな事は今まで……………いや、そう言えば駄女神ネフテューヌに悪戯で就寝前を邪魔された事があつたな。その類か……………?

「……………用が無いなら自室に戻れ。俺は眠『シヤア!!』……………何のつもりだ?」

いきなり武器を構えて襲い掛かって来た2人を見て、俺は非常に困惑していた。確かに、これまで散々無茶はやってきたが、この局面で襲われる謂れはない。

これまでにはつきりと記憶している範囲で殺したのはモンスターか犯罪組織に与するゴミだけだ。その辺はこいつ等も把握している筈だし、理解できない程幼稚でも愚かでもない筈だと、俺はそう認識していたが……………

「シッ！」

「ジャー！」

「……………まあ、いい」

説教を垂れる程度なら駄女神ネプテューヌの手前、色々和我慢してやっていたが……………物理的に殺しに来ると言うなら知った事ではない。血祭りに挙げてやろう。

「ギャ」

「ギイ」

武器を構えて襲い来る塵アイエフとコンバ 共を力尽くで跳ね返して壁に叩き付け、俺は体内に粒子として変換し収納している愛用の剣（肉切り包丁）を取り出し、壁に叩き付けられて気絶している2人を叩き斬る為に大きく振り上げた。

「死にたいと言うならば非もない。せめてもの情けだ。お前達は2人纏めて殺掃除してしてや
「ダメー！！嫁を殺すなんて、絶対に認めないんだから！！」 邪魔をするな！！」

大きな声を上げて突撃して来た塵屑に対して、俺は盾にするように足にしがみ付く頭の軽いアホを、回し蹴りの要領で塵屑共の武器へと叩き付けた。

「え……」

『ギシヤア……』

「ふん、これで邪魔物は消えた。これから存分に……ん？」

しかし、どう言う訳か様子がおかしい。

先程の様子であれば、カッターを肉壁の足に当てて血飛沫と共に弾き飛ばし、注射器の針を尻に突き刺して動きを封じた程度であれば、即座に態勢を立て直して再度襲い掛かって来る筈だが……何故か連中は完全に困惑したような表情で呆然と突っ立っている。

「私達は……一体……っ!? なによこれは?!

「あ、ああ……ああああああ!! だ、大丈夫ですか!? 今手当てをします」

(……どう言う事だ?)

明らかに様子がおかしい2人を見て、俺もただ困惑するばかりだった。

『諦めない……私は私の民だった者達の為にも、私はあの最低のクソ野郎だけは絶対に赦さぬ【クスクス……ざーんねん♪あなたアンタの復讐劇はこれでお仕舞いですよー?】……ツ?!誰だ!!』

思わず私が周囲を見回すと、一ヶ所だけこの光輝に満ちた神聖なる完全な世界に相應しくない、暗く、深く、穢らわしい闇が発生していた。

【ひつどーい♪私アタシの事、ずーつと見てた癖に〜?】

『お前は……何故だ?!何故、お前がここにいる!!』

あり得ない……ここは現代の女神如きが自力で訪れる事は叶わない、神代の聖域だぞ!?

なんとか行き来が出来ていた私達の代だつて、機械の補助がなければ下界との行き来も叶わなかったのに、何故お前がここに……!!

『何故、お前がここに……!ネプギアア……!!』

闇から現れたのは、今の下界を治める女神パープルハートの妹子編の姿だった。

【あらア?ひよつとして私アタシが判りませんか?まア、あれから随分時間も経っちゃいましたしね〜♪】

あり得ない程の濃密な闇を纏った紫の候補生は、そう言つて可愛く小首を傾げながら、隠しきれない……いや、隠す気もない嘲りが、三日月型に吊り上がった口元に顕れ

ていた。

(……………いや、違うのか?)

紫の候補生はあの最低のクソ野郎と共に入国した時点で監視していたが、これ程の密度の闇を内包した気配などなかったし、そもそも紫の候補生は14歳位の少女だ。

しかし、目の前のこいつはどう見ても18歳程だ。明らかに一部の容姿が違う。

(……………一体、どうなっているとと言うのだ)

「ん〜♪まあ、良いでしょう。要件は簡単ですし、手短に片付けて私から外れましょうか」

そう言いながら、目の前の異物の姿が掻き消え

『……………は?』

私は、私の意思を保存した器たるディスクが碎け散った音を聞いた気がした。

【さ〜て、使えない駒は始末しましたし、後は後始末をして事実を振曲げたらコレクションの整理整頓に戻りましょうか♪】

そんな言葉を最後に、私は私である意思を碎かれ、この世界から完全に消滅した。

「……………あ、このディスクは要らないし、ギアかう二にでもくれてやるとしましょうか……………邪魔ですし♪」

「ツ~~~~~!!!」

良く寝た。

アイエフとコンパに頼んで夜中の奇襲をして貰ったが、やはりダメだな。事前に奇襲があると判っているかどうかにも緊張感に欠ける。

しかも、事情を知らない外野が乱入して来て大騒ぎだ。恐らく、今後二度と建物内で奇襲に対する鍛錬をやる事は無いだろう。

(……まあ、そんな事はさておくか)

「これが……私……?」

「へえ……確かに、結構強くなるじゃない」

「これで、ネプ子達の救出に一步近付いたわね!」

「わたし達もパワーアップしましたし、ねぶねぶや女神さん達の救出目指して、いつきますよ♪」

何故か、俺だけは適性が無かったらしく力を得る事は叶わなかったが、ゲームキャラはネプギア達以外にも力を与え、俺以外の面々は程度の差こそあれ、集団としてみれば

大幅なパワーアップをしていた。

……まあ、力を与え過ぎたらしく、ゲームキャラは人格が休眠しているらしいが、その辺の詳しい事は知らんし興味もない。ただ、先日行った水弾幕の鍛錬は必要なかったのかもしれないと、俺は思った。

(……まあ、本来の鍛錬の方向性ではなかったが、その内役に立つ事もあるだろう) 取り敢えず、問題があるとすれば、数時間前に急遽リーンボックスに行く事が決定してしまつた事だな。

(…………やだなー。アイツに遭うの……消し炭にならないように全力で防御しよう)

…………リーンボックス逝きだけはどうかならないものだろうか？

「アナザーさん！リーンボックス行きの席が取れましたよ!!」

「…………ええい！わかつた！わかつたから引つ張るな!! (鬱だ……)」

非常に憂鬱だが、アイエフになにか吹き込まれたらしいネプギアに引き摺られ、俺はリーンボックス逝きの飛行機(何故か貸し切りだが)に乗り込んだ。

「さあ！リーンボックスでも、頑張つて修行するわよ！ネプギア!!」

「うん！頑張ろうね！ユニちゃん!!」

(…………ああ、だから貸し切りなの………あの変質者が………余計な真似をしてく

れたものだ)

俺は、無駄に蒼く晴れ渡った大空にグロウが無駄に良い笑顔でサムズアップしている
光景を幻視した。果てしなく不快だった。

第三章く緑と白のララバイく

第二十九話

飛行機に乗ること数時間

俺は今、出来れば絶対に来たくなかったリーンボックスに居た。

「……………」

「どうしたの？随分と静かじゃない」

黒いのの妹……………ユニだっけ？まあ、黒いのの妹でいいか……………面倒臭いし

黒いのの妹が声をかけてくるが、正直俺には気になっている余裕がない。

今も、何処から溶人熱光線が飛んでくるのかと冷や汗が止まらない。

「……………」

「ちよつと！無視は良くないと思うんだけど!」

黒いのの妹が騒いでいるが、そんな事は後だ。

とにかく今は、無駄に特徴的な戦闘用に改造されている修道服を着込んだ銀髪を探し出して、視界に収めるのが最優先事項だ。でないと（俺の）命に関わる。

……………本当なら不意打ち気味に叩き込まれる攻撃に対して近くの間人を囮寄せし

ても良いのだが、アレの攻撃は人間程度では壁にもならん。寧ろ、一瞬で溶けて（俺への）被害が増すのが落ちだ。

「……………」

「ユニ、そつとしておいてあげなさい」

「なんでよ！人がせつかくしんp……………気にしてあげてるのに、無視は流石に酷くない?!」

「ユニちゃん……………落ち着いて、目立ってる……………すごく、目立ってるから」

「……………あ」

（そうだな。お陰で余計に見付け難くなったぞ。うん）

荒ぶる黒いのの妹をアイエフが止め、ネプギアが説得した事でやっと落ち着いたらしい黒いのの妹だったが、俺としては手遅れ感が満載だ。

周囲からの視線が集まり過ぎている所為でどの視線が正解なのかがさっぱりわからん。

『ピンポンパンポーン♪』

そんな時だった。軽快な音が鳴ると同時に、不愉快至極極まりない仕打ちが行われたのは……………

『えー、リーンボックス空港をご利用のお客様、迷子のご案内つちゆ。えーつと……………アナザー、ハク様がお探しつちゆよ。直ちにリーンボックス空港の迷子センターまでお越し

くださいっちゅー!』

『ピンポンパンポーン♪』

そして、軽快な音が鳴り終わると同時に、周囲からの視線が生温くなったのを感じた。

「……………えっと、アナザーさん、昔リーンボックスでなにをしたんですか?」

「アナザー、お呼びみたいよ。行ってきなさい」

「あなざーさん、迷子だったですね。お迎えが来てるみたいですから、早く行ってくださーす」

「じゃあ、アタシ達は教会に行つて挨拶をしてからクエストを受けて修行でもしましよ
うか」

「おー!」

それぞれ言いたい事を言うと、空港の出口に向かってさっさと行ってしまった。ふざけるな。

(まさかの着いて早々に迷子呼ばわりか……………やっぱり、リーンボックスなんぞ来るんじやなかった)

ああ……………不幸だ。

「……………仕方ない、行くか」

こうして、俺は(無視したら何されるか分からないから)仕方無くリーンボックス空

港の迷子センターにトボトボと歩いて行った。

『ピンポンパンポーン♪』

軽快な音楽が鳴り止むと同時に、おいらは耳に当てていたイヤホンとマイクを取って後ろへ振り返ったつちゆ。

「ワレチューさん、お疲れ様でした」

「いやいや、ハク様の為ならこのぐらいいはお安い御用つちゆよー!」

振り返った先には、緊急で運び入れたVIP用のソファアールで寛いでいるちよつと変わった服装なおいらの雇い主……と言うよりは、パトロンのハク様がいるつちゆ。

正直、出会いこそあんまり良くなかったつちゆけど、ハク様がこのマスコットに幹旋してくれたお陰でマスコットに成れたつちゆしね。今となつては良い思い出つちゆよ。

「いいえ、アナタもお仕事があつて大変でしょうし、教会として今度なにか埋め合わせを

しようと思えますから、楽しみにしててくださいね」

「了解つちゆ！ハク様も、無理はせずに頑張つて下さいつちゆ！」

「ええ、それでは…そろそろ時間が来そうですし、私はこれで」

そう言うのと、ハク様は迷子センターの待合室に入つて行つたつちゆ。

「……けどまあ、大丈夫つちゆかね？この国は」

正直言うのと、おいらはそれだけが心配つちゆ。

………まあ

「おいらが気にしてもしょうがないつちゆよね。おいらに出来るのは日々の仕事をただ頑張る事だけつちゆし」

取り敢えずは、次の迷子の連絡が来るのを待つつちゆよ。

しかし、この数十分後……おいらは運命の出会いをするのをまだ知らなかつたつちゆ。

「……………(こ)か」

ネプギア達と別れて数分後、俺はリーンボックス空港の迷子センターの中にある待合室の前に立っていた。

正直、扉越しに気色悪い光の気配が漏れ出ている、非常に気分は良く悪く精神的な正気狂気を水で泥を流すように洗い流されてドリルで削岩するように削って逝く感じがして、かなり気怠い。

「……………早い所終わらせて合流するか」

途中でデカイネズミを見た気がしたが、俺は知らんしどうでもいい。

嫌な事は手短かに済ませるに限ると言うし、俺は全神経を前方の視界に集中させながら扉を開いた。

「……………あら?」

「……………」

バタン!!

(……………は?何この状況???)

……………なんか、目の前の扉を開いたら着替え中らしいハクが居た件について

ここ迷子センターの待合室だよな?!なんであいつこんな所で着替えてるの?!バカな

の？（俺が）死ぬの？

思わず全力で閉めたわ！え？なんで呼び出されたの俺!?!?

訳が分からん。とにかく、俺は融かされる前に「あー、別に怒ってないのでここで待っててくれて結構ですよ？」……………これは、逃げたら殺される。

（……………仕方ない、ここで待つか）

そして、ハクの奴が扉から出て来たのはその数分後だった。

第三十話

いきなり訳何故か着替えていたハクの分からない事態が遭ったが、その後は特に何事も無く事は進み、俺は今、待合室のソファアでハクと向かい合って座っていた。何の拷問だ。

「……………で、何の心算だ？」

「はい、要件ですけど……………あの、他の方は何処に？」

丁重な物腰でそれだけ言うと、ハクは小首を傾げた後にキョロキョロと周囲を見回しだした。

「ハア？他の奴？」

「はい。お仲間が居るのでしょう？通信でグロウさんから要件は何つています。アナザーさんがお世話になっているようですし、これからは私もお世話になるのですから挨拶ぐらいはしておこうと思っただけですが……………」

……………ああ、そう言う

「お前は俺の保護者かなにかか？と言うか、俺の名前しか呼ばなかったから他の連中は教会で教祖に挨拶してからクエストに行くとか言ってたぞ」

「ええ？」

俺がそう答えると、ハクはポカンと口を半開きにした阿呆のような顔でこう言った。

「……………あの、実は——」

「はっ。」

その言葉を聞いた俺は、訳が分からないとしか言いようがない微妙な気分になった。

アナザーと空港で別れた私達は、事前に調べておいたマップで一直線に教会まで向かい、その教会の中で教祖に会っていた。

(……………と言うか、本来なら空港の中で女神候補生本人と話をする算段だったらしいのだけど、私達が教会に来ちゃったからそのまま教祖と話をする事になっちゃったんだけどね)

……………まあ、そんな事は置いて、教祖の箱崎チカに軽い挨拶の後、この国の女神候補生を仲間にする話を終えてさあくエストに行こうかと言う話になってただけど

……………

「……………はい？」

訳が分からないわ……………聞き違いかしら？

「だから、残念でしょうけど、この国でクエストを受けるのは諦めてと言ったのよ」

「いえ、その少し前なんですけど……………」

「えっと……………クエストをこの国の女神候補生のハクって奴が殆ど消化しちやったって

……………マジ？」

一体、どんなワーカーホリックなら、近年犯罪組織の横行で激増したクエストを消化できるのよ……………流石に冗談よね？

「マジよマジマジ……………アタクシも、まさかあの子ー人でお姉様のご不在に加えて犯罪組織の横行の相乗効果で一時期は上位危険種が各ダンジョンに何体も出現するぐらい溜まってしまったクエストが無くなるなんて思ってもなかったから、その気持ちは良く分かるわ」

そう言つて、この国の教祖——箱崎チカは、頭痛を堪えるように頭を抑えながら椅子に座り直した。

「……………まあ、そんな事はどうでも良いわ。とにかく、一刻も早く御姉様を救出してちょうだい！アタクシもあの子が単独でギョウカイ墓場に突撃しないように抑えるのはもう限界だったし、何よりもアタクシが御姉様に会いたいので！大急ぎで！特急で!!」

「わわっ……ちよ、落ち着いてください！私達はまだゲームキャラさんに力を借りな
k
「その辺は問題ないわ！あの子がもう力を借りてるから、気にせず行っちゃって！」
……………え？」

そして、もの凄い剣幕で捲し立てた箱崎チカは、さらつと爆弾発言(?)をして私達
を空港にまで送り返す乗り物の手配を始めてしまった。

「……………この候補生って……………どんだけ」

そして、ユニの一言が全員の思いを表していたのは……………まあ、必然でしょうね。

「あいちゃん、私達はこれからどうしましょうか？」

「……………そうね。ルウイーにでも行くしかないんじゃないかしら?……………リンボック
スでしなきゃいけない事もないし」

……………まあ、旅が順調なのは良い事よね！

「手配が終わったわ！数分後に黒い車が来る筈だから、教会の入り口で待つてなさい！」

そして、箱崎チカが手配した乗り物でリンボックス空港に送って貰った私達は、ア
ナザーとリンボックスの女神候補生と合流した後そのままステーションにとん
ぼ返りする前に雪国ルウイーを旅する為の準備に取り掛かったわ。

「……と、言う訳なんです」

「……お前は仕事のゾンビか何かか?」

ハクからリーンボックスのクエスト事情を聞かされた俺は、呆れ半分残念半分の微妙な気分です。ソファに座り込んでいた。

と言うか。確かに以前、趣味はクエストマラソンと聞かされた事はあるぞ? あるんだが……だからと言って、誰がクエストマラソン20時間を毎日こなしてると思うよ? アホなのか? こいつは

「……まあ、ここで待て居ればネプギア達も帰って来るんだろう? だったら、俺は暫くここで待つ」

「はい。そうしてただければ助かりますね。あなたを外に出して万が一にも見失うと、一般人や他の健全な企業諸共犯罪組織関係者を血祭りに挙げてしまいかねませんか」

……些か心外だが、別にどうでも良いか

ナチュラルに蛮族扱いされている事に思う事はあるが、こいつ相手に話を咲かせる趣

味はない。ある程度は流しておけば問題は起きないので、基本はスルーが一番だろう。「それにしても、ラステイションからの通信でグロウさんから聞かされた時は驚きましたよ」

「……………」

……………スルーしたいのだが、こいつは意地でも話を咲かせるつもりらしく、ニコニコと笑いながら只管捲し立てるように喋り続ける。

「何時も何時も、人間が嫌いで森の中に引き籠り、偶に気が向けば街中にふらつと現れては教会からお仕事を貰ってモンスターを血祭りに挙げる以外では姉さん達とさえも会話をしたがるあなただが、まさかお仲間を作って一緒に旅をするなんて、思いもしませんでした」

「……………」

そして、一区切り喋りたいだけ喋ると、こちらの反応を待つかのよう一旦喋るのを止め、俺が喋るのを待っているようだったが……俺が口を開く気配さえない事を察すると、それでもなお、諦めずに只管言葉を捲し立て始めた。

「今はどんな気持ちですか？お仲間とは仲良くやっていますか？無茶苦茶はしてませんよね？毎日ちゃんと三食食べていますか？お仲間には他の候補生の方も含めて女性が多いと聞いていますが、色々と気を使っていますか？大虐殺をして血塗ろな光景を

造っていませんよね？ブラッドバスとかブラッドジュースだとか言って、血塗ろライフは送ってはいけませんよ？——（以下、延々と話は続く）——」

そして、その話はアイエフ達と合流するその時まで続いた。正直、殆ど拷問染みたまの間だった。

第三十一話

「ちゅー……ネズミ遣いが荒い教祖ちゅね」

おいらは今、リンボックスの教祖、箱崎チカの命令で迷子センターから出張サービ
ス（？）で車を運転して教会までお迎えに行つてゐるちゅ。

なんでも、人数が多いらしいから黒くて長い奴で来いとか言われたちゅけど……今
時、教会を訪れる団体客なんていたんちゅね。ビックリちゅ。

「……………まあ、ハク様にはお世話になつちやつてゐるちゅし、しようがないちゅけど
ね」

色々と思う所はあるちゅが、浄化と称して融解光線なんてぶちまけられてフェード
アウトするような人生よりは100倍マシちゅ。

夢(?)だったマスコットの職業も得て、人気もそれなり且つ堅実に伸びてゐるちゅ
……………けど

「でも、なんか足りないんちゅよね……?」

不思議ちゅよね。

間違いなく死ぬよりはマシ所か破格の待遇なのに、妙に懐かしくなるんちゅよね

……マジエコンヌの中級構成員だった頃が

こう、なんて言うか……数年前に食べ飽きた筈のやつすいジャンクフードをまた食べたくなるような……でも、見付からずに結局は今の家庭料理を食べてるような……

「……まあ、犯罪組織に帰ろうにも、とつくに居場所なんて無くなってるつちゆし、そもそも犯罪組織に戻ったらハク様に浄化されかねないつちゆ……気にしない方が一番つちゆ」

……まあ、今の待遇が不満って訳じゃないんつちゆし、どうでもいいつちゆよね。
 ……なによりも、浄化されて融けるのはマジ勘弁つちゆし。

(本当に、あの状況から良く生還出来たものつちゆよ)

——回想——

2年前、おいらは犯罪組織の中級構成員として、ピラ配りから犯罪神様のフィギア売りやマジエコンヌユーザー獲得の為の営業をする為、当時の上司だったレミイと言う、幹部直属の大隊長の下の下の上級構成員の女の下で働いていたつちゆ。

「おいネズミ、どうだった？」

「難とか3人程マジエコンユザーを獲得できたつちゆよ!」

「そうかい!アタイは0だ……まあ、フィギアの方は4人の爺や婆に売り付けてやったけどね!アツハツハ!!」

黒髪で清楚そうな上司の女は、見た目に似合わないガサツな口調で成果を確認して、おいらの成果を聞くと自分の成果も告げて豪快に笑い出したつちゆ。

……けど、ガサツながらも豪快なこの女は、いつもこんな感じでお気楽と言うかなんと言うか……姉御肌のレディースって感じの女つちゆね。

「しっかしまあ、リンボックスこの辺も物騒になったもんだねえ」

「そうつちゆねえ」

最近ではリンボックスの支部が何者かによって壊滅寸前にまで追い遣られてるつちゆ。

基本的に完全に壊滅してる訳じゃないんつちゆけど、偶に実験施設が襲撃されていると、施設や研究員がドロドロに融かされた後、自然に冷えて固まったような惨状で見付かるつちゆし……本当に、ラスティションと言いつつ物騒になったものつちゆよ。

「つたく、大隊長と隊長達はなに考えてんだか……こんな所で営業したって人的被害や施設への被害が増すだけだろうに」

「まあ、おいら達は下ツ端つちゆからね。サイ様の命令に逆らえる程偉くない以上はど

うしようもないっちゅ

「それもそうだね……おっと、こんな話をしてる場合じゃなかったね」

そして、そろそろ出発しようかと言う時に、当時のおいら達にとつての災厄の権化は音も無く忍び寄っていたっちゅ。

「……………見付けた」

「ツツツ?!?!」

声が出た方に振り返ると、そこにはニコニコと笑っている天使のような女が一人いたっちゅ。

勿論、天使と言っても可愛いとか綺麗みたいな褒め言葉ではなく、文字通り、天使の様な翼を持ち、頭に円環が乗っかかっている感じの見た目的な話っちゅ。

そんな女を怪しいと思ったのか、レミイは女を警戒しながら前に出たっちゅ。

「……………あんた、誰だい?」

「見てわかりませんか? 解りませんよね? 解ろうが解るまいが構いませんけど……………一応聞いておきましょうか」

そんなレミイの殺気雑じりな問いに対しても、この天使擬きの女は何でもないかのよう
うに受け流し、逆にこう聞き返してきたつちゆ。

「……………素直に投降する気はありませんか？ 投降して更生すると誓うなら、見逃して
あげても良いですよ？」

「……………あ？」

けど、その問いはレミイにとっては地雷そのものつちゆ。

普段から赤の他人や年下に上から目線で言われるのが大っ嫌いだと公言してるよう
な女つちゆ。

この後の惨劇を想像すると、ちよつと同情はするつちゆけど……………まあ、おいらには関
係ないつちゆ。

「……………アハハ……………そこまで嘗めた事言われるとはね……………楽には殺さねえぞクソガ
キ」

「……………？」

ドスが効いた声で天使擬きの女に話しかけるレミイと、そんなレミイの様子に気が付
いていないのか、能天気ニコニコと笑っている天使擬きの女

そして、レミイが魔力弾を10発程生成すると、それを天使擬きの女に目掛けて一気
に射出したのが、その後の悪夢の始まりだったつちゆ。

「死に晒せ!!」

「あらあら、交渉は決裂と言う事でしょうか?」

「死ね!!」

当初はおいらも、天使擬きの女——ハク様が、レミイ——当時の上司だった女に血祭りに挙げられる事を信じて疑っていなかったつちゆ。

なにせ、上級構成員とは言っても、戦闘に限って言えば隊長クラスの中堅とほぼ同程度のレミイが怒りに任せて能力まで使って手加減無しの一撃をぶち込んだつちゆ。

普通に考えれば、頭が可笑しいと思えないような格好の女は全身を撃ち抜かれて死に至り、その躰を破壊し尽されると思うのが自然つちゆ。

「アツハハハツハハツ!!まだまだ終わりじゃねえんだよオ!!!」
(……何時もの事ながら、キレると本当に怖いつちゆよね)

上司だった女は、複製や増殖の効果を付与でもしたのか、射出中に威力を落とさずに分裂して行く魔力弾を何発も何発も撃ち込んで行ったつちゆ。

そんな大量の魔弾で天使擬きの女に当たらなかつた魔弾は、周囲の木々は破壊し土煙を上げて視界を覆ったつちゆ。

「ハッ!ガキは素直に寝てりゃいいんだよ!!……行くぞネズミ」

「了解つちゆ」

(……これで、あの天使擬きの女は死んだっちゆね。と言うか、あの質量の魔弾を叩きつけられて生きてるならマジもんのバケモノっちゆ)

しかし、そんな予想を裏切り上司だった女が魔力弾の乱発で巻き上げた土煙が晴れると――

「……はあ、どうしてこう、犯罪組織の人っておバカさんが多いのでしょうか?」

「……は?」

そこには、躰がぐちゃぐちゃになっている筈の天使擬きの女が、五体満足、全くの無傷で立っていたっちゆ。

しかも、訳の分からない事に、女には土煙が巻き上げられたにも拘らず、長い金髪にも、無駄に露出が多い衣装や肌にも埃一つ付いていなかったっちゆ。

——これは後で聞いた事っちゆけど、普段から能力で周囲の埃や塵を浄化焼却してるらしく、この時も能力で浄化焼却してたとか……マジバケモノっちゆ。

「………仕方ありませんよね。姉さん達を捕まえて世界を好き放題しようなんて考えは、改めて頂かないと困りますし………荒っぽくなってしまいますけど、死なないでくださいよね?」

「ナメてんじゃねーぞクソガキアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

(姉さん達を捕まえて世界を好き放題?この女はなにを言ってるんっちゆか?)

当時のおいらは、なんでこんな頭が可笑しな女の姉を捕まえたら世界を好き放題に繋がるのかを考えたつちゆけど、あまりよく分からなかったつちゆ。

ただ、当時のおいらでも解ったのは――

「キレイに、浄化してあげますから……」

「ア――」

「ぢゅーー?!?!」

――目の前で様々な特殊効果を付与したらしき魔力弾を撃ち込でいたレミイが、頭が可笑しな女の手で、グズグズの粘液に変えられてしまったって事だけつちゆ。

(……ヤバイつちゆ?!殺されるつちゆ?!?)

そして、次はおいらだろうと思ったつちゆけど……

「……それで、貴方はどうしますか?大きなネズミさん?」

「全面降伏するので、命だけはお助け下さいつちゆ!!?!」

投降を呼びかけられたので、全力でDOG E Z Aして慈悲を乞う事にしたつちゆ。

――回想終わり――

……まあ、この後なんやかやと色々遭って(誤字じゃないつちゆよ?)今の立ち位置マスコットの職業

を得た訳っちゆけど……………

「あ、あれかしら?」

「運転手さんは……………?」

「でっかいネズミだね!」

おっと、考え事をしている内に着いたっちゆね。

おいらの視点はここでおしまいにさせて貰うっちゆ。

「ネズミさん、かわいいですね。あいちゃん」

「え?…………ええ、コンパがそう思うんなら、そうなんじゃないかしら? (かわいいの?ア

レ)」

(…………ちゆ……………!?!?!?)

この日、おいらは運命の出会いをしたっちゆ。

第三十二話

深々と

極寒の冬にして豪豪と吹き荒ぶ雪の中、ルウイーの公園へと歩む一人(?)の巨大な人物(?)があつた。

「……………」

その人物は——まあ、人物と言つて良いのかは判らないが、そこは一旦置いておこう——その人物の姿は、到底人間と呼べるようなものではなかつた。

その姿は、出来の悪い蜥蜴の人形のような風貌であり、異形としか言いようなない特徴的な容姿であつた。

「ゼエ、ゼエ……………」

特に、大きく裂けた口とそこから零れる長い舌は、この出来の悪い蜥蜴人形の出来の悪さを更に強調しているようであつた。

「ガフツ…………おの、れ…………ゼエ、ゼエ、ハア、ハア…………よう、じよを…………この舌で…舐め回す、ま…で…………消えて…………か!!」

しかし、妙に様子がおかしい。

……まあ、そもそも普通の童女であれば、猛吹雪とかの前に先程のトリックの姿を見た時点で腰を抜かして怯えているか、全速力で逃げ出しているだろうが、そこは置いておく。

『……ああ、そうだな——エルマ』

「ん……ト……トリックは息災?」

そうして、無表情で小柄ながらも美しい、エルマと呼ばれた童女の姿をしたナニかと、雰囲気処か口調や表情まで、容姿以外は一切合切が先程とは別物同然にまで変化してしまつたトリックは、まるで旧友と再会したかのような親しみが籠つた笑みで笑い合つていた。

『くくつ……吾輩を誰だと思つていいのかね? 当然、息災であるとも』

「そう、それは僥倖」

そう、トリック（仮）が述べると、エルマと呼ばれた童女は嬉しそうに——しかし、少々複雑そうに、何とも言い難いと言わんばかりの表情を浮かべ、こう、トリック（仮）へと問い掛けた。

「……わたしが頼んでおいて難だけど、あの性格はなんとかならなかつたの?」

『……言うな。吾輩もはつきり言えば恥じている』

その問いは、トリック（仮）が先程までの狂乱し、今のトリック（仮）に変化するま

での、『犯罪組織の幹部：トリック・ザ・ハード』としての意識の事を指していた。

『そも、あの意識は犯罪神が吾輩の■をベースに無数の■を混ぜ合わせ、その果てに生まれたものだ。断じて吾輩の意志でも趣向でもないのだよ』

しかし、どうにもこのトリック（仮）も先程までの人格の事はよく思っていないらしく、その意とあなつた原因を示す事でエルマからの誤解を解こうとしたようだが

……

「……………2000年前の、まだ見た目通りだったわたしに求婚してきたのは誰？」

『ガフツ?!?!』

……………しかし、それでもなお、エルマにとつてはトリック（仮）の言葉は信じるに足りなかったらしい。過去の前科を持ち出され、トリック（仮）は精神的ダメージから血を吐いて倒れた。

『い、いや、アレはだな？ 吾輩すっかり大人クツババアの女の心無い悪辣で最悪で卑劣極まりない手口で色々と傷心だったと言うかなんと言うか……………?!?!』

「……………フツツ、冗談だよ」

そして、全力で弁明を始めたトリック（仮）だったが、そんな慌てた姿を見て満足したのか、無表情な表情を少しだけ緩め、軽く微笑みながらエルマは冗談だった事を告げ

……………

『……ホッ、なんだ、冗談なのか』

「うん、半分だけ」

『カハッ!』

更なる言葉を叩き込み、再度トリック（仮）に精神的なダメージを与える事で、満足したのか、悪戯っ子のような笑みを元の無表情に戻し、こう切り出した。

「……そつちはどう？わたしは、多分もう限界が近い」

『……うむ、吾輩の方は大凡、十分に用意も完遂した。後は、キーが揃うのを待つばかりだ』

「…………そう」

その言葉を聞くと、エルマは月を見上げ、幼い見た目に見合わない慈母のような表情を浮かべ、こう呟いた。

「…………そう————安心した。ありがとう」

それだけ言うと、月を見上げたまま、エルマは何の前触れも無しに、まるで幻かにかだつたかのように何処へともなく消えて行ってしまった。

『…………さて、吾輩もコレの記憶を弄ったら早々に帰るとするかな』

そして、トリック（仮）も、猛吹雪の中、何処へともなく去って行った。

第三十三話

画面の前の皆さん！初めまして。リーンボックスの女神候補生なハクです。

現在、わたしはアナザーさんのお仲間と合流して、今はリーンボックスから飛行機で直接ルウイーにまで飛んで行っていきます。

「……………ほんと、来てくれて助かるわ」

「気にしないでください。これもアナザーさんを陽光の照らす場所で過ごせるようになる為ですし、それ以上にわたしの為ですから」

アイエフさんからは、道中のお話を聞かせて頂きました。やっぱり、彼の面倒を見るのは物凄く大変なんですね……

（……………やはり、アナザーさんを更生させるのはわたしがやるべき使命なんですね。もしも彼を更生させる事が出来れば、わたしはきっと、あの人の気持ちが解る筈なんです）

（……………なんでアナザーを日の当たる^堅場所で生活出来るようにするのがハクの為なのかしら？！）

「いや、断じて違うから！しかもなんか片想いの乙女っぽい!!そう言うのは俺^{アタシ}の役！

ぶっ殺すわよ!!」

………けど、なんなんでしょうね?この脳裏に直接叩き付けてくるような強烈な思念……わたしじゃなかったら解体されてますよ?声にも妙に聞き覚えがありますけど………まあ、長距離から叩き付けられるような質ではありませんし、以前も周辺一帯を調べ尽くしたのに何も在りませんでしたから多分幻聴の類いですよね。

【幻聴じゃねえええ!!………つと、危ない危ない。あまりのあざとさについ計画を台無しにする所でした。やはり、このクソアマだけは危険ね】

………けど、一体なんなんでしょうね?この幻聴は………物心付いた時にはもう聴こえてましたし

………は!?

(そうなんですわね!夢は自分の深層意識の望みを映すと聞きました!この幻聴はわたしの悪を討ちたいと言う願いが生み出したもの………ですがいけません。昔あの人に誓ったではありませんか!必ずこの世全ての悪は更生させ、真人間として生きられるようにすると……やはり、姉さんが捕まった心労でしょうか?昔の過激な所は頑張つて抑えな
いと………!)

【………うわ………(………めんどくさい奴ね。暑苦しいし思い込み激し過ぎない?都合がいいとは思うけど………流石にどうよ?)】

これは反省しなければいけませんね。
わたしはあくまでも正すモノです。

審判者が争いを望んでは本末転倒にも程があります。あの方にも示しがつきません。
(……でも、アナザーさんを更生させるだけでも結構大変ですけど、姉さんも助けなきやいけないんですよね………がんばろう)

そんな時でした。

「大変よ！操縦室にこんなものが?!?!」

「どうかいたしましたか?」

先程操縦室に入って行ったユニさんが、手に紙を持って客室へ入り込んできたのは
……………

「大変よ！この飛行機はもう少して雪山に追突するわ!!急いで脱出しなきゃ」ズドオオオオオオん!!!」

そして、そんなユニさんの発言は最後まで続く事なく、リーンボックスから出航したルウィー行きの飛行機は、何処かの巫女さんの放つ弓矢のような大きな音を立て、わたし達はその衝撃で意識を失ったのでした。

「……は……………」

「……ッ……………」

「……さて、死する前に我が贄とンギヤラシガ?!?」

「……ああ、思い出した」

目の前にいた下位吸血鬼レッサーヴァンパイアを血祭りにし、俺は現状を把握した。

端的に言おうか

「……………もう、二度とリーンボックスには行かん」

「あのー、女神の目の前で治める国の批判とか、色々と言いたい事はありますけど、今回は聞かなかった事にしますから取り敢えず助けてくれませんか?」

やはり、俺がリーンボックスに行くとは碌な事がない。

飛行機は雪山に叩き付けられ、起きて早々に下位吸血鬼レッサーヴァンパイアの面を拝まされ、挙句の果てに吸血鬼の集落で餌にされかけ……………と言うかだ。

「ま、待て!!!(?!?)いつらがどうなってm「黙れ虫けら」ギイヤアアアアアアa「五月蠅い」……………!!!(?!?)」

言うに事欠いて俺をあの程度の虫けらの餌?

……余程、死にたいようだな。

「ヒイ!?!お助k「知るか。己の不運でも恨め」……………」

感情が制御できないが、そんな事はもうどうでもいい。

目の前の下位吸血鬼レッサウァンバイアの心臓を素手でぶち抜き握り潰した事で恐怖でも憶えたのか、ネプギア（多分）を人質に取った心算なのだろう、下位吸血鬼レッサウァンバイアを先程潰した同程度下等の雑魚物の血で足を拘束して股座から左右に引き裂き、そのままネプギア達にぶちまけられた血以外の血を支配下に置いた。

「ヒイ!?!」

「……………殲滅を開始する」

内臓やら諸々を纏めてぶちまけてしまったが、まあ問題はないだろう。

確かにこいつらの血を浴びると吸血鬼になる可能性はあるが、所詮は下位だ。少々なら問題はない。

仮にこの程度の血で吸血鬼化するとしたら、余程才能があつたか、余程大量に浴びたかのどちらかだ。幸いにも量は満たしていない以上、これであるようなら諦めろとだけ言っておこう。

「……………さあ、全力で抗うが良い。貴様等総員ミナゴロシだ」

（取り敢えず、現在支配下に置いている血の量は最大量には遠く及ばないが……………まあ、こ

肢をミスしたような気がしてしまいました……まあ、失敗は誰にでもありますよね。次に活かすとしてみましょう。

「ああ、煩わしい!!だからお前と一緒にいるのはツ——とにかく!邪魔すんな腐れ女神がああアアああアアアア!!」

「だからと言つてなんでもかんでも暴力で解決するものではありません。せめて投降を呼びかけないとダメに決まっているでしょう?」

わたしとしては、出来る事なら吸血鬼ヴァンパイアの方も更生して真つ当に生きて欲しいと思つていますし、そもそも無暗に殺戮を行うものではありません。

話し合いで解決できるならそれに越した事はありませんし、それ以前の問題としてわたしとユニさんはともかく、気絶したネプギアさんと人間庇護の対象であるアイエフさん達が危険過ぎます。

「知るかそんなもん!!下等種族虫けらに会話?!やる訳ねえだろバカかテメエはああアアアああアああアああア!!!」

「もう!何で毎回こうなるんですか?とにかく、早く落ち着いてくださいね?起動!!」セット
けれど、怒り狂つて普段は粒子にしてしまつてある肉斬り包丁を物質化して暴れ出しているアナザーさんには通じそうにもありませんし………ハア

「完遂!さあ!何処からでも掛かつて来なさいな!!」コンフリクト

けど……………

「SI殺mur滅derde死ath!!」

「まだです。貴方は全力⇨理性がないのが最大の強みだと言いましたが、わたしから言わせれば、理性がないのは最大の欠点です」

「せめて縄を切つてから暴れてくれない!?!いや本当に!?!」

そう、今もなお、私達の両手を縛っているワイヤー入りロープ（なんでアイツ等こんなもの持つてるのよ!?!）は、その拘束力を損なつてはいなかった。

どう言う訳か、ハクはあっさりとその拘束から逃れて目の前の惨状を生み出しているが……………少なくとも、私にはこの拘束を引き千切る事が出来そうにない。（なお、アナザーの奴は力尽くで引き千切っていた。正直、どれだけ人間に見えても生物としての規格が違うと思つたわ）

「ぐぬぬ……………こん、のおおおお!!!」

「ゆにちゃん!ファイトです!」

（……………まあ、ユニも引き千切れてないから、生物としての格云々以前に単純に力が足りてないだけなんでしょうけど）

しかし、変身したユニでさえも引き千切れないとは思わなかった。今もなお、腕のロープを引き千切ろうと力を籠めるユニだったが、ロープは軋む事こそあつても、引き

私達の両腕を拘束していた縄が、何故か急に外れたのだ。

「ちよ、どう言う事よこれ!？」

「と、とにかく、急いでここから避難するです!細かい事は後で考えるです!」

「逃げろく!!」

(色々と急な展開で訳が分からないけど、確かにコンパの言う通りね……えつと、取り敢えず気絶してるネプギアを背負つてと)

色々と訳が分からないけど、とにかくチャンスよ。早い所こんな地獄から避難して、温かいコーヒーでも飲みましょうか……………

こうして私達は、雪崩が発生してもお構いなしで空を飛び、大乱闘を繰り広げながら大暴れしてる2人を放置して、全速力で下山した。

途中ヤバイ所もあったけど、変身したユニにビームをブツパして貰ってギリギリまで塞き止めて貰う事でどうにかしたし、アナザー達についてはハクとメアドの交換を済ませるからそつちに連絡は入れられる。今はとにかく……

「二」避難する(わよ/です/のよ/のだ)!!!
「二」

第三十五話

アイエフ達がこの雪崩が頻発している雪山から避難した後も、アナザーとハクの2人は空中で熾烈な争いを続けていた。

「ウオ雄悪汚悪男魚隕塢夫生淤将乙土!!!」

「まだです。まだわたしは倒れる事は出来ません」

暴走したアナザーが、謎の発生方法で歪みブレたような声で雄叫びを挙げながらハクに突撃したかと思えば、ハクはその突進を左手のルミナス・ライト・セイヴァー神器でもって防いだ。

「浄化の光よ！ハア!!」

「ツツツツツ?!?!?」

そうしてアナザーをギリギリまで引き付けながら、ハクは女神であるにも拘わらずその身に宿す異能煌めきの浄光を右手から放ち、その破滅的な熱量を内包した光をバランスを崩しながらもどうか回避したアナザーへ、肉斬り包丁が離れた事で自由となった左手のルミナス・ライト・セイヴァーL・L・S.を持って斬り掛かった。

「くっ、相変わらずで安心しましたよ」

「邪a!!!」

しかし、アナザーは足と背中中で凍結してしまっていた血液を操作し、バランスを崩した状態のまま加速して強引に上空へと浮上する事で、ハクの細腕に似合わぬ剛腕から振るわれるLルミナス・ライト・セイバー・Lルミナス・ライト・セイバー・Sルミナス・ライト・セイバーを回避したが、その強引な回避によって内臓を傷付けたのか口内から血を吐いていた。また、アナザーは吐いた血をそのまま針のように形成して射出する事で、Lルミナス・ライト・セイバー・Lルミナス・ライト・セイバー・Sルミナス・ライト・セイバーを振り切つて無防備なハクへと反撃した。

「この程度じゃ、倒れません」

「餓亜亜鏹鏹阿會極両闕亞亜鏹鏹阿會極両闕!!!」

だが、ハクもまたアナザーと殺し合えるだけの怪物だけあって、振り切つた

Lルミナス・ライト・セイバー・Lルミナス・ライト・セイバー・Sルミナス・ライト・セイバーへと光を纏わせながら更に逆の方向へ強引に振り戻し、氷漬きながら翔んでくる血の針を蒸発させて防ぎ切っている。

戦況は膠着しており、ハクは単純に性能的な面で己を上回るアナザーを倒す事が出来ず、逆にアナザーはハクの煌めきクラッシュの浄光ライントによる、防御をぶち抜き回避さえも困難な光速のバ火力を越えられないでいた。

「鏹破、鏹破破破破破破破破破破!!!」

「つう!?ハア!!」

そして、そんな膠着状態も終わりを迎えようとしていた。

「腐鵜憂優紆、斑有迂羽外嫗兔侑宇!!」

「ハア……ハア……」

終わりの原因は、体力的な限界だった。

そもそも、普段からクエストマラソンで鍛えているハクは元より、保有している異能の關係上、肉体的な疲労を感じ難いアナザーでさえ、体力の限界とは無縁でいられるものではない。

……まあ、空中で何十合も巨大な両手剣をぶつけ合い、（ハクにはあまり自覚は無いが）お互いに殺傷力が高い能力を振るいながらもそれを回避し続ける事を強要されている状態だったのだ。それも仕方がないのかもしれない。

「餓亞亜鏢阿會極両闕亞亜鏢阿會極両闕!!」

「次で、決めます」

そして、決着の時は来た。

「雄惡汚惡男魚隕塢夫生淤將乙士!!」

アナザーはその身に宿す異能『鮮血「グレイジーブラッド」の狂喜』で先程殺し、支配した吸血鬼達「ヴァンパイア」の雪に混

じった血や、事前に支配していた為に雪に混ざらなかつたが余りの低温から半ば凍り付いていた血液を強引に操作し、鋭く脆い氷の蒼い矢尻や丸く蒼い氷球をハクの正面を除いた全方位へと配置していた。

そして、血を射出していない正面もアナザー自身もその手に持った巨大な肉斬り包丁

……自分の放とうとした技に周囲の酸素の殆どを使ってしまい、墜落したハクと共に

第三十六話

「う、うん……………あら？ここは何処でしょうか？」

何時の間にか眠っていたわたしの視界に映ったのは、周囲に土の色が広がってその中で倒れているアナザーさんと、その土色の外は雪で覆われている謎の景色でした。

しかも、身に覚えのない女神化までして……………

「……………まあ、女神化は解除してと、一体なにが……………あ」

あ、ああ……………思い出しました。

そう言えば、気分が高揚しちゃってつい、扱いきれてないのに必殺技エグゼドライヴを使っちゃったせいで周りの酸素を焼き付くして、気絶しちゃったんです。

「我が事ながら、まだまだ未熟ですね。アイエフさん達が巻き込まれたら流石に死んでましたよ……………そう言えば、アイエフさん達は無事でしようか？」

確か、憶えている限りでは雪崩が激しくなり過ぎて巻き込まれない内に避難してたと思っていますけど……………『pipipi!!』……………あら？

「……………よく無事でしたね。この端末」

確かに、普段から頻繁に熱暴走を起こすから、徹底的に対物理や耐熱及びに防水を強

化した逸品でしたけど……と、そんな事はさておき

「えつと……『ルウイーの教会で待つてるわ。暴走したアナザーが落ち着いたらそこまで来て』と……では、アナザーさんを起したらわたしもルウイーへ行くとしましようか」

取り敢えず、ちよつと焦げちやつてるアナザーさんを起しましょう。

因みに、この後アナザーさんを起したら何故かもの凄く威嚇されました。(・ω・) ショボーン

そんな風にあなザー達雪山を降りる最中、荒れ地にまで変貌した雪山の一角より遙かに遠くからそれをじつと見つめている存在がいた。

「……………痛い……………」

その者は、長く艶やかな黒い髪を靡かせ、金色の瞳を内包した眦には涙を浮かべている、クリーム色の学生服を着込んだ童女の姿をしていた。

「……………(い)つ(い)つ)」

そんな童女——以前、トリック・ザ・ハードとルウィーの公園で密会していたエルマは、眈の涙をクリーム色の学生服で拭いながら、先程までアナザーとハクが戦っていた場所へとその視線を移して——

「……………なにあれ怖い」

徹底的に強化されたわたしの視界には、先程まで雪でいっぱいだった山の一角が映っていた。

……………そう、先程まで雪でいっぱいだった山の一角だ。

先程、眼が潰れるかと思う程の（と言うか、強化のし過ぎで光をモロに受けてしまい本当にさつきまで潰れてた。わたしじやなかったら失明ものだ）極光が、その主と矛盾になってた少年以外の全てを吹き飛ばしてしまっていたのだ。

「……………逃がして、正解……………」

わたしが想うのは、こんな最悪な結末しか用意されていない喜劇に強制参加させられてしまっている、あの方達の後続と、その従者達の事だった。

今回だって、わたしが介入しなければ、あの方の祖は例え自分の後続達を巻き込んででも、周囲一帯諸共少年を消し飛ばしてでも、最悪な結末を回避する為に、周囲の全てを消し飛ばしていたかもしれない——いいえ、間違いなく消し飛ばしていた。

あの方達の祖はそう言うものであり、今もなお存在し続ける規格外の光だから——わたしに流れる力だって、流してくれたのはあの方だけど、源流はあの方の祖だ。だからこそ、今もなお、微弱な影響を受け続けている。

「……………」

はつきり言つて、あの状況でわたしに出来たのは、あの方の後続を——その従者達を縛っていた縄を壊して逃走し易くなるように協力する事だけだった。

それ以上の事をしようと動くと、光で覆われた時に一瞬だけ、傍から見なければ分からない、ほんの一瞬だけ、闇に覆われた少年を始末してでも平和を保つように動く事を、わたしはわたしに流れているシェアエナジーを介して強要されかねなかった。

「…………けど、それじゃあダメ…………それじゃあ、何度でも同じ事が起こる……………」

けれど、それに従う訳にはいかなかった。

確かに、衝動のままにあの少年を始末すれば、一見平和が保てるかもしれない。しかし、それで平和を保つのは絶対に不可能なのだ。

そもその話として、本当の意味で世界の平和を得ようとすれば、結局の所は意思

を失って単なる力にまでその身を落として棄ててしまったあの方では、もうどうしようもが無いのだから……………

「……………もう、限界……………なの？」

そうこうしてしまっている内に、わたしに限界が訪れた。

今のわたしは所詮、天で抗うオリジナル^本体が、地上で女神を補佐する為に創み出された影だから……………力を使い果たした以上は、もう次のわたしに任せるしかないわ。

「……………ああ、トー……………トリックにも会えたり、もう、あんまり思い残すこともない、かな？」

ただ、願わくば……………次のわたしもトー……………トリックに会えますように……………

————そして、アナザー達を見つめていたエルマは、光へと分解されて完全に消滅して逝った。

その表情は、聖母のように慈愛に満ちたものだったとか……………

第三十七話

『や、やつと着いた（わ／わよ／のだ／ですう）』

（し、死ぬかと思つたわ……!!）

まるで片付けが下手な四捨五入したら三十路女（嵐を呼ぶ五歳児とその妹の母、因みに旦那さんの足は死ぬほど臭いとの噂がある）の自宅にある、これでもかと思つた物が詰め込まれた押し入れが崩壊して、文字通り山のように崩れ落ちる私物のような勢いで私達に襲い掛かつてくる雪崩を、雪山から死ぬ気で下山しながらある時は偶々そこにいたエンシェントドラゴン^Xを囿^Mにして数秒稼ぐ事で回避し、またある時は変身し空を飛んでるユニ^Bにエクスマルチブラスター^Bでビームをブツパして貰う事で吹き飛ばして時間を稼ぎ、またある時は私物のワイヤーで適当な逃げ惑うモンスターを複数体とつちめて（即興だったけど）木々に絡める事で縛り上げ身動きを出来なくした上で雪崩れへの壁にして、どうにか私達は下山した。

「さ、散々な目にあつたですう。早く教会に行つてあつたかいミルクが飲みたいです」

「RED. ちゃんはココアが良いのだ！」

「その前に、ほら、ネブギア……起きなさい」

コンパの意見には全面的に同意したい所だったが、今は取り敢えず、私の背中で気絶してるネプギアを起こすのが先よ……………流石に、もうこれ以上は背負つてられないし
 「ん、んう……………ハツ!!?血塗ろはイヤアアアアアアアアアア!!?」

「あいたあつ!!」

「……………あ、あれ?アイエフさん?」

「……………ネプギア」

背中から降ろしたネプギアの頬を軽く叩いて起こしたら、思いつきり叫んで飛び起きたネプギアに張つ倒された件について……………つと、言つてる場合じゃないわよね。

「……………あ、あれ?ここは……………」

「……………ネプギア、ちよつと落ち着きなさい。ここはルウィーの街の中よ」

「あ、ハイ」

叫んだ後に、アツパーカートンの姿勢で拳を振り上げたまま困惑したような反応をしているネプギアは、ユニが落ち着くように言うのと、数秒程深呼吸をして……………

「……………あの、私が気絶しちやつてた間、一体何があつたんですか? 皆さんボロボロですし、ハクさんも居ませんし」

「その事だけどね——と、言う訳なのよ」

これまでの経緯について教える為に、一先ずネプギアが気絶している間に何があつた

かを簡潔に話したユニは、説明が終わると同時に疲労がぶり返したのか、頭痛を堪えるように頭を押さえていた。

「……………うわあ」

「あらためて聞いていると、頭が痛くなってくるですねえ」

コンパが言うように、現状は非常に頭が痛くなるような状態だった。

なんで私達、対アナザー用の抑制効果を期待してハクを仲間にした（勿論、犯罪組織相手の戦力としても期待してるけど）のに、こんなに頭を抱えないといけないのかしら？

（……………まあ、言ってもしょうがないのかしらね。実際問題として暴走の抑えを任せられるならそれだけでも結構助かるし）

「ねーねー！いい加減教会に行こーよ！そこできつと新しい嫁との出会いが待ってるだろーし、流星にちよつと疲れたよー」

「そうね。取り敢えずルウィーに来たんだから、教祖に挨拶の一つでもした方が良いのは確かなんじゃないかしら？」

「そう、ですよ。ルウィーの女神候補生の方ともお会いして、協力をお願いしないといけませんし……………」

「じゃあ、早速教会に行つて女神候補生さんに会いに行くです」

私がハクの事について少し考え込んでいる内に、皆はルウイーの教会（道は判つてないのに）へ向かつてどんどん歩いて行った。

「あ、ちよ……すみません、教会つてどつちに行けばいいかしら？……ああ、そうですか、はい。ありがとうございますました……待ちなさーい！」

そして、私もその辺の適当な通行人へ手早く道を尋ねると、先に先にと進んで行く皆を追つて駆け出した。

……と言うか、皆そもそも教会までの道は知ってるのかしら？

（……………疲れた）

ルウイーのわりと奥の方の、つい先程までは雪山だった場所で俺は、ただただ脱力し、つい先程までどんよりして曇りだった、晴れ渡る青い空を見上げながら、脱水気味な所為か矢鱈と痛みを主張している頭を更に刺激するデカい声に顔を顰めていた。

「さて！では先に教会で待っている皆さんに合流する為に、早く雪山を下山しましょう

！」

「……………」

そう言いながら、この天変地異擬きの元凶は駆け足で下山しているが、雪が解けて水になり、そのまま一気に蒸発した水分が周囲に湿気として溢れている為に、はつきり言つてももの凄く暑苦しい。ここに目隠したまま連れて来たルウイーの住人に聞けば、恐らく10人中10人がここを真夏のラステイシヨンの荒野と間違えるだろうと思う程暑苦しい。

「ふんふんふん♪♪♪」

「……………」

その証に、目の前で呑気に鼻歌を歌いながら歩いているハク元凶の服は、普段から無駄に体にフィットしている所為で体のラインが浮き易いのに、今ではべつとりと肌張り付き、その中身が（規制的にダメな箇所だけは固有能力で乾かしているのか無事だが）透けている。はつきり言つて、かなり不愉快だ。

「色々と思う所はありますが、偶にはこうして思いつ切り身体を動かすのも良いものです。良ければまた、今度は健全なスポーツとかを一緒にしませんか？あ、勿論ルールを厳守ですからね？」

「……………」

………挙句の果てにこれだ。

俺は、こいつのこう言う所が特に気に入らない。

先程までの鬭争の結果、周辺一帯の生きているものはこいつの手で消し飛んでいる。しかし、こいつはその辺を気にする事がまずなく、あつたとしてもそれは見せ掛けで、そもそも被害に遭うのは大概がモンスターや吸血鬼だ。

「……………」

「……………?」

別に、モンスターや吸血鬼を庇う気は一切ない。そもそも初めに奴レツサーヴアンバイアらを殺しにかかったのは俺だし、それをこいつが殺そうが、俺が殺そうが、そんな事は些細な事だ。

「……………どうかしましたか?」

「……………何でもない」

しかし、こいつは救うと、護ると宣いながら殺す殺す。そして、それを認識していても、恐らく根本的な部分で意識には留まらない。仮に留まっても、精々が『残念だった。また次に頑張ろう』……この程度だ。

何故かは解らんが、その矛盾が異様に気に障る。俺にとっては些細な事の筈なのに、何故かこいつ女神等がそのような行いに走っていると、引き巻いてその生命を終わらせ、早々に別の女神を生成させたくなる。

(何故だ？何故、こんなどうでも良い事が気に障る？……………解らんな)

……………まあ、これ以上は考えても仕方あるまい。

今はとにかく、この暑苦しい地を離れるのが先決だ。

そして数時間後、俺はルウイーの教会でアイエフ達に合流した。

第三十八話

暑苦しい山から寒い雪山に変わった（戻った）道を下り、どうにかルウイーへ辿り着いた俺は、現在ルウイーの教会で寛いでいた。

どうにも、約束した時間にはまだ早いらしく、今は教会の礼拝堂にある椅子に座って疲れを癒しながら待機しているところだ。

（……………怠い）

「皆さん、ご無事でなによりです」

「……………」

「え？……………え、ええ、なんとかね。そっちはどうだったの？」

「はい。ご心配には及びません（n*、ω、*n）。これでも、こう言う事には慣れていきますので……………流石に、ここまで激しいのは初めてでしたけど、次からは然程の手間なくどうにかできそうです」

「は、激しい？（えっちょ、頬を赤くしながら激しいってナニよ!? よく見たら二人とも服がちよつと湿ってるし……………あの後ホントに一体ナニがあったの?!?!）」

「はい。今まで色んな方の相手をしてきましたが、憶えている限りでも一番激しい一時

でした」

「……………キッ!!」

近くでは、先程まで暑苦しい場所に居た所為で体温が高いハクがアイエフとなにか話しているが、何故か俺を見るアイエフの物凄い形相を見ると、そこに意識を割くなど全力で本能が警鐘を鳴らしてくる。

かと言つて、ネプギアが居る方に意識を向けると……………

「ごめんなさい。ユニちゃん……………私、また」

「別に、気にする事ないわ。ネプギア、アンタはそのままが良いの。いいえ、お願いだからそのまま置いて（ネプギアが血に慣れたら女神的にもエンディング的にもヤバイフラグが建つ気がするし）」

「気にしな—い気にしな—い!嫁はそんな事に馴れなくつて良いんだよ—!」

「ゆにちゃんの言う通りです!わたしからも、あなざーさんにもう少し穏便に戦えないか掛け合つてみるです!（メラメラ）」

「ユニちゃん、コンパさん……………（うるうる）」

……………こんな感じで、はつきり言つて物凄く四面楚歌だった。

と言うか思うのだが、何故こいつらは他者が死ぬ事塵にそこまで意識を傾けるのだろうか?人間はそこまで他人に心を裂いて痛めるものだったか?

（まあ、女神は確かに人間から信仰心を受け取って存在しているから仕方ないのかもしれないが……己を裏切り犯罪組織に付いた者や、そもそも敵でしかない吸血鬼の事など気にするだけ無駄だろうに）

……まあ、そんな事を俺が気にしても仕方ないがな。

そもそも俺は、『女神パープルハート』との契約に従って人間を狩らずに（まあ、人間の血は基本的に不味いから好き好んで狩ろうとは思わないが）モンスターを狩っている。

この旅を共にしているのも、ゲームキャラに課せられた罰ゲームでしかない。

（結局の所、俺をハブって間抜けにも取っ捕まった女神連中を救出後俺がどうするかはネプテューヌ次第だ。そんなどうでもいい事を気にする暇があるなら、この教祖に女神候補生を出すよう脅し方でも考えていた方がマシと言うものか）

……しかし、そう言えば3年程前にネプテューヌがルウィーで女神ホワイトハートが大変だとか言って、大慌てでルウィーへ翔んで行っていたような気がしたが……アレは一体なんだったのだろうか？

(……………ああ、なんでこんな事になってしまったのでしょうか?)

いいえ、これは、ある意味でブラン様が犯罪組織に捕らわれた時点で、決まっていたことかもしれません。

ラストイションからの通信で、グロウさんからこちらへ近い内に、プラネテューヌの女神候補生一行が訪れるとは聞いていました。

そして、捕まった女神様達を助ける為に、ロムやラムに協力を求められるだろうとも……………それ自体は、まあ、色々と思う所はありますが、あの子達が女神として望むならば構いません。

ですけど……………

「あの怪物を態々連れて来るなんて、プラネテューヌとラストイションはルウィーを滅ぼすつもりなのでしょうか……………?」

一体、両国はなにを考えているのでしょうか?

幾らなんでも、犯罪組織が昼夜問わずに跋扈しているこの状況でそんな事はしないと
思いたいですけれど……………連れてくる人物が人物だけに、笑い話では済まないのが笑
えないですね。

「……………せめてもの救いは、あの子達が街へ遊びに行っていた事だけですネ」

後は、ストツパーとしてリーンボックスの女神候補生、ハクさんが同行している事ぐらいでしょうか？

ハクさんが居れば、あの怪物も好き放題に暴れたりは出来ないでしょうし、被害もある程度は抑えられる筈です……………少なくとも、7年程前にリーンボックスで勃発した戦いでハクさんが辛勝して以来、あの怪物も周囲への被害を少しは考慮してくれるようになりましたし。

……………けれど、本当に……………

(ああ、ブラン様……………私は一体、どうすればいいのですか?)

私はそのまま、約束の時間が来るまで執務室で頭を抱えながら、ルウィーとしてどう対応するべきかを考え続けるのでした。

(……………頭と胃が、痛いです)

第三十九話

ルウイーの教会で色々とアレな惨状が繰り広げられている中、その教会を擁している首都では平穩（？）な光景が広がっていた。

雪が積もった公園では子供が雪遊びに夢中になり、各家庭では炬燵と蜜柑を完備してある居間で休日の学生や大人達が、炬燵で暖まりながらゲームをしたり、迷い込んで来て炬燵の上で丸くなる猫を眺めて寛いでいる。

それらの光景は紛れもなく平穩そのものであり、平和な街並みの象徴とも言えた。

民衆達は、何処までも平穩な暮らしを甘受しており、その幸福は何時か天寿を全うするその日まで続くと、欠片も疑ってはいなかった。

「……ある一点の機械が、その平穩を完膚なきまでに崩す兵器地雷とは知らずに、ねえ？」

……その街の一角で白昼堂々とある違法機械の販売営業が行われている現状は、その平穩の全てを崩壊に追い遣るとも知らずに——

【アツハハハハツ——
!!!!】

「はい。みんな寄つといでー！楽しい楽しい犯罪組織マジエコンヌだよー！」

アタイは、慣れない愛想笑いを浮かべながら、周囲のルウィー国民にピラを配る。

「マジエコンヌに入信すれば、どんなゲームもタダで遊べちゃう！好きなだけゲームし放題だよー！」

勿論、このセリフは定型文だ。アタイにはこのセリフを繰り返しながらピラを配る方向が向いていると、何ヶ月か前までピラ配りをやってた時に学習済みだからだ。

「……………はあ。なんでアタイはピラ配りなんてみじめな真似しなきゃなんネエんだろうな」

「……………そんなにお嫌いでしたら、今すぐにもアレイストやイヴェルトの元へ帰して差し上げましょうか？」

「うおっ!?!リリス大隊長?!いい、イヤー、キョウモガンバッテピラクバリダー！タノシイナー（棒）」

「そうですか……では、わたくしはもう少し各所を回って来ます。貴女はその箱に入っている物を空にしなさいな」

言いたい事だけを言つて、リリース大隊長はルウィーの街の人混みの中に紛れて何処かへ行つちまつた。

現状のみじめさからついつい本音を漏らしちまつてたが、アブねえアブねえ……後ちよつと誤魔化すのが遅かったら、またあの地獄^{大隊長の人}へ送り返^ボされる所^コだったぜ。

「寄つといで……楽しい楽しい犯罪組織マジエコンヌだよー！」

けど正直、あの人の事は今一よくわかんネエんだよな。

大隊長なんて御大層な身分をやつてる割りに、頻繁にこんなピラ配りなんかを頻繁にやつてるらしいし？そもそも、ブレイブ・ザ・ハード様は他に直属の部下つてモンをこの人しか抱えてネエし？……まあ、そこはアタイが尊敬してるマジック様も同じだよ。何でか知らねえけど、マジック様はアタイ以外の部下を直属にしてはいネエ。

なんでも、2年前まではサイつて言う女の大隊長を抱えてたそうだけど、そいつがプラネテューヌであのバケモンにぶつ殺されて以来、アタイを拾つて来るまで1人も新しい直属の部下を持たなかつたとか、なんとか、なんとか

「マジエコンヌに入信すれば、どんなゲームもタダで遊べちゃう！好きなだけゲームし放題だよー！」

……まあ、んな事は後だ。

今はとにかく、この意外と物が詰まってる箱の中に入ってるチラシだのフィギュアだのブレイブ・ザ・ハード様の木彫りだのを……………ん？

「…………ブレイブ・ザ・ハード様の木彫りなんざウチの商品に在ったか？」

しかも、やけに精巧に造られてる上に色付けまで完璧にされてるのが幾つも……………心成しか、犯罪神様の姿を模したとか言う触れ込みがあるフィギュアより出来が良いし（まあ、箱に入ってるって事は商品なんだろう……………えーっと、なにに？ 一体辺り単価2000クレジット……………高いのか？ これ）

なんとも微妙な値段設定だった。正直な話し、犯罪神様のフィギュアの方が値段的にも需要的にも高く付「ああ！ この間の悪い人だ!!」……………悪いこと、めっ……………ああ？

「もー、またこの下つ端だねロムちゃん！」

「…………こんな事しちや、めっ（ぶんぶん）」

「へっ、んな事アタイが知るかってんだ！ そして、誰が下つ端だ誰が!! アタイにはリンダって言うちゃんとした名前がなア!!」

誰かと思ったら、2、3日前にアタイをぶっ飛ばして商品マシエコンをぶっ壊して行きやがったこの国の女神候補生だった。

「えー?でも、こうせいいいんってえらい訳じゃないんでしょー?だったら下つ端じゃない!ねーロムちゃん?」

「うん……それに、この間戦ったら、とっても弱かった(しょんぼり)」

「二応これでも最近上級構成員に昇格したんだよ!バーカバーカ!」

しかも、アタイの事を下つ端だなんだと見下してきやがるオマケ付き……しかし、こんなちっこいなりでも実力は女神相応と言えば相応だ。

途中でとんずらしたとは言え、あの地獄アレキストヒツエルトによる攻撃のような鍛錬を潜り抜け、心身共に大幅なパワーアップを遂げたアタイを歯牙にも掛けず、ムカツク事に無駄に有り余つてますと言わんばかりの才能で炎と氷の魔法攻撃をぶつ放なつて来たのは記憶に新しい。

「じょーきゆうこーせいいいん??ロムちゃん、それつてすごいのかな?」

「……わかんない(ふるふる)」

(スゲエんだよバツキヤロウが!)

見た目相応のおつむしかネエのは不幸中の幸いかもしれねえが、正直、これはこれでマジムカツク……!!

ただ、今回ばかりは何もせずに逃げ出す訳にはいかネエ。今度んな事したら、リリヌ大隊長にあの地獄の特訓場へ送り返されるのが目に見えてるからだ。

そして、事態はアタイにとって最悪の方向へと向かつて行った。

「ま、ぶつ飛ばしちやえば良いよね！」

「うん、お姉ちゃんを攫つてこの国を荒らすマジエコンヌ……嫌い（ぶんぶん）」

「じゃあ、やっっちゃおう！」

「うん、やっっちゃおう？」

そして、目の前のガキの姿をした怪物はアタイの敗北を決定的なものにする一言を告げる。

『プロセツサユニツト、セツト』

「チイツ!? 負けるかってんだ! どっからでもかかって来い!!」

「……………ていつ」

しかし、妙に気が抜ける声が聞こえ、光に覆われた視界が開けると――

「……………は？」

『きゅ〜』

「とまあ、こうすれば非力なわたくしにも簡単に鎮圧可能な訳ですけど……この程度の仕事も熟せないのですか? だから貴女は万年下っ端なのですよ?」

そこには、あつさりと倒されて目を回してやがるクソガキ共と、その背後でばんぱんと手を払っているリリス大隊長の姿があった。

「さ、この子達を連れてこの町から出ますよ? 貴女はその箱の中身をきっちり回収し

てからわたくし達の拠点に来なさいな」

「えっ？あ、ああ……はい。了解しやした」

そして、リリス大隊長は目を回してやがるクソガキ共に妙に手慣れた手付きで縄を回してきつちりと縛り上げ、そのまま魔法でも使ったのか、クソガキ共をふよふよと浮遊させて、本人曰くこの国にある犯罪組織マジエコノムの拠点へと向かって行っちまった。

「……………えー」

しかし、アタイの心中には微妙な気分と消化不良感が残った。

第四十話

ルウイーの教会に備えられている、女神用の執務室。

そこでは今、ものすごく重苦しい空気が漂い、私達の胃を荒らしていました。

(えー、ネプギアですが……執務室の中の空気が最悪です)

「それは……あの子達を危険な旅に差し出せと、そう言うことですか?」

「他にどう聞こえる? 言っておくが、これは要請ではない。嫌なら嫌でも一更に構わんが……その結果は言うまでもあるまい?」

「……それは、どう言った意味でしょうか? まさか、私達ルウイーの女神を見捨てるか?」

「はっ……そう聞こえなかったのか? 少なくとも、俺から言わせれば契約相手であるネプテューヌプラネテューヌの女神さえ救出出来ればそれで問題はない。他の連中はついでに過ぎん」

ルウイーの教祖さん——西沢ミナさんが眉間にシワを寄せてアナザーさんを睨み、とっても不愉快そうに、この国の女神ブランサンを見捨てるのかと問い詰め、アナザーさんはそれに対してあっさり肯定を返してしまいました。

けど……

「アナザーさん!? 私達は他の女神を見捨てたりなんて「お前は黙っている。今は俺が話している」あう」

私は、それを認めないと言おうとしたのですが、問答無用でギロツと睨まれて黙れと返されてしまいました。

「ご生憎さま、アタシは黙らないわよ! アンタ、お姉ちゃんも見捨てるつもり!」

「……………」

アナザーさんを睨むユニちゃんと、相変わらず笑顔なハクさん（候補生同士仲良くしようと言われたけど、どうしてかついっさいさん付けしてしまいます）はアナザーさんの言い分で自分のお姉ちゃんが心配になってアナザーさんを問い詰めますけど、それに對してアナザーさんは訳が分からない物を視るような、とても冷め切った眼差しをユニちゃん達に向けながら、口を開きました。

「…………何を訳の分からん事を言っている? お前達がプラネテューヌへ協力する限りは俺とて労力の提供程度は行うが?」

「ハア? なにが言いたいのだよ!」

「ふん…………お前達女神候補生がゲームキャラを持ち、プラネテューヌへ協力する。代償にプラネテューヌはその国の女神も救出する…………これは各国の教祖が取り決めた条約である筈だが?」

……唐突な新事実が明らかになっていました。

それだけ言い切ると、アナザーさんは西沢ミナさんへ再度向き直り、再三に渡って要求を突き付けました。

「……………それで、お前は どうする？ 協力を頑なに拒み、女神もゲームキャラも何もかも失うか、素直に協力して共に女神を救出するか……………言っておくが、これは最終通知だ。これ以降俺がこの問いを受け付ける事はありませんし、この提案を蹴った所で俺がゲームキャラ確保を止める訳ではない」

—— さあ、 どうする？

「……………」

そして、ミナさんはその問いに対して、数瞬の間を於いて絞り出すように声を上げました。

「……………どちらも、認められません。少なくとも、私は……………幼いあの子達を危険な戦場へ赴かせたくはありませんし、なによりもゲームキャラをこの国から持ち出す事を認める事は決して出来ません」

「……………そうか」

その答えは、完全な拒絶でした。

ただ、この国の女神候補生の話とゲームキャラさんのお話ではちよつとニュアン

スが違ったような……?」

「……………そうか……………なら、お前を斬り捨て必要な情報を持つ職員なり、女神候補生なりを探し出して、拷問でも加えながら聞き出すとしよう……」

『ちよつま』

そして、そんなミナさんの主張に対して思うところでもあったのか、アナザーさんが不穏な空気を纏いました。

私達もそれを止めようと動いたんですけど……

「はいはい。ダメですよ〜?」

「ガフツ!」

『……………え』

けれど、私達が止めるまでもなく、アナザーさんが腕をミナさんへ向けたと同時にハクさんはのんびりした喋り方をしながら、何時も通りの微笑みを浮かべ、まるで世間話でもするかのような自然さでアナザーさんの脳天へと、急に具現化させた大きな剣の腹を降り下ろして鎮圧してしまいました。脳天直撃です。

「まったく、いきなり『交渉は俺がやるからお前は黙ってろ』……なんて言い出したかと思えば、なんで貴方は必要もないのに誰かを殺すなんて言うのですか?命は誰のものであれ1つしか無いのですよ?それに、以前約束しましたよね?不用意に人を殺めないと

……お忘れですか？」

「……………」

「西沢ミナ教祖……すみませんが、懺悔室をお借りしても？」

「え？……………え、ええ……勿論構いませんが……う？」

「では、わたしはこれで……ネプギアさん、申し訳ないのですが、後でギルドで落ち合いますでしょうか？……………わたしは、貴女の決定には従いますから、ね？」

そう言つて、気絶しているアナザーさんを背負いながら、ハクさんはこの教会の執務室から出て行つてしまいました。

「……………ふう」

「……………えつと……………アナザーさんが無茶苦茶言つてごめんなさい」

「あ、いえ……………気にしないでください。わたしも、無茶を言つてる事は自覚していますから……………」

ミナさんも、緊張の糸が切れたかのように安堵の溜息を漏らしています。

そして、そんな感じに和やかな雰囲気になつていたその時でした。

「西沢教祖！一大事です!!」

バン!!と、大きな音を立てて扉が開かれ、ルウィー教会の職員の服を着た人が飛び込んで来て……………

「何事ですか？」

「ロム様とラム様が犯罪組織マジエコンヌに浚われました！我等の兵士も必死に抵抗したのですが、敵に転移魔法の使い手が居た為に、何処とも知れない場所へ逃げられてしまい、只今一生懸命搜索している最中であります!!」

……とんでもない爆弾を落としました。

「……………え？」

「た、大変ですう!!」

「そ、そうね。急いで助けに行きましょう!?(……でも、何で女神がそんなに頻繁に捕らわれるのかしら?)」

「嫁を攫うなんて……許せない!!RED。ちゃんが成敗しちゃうんだから!!(嫁が攫われるのってすつごく王道だよね!)」

「……………」

って、あれ？

「あ、あの、ミナさん?どうs『バタツ』……エエエエエエエエエエ!」

何の反応もないミナさんの肩に触ると、ミナさんはそのまま床へ倒れてしまいました。

「あゝ……ネプギア、そつとしておいてあげなさい……コンパ、西沢教祖を医務室まで運

んであげて？」

「任せてくださいです。えっと、医務室はどっちですか？」

「……あ、はい。こちらです」

「キョ〜……………」

そうして、倒れたミナさんはコンパさんが職員の人案内で医務室にまで運んで行ってしまいました。

「……………さ、これからどうするか、話し合いをしましょう？」

「そうね……………ま、言うまでもないかもしれないけどね！」

そして、倒れたミナさんを医務室に運びに行くコンパさんと、懺悔室に行ってしまったアナザーさんとハクさんを除いた面々で、この後の事を話すのでした。

(……………私が気絶したミナさんに親近感を憶えたのは秘密です)

話すのでした。

第四十一話

俺は今、所々に意味は分からんが石壁を彫つて造られたのだろうレリーフや、恐らく歴代の女神と教祖と思われる人物を模したのだろう石像（因みに、歴代女神かどうかの判断基準は胸だ。歴代の女神らしき石像は全て胸部がまな板だった。教祖の方は知らん）のある狭い部屋で、精神的にかなりキツイ話しを無理矢理聞かされていた。

「——良いですか？命は大事なのです。不用意に殺すなどと、言つてはいけませんよ？」

「……………」

「……………」あの、聞いていますか？（ちよつと強く叩き過ぎちゃいました？……………けど、あのまま西沢ミナ教祖とお話しさせる訳にはいきませんでしたし……………」

（……………くだらん）

しかし、何故俺はこんな場所でこいつのつまらん戯れ言を聞かされねばならんのだらうか？

確か、最後の記憶ではルウィー教会の執務室らしき場所で、イストワールから国を出る前に聞かされていた約定を破つた愚か者の頸を刎ね飛ばし、その首を晒した上でここ

の連中からゲームキャラの情報を吐かせる予定だった筈なのだが……そう言えば、後頭部に大きな衝撃があつたような……？

「あの一、本当に聞いてますかー？」

（まあ、どうでも良い……のか？）

本当はどうでも良くない気がするのだが、俺の本能が矢鱈とそれ以上気にするなと警鐘を鳴らしてくる為、これ以上気にするのはやめておこうと思う。

……しかし、まあ

（ああ、この部屋は良い。何となく落ち着くし、何より必要以上に陽が差さん）

この部屋は良い部屋だ。少なくとも、俺個人の感想としては上の中に相当する。

少なくとも昔、ネプテューヌ女神に勧められた半吸血鬼自治区の一角よりは気に入った

……この悪趣味な石像群さえなければ、ここで暮らしても良いと本気で思う程に

（……正直、半吸血鬼ダンピール自治区の同類達は嫌いではないのだが……家屋の趣味だけは嘔み合わん）

連中にも俺と同じく吸血鬼ヴァンパイアの血が流れている以上、程度の差はあれ太陽に苦手意識ぐらひはある筈だが……まあ、自治区の連中は人間の血の方を優先しているのだから。うん。

——そんな時だった。

【「……………聞いてますか？」】

「…………ツ!？」

底^{焼き}冷^殺えするような声が聞こえ、思わず声が聞こえた方を向いたが……………

「……………?どうかしましたか？」

「……………何でもない」

そこには、いつも通りの能天気な笑みを浮かべたハクの姿があっただけだった。

「まあ、お説教はこのぐらいにしてと……………そろそろネプギアさん達に合流しましょうか？」

「……………そう、だな（先程の寒気は一体……………?）」

……………まあ、気にしない方が賢明と言うもの……………なのか？

そして俺は、このルウィーで最後になる、のんびり出来る時間を終えたのだった。

【ジジツ……………えのげ…ザザツ…を確認、これよりとう……………を開始します……………】

『……………』

「えっちよ、アナザーさーん!?何処に行くんですかって速い?!」

「……ふう、やっと帰って来られましたわ」

「……むー、むーむー……」

「むー！むぐぐむむー!？」

あれから、二人の女神候補生を縛り上げて風の魔法で浮かせながら街を歩いていけば、気絶中の縛られてる女神候補生を見咎めた衛兵達に追い回され、貧弱なこの身体に鞭を打って全速力で逃げ回り、途中で女神候補生を浮かせている魔法を反魔法装置マジックキャンセラーで強制停止させられてしまい、自力で二人を抱えて逃げ回る羽目になったりとまあ………本当に、反魔法装置マジックキャンセラーが肉体強化魔法にまで影響を及ぼすようでしたら捕まっていたわ。

「遅かったではないか……いつも時間にも仕事にも遊びを持ち込まずにきつちりしている汝にしては珍しい」

「いえいえ、生憎ですが、わたくしも単騎で一国の教会に備えられている全兵力を掻い潜って嚴重に保護されている——ましてや、本人自身もそれなりに強い女神候補生を

「浚うのは困難ですのぞ」

「ハッ！だからオレ様が手を貸してやろうかつつたんだよ！そうすりゃあこんな無駄な時間を使うことも無かつたろうになア!!」

そんなわたくしに、同僚のアレ変態イストさんとイヴチンピラエルトさんはそれぞれ思い遣りの籠かごつた言葉を掛けて来ますが……言つては難ですが、勇者様に言つて欲しかつたですわ。ええ、とつても

勇者様からでしたらわたくし、罵倒や暴力でさえご褒美ですもの……まあ、勇者様はお優しいですから、そんな事はしてくれませんけれどしませんけれど

それに……

「そう言うな。我等は実力に多少の差はあれど、対等の地位を頂く身、多少なりとも融通を効かせ合う程度の器量もなくば……いや、すまんな。忘れると良い」

「オイゴラア！テメエ今の間は何だつてんですかア?!」

「いや、気にするでない。私も大人気なかつたと、これでも少々反省している」

「あゝあゝん?!どう言う意味だオイ!!!」

「……………(ガクガクブルブル)」

案の定、毎度の如く言い争うお二人は、今にも爆発して殺し合いを始めそう。その間に挟まれてしまっているリンダ下っ端はガタガタ震えていますし……………ハア

補生2人の見た目相応の華奢な細腕へ荒つぽく刺し穿ち、ドクン！ドクン！と脈打ちながらその血を嚙らせて吸収していきます。

……正直な話し、心が痛まないと言えば嘘になります。それでも、子供は好きですし。

ですが、これも犯罪組織（犯罪者組織）を犯罪神マジエコンヌから切り離す為に必要な行（試験）いなので。だからこそ、この任務だけは絶対に果たして見せます。

「天を裂け！地を砕け！海を渴かせ！今こそ、汝は現世へ舞い戻る！」

「ギャハハハハハアアアアア!! イイネイイね最ッ高にハイってヤツだアアアアアアアアアア!!!」

「……………」

（ああ、これで…………やつと）

そうして、必要なだけの血を吸い終わった女神候補生の2人は触手から解放されると同時に気絶し、地上でぐったりとうつ伏せに寝かせられ、明滅する魔法陣の中心からはわたくしの眼（アイカメラ）に、先程の触手達が無数に殖えて絡み合い人の形へと変貌していく光景が映りました。

……………そんな時です。

——ゾツ

かったと思いましたが)な速度で駆けてくる怪物に対して、事前に張っておいた魔法障壁で稼いだほんの数瞬でわたくし達はギョウカイ墓場へと転移する事で、この拠点――
――世界中の迷宮から避難したのでした。

「いや、仕方ないわよ……誰にだって失敗はあるんだし」

「そうです。あなざーさんが奇行に走るのなんて今更ですし、はくちゃんがそこまで気にする事ないです」

(うう、氣遣いが心に刺さります)

前に見た全力疾走の三倍は速い勢いで走って失踪したアナザーさんを、ルウイーの街中で見失った私は、ルウイー教会の応接室(執務室はミナ教祖が倒れたので宿舎の用意が出来るまでここで待機との事です)でネプギアさん達に合流した私は、どうしてあの程度の事が防げなかったのかと心底反省している真つ最中です。

「……でも、アナザーさんは一体何処に行っただんでしょうか？」

「そうですね。あなざーさんは無茶苦茶はしますけど、約束は破ったりしないですし……」

ネプギアさん達は、失踪したアナザーさんの行方を気にしていますけど……残念ですが、北西の方向に物凄い勢いで向かって行った事以外はさっぱり分かりません。

(……けど、彼は彼で意外と信用されてるんですね……嬉しいです)

「……………(ポチポチ)」

ええ、ええ、アナザーさんはアレで意外と誠実なんですよ。

普段は障害とみなせば誰でも何でも殺して排除しようとはしますが、嘘は吐かないの

で約束さえしてくれれば殺さずに収めてくれる事はありますし、出来ない約束はしませ
んし。

(……まあ、約束してくれてなかったらダメな時もありますけど、その辺は私の今後の努
力ですよね)

「……………(ポチポチ)」

……つとまあ、それはさておき

一体、どうしたと言うのでしょうか？

「……………あ」

「アイエフさん、どうしたんですか？」

「……………あいつ、なにやってんのよ……………!?!」

……………なんででしょうか?すごく嫌な予感が……

「この辺にいるオトメちゃん達にメールしてなにか困った事はないかって聞いたんだけ
どね……………居たのよ」

「居たって…誰がですか?」

「……………アナザーの奴、世界中の迷宮付近で周りのモンスターを血祭りに挙げながら
見るからにボロボロの黒っぽい人とガチバトルを繰り返して……」

『……………はい?』

ああ、やつぱり……………

「じよ、冗談よね？」

「……………幾らなんでもこんな時に冗談なんて言わないわよ……………こここの女神候補生が浚われて大変な時に、アイツは一体なにやってんのよ……………!？」

「え？ルウィーの女神候補生の方が浚われてるんですか!？」

え？……………一体、何時の間にそんな事に……………!？」

「ああもう！その話は道中でじつくりと……………あのー……………なによ今度は!？」

「あの、西沢教祖から貴女方へ伝えろと言われて来たのですが……………」

慌てて教会から出て行く準備をしていたアイエフさんは、突然……………いえ、この職員の方ですし、突然と言うのも難ですけど……………突然、西沢ミナ教祖からの伝言を持ってやって来た職員の方に呼び止められました。

「なに？私達は急いでるの。話があるなら手短に「ああ、それなら問題ありません。浚われた女神様達の居場所が判明しましたので、救助の依頼に來ただけですのよ」……………それで、何処よ？」

「はい……………場所は世界中の迷宮です！どうか、ロム様とラム様をよろしくお願い致します！」

それだけ言って、返事も聞かずに（いえ、どっちにしても請けますけど……………いいんで

しょうか?) ルウイー教会の職員の方は部屋を出て行ってしまいました。

『……………はあああああああああああああああ!?!?!』

『……………』

(さ、最悪です)

い……………急がないと……………間に合わないかもしれないですけど、最悪の場合、安否の確認だけでもしないと……………

こうして、私達は世界中の迷宮へと向かって全速力で向かって行くのでした。

(……………と、とにかく、女神候補生の方の無事を祈りましょう! なんかダメそうな気がしますが、最初から諦めては助かるものも助かりませんしね!)

第四十三話 改善後

世界中の迷宮跡地から少しだけルウイーの首都へと近付いた場所——

そこは今、周辺の山が幾つも崩れ、植物も動物も悉く薙ぎ倒され死に絶えた死の大地と化していた。

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!!!』

「『や……ザッザザ……かを……ジジッジジッ……す……』」

しかし、その元凶である2人はそんな事は知らんとばかりに殺し合う。

『殺殺、殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!!!』

「『……つづ……に……ジジッ……ん……げジジッ……ガガガッし』」

喉から黒く染まった泥のような血を流しながら、殺!と叫ぶ血塗れな銀髪の男は、ただ左腕を振るうだけで周囲へ衝撃波を撒き散らし、脚で大地を踏み締める度に大地を砕く。

逆にそれとぶつかり合うアナザーは平時以上に無機質な無表情のまま、何故かノイズが走っている声をこれまた無機質に淡々と発しながら、本来なら全身に膨大な量の血を纏い、その身を完全に狂気に委ねても尚、受け止める事の敵わない筈の拳を正面から力

任せに殴り返し、同じように周囲へ衝撃波を撒き散らしていた。

更にその上空ではこの地へと来る道中のモンスターから搾り取ったのか、大量の蒼い血が蠢いた。

上空で蠢いている膨大な蒼い血は、唐突に発生する黒い靄の様なナニかと激突する。

空を飛んでいる鳥系のモンスター達はその余波で死に絶えて、蒼い血を操っているアナザーには問答無用で全ての血を吸い上げられ、血を吸い上げるのを阻止しようとしたのか、急に発生した黒い靄には肉片一つ残さず消滅させられていた。

そんな世界の終わりのような光景の中で殺し合う二人——しかし相当な無理のある強化だったのか、アナザーの肉体は血塗れな銀髪の男と殴り合う度に何故か黒く染まった血を噴き出しながら自壊する。

銀髪の男の拳を防ぐ為に差し出した右腕は、拳そのものこそ防いだが腕の筋肉が断裂し、関節も砕けてだらりと垂れ下がる。

また、銀髪の男の顔面に叩き付け脚で蹴られた左腕は、皮膚が裂けて白い骨が服を突き破って飛び出している。

『殺殺！殺殺殺殺殺、殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺！！』

『うつ…：ザザ…ん、や…：ジジツ…をてん…ガガガツクきを…：ザツザザザ…：す』

それを好機と見たのか、血塗れな銀髪の男はアナザーに追撃する。

しかし、アナザーは急激に黒く染まった血を固めて全身に纏い、更には自壊した箇所をその黒く染まった血で固めた事で破れた皮膚から流れる血を塞ぎ、断裂した筋肉と砕けた関節を補強して肉を喰い破った骨を強引に中へと戻した。

『殺！殺殺殺、殺！殺殺殺殺殺殺殺！！』

『とう……しジジジジジじょうほガガガガガッ……ふよ……ザザキギギギウ』

そして、そのまま硬化した黒い血を刺々しい鎧のような形状にして頭部を除く全身に纏い、血塗れな銀髪の男へと先程以上の速度で向かって行った。

(……………)

ふわふわとした不安定な感覚

はつきりとモノが視えない状況

ああ、これは夢だと……不安定な意識の中で想う。しかし、直ぐに記憶から抜け落ちる。

』、
』

(……)

目の前には、俺と誰かが居る。以前勧められた明るい部屋に居る。何処となく楽しそうな雰囲気であり、何処となく懐かしいと思う。

』

』、

しかし、俺はこんな知らない。目の前の誰かは誰だろう？どうでもいい。

』、

』、

更に誰かが増えた。分からない。小柄だ。

』、

』、

』、

』、

』、

』、

三人で抱き合い、何かを話すと、目の前の俺は玄関から出て行つた。そして、特に意味もなく、場面が切り替わつた。

燃える。燃える。瓦礫と死体と死人紛いの生者が溢れる。

恐らく、平和な田舎町だったのだろう瓦礫の山は、時折崩れ生きている人間を潰し、死体は其処等中に溢れている。

(……………)

目の前で駆け回る俺は、誰かを探しているのだろうか？理解できない。興味は低い。しかし視界は閉じない。離れる事も出来^{叶わ}ない。

『、——』

表情は見えないが、相当必死になつて何かを探していた目の前の俺は、半壊状態としか言いようがない。一件の家屋の前で立ち止まつた。

(……………)

そして、比較的損傷の少ないその家屋に覚えでもあつたのか、目の前の俺は希望^悪に満ち^かたよう^にな^もる^期待^待た^した^てような表情で半壊した家屋へと入つていった。理解不能

『—————』

『……………』

其処に在ったのは、案の定、全身を明らかに人為的に破壊された誰か達の姿だった。寧ろ、俺はこの結末を《《妥当だと》》断定する。

一体なにを期待していたのかは知らないが、人間の言う秩序だの理性だのと言う言葉は、結局の所は単なる幻影だ。何かあればそれだけで人間は獣としての側面を是として表にする。

はつきり言つて、家屋が半壊していた時点で希望など持つべきではなかったのだ。

俺は、目の前で嘆きの慟哭を挙げているらしき俺を観て、心の底からそう想う。

そして、失った果てに絶望の叫びを挙げる位ならば、極力離れずに共に居れば良かったのだと

『……!!』
そして、そんな目の前の俺を見張つてでもいたのか、周囲にはなにかを持ったボロボロの服を纏う人間達で溢れ返っていた。集団で袋叩きにするつもりなのだろうか？

『……!!』
何かを言いながら、周囲の人間達が近寄り、目の前の俺に刃物を振り下ろした時だった。

『?』、
『!?!?』
『!?!?』

そして、そのネズミやゴキブリ等を潰した血を元の持ち主の血管の中に無理矢理戻し、残骸を強引に血管へ挿れたのを確認すると同時に、血流を強引に進める事でその人間達は死に絶えた。恐らく、内側から血管をズタズタに引き裂かれて即死だろう。

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!』

そうして、目の前の俺は紅かった筈の髪が白くなり、そのまま狂ったように暴れ出したのだった。

「くすくす、残念だけどここでおしまい!アナタにはこんな結末の記録なんて必要ありません!おとなしくオレのモノアタシになってくださいね?ア・ナ・タ♪キャツ」

(……………イラッ)

それ以降の映像は、俺には流れて来なくなつた。

「……、わたしの『』を上げ」

!?!?

(……………)

そして、なにか異物が挿ってくる感覚が残ったままに、俺の意識は浮上した。

第四十四話

ルウイーの教会から出て数十分

ルウイーの女神候補生の方を救出する為に大急ぎで世界中の迷宮へ向けて全力疾走した私達は、目的地である世界中の迷宮から後数キロメートル程の地点で足留めを食っています。

ただ、一応断っておくなら、その足留めは決して犯罪組織から刺客が差し向けられたとか、そういう話ではなくって……………

『殺！殺殺殺、殺！殺殺殺殺殺殺殺！！』

『『とう……………しジジジジジじょうほガガガガクガガツ……………ふよ……………ザザキギギギギう』』

……………黒い甲冑を纏っているアナザーさんと全身がボロボロな銀髪の人の戦いが近場（5km先）で展開されている影響で、周辺の道が悉く崩壊していたんです。もつと言えば、地面には幾つも巨大なクレーターが出来上がり、周囲の山はインフレの進んだバトル漫画の如く上から半分ぐらいが消し飛ばされて、残された土台の部分が哀愁すら漂わせていました。

「……………あなざーさんって、こんなに危なかったんですか？」

「……………いえ、私の記憶が合っているなら、私が女神化して戦えば五分に戦えるので、拳のぶつけ合いで衝撃波が出るぐらい強くはなかった筈ですけど……………」

コンパさんは何故か上を見て、遠い目をしながら呟いていました。

けれど、そんな筈はありません。少なくとも、殴り合うだけで衝撃波が出るような拳のぶつけ合いが基本なら今の私では勝てませんし……………それに、そもそもアナザーさんの筋力は本来あそこまで強くありません。

戦ってる銀髪の人は知りませんが、何故かノイズが走って二重に声が聴こえるアナザーさんの筋力は本来なら私よりも低い筈ですし、その私だっただう頑張っても200mの鉄板を素手で破れる程度です。

幾ら私でも拳を振るった余波だけで山が吹き飛ぶ衝撃波は流石に……………今度、どうやったのかを聞いてみるべきでしょうか？

『え？』

「な、なんですか？ 皆さんいきなり私の方を見て……………ちゃんとあつちを見てないと、いざと言う時に命に係わりますよ？」

そんな時、何でかは知りませんが、ネプギアさん達は私を見て変な声を上げたのです。

正直、可笑しな事を言ったつもりはないのですが……なんなのでしょうか？

「……え、あの子、……見え……？」

「さ、さ……聞いて……」

「……ら、……が聞いて……」

「は……!?無……!」

「言い出し……、諦め……」

「……ああもう、分かった、分かったわよ!」

そうして少しの間、皆さんは円陣を組んで内緒話をしていたのですが……話しが纏まったのか、その中からユニさんが出て来て、私の前に立ちました。

「……あのさ、ハク」

「はい。なんでしよう?」

そして、言い難そうに言葉を詰まらせると、意を決したような表情をして、こう言い放ちました。

「……アンタ、アレが視えるの?アタシにはただ単純に空の上で血生臭い紅と蒼の塊と嫌な感じがする黒い塊が激突してるだけにしか見えなだけで……」

「………はい?」

うならば、全身を覆っている黒い血はとうとう頭部を覆うようになり、明らかにアナザー自身の肉体が保有している血液の総量を上回る量の血が溢れ出てその全身を覆っていると言う事だが……それ以外の部分では何処までも自然体であり、目の前で行われている膨大なエネルギーのチャージにさえ然程の関心を持っていないようであった。

……そう、まるで、あの球体に触れても己自身は何の問題も無いと言わんばかりに……………

『殺!!』

『母なガガガツアクセザザザツ、前方ノノノネスジジジジツクワーアアアアアアアアアうしジジジジツクネスギギギツ』

そうして一定の区切りでも出来たのか、黒い球体の膨張が止まると同時に銀髪の男は目の前で立ち止まっているアナザーに目掛けて、桁外れのサイズにまで膨れ上がった黒い球体を投げ付けた。

それに対して、アナザーは右手を黒い球体に向けて突き出し――

【……………^{ゲート}門解放…強制連行……………開始】

――何処からともなく現れた光り輝く円環に吸い込まれ、桁外れのサイズにまで

膨れ上がったいた黒い球体諸共に何処へと消え去ってしまった。

そして……………

「え？」

「な、なんでアタシ達まで……………!？」

「吸い上げられてるですー!?!わたしはごみじゃないですよー!？」

「あつはははは! RED、ちゃん空を飛ぶの巻きー!!」

「……………ああ、結局、こんなオチなんですな……………」

「……………(……………懐かしい。なんで、先程までの争いが、今、目の前に広がっている光が、感じた事も無い筈の、母の腕に抱かれたかのような懐かしさを感じているのでしょうか……………?)」

……………アナザー達の殴り合いによる巻き添えを受けなくて済んだギリギリの地点に居たネプギア達の頭上にも同じような円環が現れ、アナザーと銀髪の男と同じ様に吸い込んで行ったのだった。

『……………』

その後に残されたのは、アナザーと銀髪の男が暴れた結果、無数の生物が動植物問わずに死に絶えて荒れ果てた大地と崩れ去った山ばかりであった。

えーっと、アイエフさんもコンパさんも無事ですし、ユニちゃんも無事、REDさんも無事……と言うより、何故か炎の近くで踊ってますし、ハクさんは慌てて魔法をおうと……って、魔法陣から凄い勢いで光線が飛んでいって燃えてる誰かを吹っ飛ばしました!?なにやってるんですかあの人!?

「ちよつとハク?!」

「あう、間違えちゃいました!? えつとえつとえつとえつと……こうしてこうして……ああ?!」

「ちよ、危ない?! アタシを殺す気!」

「ぞ、ぞめんなさーい!!」

(うわー……)

更に、うっかりビームを放って慌てたハクさんは、幾つかの魔法陣を同時に展開して今も燃えてる誰かに照準を合わせてるんですけど、その殆どは明後日の方に飛んでいて、その内の一発はユニちゃんに目掛けて飛んでいっています。

しかも、出てるものの殆どは水じゃなくなって光や炎ばっかりだし……

「変ですね……私は確かに水の魔法を使ってるのに……」

「いや、もう良いから……後は私が……もう止めて、無駄よ……誰?!」

(……女の子?)

そこに在ったのは、矢鱈と寒気がする白い山と銀色の糸だった。

思わず条件反射で振り払おうとしたが、その直ぐ後に死滅した感覚でも分かるような強い力で頭を掴まれ、そのまま元の場所不快な場所に叩き付けられるようにして連れ戻されたのだった。

「と、とにかく！まだまだダメージは消えていないのですから安静にしてください

！」

「ガア?!?!?!」

そのまま、何故か頸を締め上げられた俺は、もう一度深い眠りに（強制的に）就かされるのだった。

第四十六話

何処となく懐かしい、白い光が満ちている草原のような場所

そこで私は今、燃えている誰かを莫大なシエアエナジーを物質化して創った鎖で拘束して引き摺っている女の子の案内で、何処かへと向かっています。

「……………つち……………」

「一体、何処に向かっているんでしょうか…?」

「さあ?その内分かるんじゃない?」

「コンパ、ユニの言う通りよ……………この女神候補生の件もあるんだから、こんな何処ともわからない場所で彷徨ってる場合じゃないわ」

「ええ、本当なら今直ぐにでも女神候補生の方を救助しに行くべきですけど……………その結果として迷子になって出られなくなったら救助しになんて行けませんからね」

実際、この場所に何処となく懐かしいと感じてはいますけど、私はこの場所を知りません。

下手に動くとそのまま遭難して脱出に時間がかかる可能性は非常に高い訳で……………そのぐらいなら、先住民(?)らしき女の子に道案内をお願いしていた方がマシと言うも

のです。

『……………』

それから、暫くの間歩き続けた後です。

「おかえり！（びよいーんびよいーん）」

「……………ん、帰った」

なんとそこには、双子のようにそっくりな茶髪の女の子達が何故かあるベッドの上で跳び跳ねていたのです。まるでカンガルーのように

「ねえねえ！そのブーツ！って燃えてるのなに!？」

「なあに？（はてな）」

「……………これ、人……………?」

「ちよ…!？」

可愛らしく小首を傾げながら聞いて来る双子の女の子に対して、黒い髪の女の子は、燃えている誰かを指し示して、端的にそう説明してしまいました。

大分ショッキングな光景ではあるので、出来ればなるべく誤魔化してお茶を濁したかったのですが……………大丈夫でしょうか？

「ええ!?!ちよつと！それ大丈夫なのかな!?!ロムちゃん!」

「うん、大丈夫？（はらはら）」

「……問題、ない……」

(………大丈夫そうですね。意外と)

大丈夫そうですね。色んな意味で

トラウマにならないか心配していたんですけど、安心しました。

(……髪が長い方の女の子が短い方の女の子へ向けてロムちゃんと言っていましたけど

……もしかして……?)

そう思った私は、髪の長い女の子へと声を掛けてみる事にしました。

「あの、ひよつとしてルウィーの女神候補生の……?」

「うん。わたし達がルウィーが誇る双子の女神。ラムちゃんロムちゃんとはわたし達の

ハトよー!」

「…… (ハハハハ)」

『……え／わー、かわいいなー!』

もしかしたらと思えば、案の定、教会で救助依頼を請けた女神候補生のロムさんラムさんのお二人でした。

……まあ、ドヤ顔で名乗りを挙げたお二人ですが、ネプギアさん達もここまで幼いとは思っても居なかったのか、凄く意外そうな顔をしています……かく言う私もここまで精神面が幼いとは思ってもみませんでしたけれど

「やっぱりそうですか……私達は教会からお二人の救助を依頼された者です………無事でよかったです」

「当然でしょう？だってわたし達、さいきよーだもの！」

そんな話しの最中でした。

「……んしよ、んしよ………」

私達をここまで案内してくれた女の子が何時の間にかボロボロのジャージ姿からピントクのスーツとメガネに着替えて、恐らくシエアエナジーで出来たのだろう黒板を引張って来たのは……

「あの、なにw「静粛に……」ア、ハイ」

「……集合………これから授業を始めます………」

ネプギアさんの声を跳ね除けて、そのまま私達の目の前にまで黒板を引張って来た女の子は、右手にチョークを持って、宣言通り説明を始めました。

「まず、質問……ある？」

「あ、じゃあ！……ここは一体何処なんですか？そして、貴女は一体誰なんでしょうか？」

「……まず……わたしはエルマ………ルウィーの………天使？「はい？天使ってなに」シャラップ「ア、ハイ」………天使兼、女神の従者………」

まず初めに、手を挙げたのはネプギアさんでした。

ネプギアさんが多分私達の殆どが知りたいたらう事を質問すると、女の子——エルマさんは、ちよつとよく分からない事を言い出しました。天使ってなんでしょうか？

しかし、そんな疑問も、この後の答えで一気に吹き飛ぶのでした。

「……………次、ここは……ルウィーのシエアの内部」

『……………はい？』

……………え？え？……………シエアって中に入れたんでしょうか？

「いや、シエアの中とか言われても……………」

「話がよくわからないです。もう少し分かりやすく説明して欲しいです」

「私も、アイエフさん達に同意です。もう少し詳しく説明していただけますか？」

「……………分かった」

私達の抗議に対して頷いてくれたエルマさんは、少し思考を整理するようにまた黙りだすと……………

「……………一定範囲内を特殊な結界で世界から隔離した後、この次元と何処かの次元の間に存在している緩衝地帯である次元の狭間に廃棄を前提にしてその隔離した空間を置き直して出入り口の管理者権限をゲームキャラとわたしのふたr『ストローツプ!!』……………今度は、なに？」

……………詳しい説明をしてきていたのですけれど……………アイエフさん達にストップ

をかけられてしまいました。

一体、なにがダメだったのでしょうか……？

「いや、細か過ぎるから……詳しい原理とかは本当にいいから……」

「あ、アタマがクラクラするですう……」

「すう……すう……」

「……………ああ／あゝ……………」

そこには、難しい説明だったのか、頭を抱えてフラフラしているコンパさんと眠ってしまったているRED・さんとロムさんラムさんが居ました。

「……………次元の外側を街に、次元を家に例えると、一軒家の中にあつた部屋を庭に移築したようなもの……………以上、他」

「な、なるほどです」

「……………」

（……………まあ、魔法を専門に研究しないなら聞いても仕方ないですよね……………多分）

固有能力の制御の為とは言え、魔法もそれなりに嗜んできた身としては悲しくもあり
ますけれど……………彼女とは後でじっくりとお話するとして

「では、膨大なシエアを消費して、何故このような大掛かりな事をしたのでしょうか？」

「あ、それアタシも気になってたのよね」

「私も……体感的なここのシエアエナジーの密度からして、ルウイーだけではこの結界の維持なら兎も角、発動までは賄えませんかよね？」

今は、この博麗大結界……基、特殊な異界を造り上げる程の結界が何故在るのか……その意義を問うとしましょう。

（本当なら、目の前で鎖に縛られ相変わらず燃え盛っている方の救助を優先すべきかもしれませんが、どう考えても手遅れですし……それに、私が救助しようとするのと寧ろトドメ差しちやいそうですし……）

「……………それは——次回に続く」

『ズゴーーーーー!?!?』

……………あ、次回に続くんですね……次回って何でしょうか？

第四十七話

「それは——」

『それは?』

エルマさんは数秒程沈黙した後、こう言いました。

「……………それは、とある『怪物』を封印する為よ」

そんなエルマさんは『怪物』の部分にだけ、まるで親の敵を語るような、或いは、どうしようもない程に不運な人を憐れむような……………とにかく、絞り出すような声からは凄まじく複雑な想いが滲んでいました。

「かいぶつさんですか……………? モンスターさんなら、お外にいっぱい居るですよ?」

それに対してコンパさんはゲームギョウ界で溢れ返っているモンスターの事かと思っただのか、私達が歩いて来た方向を指差してそう指摘しました。

「……………アレは、モンスターなんて茶稚で生易しい代物じゃないわ」

「アレは、今から約1000年前に現れたマジエコンヌが、この世界に解き放った死と絶望の権化」

「アレは数え切れない程の人間を溶かし」

「アレは、当時の女神の半数以上を手を掛けた」

「それだけの犠牲を払って、どうにかこの地へと封印出来たの」

コンパさんの問いに対して、エルマさんは表情を殆ど変えずに淡々とした口調で話しています……ですが、先程の『怪物』と言う言葉の所為か私にはその無機質さは何処か無理をしているようだとしか感じられないのでした。

「……………」

『……………(すう…すう…………)』

そうして暫くの間、気不味い沈黙が続いた時でした……

「……………あ、火が消えて……………」

先程まで燃え盛ってた焔が消え去り、その中身が露になったのです。

「……………えーっと、これも説明して貰っていいかしら？」

「……………元々、そのつもり」

なんと、燃えていたのは(半ば予想はしていましたが)先程まで凄まじい勢いで大暴れしていたアナザーさんなのでした。

確かに、彼ならあれだけ燃えててもしぶとく生き残りそうだとは思いましたけど……こう言ってはなんです、殆ど火傷さえしていないのには一周回ってその頑丈さにドン引き……でも言うべきでしょうか？

(…………あれ？でも、アナザーさんってそんなに頑丈じゃなかったような…………?)

「…………とは言っても、わたしも全部把握している訳じゃないし、全部言える訳じゃないわ」

「別に、それで良いわ。言える範囲がよっぽど少ない限りはね」

「…………ん、言えないことはあんまりない…………でも、その前に」

言えないことはあんまりないと言ったエルマさんは、そのまま私の方を向くと……

「…………これ、よろしく」

「え？…………ああ、はい」

そのまま、エルマさんの鎖に縛られていたアナザーさんを投げ渡してきたのでした。

(…………取り敢えず、鎖を外して…………)

「…………話せば長くなるけど…………何処から説明する…………ん、そう、その辺」

「じゃあ、早速、キリキリ吐いて貰うわよ？」

「…………ん、まず第一に、アレが燃えていたのは、この結界の効果の一部」

そう言うと、エルマさんは先程物質化した黒板へデカデカと結界の二文字を書き、その下へ番号を振っていききました。

「……………言うまでもなく、この結界の効果の1つは、あの怪物の封印にある」

そして、一番目には【怪物の封印】と書き込みます。

まあ、そもそも封印するのに封印の対象を出られるようにしては意味がありませんし、当たり前ですよね。

「……………まあ、当たり前の話だから、ここで一旦終わらせる。次に、この結界の内部では、様々な恩恵がある。一つはこれ」

【女神に属する存在の強化】

「すごいじゃない!?!」

「これなら、犯罪組織を倒してねぶねぶ達を助けるのなんてわけないです!」

コンパさんやアイエフさんは喜んでいますけど……………でも

「……………言っておくけど、この結界は維持するより張る方が難しいわ。専用の触媒が要るし、術者にも相当な負担を強いる禁術も使われてるから、術者も居なくなつて失伝してるだろうし」

「まあ、そんな事が出来るんならお姉ちゃんやグロウ辺りがとつくにやつてるでしょうしね」

案の定、この結界を張るのはまず不可能と言う事が明言されただけでした。

仮に必要な触媒及びに複雑怪奇な結界の式を調整可能な術者の確保が出来ても、これだけの大結界です。一体どのような代償がある事か……………考えたくもありません。

「……………尤も、これだけやつてもわたしに出来たのは足留めだけなのだけれど……………つ

と、それは良いわ。問題はこの効果よ」

【特定の存在の弱体化】

「……………まあ、あの怪物にしかこの結界はこの力を発揮しないのだけれど」

「……………あの、これでどうしてアナザーさんは燃えたんですか？」

「それは……………」

エルマさんは、ネプギアさんからの質問にどう答えるのかを考えあぐねているようですが、私は大体の予想が付きました。

「それは……………」その怪物の力か血でも吸収して内包していたから……………ですか？……………そうよ」

案の定、ですね。

あの戦いを見た限りでは、明らかにアナザーさんはアナザーさん自身の限界を大幅に超えた力を振るっていました。

これまで説法してきた限りだと、アナザーさん自身にも限界を超える力を発揮する方は持ち合わせているようですが……………もしも、あれだけの力を振るえるなら私に対して何の躊躇もなく使っている筈ですしね。

「あなたが言うように、これは何故かあの怪物の力を吸い上げて自分のものにしていた……………まあ、完全に馴染む前にこの結界に入ったから、殆どは消滅している筈だけれど」

「……………あ」

(……………ヤっちゃった☆)

ま、まあ……ダメージは相当大きいようだし、もう一度眠って貰いましょう。

「と、とにかく！まだまだダメージは消えていないのですから安静にしてください

！」

「ガア?!?!」

取り敢えず、私はアナザーさんの頸を軽くめてその意識を強制的に落とすのでした。

『……………』

「さ、さあ！他にもまだまだ聞きたい事がありますからね！説明を続けてください!!」

——この時、この光景を見ていた全員は、心を1つにしてこう思ったそうなの……

((((あ、誤魔化した)))

まあ、それは見ないフリをしてだ……………

「……………何故、お前がここにいる？いや、そもそもここはどこだ?！」

確か、俺は変なロボットに一文字斬りされた筈だが……………良く生きてたな。

「はい？もうかれこれ二日は前から一緒に居ますけど……………忘れましたか?！」

……………は?」

「いや待て、それはおかしい。俺の記憶では確か、二日前はプラネテューヌの森で昼寝をしていた筈だ……………お前に遭った覚えなど、微塵もない」

(一体、どうなってやがる……………)

何があったのかを考えていた俺だったが……………そんな俺に対して、ハクは更なる地雷を振り込んできた。

「そんなことを言われましても……………もしや、二人きりで過ごしたあの暑い一時もお忘れですか?！」

『え』

「……………は?！」

熱い一時?二人きり?なんだ?なんの冗談だそれは

真面目に身に覚えがないが、この女はそんなつまらん嘘は吐かない。非常に不快だし腑に落ちないが、熱い一時に相当するなにかが遭ったのは確かなのだろう。

そんな時、どうにかして何が遭ったのかを思い出そうと考え込んでいた俺の目に、近くに居たネプギアがハクに声をかける姿が目映った。

「えーつと……ハクさん？熱い一時って一体……」

（ネプギア！良いぞ！もつと聞け！あわよくばこのままこの話をうやむやにして誤魔化してしまえ！）

—なんか色々と思覚えないのも居る《そもそもアイエフ、コンパ、ネプギア、ユニ、ハク以外知らん》が、その辺はもうどうでもいい。

今はとにかく、この嫌な死亡フラグを消し去るのが最優先だ。

「ああ、その事ですか？それは、ルウイーの雪山での事でしてね——」

『……………』

「——と、言う訳です。前に教会で説明しましたよね？」

……………まあ、そんな事だろうと思つたよ。

（しかし、雪山か……うん、まるで身に覚えがないな！）

取り敢えず、必要な事を聞くしかないだろう。

「そうか……悪いが、俺の記憶はラストイションで犯罪組織の連中を庇う腐れロボットに斬り捨てたらr「は？アンタ、あの時の事を思い出したの!?!」……………はあ？なにがだよ？幾ら暴走しても殺されかけた相手位は覚えてるぞ？」

「いえ、思いつきり忘れてましたよ……」

「忘れてたですなあ……」

……訳が分からないよ。

「……まずは、お互いに情報を確認し合う事を優先しましょう？まず、私から——」

そうして、ハクからの説明を聞いた俺が思ったのは、1つだけだ。

(……ゲームギョウ界って、なんなんだろうな……？)

ここ二日間の事をアナザーさんへ説明し終えた私は、膝から起き上がって血に胡座を掻いて座っている仏頂面をしたアナザーさんを見ながら、思えばこの二日は色々遭ったなど思うのでした。

「………言いたい事は多々あるが、その辺はもう良い。次は俺が説明する番だな」

「はい……まあ、私達もそこまで分かつてる訳じゃないんですけどね？」

取り敢えず、エルマさんが言う所の怪物をどうにかしないとゲームギョウ界が不味い
とだけ認識していますけど……ゲームギョウ界って、普段は本当に平和なんですけどね
……………

「まず、暴走してた影響からか俺の記憶は曖昧だが……ざっくり言えば、なんかあからさ
まに正義側っぽい見た目のロボに叩き斬られた」

「……………見た目はって所が気になるけど、良いわ。他になにか覚えてないの?」

（は、犯罪組織なのに正義っぽい見た目のロボットですか……………なんて言うか、複雑で
すね）

ネプギアさんの目が輝いている気がしますけど、今はアナザーさんの話に集中し
「他か?なんか白っぽい混ぜ物が在った気がするが、良く覚えてねえな」……………えー
「ちよ……………それだけ?他にこう、なんか無いの?蛇と呼ばれてたーとか段ボールを被っ
てたとk「ない」最後まで聞きなさいよ!」

「そうは言うが、お前はアルコールで酔い潰れた後の記憶が有るのか?」

「アンタの暴走は酔っ払いと同じか!あと、私は潰れるまで飲んだりしないわよ!!」

「……………そうか?確か記憶が合っていれば、数年前のネプテューヌとの旅でネプ
テューヌの奇行に対してストレスでも溜まったのか、ラストেশヨンの町工場に併設
されていた食堂——確か、パッセ、だったか?そんな名称の飲食店で潰れていたような

「チツ……そうかいそうかい、アレを倒せて訊だよな？」

「……そう。本当はそこまで話す予定だったけど、亜空断層式隔離障壁が思ったより保たなかったみたいね」

——なんと、お外で暴走していたアナザーさんが殺し合っていた怪物さんが、右腕を無くした状態で立っていたのでした。

「それで？アレの弱点は『殺!!』ってあぶ、あぶなっ!？」

「……悪いけど、その辺は分からないの。取り敢えずこの結界の内部でなら、外よりは弱くなってる筈だから……」

『殺!』 あぶ!? 『殺!』 あほ 『殺!』 うか! 『殺殺!』 貴様!」

そして、矢鱈と重点的に狙われるアナザーさん。

なにかしたのでしょうか? これでもかと言わんばかりにアナザーさんだけが狙われています。

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺!!!!』

「だああああ!! 兎に角! 俺が囮になってるからお前らは最大出力で必殺技エグゼドライヴの用意でもし

とけ!!」

………まあ、それはさておき

アナザーさんが言うように、暫くはアナザーさんに囮になって貰って、私達は必殺技エグゼドライヴ

の準備をするとしましょう。

………あ、そう言えば私、そもそもエグゼドライブは持ってないんですた

!?

第四十九話

白の女神が治める国に在るからか、矢鱈と白い雪原が在ったこの結界の内部だったが、そこは今、あちこちに大穴が空いて土の色が剥き出しになり、何処となく不愉快な光景白塗りの陶器のような景色は一白い鍍金が剥がれて土色が溢れ返った穴だらけの見るも無残な景色《何故か悲しくなる光景》へと変わり果てていた。

『殺ッッッッ!!』

「ぬおおおおおおおお!!」

ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオン
!!!!!!

しかし、今はそれ処ではない。

両腕が使えないにも拘わらず、矢鱈と俺を狙ってくる敵は、大地を踏み締めて突進してくる度に大地を砕き、ロケットもかくやと言う勢いで俺に向かって突撃して来る。

それをどうにか避した俺だが、当然、そんな一撃をまともに受ければ命はない。恐らくだが、その破壊力はハクの拳を無防備に受けた方がマシに思える程だろう。

『殺!!殺殺殺!!』

「うげ……」

しかも性質の悪い事だが、アレは俺が触れたら命は無いだろう出力の——恐らくは、アレの固有能力だろう球体の闇を浮かべ、己の体積を嵩増ししながら同時にその危険度を高めている。

「チツ……なんだってんですかかってんだ……なんでこんな危険物に狙われてんですかー俺は……この数日何が遭ったよ」

突撃してくる闇と敵をどうにか回避して先程まであの闇が当たっていた大地を見た俺は、あの闇の在った場所から一直線にくり抜かれて消滅している大地の溝に、アレの危険度の見立てを急速に高めていた。

「たく………あがつ!」

「………そうか、お前はあの■■■を選ぶか………」

極め付けはこれだ。

とでも悲しくなるネプテューヌを彷彿とさせる誰かわからないが、赤紫色の髪をした女が悲しそうな、そして、全てを諦めたような表情をしながら左の視界を覆って、なにかよく分からない事を宣っている。

言葉にすればそれだけだが、それだけの映像と音が、脳への過剰な負担にでもなっているのか、左側頭部が割れそうな勢いで激しく痛み、心臓は今にも破裂しそうな勢いで、激しく脈打っていた。

(なんだこいつは……誰だ?なにが言いたい?)

【アナザー…ならばお前は、○○○このゲームギョウ界○○○○】

だが、どんな理由があつても戦いの最中にそんな動作頭を抑えてをして良い訳もなく――

『殺!!!』

「ガフツ――?!?!?!」

――突撃して来た敵に正面から衝突して、俺は血を撒き散らしながら彼方へと吹き飛ばされたのだった。

『殺ツツツツ!!!』

「ぬおおおおおおおおお!!」

ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!

アナザーさんを囷にしてエグゼドライブ一斉掃射を入れようと言う方針になったこの戦いですが、轟音が響き渡る中で皆さんが限界まで力を高めている最中、私は一人、内心頭を抱えながら女神化だけはせずに力を高めていました。

「一斉に行くわよ！」

『はい／ええ／うん！』

(……どうしましょう？私、エグゼドライブは持っていないのですが………今更そんな事を言つて空気をぶち壊しにする訳にもいきませんし……)

ああ、本当にどうしましょうか？ネプギアさんもユニさんも、ロムちゃんラムちゃんも女神化して力を溜めてますし……かと言つて、私が女神化して力を溜めても自爆にかなりませんし………

(そもそも、必殺技なんて無くても問題が無かつたのが不味かつたのでしようか………大抵のモンスターさんは殴つただけで消えちゃいますし)

今も力だけは溜めてますけど、女神化しなくても私があんまり力を溜めてると爆発しちゃうから危ないんですよね……見てもらった科学者さん曰く水蒸気爆発がどうか言つてましたし………

そうやって、轟音の中で色々と考え込んでいた最中でした。

『殺!!』

「ガフツ——?!?!?!?!」

アナザーさんのお腹に怪物さんが激突して、口から血や内臓の一部らしきものを撒き散らしながら、アナザーさんが遙か彼方へ吹き飛んで行ったのは………

更に、その上から巨大な隕石を模した赤い力の塊が叩き落とされたのですが、不意討ちで叩き付けたハートと違い、素早く大地へと配置しされた黒い塊が上方向へ腕のように変形し、隕石を模した赤い力の塊を押し止めてしまいました。

「カチンコチンに凍っちゃえ！／本気の攻撃……!!」

そうして、ラムさんロムさんの掛け声で上から来る力の塊に黒い塊で形成した大きな腕で抵抗している怪物さんの周りの空気が凍り付き、腕のような形状になっている黒い塊以外を固めてしまうと同時に、上空から赤い力の塊を無視して小さな青い光が8つ、腕を無くしているからかぎこちない動きをしています。氷塊の中で固められながらも下半身の力だけで己を閉じ込めている氷塊を強引に砕きながらこちらへと向かって来る怪物さんの周りを囲むのでした。

「ノーザンクロス！」

そして、凍り付いた怪物さんの周りを囲んでいた8つの青い光が二組の十字の形状となり、一方が半ば凍り付いている黒い巨腕を砕き、もう一方が氷を砕きながら怪物さんを打ちのめすのでした。

「目標確認!!／これが私の全力全開!!」

けれど、そこまでしてもなお生き残り、氷を砕く青い光の十字を肩から黒い塊を形成して生やした8本の偽腕を用いて、十字を発生させている四隅の光点を握り潰す事で無

「……………え？」

わ、e…壊すr……

『殺ッッッッ!!!』

「ぬおおおおおおおおお!!」

ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!

G A I 唐存財、カイ非……をS A I 介S U ……!!!!!!

『殺!!殺殺殺!!』

「うげ……」

今乃 s i k i ■ の籠 W O 海 H O …… W A R E わ W R e …… s a t u、、、石よ R
I のが ……

「チッ……なんだってんですか……なんだって……なんでこんな危険物に狙われてんですか」

『やあああああああああああああ!!!』

意識だけは完全に目覚めた我が始めに聞いたのは、懐かしい声達の合唱であった。

「行くです!!／墜ちなさい!!」

そこから不意打ち気味に上から降って来るハートの直撃を受けた私の左腕は、根元から千切れ飛んで何処かへと消えて逝った。

『殺ー!』

それによって完全に両腕を亡くした私は我を押し潰す巨大なハートに対して、残った両足を背中側の側へと叩き込む事で強引に霧散させた。

「追加よ!耐えられるかしら?!」

そして、我を押し潰す巨大なハートが霧散すると同時に、上空から巨大な隕石のようなものが降り注いで来たが、それは我を生かす忌々しきこの加護が勝手に造り上げた腕が下から支える事で訳なく受け止めてしまうのであった。

(ああ、忌々しきあの気狂イメ……なぜ、素直に我を吾をワレヲ)

「カチンコチンに凍っちゃえ!／本気の攻撃……!!」

あの忌々しき氣狂いへの憎悪に燃える私の祈りを、嘗て滅殺してしまった——否、滅殺した守護女神が聞き入れてくれたのか、私の周囲をそれなりに強力な氷の魔法が覆い、空気諸共固める事で、両足の動きを完全に停止させてしまうのであった。

「ノーザンクロス！」

そこから更に、凍らない範囲をうろついていた蒼い光が8つ、それぞれ4つずつが我と私の腕の代替の上部分に集まると、その光は氷塊ごと凍て付き強度を損なっている私の腕の代替を砕き、我自身をも打ちのめすのだった。

(だが、この程度デハA足り又……我を我が我に我へ更にもっと強烈な)

しかし、これでは決定打足り得ない。

事実、我を流れる黒い力は、根元から砕けそうな脚を皮だけ強引に再生させ、完全に砕けた骨や千切れて失った筋肉の代用を務める事で我から支配権を完全に奪い去り、肩から無くした腕の代わりだと言わんばかりの8本の腕で蒼い光を全て握り潰しながら、凍り付いた周囲の空気を砕き、上から落ちる隕石から逃れようと懐かしい声の主達の元へと強引に突き進んで行く。

「目標確認!!／これが私の全力全開!!」

そうして、嘗て我が我となる少し前に滅殺した女神にそっくりな少女とその親友に良く似ている少女は、彼女達に良く似ている武器のエネルギーを限界まで充填したのだろ

第五十話

見上げた空は赤く、大地も荒れ果てたギョウカイ墓場

あの化け物の魔の手を搔い潜ってどうにか帰還したわたしくは、犯罪組織マジエコン又の幹部クラスに支給されている部屋の中で、ベットに寝転び、枕に顔を埋めながら喜びの笑みを浮かべるのでした。

「……………ふふっ」

(ああ、本当に嬉しいです)

わたしは、今回の一件で犯罪神から勇者様を切り離す計画が大詰めになった事を、木彫り勇者様(色付き)を抱き締め、本物に限界まで近付けたその匂いを嗅ぎながら、喜び、狂喜し、悦びました。

あの子の事は知りません。ですが、あの化け物がどうなるかなど、聴くまでもありません。

あの時、確かに感じた悪寒からするとあの化け物は、勇者様に出会って直ぐ、まだ眼も鼻も耳も、肌以外の全てが揃わず、あのクズ共に捕らわれる以前の記憶まで無くしていて心も身体ものっぺらぼうのようだったわたくしに接触してきたナニかの一部――

そうではなくても、限りなく近いナニかでしょう。

「そう言う意味合いでは、今は亡きイヴ^{チンピラ}エルトさんから似たような感じがありました
が……まあ、気にするような事ではないわ」

そう、そんな事はどうでも良いの。

わたくしが真に気にするべきなのは勇者様の事だけで、それ以外は全てが無価値！

勇者様が同志としてのわたくしを求めらるならばそのように振る舞いましょう。

勇者様がただの小娘としてのわたくしを求めらるなら、何処までも溺れて爛れたいと思えるだけの快樂を、わたくしの生命を削つてでも捧げましょう。

勇者様がわたくしの命が欲しいと願うなら、それこそ、全ての計画を捨てて、この終わりが近い命の全てを捧げて果てましょう。

それこそが、わたくしの愛であり、全てを与えられたわたしの願いなのだから

……

「はあ……勇者様あ……」

けれど、そんな想いを懐くわたくしも——いいえ、なまじ何も無かつたわたしだからこそ、勇者様人形を抱き締めるこの両腕も、肌も、胸も、眼も、鼻と耳の一部器官もわたしく生来のものではない事に一抹の悲しみを覚えるのです。

「……ふふつ……けど、良いわ。わたしくの身体は、全て、総て、なにもかも、勇者様へ

と捧げて、わたしは達は一つになるのですから……」

しかし、最早、この身体が生来のものである必要など、何処にもありません。

この身体は、勇者様に貰った二番目の贈り物教であり、正しき使徒濟として、永遠に付き従う為の手段を示した唯一無二の手段なのですから……

「あの化け物は、恐らく、今度こそ女神の手で討たれるでしょう。アレはそう言うモノであり、同じ力の恩恵を獲てしまった物の在り方なのですから……」

そう、あちらの主な戦力が未熟な女神達とは言えど、過去の女神の遺産と、如何に本質から歪んでいても、アレを滅ぼす側の使徒に加えて、アレの大本の中でも最大の端末まで居るのだから、あの化け物は勝てません。

だから——

「オチロ、オチロ、オチロ、オチロ——メイドノセカイへオチテコイ。エイエンノネガイハ、オチタハテニカナウダロウ」

「……わたしは、お前に付き従うつもりなどありません——そう、絶対に」

——わたしはどうなっても、どれ程嫌われても、完全に磨り潰されても、お前に取り込まれて堪るものですか……そう、わたしの異能だけを目当てにしているお前等に——

「——だって、後は勇者様を生き残らせるだけなのですから——」

そんな中、何故か入って来た下っ端が開口一番に暴言を放って来たが……まあ、知った事ではない。

「だーかーらー、アタイはマジk『操魔のグリモアに命ず。飛ばせ』ってふおおおおお
おおおお?!?!」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

「……………さて、研究を再開するでしょう」

一応、この部屋には様々な精密機器に加え、重要なデータを保存したコンピューターが有る。

それを破壊されては敵わない。懐に何時も仕舞ってある操魔のグリモアを触媒に、事前に保存していた風の中位魔法を下っ端に叩き込んだ私は、改めて目の前に放置してある組み掛けの機械を完成に近付けるべく、スパナやドライバーを振るうのだった。

「……………しかし、これだけは本当に予想外だった」

この世界へ転生して一番に驚いたのは、一定以上の魔法の研究には機械が必須であり、ホムンクルスの製造には非常に高価な機材が必須であった事だった。

転生前に見たこの世界の概要では、ルウィーは魔法大国で機械文化は疎いとあったが……まさか、禁術クラスの魔法を研究するのに機械技術が求められるとは思わなかった。

勿論、ホムンクルスの製造にはある程度覚悟していた。

一応、元の世界で言うクローン技術のようなものだ。それを母体無しで行う以上は、一定規模の施設なり機材なりが必須だろうとは思っていたが……かなりの額の金が必要だった。具体的には、一般人十人の生涯年収分

挙句の果てに、禁術クラスの魔法は危険過ぎて使う前にはシユミレーターが必須であり、シユミレーターの内部で感覚をデータ上の義体に移さなければ代償で死ぬ可能性さえある始末だ。

「……まあ、幸いにも、代償は魔力で代用出来たが……匙加減を間違えると死ぬな。アレは」

実際、アレは酷い。

確かに威力は申し分なかったが、必要とされている魔力しか籠めなかったら代償に心

臓を持って行かれた。シユミレーターで形成されていた義体でなければそのままあの世逝きは確定だろう。

「しかも、あの後代償を魔力で代替したらあの禁術の1発で総魔力の半分は持って行かれたぞ……軽く見ても上級魔法30発分だな」

全く、何なのだろうな？この禁術と言われる魔法は

明らかに人間が使用する事は考慮されていない。

それ故に術者に求められ、消費される莫大な魔力を補おうとして山を消し飛ばす程度
と言う最低ラインの水準でしかない禁術一発で心臓を持って行かれてしまう。

時間や空間を破壊する威力
それ以上の威力を求めるなら、半身や魂を喰い潰される。

確かに、その効力は補助や回復の系統であつても凄まじいものだが、ランクが上がつて威力を上げる程にその分だけ代償も大きくなつていく。

私を知る限りでは、禁術を連発出来るような存在など、それこそゲームギョウ界の旧き神話に語られるような――

「……ふん、くだらんな。私とした事が、耄碌したか？」

考え過ぎであるな。

そんな事など、ある筈もあるまい。

「それこそ、禁術が連発出来る一番現実的な存在は、先日復活させた、犯罪組織四天王の先代位のものだろうよ」

そうだ。

あんな化け物を超える神の存在など、ある筈もない。

あの歴史好きな老人に聴いたゲームギョウ界創成期を記した神話にある始まりの双神とやらは、存在しない単なる創作だろう。

「さて、私はさつさとホームクルスを造り出して、禁術の威力を削がずに代償を削る研究

でも続けるとしよう」

まあ、そんな事はどうでもいい。

今私が願うのは、一刻も早くホムンクルス^{人形}ハーレムを形成し、それらを助手にして趣味の禁術研究を完成させる事だけなのだからな。

「……む」

そんな時だったが、懐かしき故郷の風景を観た影響からか、私は普段なら気にもしないような事を思い出していた。

私の肉親は犯罪組織に入る前に殆ど始末したが、思えば一人だけ、何年も前から教会の職員として働いていた関係上、殺せずに放置しておいた物が居たのだ。

「……………そう言えば、姉貴はどうしているのだろうか？もしも生きているなら——」
——その美貌の如何に依つては、最高のホムンクルスの為の素材として活用してやるのも一興だ。

第五十一話

怪物さんを倒してから、エルマさんの手引きでゲームキャラさんの前へ転移して貰った私達は、そのままゲームキャラさんの力を借りてルウイーの街にまで帰って来ました。

「いえーい♪ミナちゃんの所にまで競争しよう！ロムちゃん♪」

「うん……ごーごー♪（びゅん）」

ルウイーの街の城門を潜ったロムちゃんとラムちゃんは、仲良く走りながら、教会の方へと走って行きました。

「元氣ね……わたしは護衛があるから……じゃ」

「ええ、任せるわ……私達は、もう少しゆっくり教会に行くから、教祖に連絡よろしくね

……」

「……ん」

そんなロムちゃんラムちゃんを追って、エルマさんも走って行きます。

「さ、アナザーさん？これから治療の時間ですよ？」

「嫌だああああああああ!! 離せ！今すぐ離せ!?!」

そうそう、怪物さんに吹き飛ばされたアナザーさんですけど、ゲームキャラさんの前へ転移した時に、近くに転移していたんです。

ものすごい力を叩き付けられたのか、先程までは瀕死の重体でしたが……それでも、治療しようとしていたコンパさんを押し退けたハクさんが背負いながら回復魔法を掛け続ける事で、今はあの通り、元気一杯です。

「もう！ 暴れないでください！」

「お前に看病される位なら、俺はそのまま死んだ方がマシだ!!」

「ふふふ♪ダメです♪アナザーさんは暫くの間、私が確り治療して看病もすると決めたのですから……」

「H A ★ N A ★ S S E」

楽しそうなハクさんとは対照的に、とても嫌そうな顔をしながら必死に暴れているアナザーさんですけど……ハクさんは、そんなアナザーさんに対してとても良い笑顔を向けながら、暴れてはズレるアナザーさんを背負い直して確保し続けています。

「では皆さん、申し訳ありませんが、私はアナザーさんを治療して看病しなければなりません。教祖のミナさんにはよろしくお伝えください」

「ええ、そうね……アナザーがやらかしたことも、改めて謝っておくわ」

「ありがとうございます……さ、行きますよ？ アナザーさん」

「ぬおおおおおお!!何故この程度で上手く動かん!俺の身体ああああああああああ!!!」

ただ、アナザーさんは余程ハクさんとは一緒に居たくないのか、重傷から回復したとは言ってもまだまだ完治には程遠い状態の身体の傷口が開いて血が吹き出てるのもお構いなしに大声を上げながら暴れ続けています。

(ただ、そろそろ暴れるのもその辺にした方が……………)

私はそう思ったのですが、声に出すのが少し遅かったみたいで……

「もう…近所迷惑ですよ?少し大人しくしててください」

ドスツ

『……………』

「では皆さん、また後で」

……………案の定、アナザーさんのお腹にきつい一撃愛の鉄拳が叩き込まれ、色々と傷口が開いて出血が酷くなってるアナザーさんは、ぐったりとしたまま動かなくなつてハクさんに連れて行かれてしまいました。

「……………さ、私達も教会に行きましよう?」

「そうね…………」

…………まあ、大丈夫ですよ。ハクさんとアナザーさんですし

ルウイーの教会にある執務室

つい数時間前にアナザーがすぐくやらかしちやったからちよつと入り難かったんだ
けど……

「事の顛末はエルマ様から一通り聞かせていただきました。皆さん、本当にありがとうございます
ございました」

「将来の嫁の為だもん、当然だよ」

RED・はちよつとおかしな事を言ってるけど、そこはスルーして……執務室のソ
ファーに腰掛けた私達は、目の前で立ち上がった教祖から言われたお礼の言葉に、私達
としては顔を逸らすしかない訳で……

「気にしないでください。こうして無事に、ゲームキャラさんから力を借りる事が出来
ましたから……アナザーさんの件もありますし」

「そうそう、うちのアナザーがやらかしたお詫びみたいなものよ」

……………本当に、アナザーのやつは…その辺危険性を把握した上で陣営に引き込んでるプラネテューヌや私達も大概だけど、もう少し自重できないのかしら？

「そう言っていたらと…もうこの国からは出るのですか？」

「はい。色々とご迷惑をおかけしました」

まあ、全ての国の女神候補生と強者の力は借りられなかったけど、全てのゲームキャラから力は借りたし、残るはギョウカイ墓場からネプ子や女神達を救出するだけ……………思えば色々、長かったわね。

「いえ、こちらこそ、なにも協力できずにすみませんでした…どうか、ブラン様をよろしくお願いします」

「ええ！任せておきなさい！アタシがお姉ちゃんについて位に華麗に助けて来るから！」

「じゃあ、私達はこれからプラネテューヌで女神救出作戦の準備をしなくちゃいけないからこの辺で」

とまあ、こんな感じにユニが意気込んだ所で、この教会から出てアナザー達と合流したらプラネテューヌに帰って最終調整に入ろうとしたその時よ。

「はいはい！待った待ったー！！」

「待つて……（あせあせ）」

「何ですか？ロム、ラム……今日はもう寝ると言っていたじゃない」

急に入つて来た……何てこの女神候補生相手に言うのも変だけど、まあそれは良いわ。

いきなり話に入つて来たここに残ると言う方針で教祖が押し通した双子の女神候補生が、大きな声を上げて執務室に入つて来たのだった。

「……二人から、話しがある」

その後ろには、怪物（仮）を倒す為に一緒に戦った（？）エルマの姿も……一体、どうしたと言うのよ？

そんな事を思っていると――

「今日からわたし達も、お姉ちゃんを助ける旅に付いて行くわ！」

「……！（くくくく）」

「………と、言う訳だから……この国の女神候補生をよろしくお願いします」

——具体的な理由が、双子の女神から語られたのだった。

「………え」

………一人だけ、話しがよく分かってないって顔をしている教祖をおいてけぼりにして

時間を少し廻り、ネプギア達が教会へ辿り着いて教祖に会う少し前

ルウィー教会の3階に在る女神候補生達の自室

「……と、言う訳で、女神救^後出^事作戦は貴女達に任せるわ」

そこは今、ベットに並んで腰掛ける双子の女神候補生達に椅子に座ったエルマが向き合い、なにやら話しをしていた。

「ねえ、エルちゃんは どうして、一緒にお姉ちゃんを助けてくれないの?」

「教えて? (はてな)」

ラムとロムがそう問い質すと、エルマはアナザーと同レベルで表情が薄い顔を若干強張らせると、普段通りの感情を極力排した淡々とした口調で説明を始める……

「……行けるならそうしているわ。ただ、それが出来ないだけよ」

「えー! 一緒に行こうよ!」

「エルちゃん、わたし達と一緒……イヤ? (うるうる)」

……始めるのだが、ロムとラムはその見た目通りの幼さ故か、話を終える前にエルマに抱き付いて駄々を捏ねる。

これが姉のブランならば、見た目は幼くとも、長い稼働時間数百年の人生が在り精神が多少は成長してるが故にこうはならなかっただろうが……この辺は、生まれてそう時が経っていない二人に求めるのは酷だったろうか？

そんな事を無表情の裏で思いながら、エルマは抱き付く二人を抱き返し、話の続きを再開する。

「二人の事が嫌いになったんじゃないわ……ただ、わたしはこの国を出られない……それがわたしの在り方で、わたしの選択の果て——」

そう言いながら、エルマはロムとラムの顔を見て、無表情な顔を若干緩ませ、微笑みを浮かべながら

「だから、わたしの代わりにブラン様をお願いできないかしら？」

そう締め括った。

「……………？／（はてな）」

ロムとラムは、良く分かかっていなそうな表情で困惑していたが、暫くして普段と同じような表情に戻ると……………

「うん！わかった！／……………（くくくく）」

「……ありがとう、二人とも……」

「じゃあ、ミナちゃんにお話ししに行かなきゃ！」

「……お姉ちゃん、助ける……（ふぁいと）」

……笑顔を浮かべ、そのまま一階へと走って行った。

「………はあ」

それを後から追っているエルマは、小さく溜め息を吐いて、1人廊下の真ん中で何かの不満を堪えるようにぼやき出す。

「……祖よ……何故、女神とは言えあの様な幼子へこの様な試練を課されるのですか……」

「何故……わたしでは不足であるとしても言うのですか……」

「………はあ……憂鬱だわ……」

そうして、一通りぼやいたエルマは、不服そうな顔を何時のものも無表情へ直すと、ロムとラムの後を追って駆け出した。

第四章く女神救出のワルツく

第五十二話

「む……なにやら重要な場面を逃した気がする」

「なにを言っているのですか？ 傷に響くので、ちゃんと寝てください」

ルウィーの街にある宿屋の一部屋

そこでは今、この宿の主人に了承を取り付けたハクによって運び込まれ布団に寝かされた俺と、その隣でネプテューヌ^{女神}なら『おとつつあん、大丈夫かい？』とか言った後、無視した俺に『ちよつとー！ ノリが悪いよー!』とかなんとか言いそうな場所をハクが陣取っていた。

「却下だ……って、止めろ触れるな縛ろうとするな!？」

「えー……ですが、寝てくれないと傷が治りませんし……」

「貴様に触れられている方が悪化するだろうが！ 良いから！ 頼むから俺の事は放っておけ!!」

今一動きが悪い身体を鎖で縛ろうとするハクを見て思わず全力で叫んだが、相変わらず^{きよんとした表情で}無邪気を装って首を傾げるこのアマは、それを無視して俺の身体の動きが悪いのを良

に入れた。女神候補生は一國分欠けているが、見た目はガキでも生存年数はそれなりに長いブランまな板と違い、生存年数の短い真正正銘のガキだ。生存年数が誤差でも肉体に引き摺られてマシになってはいるネプギアやユニと違い、居ても居なくてもどうせ大して影響はないだろう。

各国の英雄級の実力者はラストイションからしか力を借りられなかったが、元々人間の強者は絶対数が少なく、最低限必要英な戦闘力維の持ち主にもなると国に一人居るかどうかだ。

確か、何時か血でも啜つてやろうと考えて嘗て覚えた限りだと、『プラネテューヌ』は俺を除けば古代吸血鬼エルダーヴァンパイアとの半吸血鬼ダンピールが一体に上位吸血鬼グレートヴァンパイアとの半吸血鬼ダンピールが数体——しかし、こいつらはネプテューヌ女の言う事……厳密には、パールハートの命令にしか従わず、他の誰の命令も受け付けないが為に説得するのは、例えば俺やハクが力尽くで叩きのめしても不可能だ。奴等はパールハート以外に従えられる位なら、己の手で命を絶つだろう。

因みに、パールシスターネプの言う事は歴代パールハートの首都防衛令に反しない程度までは聞くが、ネプギアがパールハートを継承しなければ主力をギョウカイ墓場に着いて来させるような命令には従わないだろう。

第一、連中にそこまで言うことを聞かせられるならイストワールが疾うに駆り出して

いる。なお、非常に残念だが『人間』の英雄級は居ない。

『ラストイション』は言うまでもなく、あの^ッ変態^ロだ。こいつは割愛しても良いだろう。

『ルウィー』は確か……『蒼魔』とか言う二つ名を得ていた魔法使いの冒険者だったか？
まあ、詳しくは知らんが、確かそいつの身内にルウィー^西教会^沢の現^ミ教祖^ナが居ただけ記憶している。しかし、こいつはそもそもかなり早い段階で犯罪組織に寝返っている裏切り者だ。言うまでもなく敵だから論外

『リーンボックス』にはそもそも英雄級の実力者は居ない。それに関しては大体ハクが悪い。

ハクが強いモンスターを片っ端から駆り出した影響で、リーンボックスの冒険者は非常に質が悪い。詳細は割愛するが、居ない方が楽だ。

総合的に考えるなら、最高とは言い難くてもそこそこの戦力にはなる筈だが……ダメだな。

犯罪組織にあの^俺を^叩き^斬った^敵が居る限り、最低でも四天王の半分は各個撃破で削ら

なければ勝機はないに等しい。もしくは取っ捕まってるネプテューヌ^{駄女神}達を全員取り返してそのまま数の暴力に持ち込んでも可

だがしかし、ネプテューヌ^{駄女神}達は居ない。都合良く四天王が単騎で襲い掛かる事も無かった。

この状況で、四天王と正義風ロボットが全員で襲い掛かってきたら……全滅は免れない……か

(……まあ、無いものは仕方がない。本当はやりたくなかったが……)

「?..どうかしましたか?」

口元に右手を当てて、頭が足りない癖に如何にも考えてますとでも言いたげなポーズを決めているハクの喉を見ながら、俺は本当にこんな事はしたくなかったが、死なない為に仕方なく、ハクに『ある要求』を突き付ける事にした。

「端的に言う。吸わせろ」

「ツツツツツツツツ」

ドゴン!!

?!?!?!

………が、何故か急に顔を紅く染め上げたハクによって顔面に強烈なアイアンクローを掛けられ、軽く持ち上げられたらそのまま問答無用で畳に目掛けて後頭部を叩き付けられてしまっていた。

「な……が、Aるい………ガクツ」

「~~~~~ツ?!?」

そして、俺の意識は深くに沈んで逝った。

「な……が、Aるい………ガクツ」

「~~~~~ツ?!?」

（な、ななななにを言うんですかこの人は?!）

いきなり人の胸を見たと思えば、吸わせろって……アレですか？絶妙にズレてるのに直球な告白かなにかですか!?

（そう言うのはちゃんと時間を掛けて一緒に過ごして絆を育んで……って、いえ、えつとえつとえつとえつと………?!?!）

ああ、どうしましょう?こ、この場合私は一体どうしたら………?!?!

そんな時でした。

後から振り返ってみると、非常にあり得ない話ではあるのですが、どうしようもなく混乱していた当時の私が見て天井の染みを数えていると――

『ハク?』

「え? 姉さん?!」

――なんと、あまりの混乱っぷりから犯罪組織に捕まっている筈の姉さんの声が聞こえてきたのでした。

『事情は分かっていますわ……なので、貴女へ唯一の答えをあげましょう』

「答え……」

『こう言う時は、いつそのことアナザーの顔を胸に押し付けて、一緒のお布団で寝てしまいなさいな』

ええ、ええ……後から振り返ると、絶対に姉さんの声が聞こえる筈がないと断言できますが、当時の私は非常に混乱していた訳で……

「え……そうすれば、良いのですか?」

『ええ、きつと上手くいく筈ですわ』

……幻聴で聞こえた姉さんの声に従って、アナザーさんの顔を胸に押し付けながら、同じ布団で眠るのでした。

——アイエフさんが迎えに来るまでずっと

ルウイーからプラネテューヌへ帰る為、教会の玄関先でコンパやネプギアと別れてア
ナザー達と合流をしようと、血塗れな黒い服の人を背負ったシスター風の女性の目撃情
報を訪ね回って西側の隅に在る宿屋に着いた私だったけど……………

「……………」

……………その宿屋の一室に居たのは、布団の中で女の胸に顔を埋めて
白眼を剥きながら痙攣する男と、そんな男を胸に抱きながら同じ布団で添い寝してると
言う、状況を分かかってんのかこいつらと言いたくなるような、独り身には限りなく辛
い雰囲気を形成しているバカ二人だった。

「……………ねえ、アンタ達、バカなの？バカップルか何かなの？」

「違う!!／＼違います!!」

顔を紅くしてゐると蒼くしてゐるのに対して投げ遣りに關係を問えば、返つてきたのは同時に即答での否定……………ハア

「あーはいはい。仲が良いのは分かつたから、そう言うのは時間がある時にでもゆっくりやつてちょうだい」

(全く……………この大事な時にナニやつてんのよコイツ等)

顔色は違うのに二人揃つて違ふのだのそんな關係ではないのだのと言う抗議を無視しながら、私はネプギア達を先に向かわせたプラネテューヌ行き列車が出る駅にまで向かつて行くのだった。

第五十三話

「うっぷ……酷い目に遭った……………」

ルウィーからなんとか生きてプラネテューヌにまで辿り着いた俺は、何が目的なのかは知らんし知りたくもないが、近くに居座つて俺に構い続けるハクの意識を不意討ち^{猫騙し}で逸らし、その隙にプラネテューヌの駅から脱走を果たした。

そして、バーチャフォレストの最深部で息を潜めながら体力の回復を図る為にモンスタから血を搾り取っているのだ。

「チツ……ああ、クソ、不味い……だが、この際選んでいられる程の余裕もない……腹立たしい……」

本音を言うなら、俺とてこんな雑魚の血は飲みたくない。最低でもこここの^{フエンリスツォル}下位危険種辺りの血が欲しかったのだが、何故かハクが近くに居るだけで、生命力の消耗が激しく、殆ど死ぬ手前のようなレベルにまで追い込まれている以上、選り好みは出来ない。

こんな状態で下手な危険種を襲おうものなら、不意に受けた一撃でそのまま昇天しかねない現状を打破する為には仕方ない事だ……それに、下手に強いのを刺激して全力を振るおうものなら、死神^{ハク}がやって来て今度こそ昇天させられかねないと言う実状

もある。

「コフツ……そもそもだ、何故俺はここまでして駄女神の救出なんぞ……ああ、そうだった」

そう、俺は契約の為に駄女神を捕獲しに行く。

何故忘れていたのかは知らんが、恐らく疲れたのだろう。それだけだ。

今こうしてクソ不味い血を啜っているのも、ハクと行動を共にしているのも、契約を果たす為だ。

多少の傷なら幾ら不味くとも血を啜って浴びれば癒える。以前半殺しの憂き目に遭った相手と遭遇した時の為に、例え何かしらある度に命の危険を覚えるような目に遭おうが、その欠点を補えるだけの戦闘力を持つ輩とも同行する。

契約は絶対であり、必要ならば俺個人の感傷は斬り捨てるべきである。

これだけは譲れないし、曲げる訳にはいかないのだ。

「……………」

「GAHYU?!」

そんな事を考えながらも、背後から獲物の頸を口で喰い千切り、爪で喉を裂く事でもされる音を最小限に留めて血を啜る。

些か暗殺者染みっていて気に食わないが、今はフェンリスヴォルフ程度の危険種でも

真つ向から挑む訳にはいかない以上は仕方なかった。

「……………まだ、足りない……………グッ」

散々搾り取った血で殆どの傷はおおよそ快癒したにも関わらず、心臓の辺りだけが異様に痛む。

恐らく、この異常な治りの遅さから見て骨が見えるまで肉を抉って傷口が焼き潰されでもしたのだろうか？我ながら良く生き延びているものだ。一周回って呆れすら覚える。

「確かに、昔から…死に難い、性質だったが……………あの、クソアマア……………ガフツ、ゴハア?!」

意識した瞬間にこれだ。

幸いにも、血を吐き出す事はなかったが、いい加減肉体が限界を迎えそうだった。

俺は不死身ではないのだから、急いで傷を塞がなければ命に関わる可能性は低くない……………早急に、大量の血を絞らなければ……………

しかし、俺はこの時に気付くべきだったのだ。

「アは♪つつうかまええたあああ——」

痛みの原因が、一体どんなものだったのかを——

プラネテューヌ教会に備え付けられた女神の執務室

本来の使用者である筈のネプテューヌが滅多に使わない為か、それとも三年もの月日を犯罪組織に捕らわれているが為か……どちらが原因かは定かではないが、少なくとも埃を被った執務機の隣に併設されている手入れの行き届いた小型の机の上を、本の上に乗ったイストワールはふよふよと浮きながら、ダンジョンや山が消し飛ぶような災難に見舞われたルウィーを除いた各国の代表と共にネプギアから道中の報告を受けていた。

「——アナザーさんはプラネテューヌに到着すると、列車の扉を蹴り破って何処かへ行ってしまいました」

「……………そうですか……………そんな事が……………」

報告を受けたイストワールは、顎に手を当てながら考える人ならぬ考える妖精のポーズを取り、何やら考え事を始めた。

「まあ、あの男は約束は破らん。放っておけばその内帰ってくるだろう……………そんな事よ」

そんなイストワールの様子を見て何かを察したのか、心配する事はないと述べたグロ

ウは、ユニを見ながら何かを言おうと言葉を続けようとしたが――

「ハク、大丈夫だった？アナタにもしもの事があつたら、お姉様に合わせる顔が「いえ、大丈夫なので心配はご無用ですよ？チカ教祖」……あう」

「……………」

——このような感じに、箱崎チカが大人の余裕とでも言うべき表情でグロウのセリフを遮りながらハクに声をかけ、途中からバツサリと斬られて撃沈した事で、声を掛けるタイミングを逃したグロウは心なしかしよんぼりしたような表情のまま、完全に固まってしまっている。

「……………確かに、今更こんな事を疑っても意味がありませんか……………」

ユニに声を掛けるのを計らずとも妨害されたショックで固まってしまったグロウではあつたが、どうやらイストワールの悩みを解く程度の役には立ったらしい。

「とりあえずではありませんが、今日の所はゆっくり休んでください。皆さんのお部屋もこちらで用意させていただきますので……………」

「あ、ちよ……いーすんさん?!」

考える妖精のポーズを解いてネプギアの方を向いたイストワールは、浮遊している高さをネプギアの顔の近くにまで調整してそれだけ言うと、有無を言わずにそのまま何処かへと飛んで行ってしまった。

第五十四話

「……………。いよいよ、ですね…」

日が暮れて暫く

プラネタワーの最上階にあり、犯罪組織が横行する前はネプテューヌがぐうたらしてゲームをする為に使われていた部屋の窓際で、プラネテューヌの夜景を眺めながら、イストワールは声に緊張を滲ませていた。

「うむ。堪え難き日々を耐え抜いた甲斐もあり、犯罪組織よりノワール様…………。いや、全ての女神を救う決戦の時が、とうとう訪れたな…………隣、失礼する」

「あなたは…」

そんなイストワールに対して、何処からともなく現れたグロウは感慨深いとも言いたげな声を上げて、ふよふよと浮いているイストワールの隣に立つ。

「明日の事で、少々話があったのだが…………その様子では、まず貴女からだったようだ」

「話…………ですか？」

首を傾げているイストワールの隣に立ったグロウは、きよとんとした表情で本の上に乗っているイストワールを見ながら用件を切り出した。

「……まあ、そう時間は掛かるまい……先程、アナザーに渡していた携帯から連絡があったのだが……どうにも、少し考えたい事があるから作戦の決行を一日だけ待つてくれとの事だ」

「ああ、そんな事でしたか……そうですね。ネプギアさん達もお疲れでしょうから、一日だけ休息を挿んで体調を万全にしていただけでも良いでしょう……はい。でしたら、後の連絡は私がしておきますので、グロウさんはもうお休みしてください」

グロウはアナザーに渡したと言う携帯から着た連絡をイストワールへ伝え、イストワールはそれを丁度良いと受諾した。

「時に、イストワール殿……」

「……まだ、他になにかありましたか？」

そうして、グロウからの要件が終わった時だった。

「……いい加減に、己だけを責めるのは、止めにしては如何かな？」

グロウは普段以上に真剣な表情をすると、イストワールへそう問い掛けた。

「……いえ、これは私の責任ですから」

その問いに対してイストワールは、心なしか暗い雰囲気を漂わせながらそう返した。

「……そうか、邪魔をした。では私も、そろそろ眠るとしよう……」

そして、返答を聞いたグロウは場の空気を讀んだのか、もう眠るとだけ言ってその場

これだけの力が有れば――

「嗚呼……最つ高じやねえか!!これだけの力が有るなら、犯罪神だつて血祭りに挙げて殺れ……………?!?!」

そんな思考に至つた瞬間、俺の意識は冷や水でも浴びせられたような衝撃を受けていた。

「……………いやまで、犯罪神?犯罪組織ではなく?」

焼けるような胸の熱が引き、高まつた力が霧散したのを感じる。

溢れ返つた力が急速に内に戻り出し、周囲に齎した被害破滅以外には先程の圧倒的な力を証明するものがなくなつたが……それこそどうだつて良い話だ。

「俺が闘うのは犯罪組織の連中であつて犯罪神ではない……なのに何故、犯罪神と戦う前提で考えていた?」

そして何故、犯罪神の力を知っているかのような考え方をしていた……?

確かに、俺はネプテューヌよりも若干前の時代に生まれている。

そう考えれば、前の代のパールハートの生存していた年代で犯罪神を見ている可笑しくはないかもしれないが……それがまずあり得ない。

生まれて100年後なら――或いは、当時の女神と契約でもしているならまだしも、数十年の年月で得た力程度で、俺が自主的に犯罪神やその走狗を相手にして戦う筈

がない。

そして、犯罪神も犯罪組織も、その当時には存在していない。

「……それに、もしも俺が当時の教会と関係を持っていたならば、イストワールとて何かしら言っただけ……」

そう。全ては俺の勘違いで、気の所為の筈だ。

きつと俺は、仮想敵で最大の力を持つだろう犯罪神を例に出す事で、俺自身の高まり続ける力を絶対的なものと主張したかったのだ。誰に主張するのは知らんが、きつとそうに違いない。

「……まあ、最早そのような事など関係ない。さっさとプラネテューヌへ戻って、駄女神共の救出作戦の実行を急かすとするか」

でなければ……俺は………一体、ナンノタメニ、活D卯sri羅？

第五十五話

数分前にイストワールさんに温泉での休息を勧められた私達は、プラネテューヌ教会の敷地内地下にある秘蔵(?)の秘湯に浸かって旅の疲れを落としているのでした。

「いやっほー!一番乗り、いっただきー!!」

「ああ、こちらそこ!飛び込むんじゃないの!」

RED.さんが温泉で走って湯船に飛び込んだ……………本当は私が注意をしようと思つたけれど、アイエフさんが先に注意してしまったので手持無沙汰になつた私は近くの掛け湯を浴び、マナーに則つた上で温泉に浸かります。

「うずうず、うずうず……………(うずうず)」

「えつと……………ロムちゃん、ラムちゃん、あんな事はしちやダメだからね?」

(ああ、RED.さんは……………後でお説教ですね)

けれど、そんなRED.さんを見たロムさん幼ラムさん子が真似をしたそうにうずうずしていたので、RED.さんは後でお説教の刑に処する事にしました。

(……………まあ、今はゆつくりと温泉に浸かりましょうか)

「ほら、ネプギア……………あつちに掛け湯があるから早いとこ済ませちゃいましょう」

「あ、うん。分かったよ。ユニちゃん……ロムちゃん達も、一緒に行こうか?」

「はいー! / …… (こくこく)」

湯船から先程入って来たネプギアさんとネプギアさんに連れられたロムさんラムさんは、ユニさんに呼ばれて掛け湯がある方へと歩いて行ってしまいました。

(……けどまあ)

「……………はあ」

けれど、そんなネプギアさん達(ついでにアイエフさん)を見ていると、水面に浮かぶ邪魔な脂肪胸の事を否応なく意識してしまい私は憂鬱な気分になるのです。

「……本当に、どうせならDかCにでも生まれて来れば良かったのに……」

確かに、この身はリーンボックスと言う名の姉巨乳好きの樂窟さんの信奉者達が、その願望シエアを極限まで集結させて創られた、所謂『精巧な人形』のようなものですよ?

シエア的にも、ある程度のサイズが有った方が有利に働くと姉さんやチ力教祖からも言われてますし

ですけど……

(……ですけど、だからと言って大きな胸のを付けなくたって良かったじゃないですか……)

確かに、姉さんはこの脂肪の塊を是としますし有効活用もしていますが、私

はそう言うのはちよつと……いえ、かなり嫌です。

挙げ句、ちよつと全力で動く度に揺れて鬱陶しいし、何より愛剣が振り難いんですよ……これ

今はどうにかなりましたが、生まれて時間が経っていない間は本当に振り難くつて……姉さんに嗜みとして武器一式の扱いを教えられた時だって、出来たら大剣は振りたくなくなつたんですけどね……

(けど、女神化した時の神器は大剣……扱い難いにも程があると思うのですよ。私も)

まあ、17年経つた今となつては良い思い出ですし、何年か鍛錬を積んでたら何時の間にか手足の延長のような感覚になりましたけど

(……ああ、いけない……こんな事を考えるよりも、今は明日の姉さんの救出の際にどのような采配を振る舞うかの心配をするべきでしたね)

救出自体はこれだけの戦力が集まつた以上、十中八九と言つて良い程に成功するでしょう。

ですが、誰も犠牲にすることなく成功するかは……なんとも言えないのですよね……(どのようにしたのかは不明とは言つても、幾らシエア不足で不調とは言え私達よりも戦闘経験が勝るだろう姉さん達を倒して殺す事なく捕えているのだから……私やアナザーさんはともかく、他の方には少々分が悪いでしょう)

生憎と、姉さんが本気で戦う姿を見た事はありませんが、私の何十倍も生きているのだから当然、戦闘経験は私よりも上と見るべきでしょう。

私も、生誕してからずっと戦っては来ましたが、所詮はモンスターや中位以下の危険種が相手……長く生きてる分、上位危険種とも渡り合っている筈の姉さん達に及ぶ筈ありません。

(何故か過去の戦果を尋ねたら新作ゲームがどうか言って逃げられてしまいましたけど、果たしてどれほどやれる事か……)

そんな(頭が痛くなるぐらい)難しい事を考えていた最中でした。

「……………はふう……………気持ちいいですねえ……………」

「……………え、あ、そうですね。プラネテューヌ教会が秘湯と紹介するだけがあります……………」

温泉に浸かってぶかぶかと流れて来た(?)コンパさんに声を掛けられたのは……

「はくちゃんは、疲れがとれてるですか？」

「はい。特に肩凝りが取れてますよ？」

「それは良かったです」

コンパとハクは、縁に並べられた岩に背を預け、肩までお湯に浸かった状態で会話を続けながらゆつくりと寛いでいた。

「はくちゃん、あなざーさんのお目付け役ごころうさまです」

「いえ、それは元々私がやりたい事ですしありませんので、コンパさんは気にしないで良いのですよ？」

「それでも、わたしははくちゃんに感謝してるです」

そう言ったコンパは、嘗てを懐かしむように目を細めて、過去の思い出を語り始めた。「わたしがあなざーさんに会ったのは、ねぶねぶに初めて会った日から何日かしてからです……」

「そうなのですか？」

「はいです。とは言っても、あそこまでひどい戦い方をすると知ったのは、犯罪組織にねぶねぶや女神さん達が捕まって、あなざーさんを探し回ってた時なんですけどね——」

— 守護女神戦争末期

それは、守護女神戦争がまだ続いていた時の事でした……

当時のわたしは、空から降って来て記憶をなくしちゃったねぶねぶの記憶を戻す為
に、ねぶねぶが降って来た場所にまで案内していたんです。

「お、もしかしてここが、わたしがねぶ神家の一族の水死体の如く地面に突き刺さって
たって場所?」

「それはもつとこの先です。さ、ねぶねぶ! コツチです!」

そう言つて、わたしがねぶねぶの手を引きながら、森林公園の奥に連れて行つていた
時でした。

「おい! ちよつと待てその能天気紫!!」

「ねぶつ?! なんかよく分かんないけどマジギレしてる女の子に絡まれたよコンパ!」

「だ、誰ですかあなたは?! わたし達はこの公園の奥に用があるんです! なので、そこを退

いてくださいです……」

他の女神さん達を振り払って、プラネテューヌにまで吹き飛ばされたねぶねぶを探しに来たあなざーさんに会ったのは……

「……そうか、よりもよってその態度かこの駄女神は……」

「ねぶつ?! コンパ! なんかに更になんかヤバイ感じになってきてる気がするのわわたしの気の所為なのかな?!」

「け、ケンカはダメです! 落ち着いてくださいです!」

「…………あ? ……お前、ダレ?」

「わ、わたしはねぶねぶのお友達です!」

「て言うかー、君こそ誰さ!」

「…………は?」

そう言つて、わたしが居た事に初めて気が付いたような風にわたしを見たあなざーさんは、今思い出しても若干恐いモノでしたが、わたしがねぶねぶとの関係を伝えたら、ハトさんが豆鉄砲を受けたような表情をしながら固まってしまいました。

「……そうして、その間にねぶねぶが記憶喪失である事、そして、その手掛かりを求めてねぶねぶが突き刺さった場所にまで連れて行ってた事を説明した後、あなざーさんは頭を抱えて簡単に事情を話してくれて、そのままいーすんさんの居る教会にまで連れて行ってくれたんです」

「……なるほど、そのような経緯があつたのですね」

「はいです。そこでアイちゃんとも会つたんですよ?」

「こうして、コンパの昔話は終わった。」

「……そろそろ、上がりませんか?」

それを最後まで聞いたハクは、血行が良くなつていいのか、若干赤みを帯びた顔で温泉から上がる提案をするが……

「わたしはもう少しだけここに浸かつてるので、はくちゃんは先に上がっていいんですよ。」

「では、そうさせていただきます……興味深いお話し、ありがとうございます」

……コンパはもう少しだけ温泉に浸かっていると行って、それを聞いたハクは一人で温泉から上がって行った。

第五十六話

早朝、日が昇る少し手前にプラネタワーへと辿り着いた俺は、魚の骨が喉に引っかかったような……美味いと思っていた天然ものの人間の血が、実は人工の養殖もので微妙な味だったような……そんな微妙な気分でイストワールの元へと向かっていた。

「……………ああ、気分悪い……………」

しかしまあ、何なのだろうか？この微妙過ぎて絶妙に不快な気分は

俺は犯罪神など知らないし、犯罪組織と言う名称自体、何となく聞いた覚えがあるような気がする程度のものだ。

「……………だが、妙に引っ掛かる……………」

あれだけ気分が高揚していた時の言葉だ。

もしも知る限りで一番強い者を引き合いに出していたのなら、それは駄ネフテューヌ女神を中心に一致団結したシエアも万全の四女神全員か、全ての女神を●●●●の●●●●にした上で、全てのシエアを奪い尽して唯一国家の女神となった●●●●か——

「——いや、俺はなにを考えている？」

オカシイ。本格的に記憶が狂っている。

少なくとも、俺はパープルハートを中心に一致団結したシエアも万全の守護女神達などは見た事はないし、ゲームギョウ界ではここ数百年の間で単一国家など存在していない。

だからこそ、知る限りではそんな知識は無い筈なのに……………

「……………なら、この妙に具体的なシミュレーションは……………いや、そもそも、この単一国家の女神は——」

『まあ、時間まであと少しありますから、それまで待つていきましょう?』

「っ!?!」

唐突に聞こえて来た何処となく不快だと感じる声に気が付けば、何時の間にか俺はイストワールのいる謁見の間の扉の前に一人で立つていた。

「……………そう、俺は今日、あの駄女神ネフエューヌを捕獲しに行く為に歩いて来たのだった。そんなどうでも良い事など、考えている必要はない」

そう、その為にワザワザレンラクマデヨコシテ、ココマデキタンダ……………イマハトニカク、ダメガミのカクホヲ——ソレイガイノコトナド、イツダツテカノウダロウ?

「【ダツテオレハ……………エイエンナノダカラ……………】」

一方、アナザーがイストワールを指してプラネタワールの内部を進んでいる頃
「ねえ、まだなの？」

「もう少しです。もう少しだけお待ちください」

「あなざーさん、遅いですねえ……」

プラネタワールの謁見の間では、ユニやネプギア達がイストワールの横に在る大きな機械——敵の本拠地であり、女神達が捕らえられたギョウカイ墓場へと向かう為の転送装置——の前で、まだかまだかとアナザーの到着を待ち構えていた。

「ふむ、連絡によると、もうそろそろ到着している時刻なのだが……」

「まあ、時間まであと少しありますから、それまで待つていきましょう?」

ハクがそう言った矢先の事だった。

『……………モドツタ』

謁見の間の扉が開いて、虚ろな表情をしているアナザーが入って来たのは

「遅かったじゃない。アナザー、アンタ以外は全員準備できてるのよ?」

『…………ソウカ、ソナナコトハドウドモイイ。イクナライクゾ』

「ちよつと!一番遅れておいて仕切らないでよね!」

「『ソウカ……』」

しかし、どうにも様子がおかしい。

何故か喋り方は片言だし、心なしかアナザーの声とは別に、少女のものと思われる声が微かに聴こえてくる。

「……あの、本当に大丈夫なのですか？体調が優れないなら、別にもう1日ぐらい待っても『っ、ヒウヨウナイ』……そうですか？心なしか何時もより不健康そうですけど……」

それに加えて、普段ならハクが寄ってくる事に対して口で嫌がつている割りには警戒が緩いのだが、今はハクが近くに寄ってくる瞬間に近寄って来た分だけ正確に距離を取り、限界まで手を伸ばしても絶対に触れる事も触れられないような絶妙な距離を維持し続けていた。

「えー、では、みなさん、準備はよろしいですか？」

『はい／はいです／はい／うむ／アア／……（こくこく）』

そうこうしている内に、転送装置の準備が整い、後はイストワールがスイッチを押すだけとなっていた。

「では、御武運をお祈りしています」

「お姉様の事を頼んだわよ！」

そうして、ポチツとスイッチが押されると共に、やる気に満ちたネプギア達は転送装置によつてギョウカイ墓場へと転送されて行つた。

『……………ニイ』

そんな中でアナザーだけ、まるで全てを嘲笑うかのように目を伏せて口の端を吊り上げながら、不穏な雰囲気を纏つて転送されて行つたのだつた。

第五十七話

「では、御武運をお祈りしています」

「お姉様の事を頼んだわよ！」

とても気持ち腹立がたし良いギョウカイ墓場

そこに俺が転移させられる直前に聞いたのは、そんなイストワールと知らない誰かの声だった。

(アア、しかし、本当に)

何だろうか？この快感掉は

ギョウカイ墓場の空気を吸うだけで、心が踊沈る、胸が高鳴傷る

「……残骸の山、か」

しかし、不思議だ。

一度も来た事のない場所でこんな事を言うのも変だが、故郷に還ってきた？或いは、母親の胎の中で揺蕩う胎児にでもなったような……とにかく、不思議で仕方のない感覚だった。

………だが

「なんですか!ここは!!」

「ちよつとハク?!急にどうしたのよ!？」

「どうしたもこうしたもありません!有り得ません!何なのですかこの最低最悪な世界!!女神を馬鹿にしてるんですか!？」

「お、落ち着いて!落ち着いてください!」

「落ち着く?!ネプギアさん!よくこんな最低な世界を許容できますね?!」

「ケンカはダメです!」

……どうやら、ハクはこの居心地最高虚しく哀しいのステキ世界世界が気に食わないらしい。

アイエフやネプギア(ついでにコンパ)の制止を振り切り、左手に物質化した大剣を持って大暴れしていた。

「て言うか!こんな最低な世界に姉さんを捕らえるなんて!!最悪です!最悪過ぎます!!」

犯罪組織は何を考えてるんですか!？」

「あの、私も最近まで捕まっていたんですけど……」

「ネプギア、言ってもムダよ……」

「ハクちゃん……こわい……(ぶるぶる)」

「最低です!最低です!!最低です!!!」

(……喧しい奴だ)

まあ、手当たり次第に溶解光線を撃たないだけ良しとしよう。

あんな危険極まりないビームを撃つて救助対象に中つては堪ったものではないからな。

だが、筋力でも上がったのか、剣先から十数メートル先の瓦礫の山が吹き飛ばされている上に、何をどうやればこうなるのか、馬鹿デカイ刀身の刃を叩き付けられた筈の大地は切断される事なく、小さなクレーター（但し、人間が数人ぐらいは入れる）を生成していた。

（……と言うか、どうやって刃を大地に叩き付けてあのサイズのクレーターを作っているんだろうか？）

刀身が地面に埋まるならまだしも、あのサイズのクレーターを造れる筈がないのだが

……

「……はあ……はあ……ここ、こんな場所にこれ以上姉^女さん^神を置く訳にはいきません！早速助けに行かないと!!」

「ちよ、場所は分かつて「今行きます!!」……なんで、こうなるのかしら……?」

そんな事を考えている内に、一通り暴れて落ち着いたハクは息を整えながら、捕まっている駄女神達を探してもものすごい勢いで突撃して行った。

「アイエフさん！早く追いかけないと!!」

「……そうね。行きましようか……私としては、アナザーの方が暴走しないか心配してただけだね……」

そうして、ハクが向かって行った方にアイエフ達が行こうとした矢先の事だった。

「皆様揃い踏みで、飛んで火に入る夏の虫とはこう言う状況を指すのでしょうか？」

「リリス、そう言つてやるな……奴らも何かしらの勝算程度は用意して来たのだろう」

「確かに、その可能性は無視出来ませんね！流石は勇者様です！」

目の前に白いロボットと白い女の二人組が立ち塞がったのは――

「……あんた達、犯罪組織の関係者か何か？」

「悪いけど、アタシ達はこれから「女神共を解放しに来たのだろう？」っ、お見通しつてワケね！」

アイエフとウニ……違った、ユニが白い二人（？）組に邪魔だとも言うおうとしたのか、そのまま出鼻を挫かれ臨戦態勢に入った。だが、今のこいつらにアレの相手は不可能だろう。

「……そう血気に逸るな。オレ達の目的は貴様らではない」

「ええ、わたくし達としては、そんな紅毛の悪魔さえ置いて行くなら貴女方は素通ししても良いと考えておりますので」

その証拠に、あの白いロボットは前に俺が斬られた時は一応構えていた大剣を持って

すらいない。

腕を組んで仁王立ちとまではいかないが、それでもたかやうに女神候補生程度や人間如きならば素手で十分とばかりに、俺の目の前に立ち塞がっていた。

『……………』

(……………まあ、そうなるだろうな)

白い女の方は知らんが、何処までも違和感しか感じない、正義の味方と言わんばかりの風体をしている白いロボットの方は、俺自身も良く憶えているとも

白い女の紅毛と悪魔と言うキーワードから、一瞬も迷う事なく全員が俺を見た事に思う所はあるが、そんな些事などどうでも良い。

「……………俺を置いて先に「さ、ここはアナザーに任せて先に行きましょうか」い、け……………」

「そうですね。それが一番です」

「お姉ちゃん！今行くから、もう少しだけ待っててね！」

「(バ)ー(バ)ー」

「……………(びゅーん)」

「イエーイ♪RED.ちゃんが一番乗りなのだー！」

(……………解せぬ)

「……………(ぽくぽく)」

そうして、誰とも知らない女の意思のようなナニかが俺の意識に混ざると共に、周囲には全てを終わらせる闇が溢れ出すのだった。

「『……………さあ、終わらせようか……………』」

一方でその頃

ギョウカイ墓場の奥に向かって全速力で走っているハクは、途中に居たモンスターやジャンクのを山を薙ぎ払い、吹き飛ばしながら、捕らわれた姉の女神達を探し続けていた。

「ああもう!!何処に居るんですか姉さんは!!!」

その表情はニコニコと笑っている普段では考えられない程に嫌悪で歪み、上位の危険

種である八百禍津日神が泡を食って逃げ出す程の殺気を撒き散らしている。

「気持ち悪い!! 本当にもう!! なんなんですか此処は?！」

だがしかし、ハクにとってギョウカイ墓場此が何なのかは、肝心な事ではなかった。

「さつきから変身しようとしても変身できないし! 拳句に浄化作業も出来ない!! もう訳が分からないわ!!」

……そう、実の所、ハクはギョウカイ墓場地に辿り着いて以来、捕らわれた四女神を気にして一度も熱光線を放たなかった訳ではなかった。

ただ単純に、何故か女神化する事が出来ず、己が異能が使えなくなっていたに過ぎない。

「此処には、間違いなくシエアエナジーが漂っているのに……ゲームギョウカイだって、他所の国に行つてもある程度の時間は女神化出来る筈なのに……なんで!!」

そうして、これまでの経験にない現象に対する困惑と不安から、何処へともなく叫ぶハクだったが、その叫びに対して答える者が居た。

「さて……な。我が主である犯罪神様は、その答えを持ち得ない」

「へへっ♪マジック様、コイツ、能天気な一人で来やりましたね♪」

それは、鎌を構えた彼岸花のような姿の女——マジックと、全身から小物臭を漂わせているネズミを象った鼠色のパーカーを着た、鼠色の肌をした女——下つ端の二人

第五十八話

『……………さあ、終わらせようか……………』

そう言ったアナザーの周囲には、全てを塗り潰さんと言わんばかりに黒い靄が漂い、アナザーの姿を見え難くしていた。

「な……なんだ！なんなのだ?!キサマは!!」

そんなアナザーに対して、ブレイブは声を荒げて問い掛ける。

『お前にその答えが必要なのか?』

「ぬうつ?!」

その問いに対して、アナザーは普段の血の弾丸とは違う、黒いナニかを撃ち込む事で返答とした。

「あ……あああ……………」

ブレイブの隣に居たりリスは、アナザーのあまりにも禍々しい姿に対して本能的なナニかを揺さぶられているのか、顔の左側を抑えながらブレイブに寄り掛かる。

『……………シネ』

「うおっ!?!／きやあつ?!」

アナザーはその一瞬を突いてブレイブとリリースが重なるような軌道で黒い弾を撃ち込んだが、それはブレイブが自前の身体能力を用いてリリースを抱え、瓦礫以外は何もない横に跳んだ事で回避した。

だが――

『バカめ！引つ掛かったな！』

――それを回避される事を視越したアナザーは、ブレイブが跳んだ方から――つまり、アナザー自身も操っている血も基点とする事なく、虚空から数発の黒い弾を一瞬で発生させて撃ち込んだ。

つまり、今のアナザーにとっては場所の座標さえ知覚出来ているのなら、1つの戦場の全てから何処にでも黒い弾を発生させ、それを撃ち込めると言う事なのだろうか？

「勇者様危ない?!」

「ぐおおおおおおつ?!」

しかし、ブレイブの反応速度は流石とでも言うべきなのか、リリースの叫び声に反応すると同時にその黒い弾を愛用の大剣に焰を纏わせて両断した――

「そんなん?!」

「なん……だと……………」

――結果、両断した大剣は纏った焰諸共に熔けて半ばから折れて行った。

だったとばかりに元の状態にまで戻っている。

「な、ナニが起こつているのでしようか……」

「……………さて、な……………」

撒き散らされる黒い靄を、時に魔力弾で防ぎ、時にはブレイブの肩にある砲撃で相殺しながら、回避し続ける事暫く

『……………』

黒い靄が無くなった先には、最初の時と変わらない、右眼の血涙さえ無い無傷のアナザーの姿が在った。

『……………』

しかし、ブレイブもリリスも、そんな無防備な状態のアナザーに対して、言いようのない不安と恐怖を感じて攻撃に移れないでいた。

「……………」

そうして、場が膠着状態になっている中、アナザーの側に動きがあった。

『……………アハア♪』

暴走時以外基本的に表情の変化に乏しいアナザーが、急に無邪気な子供のような笑顔を浮かべ――

「アハハっ♪アハハハハハ♪アッハハハハハハハハハハハハハハハハッ♪♪♪」

逸れ、アイエフ（とシエアクリスタル）にトドメが刺される事は回避した。

「——ぐぬう……?!」

「グロウ?!」

……だが、ジャッジの追撃を受け流したグロウは、そのあまりの威力に対して完全に威力を殺し切る事は叶わず、受け止めた刀は砕け散り、右腕はあらぬ方向へと捻曲がってしまっていた。

「ア……クツ……じよお……」

「……絶対絶命って奴かしらね？」

しかも、そこへ更に黄色い恐竜人形の出来損ないのような姿をした者が現れた事で、ネプギア達は敗北同然の状況へと追いやられて行ったのだった。

第五十九話

ギョウカイ墓場で待ち受けていた犯罪組織の幹部ブレイブザハードとその部下リリス

「『そらそらどうした!? 避けてばっかじゃ勝てねえぞ?!』」

「ぬうつ?!」

「勇者様っ?!」

今、2人（1人と1機）は、最早二重の意味でどちらが悪役か判らなくなるようなアナザーの容赦ない攻撃に対して、逃げ回る事しか出来ないでいた。

「『あはは♪アツハハ♪アツハハ♪ハハハハ♪ハハハハ♪ハハハハ♪ハハハハ♪』」

「くっ?! おのれ卑劣な!?!」

「わたくしの事など気にしないで! 全力で「そうはいかん!!」……勇者様……」

ブレイブの逃げ回る方に目掛けて、無数の黒い球体がアナザーの周囲から射出される。

それをブレイブがリリスを小脇に抱えながら必死になって避けているのには訳があった。

その数は万を超え、億の域に届きかねない程の膨大さで、アナザーの姿が一切見えな
い程にぎっしりと詰め込まれていた。

「ゆ、勇者様……」

それだけに飽き足らず、ブレイブ達の逃げ場を奪うようにアナザーの正面以外の全方
位に黒い靄が漂っており、それに巻き込まれた残骸の山は視界から消えたものの、漂う
異臭からして残骸は溶けたか腐ったか……何れにしろ、黒い弾に中つた時と似たような
状態になっている事だろう。

「……すまん」

「え——」

そんな状況の中、ブレイブはリリースに謝ると、首の裏を叩いて意識を刈り取った。

「……………」

「……お前は、まだ生きると良い」

そう言つて、リリースの身体に紙のようなモノを張ると、リリースの周囲に魔法陣が浮か
び、そのまま何処かへと消えて逝つた。

『あくあく、面倒臭い事をするね？』

それを見たアナザーは、人を小馬鹿にしたような表情を浮かべながらも表情とは別に
面倒だと口にするが——

「……ふん、わざと見逃しておいて良く言う」

「『あ、分かっちゃう？ 解る？ 判ったの？ そうだよ！ どうせあの死に損ないが一匹逃げてもどうにでも出来るし？』」

「『まあ、お前を見逃すなんてお願いは叶えてあげる訳にはいかないけど、あの程度の粕一匹を見逃す程度なら……ねえ？』」

——ブレイブの言葉に対して、あつさりと前言を翻して塵を見るような眼差しを向けながら、知ってか知らずか、リリス本人が聞けば怒りのあまりに力の差さえ無視して襲い掛かりかねない程の軸を突いた暴言を口にしていた。

「……どう言う意味かは聞かん……が、貴様はオレが必ず始末する」

「『アハツト怒った？ ねえ怒っちゃったの？ たかが死に損ないの生け贄^エ如^サきの為に？』」

そんなアナザーの暴言に対して、ブレイブは視線に仲間を侮辱された事による憤怒と殺意を乗せながら、半ばから溶断された大剣を構える。

それを見たアナザーも、更なる罵倒と煽りを口にしながら全身から黒い靄を放出して漂わせる。

「……………」

そうして、アナザーは退屈そうにブレイブを眺め、ブレイブはそんなアナザーを睨みながら怒りを募らせていたその時だった。

牲にして——

「ア……クツ……じよお……」

「……絶対絶命って奴かしらね？」

——恐竜人形みたいな黄色いロボットが現れた事で、私達はピンチになったのでした。

(ど、ど、どうしましょう!?)

いいえ、どうすればいいのかなんて分かり切っています。

ただ、踏ん切りが付かないだけで……

だって、勝てる訳がないじゃないですか……

黒い方の敵だけでも、私の最大出力でのM・P・B・Lは効果なし

私もあれから強くなったとは言っても、仲間が増えても、そこに強さ不明の黄色い恐竜みたいな敵が追加されている所為で戦力の分散は避けられない。

これで勝てると思える程、私は私の力を過信していません。

「殺す!!壊す!!グツチャグチャのミンチにしてやんよオオオオオオオオオ!!!」

「アックク……吾輩は何処dE此処は誰?……まあ、YOい……あN○幼女達Hあ吾輩のモノダアアAああAああaアアッ!!!」

「……私は何故、こんなものの部下をしているのだろうか……」

そしてそれを援護しながらとても的確に蒼いローブの人の金的や頭を（金的7：頭3位の割合で）狙ってどんどん狙撃を加えていくユニちゃん

「……………」

『……………（ふにゆう…………）』

二人の急な奇行の影響からか、執拗に攻撃を加えている二人と、その二人から必死になって防御結界を張ったり転移魔法で回避したりしてる蒼いローブの人以外の全員は混乱の渦に包まれたのでした。

突然黒い光を纏ったかと思えば、ベール様に匹敵するぐらい露出の激しい格好になって変身したユニと、（服が黒いから分かり難いけど）全身に薄つすらと黒い光を纏い続けているグロウ

「……………」

『……………（ふにゆう…………）』

（え、え…………）

二人は急に大幅なパワーアップを果たして、犯罪組織の強敵らしき二人（二機？）を掻い潜ったかと思えば、そのまま奥に居る何処かで見たような気がする蒼いローブの男に襲い掛かっていった。

（え、ちよつ……なんでそっちに行くのよ?!）

あからさまにやる気がなさそうな奴よりも目の前で世紀末風味でヒヤッハー的なやる気に満ちてるアイツ等から殺らないとコツチがヤバイじゃない?!

今は凄いい形相で蒼いローブの男に襲い掛かっているのが予想外だったのか止まってるけど、そんなに時間ないわよこの状況っ!?

「つてオイコラトリック!!コイツ等はオレ様の獲物だ!!!勝手に手を出すんじゃない!!!」

「アクツアクツ……アクツ?ワガ輩は幼女以外はどうでも良い!ウム!それだけだ?」

「チツ……等々イカれやがったかこのポンコツが!」

『……………』

（……意外と、時間が有りそうね）

目の前で漫才をやっている二人（?）の敵を見て、思ったよりも時間がありそうだと感じた私は、この現状を打破する為にネプ子達の救助を急ぐ事にした。

（今の内今の内つと……）

蒼いローブの男に2人掛かりで襲い掛かる事で、多少の物音なら掻き消してくれる状況が出来上がっていたから、少々声を出しても良いけどね「良いの／良いんですか?!」……出しても良いけど、ほら、この手の潜入ゲームっぽいのは気配を殺して物音を立てないってのが基本じゃない?

……そっちの方が気分も乗るし

「上等だクソ野郎がア!!人が下手に出てたら付け上がりやがつて!!まずテメエから血祭りに挙げてやらあああアアアアアアアア!!」

「アCCKUKUK……この伝説のスーパー紳士なワガ輩に、勝てると思うか?」

と、とにかく!

ネプ子まで後数分も有れば辿り着くでしょうし、そうなたら後はこっちのものよね!

ササツとネプ子達を連れてネプギア達の所にまで行けば、後はネプギア達が時間を稼いでる間にネプ子達にこの7色に輝く水晶球体シエアクリスタルを与えて復活させれば、今もああやって言い争ってる?バカな敵を倒せる筈だし!

そんな事を考えている間に、ネプ子達の吊られてる場所まで後数歩と言った辺りにまで辿り着いていた。

3……2……1……着いた!

「ネプ子、シエアクリスタルよ……」

「あいちゃん、急いで戻るです！」

「間近で見ると、嫁神様達は本当に綺麗なのだー♪」

「んなつ?!しまっ——「何処へ行こうと言うかね?」邪魔だあああ!!!」

「Drooo?!」

黒い方の敵がこつちに気付いて襲い掛かろうとしたが、もう遅い。(さつき黄色い方の敵が殴り飛ばされてた気がするけど、早過ぎて見えなかつたし、多分気の所為ね。うん)

ネプ子とホワイトハート様をそれぞれ両脇に抱えた私は、ベール様を背負ったRE D. とブラックハート様を背負ったコンパと共にネプギア達の元へと全速力で撤退して行った。

「はあ……はあ……」

「悪いけど、ネプギア！」

「は、はい！なんとしてもお姉ちゃん達が復活するまで時間を稼いで見せます！」

「やつと出番なのね?行くわよ！ロムちゃん！」

「うん……お姉ちゃん、守る（ふあいと）」

それぞれの反応を見た私は、鞆から予備のシエアクリスタルを出して、東西南北それ

ていて他に比べれば脆かった彼岸花のような背中のプロセスユニットは熔けてその機能を一部喪失した。

かなりの大怪我ではあったが、咄嗟に魔力で障壁を張り直したのが功を奏したのだらう。

でなければ、隣に居た下つ端と同じように灰も残さず蒸発していたかもしれない。

「…フーツ…フーツ……」

しかし、一方でハクの方も、それだけの火力を放った代償からか、過剰なまでの熱を内包させられた大剣の刀身はハクが両腕で振るつた際の力に耐え切れずに半ばからグニヤリと振れ、柄に至っては握り潰されている始末である。

ここまで破損したら、最早板金に錆潰して一から造り直した方が良いだろう。

更に、普段ならば耐熱性を重視している為か、過剰に熱を溜め込むに留まっていた衣類は焼け焦げて黒い襤褸布と化し、その下に見える皮膚は所々焼けて爛れていた。

「……いきなり、か……」

「……起動《セット》」

マジックが神器故か、プロセスサユニットさえも融解させ機能停止に追い込む程の熱を浴びても尚、原型を留め武器として扱える状態を保持していた戦鎌を構えると同時に、普段からは考えられない鬼のような形相をしていたハクは、能面のような無表情に

なってその手に持っていた最早使い物にならない大剣を放り、緑色の光を放ちながら女神化した。

「……………」

しかし、どう言う事だろうか？

ハクが女神化した姿は、普段の天使を模したような姿から大きくかけ離れていた。

「貴様、まさか…」

背後で浮いていた筈の後輪は消え失せ、腰に付いていた天使の羽根のような機械は黒く染まり片翼は蝙蝠の羽根の様に変貌していた。

頭部の黄色いサークレットとそれに付いている角を模した緑色の刃は、サークレットが灰色に変色すると共に、二本の角も赤黒く染まり山羊の角を模した逆刃の鎌に成り果てた。

身体に纏っていた緑色の水着のような装束に至っては、ジャラジャラと大小不揃いの鎖が付けられ、胸元には南京錠が付けられた拘束具のような有様の黒い修道服である。

「……………浄滅、開始」

そして、閉じていた目蓋を見開いたハクの瞳は、左眼だけが赤黒く変色してしまっていたのだった。

第六十二話

幕切れは、とても呆気ないものだった。

「インフィニットスラッシュ／N・G・P!!」

「ネプテューンブレイク／プラネティックディーバ!!」

「認めぬっ!?!…こんな結末、認められるわけがっ」——「ギィアあ…?!…ぐわあああああああああああああ!?!?」

光の柱が建つたのと同時に、目覚めた四女神と新たな力を得た四人の候補生達の手(……)で犯罪組織の黒いロボットは爆散し——

「ハードブレイク／ノーザンクロス／アブソリュートゼロ!!」

「スパイラルブレイク!!」

「アツクククク…我が人生に一片の悔いなあああし!!!…つて、なんと——

?!?!」
「くっ……ここは一旦、避難するしか……!?!」

——また、それと同時に倒された黄色い恐竜人形のようなロボットは、最後の瞬間だけ急に中身が入れ替わったかのように雰囲気が変わったものの半壊状態で機能を停

止し、蒼いローブの男は転移魔法で何処へ消えた。

「勝った……?……勝ちました!私、勝てたんですね!?!」

「イエーイ♪わたし達の大勝利♪」

「そうね……ネプ子達が目覚めてくれなかったら、きつとヤバかったんでしょうけど……」
「でもすごいです!あの時は黒いろぼつとさんだけでも逃げるので精一杯だったのに、
今度は勝てたです!」

その結末^{勝利}に、少しずつ実感していったらしきネプギアは満面の笑みを浮かべ、変身を解いたネプテューヌと抱き合いながら歓喜し、アイエフやコンパもそれに同意するかのよう^{勝利}に笑みを浮かべる。

また一方で、なにか言いたそうな表情のユニは、非常に緊張しながらノワールの元へと小走りで駆け寄った。

「あ、あの……」

「……ユニ……随分と、時間が掛かったみたいね。正直、もつと早く来てくれると思っていたわ」

「ご、ごめんなさい!?アタシ、まだ全然お姉ちゃんみたいには……」

そんなユニに対して少々気怠げな雰囲気を出しながら皮肉な言葉を放ったノワールは、自分のお尻をチラチラと気にしながら、普段の勝ち気な雰囲気が消失しておどおど

とした雰囲気になっていくユニに笑みを浮かべて一言多い台詞と共にありがとう、とそう告げた。

「なにを謝っているの？あれだけ時間が有ったなら当然だけど、大分成長はしてるじゃない。ありがとう、助かったわ」

「う……うん……けど、お姉ちゃん……」

そんなノワールに対してやっと安心したような表情を浮かべたユニは、未だにノワールのお尻を気にしながら気にしていた疑問を投げ掛ける。

「?なによ?」

「あ、あの、お尻……」

「これは気にしなくて良いわ」

「あ、そうなんだ……」

しかし、ノワールの気にしなくても良いと言う発言によって、感動的な筈の場面に不釣り合いな変なものを見たような、それとも自分の常識が間違っていたのか……そんな心境が窺えるような微妙な表情を浮かべて、ノワールのお尻をチラチラと見ていたのだった。

『……………』(ぶるぶる)

……………微妙に震えながらも、ノワールに近寄った途端とても神掛かった鮮やかな滑

らかさで椅子となったグロウを――

「ねえねえ！お姉ちゃん！」

「ダメよ……」

「わたくしの妹は、何故ここに居ないのでしょ……」

――なお、その近くには二人の妹の視界をうす……もとい、大きくない身体で抱き締めて強引に塞いでいるブランと、自分の妹だけがこの場に居ない事に対して何処となく別次元の因果らしき何かを感じながら独りではよんぼりしているベールの姿が在ったとか……

ネプギア達が姉の女神達と再開し、救出の喜びに高揚していた（但し若干二組は除く）少し前、ブレイブによる自爆特攻で出来上がった大穴の底

『……最悪』

そこには、自爆したブレイブの残骸である装甲の一部を踏み躪りながら、煤に塗れて

切り大量に流れ出る血を支配して行く。

「……まあ、これだけあれば十分でしょう」

そして、流れ出た大量の血を周囲に浮かべたアナザーは血抜きを終えても消える気配のない八坂禍津日神の死骸を片手で軽く投げ棄てると共に、支配した血を自身の頭上に浮かべ、支配を解除した。

「ふんふんふん♪」

そのまま、全身の煤を落とす為だけに八坂禍津日神から搾り取った血を全て使用した後だった。

「………あ??」

「……何、■の力を使ってんだ……あのクソガキが……」

先程までの機嫌の良さそうな雰囲気は何処に行ったのか、煤に塗れた時よりも顔を顰めながら、底冷えのするような怒りと憎しみを声に滲ませて、アナザーは北東の方角に顔を向けた。

「……仕方ない、か……」

それから少々名残惜しそうに自分の身体を見たアナザーは、黒い靄を全身から吸収すると共にそのまま気絶して倒れた。

四女神が目覚め、女神候補生達が新たな力に目覚めていた際

「……………浄滅、開始」

身体へ纏っていた光を消し、悪魔のような姿になったハクは表情一つ変えずにそう言う。と、両手で持った神器の大剣に黒が混じった光を纏わせマジックに目掛けて斬り掛かる。

「ぬ、おおお!？」

右、上、下、左、突き、払い

時に不可能な筈の軌道を力業で強引に放ち、幾度も繰り出される大剣の乱舞に対して、マジックは薄皮一枚を切られながらも防御と回避を繰り返した。

「……………」

「こ、の…………調子に、乗るな!？」

そして、防御と回避の合間に反撃を繰り返すも、ハクは強引な力尽くで大剣を引き戻して弾き返す。

その力は変身前は愚か、前の天使を模したような姿のそれさえも凌駕しており、黒が混じった光を大剣に纏わせている事もあって、魔王のようなナニかを連想させられた。

そのような攻防を数分程繰り返していた時だった。

「……………」

「ハア…………ハア…………グッ……………」

そこには、息一つ乱さずに無表情で立つハクと、片膝を着いて息も絶え絶えなマジックと言う構図が出来上がっていた。

「ふ、くふふ…………まさか、貴様に…………このよう、な…才が有ったとは、な…………」

「…………浄滅を執行」

ハクの放つ黒の混じった光に焼かれながら、マジックは嘲笑うような声色で毒を吐く。

「貴様は、そう遠くない時に破滅を迎える…………」

「浄滅…………」

黒が混じった光を左手に集束させてマジックの頭に右手を向けたハクは、肩で息をしている確実にしとめる為か、光の集束を続けて出力を増幅していく。

「何故なら…………」

「消えな s ——」

『ぐちゃっ』

そんな時、何かが潰れたような音がして、ハクの右手に集束していた光が喪失した。

「……………は？」

その状況には、ハクだけでなく敵である筈のマジックさえも驚愕した。

何故か、ハクの左腕の肘から先が黒い靄に呑み込まれ、黒い斑が浮かんだ左手が背後からハク自身の胸の中心を貫いていたのだ。

「……………ぐちゃっ」

それを認識したハクは血を吐くと共に、前向きに倒れ伏した。

「……………一体、何があつたと言うのだ……」

あまりにも訳が分からない状況に終始困惑していたマジックは、女神(?) 化がゆつくりと解けながら胸元から大量の血を垂れ流しているハクを一瞥し、破損したプロセツサユニットをシエアエナジーで修復して先程爆発があつた方へと飛んで行ったのだつた。

俺は咄嗟に身体の周囲に黒いオーラを展開した結果、あのロボットは俺に触れる事も叶わずに消え去ったのだからな！

「……いや待て、ならば何故、俺はこんな穴の中に――」……まだ、記憶に不備があるのか……」

だが、まあ良い。

記憶は少々不安定だが、今はこの穴からd「見付けたぞ」く事が優せん………はっ？

「…成る程、この惨状を見るに、ブレイブは最低限の使命を果たして逝ったようだな」

そう言いながら空から穴の中へと降りて来たのは、ノワールほっちをベース駄に乳を混ぜたような姿をしたプロセッサユニットらしき装備を纏う女だった。

「ならば良し……貴様には犯罪神様復活の為の礎となつて貰おう」

目の前に降りて来た女が何かを言っているが、今の俺にはそれを聞き取つて処理する能力が無い。

「……っ……」

今、俺の左眼には眼球が弾けそうな程の過剰な負荷が掛かっていた。

しかし、一方で右眼の方は特に何の問題もない。寧ろ調子が良いぐらいだ。

「……………」

そして目覚めると共に女神（？）化が完全に解けて、黒く焦げていた筈なのに一部を除き元の白さを取り戻していた修道服姿に戻ったハクは、頭を振りながら立ち上がったのだった。

「あうっ……頭が……」

軽く顔をしかめながら右手で頭を抑えていたハクだったが、頭痛を堪えて立ち上がると共に周囲へと視線を巡らせた。

「……えっと、確か私は……姉さん達を探して走り回っていたような……何で傷もないのにこんなに沢山の血をベツタリと着けて倒れていたのでしょうか？」

そう言いながら頬を搔いたハクの修道服の胸元から下は、まるで紅いペンキでもぶちまけたかの如く真紅に染まっていた。

これを返り血だと言うには着いていた場所が限定され過ぎであり、逆にハク自身の血だとすれば死んでいても可笑しくない程の量である。

「……そうそうでしタシた……私は……、姉ンサエネさんの気イハケ配を探ッテツグサテ……」

そのように部分部分に可笑しな発音が混じった言葉を発しつつ、虚ろな表情のハクは髪と同じ色合いの銀眼を不気味に輝かせながら、先程爆発があった方向——ブレイブが自爆した場所——へと視線を向けた。

「……………神罰、執k「ハク!」う……………姉さん?」

そして、虚ろな表情で右腕を爆発があつた方——マジックが飛んで行つた方——へと向けて白い光を集束し始めたその時、露出度が極端に高く、緑色の長髪をポニーテイルにしている女性——女神化した状態で飛んで来た姉のグリーンハートの姿を視認し、少し驚いたような表情をしたハク。

何時の間にかその右腕に集束していた光は霧散していた。

「ああ、やっぱりここに居ましたのnって、その血はどうしたのですか?」

右腕から光が霧散すると共に、ボールからは光の加減からギリギリ視えていなかった胸から下にべったりと付着した血液がボールの視界に映り、それに驚いたボールはアメジストのような瞳を見開き慌てて降り立った。

「さあ? 私が気付いた時にはこうなっていましたし」

「さあって……………大丈夫なの?」

そんな心配に対して、ハクは大した事では無いと言わんばかりの無頓着な反応を示した。

胸から下にべつとりと大量の血液を付着させているにも拘らず、あまりの無頓着さに呆れながらも安否を問うようが……………

「外傷が存在していない以上は、問題などありません」

「……あう……」

その心配は、先程のような空虚な表情とは違う普段通りの微笑みを浮かべたハクによつて膠も無く一蹴されてしまつていた。

そんなあまりの塩対応っぷりに怯んだベールは、心なしかしょんぼりしたような表情を浮かべて硬直した。

「そんな事よりも、姉さんは何故こんな所に？」

「ああいえ、これは……」

ベールはハクのそんな一面がとても苦手だった。

極一部の例外を除けば、何時でも何処でも誰に対してもハクは微笑みながら対応する。

そう、何時も表情が変わっていないのだ

「それは、何ですか？」

勿論、無表情とかそういう話ではない。

寧ろ、逆に笑顔を絶やさない良い娘として周囲には認識されている——姉であるベール自身を除いて

「たいしたことじゃありませんわ……単に他の方達が妹の女神候補生と再会の喜びを分かち合っているのを見て、わたくしもそうしたいと思っただけですもの」

「まあ、嬉しい……けど、それなら尚更、大人しく待っていてくれれば、私の方から向か

いましたよ？」

切っ掛けは些細な事だった。

ハクが女神化を可能とした少し後、クエストでエレメントドラゴンを倒す為にガペイン草原に行った時だった。

突然、謎の集団——今の犯罪組織マジエコヌ——に襲われたのだ。

幸いにも周囲に人質にされるような市民も居らず、実力もそこ等のチンピラに毛が生えた程度だった為にあっさり撃退して牢屋に押し込めた。

しかし、その後が問題だったのだ。

それ以降、ハクは夜な夜な捕まえた襲撃犯達の収容されていた牢に足を運んでいた。

周囲も止めていたのだが、見張りも居るのだからと押し切って止まらないハク

流石に心配になり、こっそり後を追った先で見ってしまったのだ。

親の仇を見るような目で襲撃犯に見られても尚、微笑みながら襲撃犯に尋問を行うハクの姿を

「まあ、良いではありませんか…折角の姉妹水入らず……と、言いたい所ですが、それはまた別に、急ぎのお話があります」

思い返せば、ボールの記憶に在るハクの姿はどんな時も微笑んでいるものしか無かった。

それこそ、ベールと共に過ごした時間でさえも、常と変わらない微笑みばかり
極一部の例外と共に争っている時だけが、微笑み以外の表情を浮かべている数少ない例
である。

「犯罪神マジエコンヌが、復活しました。急いでギョウカイ墓場から避難しますわよ」
「えっ」

ハクの驚いているような声を聞いて、ベールは想う。

——ああ、まだ、微笑みから変わらない。

それ所か、紫の剣は紫色の禍々しい輝きを放つて鳴動し、ナニかを吸い上げるように紫の光を明滅させた。

「……………ああ、そうか……………は、ハハハ」

そんな状況下で、胸の中心部——心臓の辺り——を縦一文字に斬り裂かれたアナザーが、倒れ伏して剣を抜こうと足掻いているマジックに近寄った。

その視線はマジックへ突き刺さっている禍々しい剣へと向けられており、虚ろな表情で乾いた笑い声を挙げていた。

「キ、さマア……何、ヲシ……た……!!」

「黙れよ。塵が」

心ここに在らずと言った感じのアナザーに対して声を掛けたマジック

マジックの声を聴いたアナザーは虚ろな表情を憎しみに満ちた表情へと変えると共に、マジックの胸に突き刺さっている剣の柄を足蹴にしてぐりぐりと押し込んでいく。

「ウ、ぐ……ッ」

「ああ、やつと思ひ出したんだよ……お前が、ムシケラが、木偶がクソが」

「ぐ、アグっ?!」

底冷えするような声を出しながら右手でマジックの首を掴んだアナザーは胸に剣が突き刺さったままのマジックを持ち上げ、紫に明滅する刀身の七割が貫通して背中側に

ある剣の柄を左手で持ち、首を絞め上げながら剣を一気に引き下ろす。

「ああ、今度は間違えない……今度こそ、この剣……いや、『ゲハバーン』で犯罪神を――

ハカイスル」

「……………」

幽鬼のような表情のアナザーによつて胸から下が左右に斬り別けられたマジックは血も内臓をぶちまける事なく、赤黒い光の粒子に分解されて引き下ろされた禍々しい剣――ゲハバーンへと吸い込まれていったのだった。

そして血の滴る刀身から紫色の暗い輝きを放つゲハバーンを持ったアナザーは、夢遊病の如くフラフラとネプギア達が向かった方へと歩いて行つたのだった。

アナザーがマジックの心臓へ禍々しい剣――ゲハバーンを突き立てた丁度その頃通信機よりイストワールの声が響き渡り、帰還を呼び掛ける。

『ネプギアさん!?!そこは危険です!今直ぐに帰還してください!』

「え、ちよつといーすんさん?!」

「イストワール様、これは一体……?!」

それに連鎖するように、姉の女神達と再会を果たした女神候補生達の居る地ではシエアエナジーで在りながらその在り方を致命的な迄に変質させた邪悪なエナジーが、ギョウカイ墓場の黒く染まった大地から間欠泉の如く噴き出していた。

『現在、凄まじい質量の邪悪なシエアエナジーが計器から検出されています！これは——まさかっ?!』

そう言つて通信機越しに慌てるイストワールの発言を皮切りに、暗黒の大地から溢れ出る莫大なシエアエナジーが先程まで四女神達の囚われていた場所に集まり、おぞましいナニかを形成し始めていた。

「ちよ、どうなつてんのよこれ?!」

『急いでください！犯罪神が…犯罪神が復活を果たしました！ブツツ——!?!』

集束を続けるシエアエナジーがウサギのような頭部を形成し始めると共に、イストワールからの通信は嫌な音を立てて途切れる。

しかし、肝心な部分は確りとネプギア達に伝わっていた。

「皆さん！急いでここから逃げましょう！」

「そうね。ここは一旦退くのが最善よ」

「ふざけないで！一戦も交えずに逃げる？そんな事が出来る筈ないでしょう!?!行くわよ

そのウサギのような頭部から響き渡る呪詛のような唸り声を聞いたノワールは、2、3 m程跳び上がった犯罪神に目掛けて勢い良く武骨な黒いバスタードソードの刀身が赤くなる程の魔力を纏わせて振り下ろす。

降り下ろした刃が敵に中らずとも大地に叩き付けた段階で纏った魔力が火柱となり、降り下ろす刃と敵を焼く豪炎の二段構えのコンボは必殺技であるエグゼドライブには及ばずとも中位以下の危険種ならば一撃で灰塵と化し、上位の危険種であつてもまともに受ければ只では済まない。

「なっ?!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ——」

しかし、女神化までしている状態のノワールの攻撃は、犯罪神が形成されている右腕で刀身を掴んだ事であつさりと無力化された。

更に、刀身に纏わせていた陽炎が発生する程の炎の魔力は犯罪神が掴んだ事で強引に握り潰されてしまい、刀身そのものもギチギチと神器でなければ握り潰されかねないと確信する嫌な音を立てていた。

「ウソっ?!魔力まで握りつ b 【オオオオオオオオオオ!!!】——あああああああ?!?!」

「ノワール様ツ?!／お姉ちゃん?!」

あつさりと己が攻撃を受け止められたブラックハートは驚きながら、嫌な音を立てて

軋む神器諸共に遙か遠方へとぶん投げられて行った。

ぶん投げられたブラックハートの安否を優先してか、ユニは女神化状態で飛行して後を追う、グロウは置き土産として念の為に持っていた予備のシエアクリスタルに内包されているシエアを暴走させ、簡易爆弾として犯罪神へ投げ付けた上で飛んで行ったユニの後を追った。

「ノワール!? クソツツ!!」

それを見たホワイトハートは、シエアクリスタルの爆発と共にモクモクと立ち上る煙の中へ構えていた純白の戦斧を投げ付け、女神化状態の2人の妹の手を掴んで飛び上がり、一先ずノワールが飛ばされた方向へと全速力で逃走した。

「ちよ、ブラン!」

「私達も、急いでここから逃げましょう!!」

「そうね! 私はコンパと…えっと、この娘を連れて行くから、ネプギアはアイちゃんをお願ひ!」

「うん! アイエフさん! こっち!」

それに便乗して、パープルハートはコンパを背負いRED.を小脇に抱えて、ネプギアはアイエフを背負って飛行し、ブランが去った方へと逃げ出したのだった。

煙幕が晴れた後

【……………】

そこには無傷の——しかし、上半身と右腕だけが形成された犯罪神が、弾き飛ばしたのか、大地へと突き刺さりながら少しずつシエアに分解されているホワイト^プハート^ラの戦斧を一瞥すると共に、先程の女神達を追う価値も無いと言わんばかりに瞼を閉じて瞑目した。

【——オオオオオオ】

第六十五話

『あ、二人とも目を覚ましたですか？おはようですう』

『……………此処何処さ？』

『あ、いーすん！チュートリアルありがとね！それで今回はどんな用？』

『……………イースン？』

『大体、話は分かったわ。つまり三人はその……………イースンって人に頼まれて、四つの大陸にある鍵の欠片を探してるのね？』

『そう、だな。付け加えるなら、オレは自分探しがメインで、鍵の欠片はオマケだ』

『ミスをして当たり前なのが人間なら、私は迷わず機械に仕事を頼む』

『なあ、なら何故、アンタは人間のままだ？』

『魔——ミテスの使いに見付かったら——』

『そうか、ならばこの場でシネ』

「……………チツ」

一歩、また一歩

犯罪神に近づく度に歯抜けが多くとも懐かしい記憶と、それに伴った殺意を思い出し

ていく。

「……………全く、何が聞き覚えのある名称か」

思えば、あの時には既に記憶の一部が歪んで書き変わっていたのだろう。

なにせ、殺したくて壊したくて仕方がなかった「マジエコヌ」の名前を聞いても、聞き覚え程度にしか思い出せなかったのだ。相当根深く洗脳をされていたとして、さて誰がやったのか

ひよつとしたら、こうして魔剣片手に神風特攻している現状さえも洗脳した輩の思惑の内かもしれないが……

「……………まあ、そんな事はどうでも良い」

何れにしても俺は犯罪神マジエコヌを殺さなければ気が済まないし、その為の手段だつて用意している。

先程から時折大地が崩れているのを見るに、そして大地が崩れる度に前回の力を超えて上昇していく犯罪神の力を感じるに、この地は犯罪神復活の為の予備電源兼補強用の建材としての側面を持っていたのだろうか？

「ならば何故、前回の犯罪神復活の際にこの地が崩れて消え去らなかったのか——」

分からない。分からないが、前回こうして犯罪神が復活しなかった事だけは感謝しても良い。

もしも前回、こうして復活されてしまっていたら、ウラヌス達が犯罪神を封印できたか分からないし、何より――

「何よりも、今回こうして俺が犯罪神をコロス機会も無かつたらうからな」

どちらにしろ、犯罪神だけはコロス。何としてでもコロス。是が非でもコロス
 例え、結果として犯罪神と同じような事をしてでも……………

「「あ」」」

「…む」

(…………ああ、そう言えば女神達いつ等も居たな)

思い出した先代女神の面影がある今代と次代のプラネテューヌの女神の姿を見た俺は、最悪のパターンを回避する為の最低水準を満たした事に安堵しつつ、何としてもネプテューヌとネプギアをさっさとこんな場所から避難させる事を決めた。

「…………ちようど良い。早くこのギョウカイ墓場から逃げろ」

それは、犯罪神マジエコンヌから皆を連れて逃げていた途中でした。

「「「あ」」」

「……む」

敵の白いロボット（正直、分解してみたかった）を任せたアナザーさんと遭遇したのは

（き、気まずい……）

いえ、囷にして置いて置いて難ですが、こうして再会するとこれはこれで……つて、なに言ってるんだらう私……

つと、そうだった。

きつとアナザーさんはまだ犯罪神が復活した事を知らない筈

ハクさんはベールさんが連れて来てくれる筈ですし、今は——

（と、とりあえず、今は急いで——）

「……ちようど良い。早くこのギョウカイ墓場から逃げろ」

『えっ』

「聞こえなかったのか？逃げろと言ったんだ」

……あ、ありえません。

今、別に可笑しくはないけど言った人が可笑し……いえ、アナザーさんが言う筈のな

い言葉が聞こえて来ました。

あのアナザーさんが『逃げろ』なんて…正直、『邪魔だ』とか『足手纏いは要らん』だとか、仏頂面で有無を言わせずに言うものとはかり……実際、お姉ちゃんもポカーンって感じの顔になってるし

(しかも、なんだか珍しく表情がにこやか、で……ツ?!?)

「ネプテューヌは兎も角……どうした？ネプギア。百面相などしている暇が在るなら、オレは即刻逃げる事を推奨するぞ？」

けれどそんな考えも、アナザーさんの左手で引き摺られている……もつと言えば、アナザーさんの左腕と同化している……禍々しい紫色の刃を見た瞬間に消し飛びました。

(ダメ?!アレだけは、絶対に……!!)

私の…だけじゃ不安かもしれないけど、隣に居たお姉ちゃんも身構えた辺り間違っつてはいないだろう女神としての本能そのものが、あの昏くて禍々しい紫色の剣に対して全力で警報を鳴らし、仲間…と言えるかもしれない間柄である筈のアナザーさんに対して条件反射で武器を構えて臨戦態勢を採ると言う行動を選ばせました。

「ちよっ?!ネプ子もネプギアも、急にどうしたのよー！」

「…おいおい、どうしたんだ？俺を相手に無駄な時間を消費している暇が有るなら、こんな場所からはさっさと避難するべきだろうに……所詮、先代の劣化品か」

けど、流石にいきなり武器を向けたのはやり過ぎでした。

私が背負ったアイエフさんは戸惑ったように声を上げ、お姉ちゃんの方も内容を聞いている余裕はありませんが、コンパさんも戸惑ったような声を上げているのが伝わります。

勿論、私だって初めて見た……もつと言えば、知らない筈の武器を見ただけでここまですごいな反応を示した事に戸惑っていますし、お姉ちゃんも表情が困惑しているのに、機械剣の柄を握り締めている両手は緩む所か更に強く握り締めています。

それを見たアナザーさんも表情はにこやかなのに先程までは何処となく温かかった眼差しから一変して、まるで塵でも視るような冷たい眼差しで私とお姉ちゃんを見つめます。

「……アナタ、本当にアナザーなのかしら？」

「さあ？ 少なくとも俺はオレをアナザーだと認識しているしそれ以外の何者でもないつもりだが？」

その極端な落差からか、お姉ちゃんは更に困惑したような表情でアナザーさんに声を掛けますが、アナザーさんははぐらかすような答えを返しました。

「……まあ、オレが俺かどうかなんざどうでも良いだろう？ お前らは早くイストワールの元にもどると良い」

「ダメよ！無謀な戦いで死に行くような友達を見捨てることは出来ないわ！」
「……ッ……」

そう言つてアナザーさんは、私達犯罪神にが来た方に向かつて歩き出しました。

ただ、お姉ちゃんはそのようなアナザーさんの自殺行為を認められずに禍々しい紫の刃に侵食されて同化していない右手を掴んで引き留めました。

……ええ、引き留めてしまつたんです。

「良く考えてみなさい！あなた一人が犯罪神に突撃して何になるの？ここはノワールやブラン達に合流して全員で犯罪神と戦つた方が「なあ、それは本気で言つてるのか？」
……なんですつて？」

「本気で言つているのかと、そう言つたんだよ。ネプテユーン」

一瞬だけ悲し気な表情をしたアナザーさんは急に無表情になつて冷たく言うと共に、禍々しい紫色の刃をお姉ちゃんに突き付けました。

「ちよ、アナザー！ふざけんのm「お前には聞いていない！」……っ」

「……なあ、ネプテユーン……お前は本当に、他の連中と協力すれば犯罪神アに勝てると思つているんだな？」

それを咎めたアイエフさんを一喝して、その周囲に禍々しい紫色の刃よりも禍々しいハイライトの消えた赤黒い球体を出現させたアナザーさんは、ハイライトの消えた据わつた目をお姉ちゃんに向けて淡々とし

た口調で問い掛けます。

まるで一個選択肢を間違えたら即DEATHすると言わんばかりの状況に、私は足がすくんで動けません。

そして、そんな状況にお姉ちゃんは――

「少なくとも、あなたが単独で犯罪神に挑むよりは勝率があるわ！だから、一緒に来なさい！」

――そう啖呵を切って、未だに目が据わっているアナザーさんへと手を伸ばすのでした。

「……すう、はあ………」

据わった目を閉じたアナザーさんは数回程深呼吸をしてから目を開くと、纏っていた重々しい雰囲気は霧散して据わっていた瞳は皮肉と諦感が滲み出ていました。

「そう、か……ああ、お前後続が言うのなら、良いだろう」

「それじゃあ……」

「……ああ、どの道もう時間切れだ。今はお前の戯れ言に従ってやるよ」

そう言つてアナザーさんは、(多分)ベールさんが飛んで行つた方に向かつて歩き出すのでした。

『……………(え、なにこの状況)』

四天王が全滅したギョウカイ墓場では未だに生命力に溢れる存在が残ってはいるものの、不完全な復活を果たした犯罪神はそれらを無視して——否、大半は気にする必要が無いのだ。

犯罪神がシエアエナジーを吸収する度に、周囲で山のように転がっているゲーム機の残骸や割れたディスクは最初から存在していなかったかのように消滅していく。

それはギョウカイ墓場の黒い大地やこの地に残存しているモンスターさえも例外ではなく、場所によっては既に崩落している部分から白い手のようなナニカが地獄の亡者の如く這い出ようとしては元の場所へと堕ちて逝った。

あらゆるものが消滅していくギョウカイ墓場は、着実に本来の役目を果たしていた。

第六十六話

時は少し遡り、アナザーがネプテューヌと言い争っていた最中

「犯罪神マジエコンヌが、復活しました。急いでギョウカイ墓場から避難しますわよ」

「えっ」

ハクを見付けたベールは、口にした言葉だけ聞けば驚いているように聞こえるものの、表情は微笑みで固定されているハクに避難を呼び掛けていた。

「さっ、急ぎますから急いで変身しなさいな」

「……………」

しかし、避難を呼び掛けられたハクの様子が少しだけ可笑しかった。

表情こそ微笑んでいるが無言で両手に異能の光を灯しており、握り締めている右の拳は心なしに周囲の空間が歪んで見えていた。

「…………ハク？」

「……………」

そんなハクの様子に気が付いたのか、ベールはハクの顔を覗き込んで様子を伺うが――

「……姉さん、避難の件は丁重にお断りします」

「は？」

——唐突に避難はしないと宣言したハクの言葉を聞いて、間の抜けた声を出して呆けたのだった。

「ど、どう言うつもりですか?」

「どう、と言われましても……言葉通りですが?」

ベールは動揺して吃りながらもハクにその意図を尋ねるがハクは普段通りの表情を一切崩す事なく、まるで近所のコンビニにおつかいでプリンを買いに行く某女神候補生のような軽い雰囲気です。死地に残ると宣った。

「姉さんも分かっていると思いますけど、女神が矛も交えずに敵前逃亡なんてしても良いことはありません。シエアは減るし増長した犯罪者が暴れ出すので大惨事しかないのでですから」

「うぐつ……敵前逃亡……つて、まさか貴女……!」

「はい。その反応は少々気になりますけど、時間がないのでスルーしますね。これから復活した犯罪神を征伐しに出掛けなければなりませんし」

……いや、それよりも尚悪い事に、犯罪神に戦いを挑むとハクは宣ったのだった。

「ダメですわ!勝てる訳がありません!!」

「ええ、ですから姉さんはどうぞ自由に？ 私は私で犯罪神を征伐しなければなりません」

逃げる間に復活した犯罪神の力を感じていたボールはそんな無謀な突撃を止めるものの、ハクはその制止を気にもせずとその辺の瓦礫の山から鉄パイプを数本程束ね無理矢理巨岩に突き刺して失った大剣の代わりに大槌を造り上げた。

「ですから、他の方達と共闘をすれば少しは活路も見出せる筈ですわ」

「……ふむ、及第点、と言った所ですね。後は——」

最早ハンマーを通り越して単なる岩塊と言っても良い手製の大槌を振るい、幾本も束ねるように突き刺した鉄パイプが軋みながらもどうにか耐え切ったのを確認したハクは、そのまま大槌を肩に担いでボールが飛んで来た方を見た。

「——見付けました……けど、こ、れ……は……」

「あの、聞いていますの？ ハク？」

『「……………」』

そして、瞳ハイライトから光が消えた状態で俯き沈黙したハクの様子を心配してか、隣に寄り添ったボールが声を掛けるものの、ハクは何の反応も示さない。

『「認識情報確認、error、error、error、再三のerrorに伴い、認証手段の変更を開始——類似するデータを検出、グリ——ト——に35%」』

それを幸いにと、不満気な顔をしたアナザーはハクを背負ってネプテューヌと争っていた場所に歩き出すのだが、不満タラタラなアナザーはハクを運ぶのを代わると言ったベールを素っ気なく一蹴して運んで行く。

「あの、不満なら代わって「黙れ雑魚」……………」

そして、ハクを運ぶのを代わると申し出たのに罵倒付きで断られたベールは、若干殺気を滲ませながら苦虫を噛み潰したような表情をしてアナザーに着いて行ったのだ。た。

こうして、犯罪神に対する戦力がプラネテューヌの教会に集まった。

しかし、プラネテューヌの教会に集った者達は、この選択肢こそが地獄への片道切符だった事をまだ知らない。

第五章く呪いの剣のファンタジアく

第六十七話

四女神を救出し、ギョウカイ墓場よりイストワールの力で帰還したネプギア達

吹き飛ばされたノワール達とハクを背負ったアナザーとも合流したネプギアは、プラネテューヌの教会で他の教祖達の主導で行われている何かを知っているらしきアナザーへの尋問に立ち会っていた。

「……さて、何から話してやろうか？」

「なら、何故今まで犯罪神についての情報を秘匿していたのかを聞かせて貰おうか？」

「そうか、生憎だがそれについては俺にも解らん。なんせ、犯罪神が復活する直前まで犯罪神^そ関連^れの情報が封印されていたみたいでな」

「ならば、その封印を施した輩への心当たりh「ある訳ねえだろう、そんなもん」……そうか」

まずはラスティションの教祖ケイとグロウがアナザーに犯罪神の情報を秘匿していた理由を聞くが、アナザーは封印の理由や原因に関しては不明と答えた。

「だが、何故犯罪神について知っているのかは答えられる」

「へえ、そう……なら、教えて貰おうじゃないの」

それによって疑惑の眼差しが強まるが、補足するように犯罪神について知っていた理由を開示する。

「単純な話しだな。前回の犯罪神討伐に俺が関与していたからだ」

『はっ／えっ?!』

結果はイストワールを含めたほぼ全員から有り得ないものを見たような表情を向けられただけだったが、アナザーは気にした様子は一切見せずに言葉が続ける。

「言っておくが、イストワールが前回の犯罪神復活のデータを見付けるのは不可能に等しい。なんせ、それで先代のパープルハートが討たれて100年近くは眠っている筈だからな」

「……はい。私の意識は確かにネプテューヌさんの顔を見た時から持続しています」

「だろうな。それでも過去の記録を漁れば出るかもしれないが、犯罪神が完全復活を遂げるのには間に合わない」

そう言ったアナザーは、やや芝居掛かったオーバーな身振りで壇上に上がった。

「俺が知る限り、犯罪神を降す術はたった2つだけ」

「2つもあるんですか?」

「そうだ。まず1つ目は想いの力を束ねて叩き付ける事……だが、これは前回の犯罪神

を封じたと言う結果を出したものの実行した先代女神をも死に追い遣った」

「それは、なんと言うか……」

「封印出来ても死ぬとは、なんとも割に合わない話ですわね」

犯罪神を倒す術が2つあると聞いたコンパが意外そうな声を上げる。

しかし、それを実行すれば死ぬと聞いた他の女神達やアイエフは、微妙そうな表情で壇上のアナザーを見上げた。

「そうだろうな。これは俺としても推奨はせん……2つ目は単純だ」

そんな微妙そうな雰囲気肯定したアナザーは、次の手段を告げる前に数秒程瞼を閉じて間を空ける。

そうして、未だに左手と同化している状態だった禍々しい紫色の刃を頭上に掲げ――

「この魔剣ゲハバーンに、女神の命を与える事――つまり、実質的な守護女神戦争の再開だ」

——中間割れの推奨——
 とんでもない爆弾発言をしたのだった。

「この魔剣ゲハバーンに、女神の命を与える事——つまり、実質的な守護女神戦争の再開だ」

『……………』

「ふざけんな!!」

「どのみち死ぬんじゃない!!」

そのあんまりな発言に一瞬だけ空気が凍り付いたかと思えば、次の瞬間には壇上に居るアナザーに向かってブランとノワールの怒号が響き渡る。

こっそり周囲を見ると、ベールやリオンボックスの教祖さんを始め、ブランの妹のロムちゃんラムちゃんにルウィーの教祖さん、ユニちゃんも尋常じゃないぐらいの殺気やら嫌悪感みたいなのを発して、普段はぱつと見残念イケメンなオーラを纏つてるグロウも残念オーラと面の皮が分厚過ぎて微妙に分かり難いけど、微妙に殺気みたいなのが漏れ出てる。

アイちゃんやコンパなんて、失望や怒りが見え隠れしてるぐらいだし

(…………ま、まずいよコレ……アナザー、わたしが居ない間にナニしたの？尋常じゃないくらい嫌われてるんだけど……)

特別変化が無いのはラステイションの教祖さんとベールの妹のハクちゃん位で、いー

すんからは悲しみみたいな色が溢れている。

(え、えーつと、こんな時に最適なボケは……)

昔から人の気持ちの色として見えてたのに対してこれまで後悔した事は無いけど、周囲からもの凄いや量の殺意やら嫌悪やら憎しみやら怒りやらの負の感情が溢れ出してるのを見たわたしは心底後悔した。

「なにを言うかと思えば……少なくとも、俺が知る限りで魔剣以上の術はない。あるのは封印して全滅するか殺して一人か二人生き残るか……たかがそれだけだろう?」

ただ、一番危ないのはこの一触即発を通り越して一触爆裂魔法な雰囲気を感じることなく、寧ろこれこそが正しいと言わんばかりに——昔、一度だけリオンボックスで見た事があるベールの狂信者さんみたいな自信とか歓喜みたいな色を纏ってるアナザー自身だった。

「……………成る程、確かに合理的だね」

「……………教祖、貴様もか」

「まさか、ボクは推奨はしないけど手段の一つとしてはありだと言いただけさ」

(あ、あばばばばば……?! すっごい不穩だよ?! どうする、どうするわたし! こんな時こそ渾身のボケを……!)

そんなアナザーに賛同とも取られかねない事を言ったラスティションの教祖さんが

分厚い面の皮を若干ぶち抜いて殺意を滲ませた残念イケメンのグロウに殺意を向けられている現状に慌てて、わたしが渾身のボケを披露して場を和ませようとした時だった。

「ま、まあまあ、みんな落ち着いて、どんな時も優雅に「一応断っておくが、俺とてプラネテューヌの女神と教祖には決定権を譲ってやるとも……当然、他の術があると言うなら付き合ってやるのも吝かではない」赤い服のあご髭おじさんも言って………えっ」

『……………』

その瞬間、周囲から『使わないよね?』と言う無言の威圧感と共に地味に殺気みたいなのが乗った視線を向けられたわたし達は、予想外の状況に固まった。

「や、やだなー…アナザー? 冗談も程々にね? ほら、みんなも落ち着いて落ち着いて! そんなのつく」一日だけ、考える時間をください」な、い……………」

(ね、ネプギアアアアアア!!)

まさかのネプギアの使うかもしれない発言にアナザーの時とは違って戸惑いみたいな色が多かったのは幸いだけど、これはヤバイ、ホントのホントにヤバ過ぎだよ……

「好きにすると良い。だが憶えておけ……今や時間は俺にとつても有限で、そう長くはないと」

そう言ったアナザーは早々にどっかに行っちゃおうし……これから、本当にどうしよ？
復活した犯罪神に対抗する為の話し合いの結末に、わたしは不穏な雰囲気を感じつ
つ、これから色々考えるだろうネプギアの方向性をどうにか穏当なものへ誘導する為
にギヤルゲーの超難関ヒロイン攻略張りに頭を使うのだった。

第六十八話

アナザーによる爆弾発言があつた日の晩

他の国の女神や教祖達はプラネタワアの客間に泊まり、翌日に出されるネプギアの答えを待っていた。

そんな中、プラネタワアの最上階に在るネプギアの部屋では、部屋の主であるネプギアが姉のネプテューヌと共にベッドに腰掛けて話をしていた。

「お姉ちゃんは、どう思ってるの?」

「どうって?」

「アナザーさんが持つて来たあの剣の事だよ…」

「ん、アレか…」

ネプギアの質問に対して、ベッドの外に足を出して寝転んでいるネプテューヌは口の人差し指を当てて、宙に浮いた足をぶらぶらと揺らし考える。

数秒程考え込んだネプテューヌは考えが纏まったのか、『よいしょっ』と掛け声を挙げて起き上がり、隣に居るネプギアの顔を見ながら答えを返した。

「……そうだね。わたしとしては、折角教えてくれたアナザーには悪いけど、あの剣は出

来るだけ使いたくはないかなって思うよ?」

「……そう、だよね………やっぱり、そうだよね」

それを聞いたネプギアは同意ともとれる言葉こそ発しているが、心此処に在らずと言った表情で俯いており、まるで自分に言い聞かせているようだった。

「そう言うネプギアの方はどう思ってるの?」

「……えっ、あ、その……」

何故なら、ネプテューヌの返しに対して言い難そうに吃り出したのだから——

「あわてな——いあわてな——い、わたしはネプギアがどんな答えを出しても怒らないし、ネプギアの味方だから……ね?」

——しかし、そんなネプギアを見たネプテューヌは、何時ものちゃらんぼらんさは何処へやら、ナニかを察した理想を諦めたような表情でネプギアを安心させる為の言葉を掛け、質問の答えを促した。

そんなネプテューヌの言葉を聞いてネプギアは深呼吸を数回程行い、投げ掛けられた質問の答えを口に出した。

「……うん……私は——」

「そっか、じゃあ、わたしもそれで良いと思うよ!」

「うん! さあさあ、答えも出たことだし、今日はもう寝よっか?」

そして、答えを聞いたネプテューヌは、明日に備える為にベッドに籠って眠りに就いた。

同時刻

「……………あ……………」

プラネテューヌ教会プラネタワーから無断で外出し、バーチャフォレストの最深部のゲームキャラが亜空間に避難する直前までゲームギョウ界に存在していた場所で寝転んでいるアナザーは、左腕を魔剣『ゲハバーン』と同化させた状態で気の抜けた声を挙げながら、ただ呆然と月を見上げていた。

「……………」

見た目だけなら女にも見えるアナザーがそうやって月を見上げている姿は、周囲に人間が居れば思わず見惚れる程に美しく、アナザー自身の危険度を知らなければ光に集まる蛾か何かのように、フラフラと引き寄せられた事だろう――

『Nu、Nuraaaaa (ザクツ) … a、 a ……』

「……………」

—— 周囲にぶちまけられている、大量のモンスターの死骸と蒼血が無ければの話だが

スライヌを初めとした然程強くないモンスターに、フェンリスヴォルフのような下位の危険種も所々混ざっている死骸は数百にも及び、それだけならば英雄級は言うに及ばず、上級の冒険者ならば片手間で、ある程度強い中堅処の冒険者でも全滅させる事は可能だろう。

しかし、アナザーはモンスターには一切意識を向けず、起き上がることも無く、ただ無意識に逃げようとするモンスターも、向かってくるモンスターも、ゲハバーンの刀身を魔力と血液で伸ばして斬っているだけなのだ。

「……………」

その証拠に、時折混ざっている死骸の中には普段は殺す対象からは外れているし外してもいる人間のものと思われる死体が混ざっており、背後からザククリと心臓を一突きされている様子から、祿に意識する事無く殺ってしまったのだろう。

大量の血はバーチャフォレストの最深部の広場を満たし、咽せ返るような血臭と死臭が溢れていた。

「……………あー……………」

しかし、それらの死骸は大部分が既に光の粒子へと分解されても可笑しくはない筈の時間が経過しているにも関わらず、何故か分解が始まらない。

「うー……………」

本来、ゲームギョウ界ではモンスターを討伐した場合、女神シヌステムの守護の恩恵によつて時間経過で光の粒子に分解される。

守護の大本である女神本人、もしくは女神とパーティーを組んだ者が討伐した場合は即座に分解が実行され、死骸そのものが残留する時間は皆無と言える。

「あうあうあ……………」

『Guruaaaaaa!?!?』

しかし、現に討伐されたモンスターは光の粒子へと分解されず、流れ出ている蒼い血が池のように溜まってアナザーの背を濡らしていた。

「……………」

そんな光景は月が木々に沈むまで続けられ、月が沈んでやつと周囲を見回したアナザーが周囲の身に覚えのない死骸の山に不思議そうに首を傾げると言う、ただそれだけの結果を残したのみであった。

……………犯罪神が討たれた後、スライヌ退治で迷い込んだ駆け出しの冒険者達が発見

して腰を抜かすその日まで

第六十九話

アナザーが頭を抑えながらフラフラと帰って来た早朝から数時間後

プラネテューヌ教会を内包しているプラネタワー

その上部にある謁見の間で魔剣ゲハバーンの扱いを決める会議が始まっていた。

『……………』

…………とは言っても、重苦しい雰囲気から謁見の間は静寂に包まれていたが

「…………で、決まったのか？」

「うん、決まったよ」

「そうか、ならばさっさと」ささ、ネプギア！ちやちやつと言っちゃって！……………あ

あ、お前が決めたのか」

「…………はい」

相変わらず、アナザーはそんな重苦しい雰囲気も気にせず左手と柄が同化しているゲハバーンを右手で指差しながら、ネプテューヌに視線を向けてその扱いを尋ねていた。

しかし、ネプテューヌの発言で決めたのがネプギアだと知ると、途端にやる気が失せ

たかのような表情を向けて面倒臭そうにネプギアへと視線を向けた。

「……まあ、良い。それで? どうするよ?」

「…私は、その剣は使うべきではないと思っています」

「だろ。うな。お前に限らず、女神と言う存在は本能的にこの剣を忌避するように出来ている」

そして、魔剣を使わないと口にしたネプギアに対して、ほつと一息を吐いた女神達を中心に重苦しい雰囲気霧散するのは対照的にアナザーは完全に興味を失ったとも言いたげな眼差しを向けながら、投げ遣りな口調で問い掛ける。

「……で? 封印して全滅を選ぶと? 俺としては封印して全滅しようが魔剣で壊滅しようが大差は無いと思うが?」

「……そう、結局の所、問題は何も解結していないのだ。」

犯罪神への対処に魔剣を使って1人か2人生き残るか、封印を選んで全員死ぬか

その程度の違いでしかなく、いずれにしても女神の大半が喪われる結果にかなりえない。

「いいえ、私は封印も選びません」

「なら、どうする?」どの道、犯罪神をどうにかしない限りこのゲームギョウ界は終わりだ
が」

魔剣も封印も選ばないと云ったネプギアにざわつくネプテューヌを除いた全員を気にすることなく、アナザーはどこまでも無関心に問い掛ける。

……まるで、次に出て来る言葉を知っていると云わんばかりに

「……このゲームギョウ界に存在する全てのシエアを、1つの国へ——プラネテューヌに集めます」

『なっ……?!』

そして放たれたネプギアの宣言に驚いたのは、アナザーを始めとする一部の例外を除いたこの場に居るほぼ全員だった。

「待ちなさい！何を言ってるの?!あなたは！」

「えっ……だから、全てのシエアを「そう言う事を言ってるんじゃないわ!!」はうっ?!」

「……言うまでもないが、それをノワール様が呑むとも思っているのか?」

「やれやれ、若いと言うか青いと言うか……」

まず、ノワールが全てのシエアをプラネテューヌへ集めると云ったネプギアを睨みながら怒鳴り付け、それに追従するようにグロウとケイが冷めた眼差しと呆れた表情を向けながら却下の二文字を叩き付ける。

「わたしも、賛同できません」

「同じく。どうしてもやると言うなら、リーンボックスでやれば良いじゃない」

「うむ。リーンボックスでと言う選択肢には同意しないが、プラネテューヌでやる理由がないのは確かだな」

更に、箱崎チカと西沢ミナの両名が同じく却下の意を述べ、それに補足するようにグロウがプラネテューヌでやる必要が無いと口にした。

「そんな……」

「あなたは、考え直す気はないの？ ルウイーのシエアを脅かすなら、敵と見做すしかない」

「……………」

「どうしてもと言うなら、プラネテューヌとは敵対せざるを得ませんわ」

「……」

そこへ、ルウイーの女神であるブランとリーンボックスの女神であるベールがネプギアを睨みながら宣戦布告を発し、双子の候補生達は片やネプギアを悲しげに見つめ、片やネプギアを睨みながら武器である杖を構えている。

「私達が争つてる場合じゃないのに……」

「アンタが選んだ選択は、そう言う事よ……ネプギア……」

そうして、ユニの言葉を皮切りに各国の教祖や女神達は、口々にシエアを一国へ集中させると言ったネプギアへと非難の言葉を投げ掛けながら、1人、また1人と教会を立

ち去っていった。

「…みんな……………」

一方で、シエアを一国へ集中させると言ったネプギアの言葉に驚かなかった一部の例外達はと言うと——

「実に下らん茶番だった……が、まあいい。シエアを集めれば犯罪神に勝てるというのなら、精々やれるだけやってみるといい」

「あらあら……………」

「…ネプギア……………」

アナザーはネプギアの選ぶ手段から結果まで、全て予想通りとでも言いた気な表情で国へと帰って行った他の女神や教祖達を嘲笑い、ハクは相変わらずの微笑みでしょんぼりしているネプギアへとジアイの眼差しを向け、最初から知っていたネプテューヌは覚悟を決めたような表情にうつすらと諦感を滲ませながらネプギアを見ていた。

これにて、破滅への道は拓かれた。

絶望の序曲は覆すべからず。されど破滅の運命は覆すべし
緑の妹神は何も救えず

紅の悪鬼は総てを破滅へ導いた

紫の妹神の決断のみが、破滅の運命を覆す最後の鍵となる。

第七十話

プラネテューヌの各ダンジョンで暴れ回り争った俺とハク

「……………ふう」

「…ク、クソオ…………orz」

結果はいつもの通りとでも言うべきか、あれほどまでにパワーアップした筈にも関わらず、俺の負けと言う形で幕を引いた。

「…は、放せえ…………」

「ダクメ、ですよ？運んであげますから大人しくしててくださいね？」

俺の後頭部を左手一本で掴んだまま空を飛ぶハク。

態々顔が見えるようにした上で話しかけてくる為に見える表情こそにこやかだが、その意図は明白だった。

どう考えても、これ以上暴れたら殺すと言う脅迫だろう。

……………まあ、そんな事はどうでも良い。

「クソツタレ…………何が、足りないんだよ…………orz」

あれほどまでに強大なパワーを手に入れても尚、何故かハクには届かない。

結局の所は、その一点こそが最大の問題であった。

何時ものように支配下に措いた血は殆どが右手から放つ光によって蒸発させられ、あの黒い力さえも問答無用で消し飛ばされた。

際限無く湧き上がった力を振るえば多少の善戦こそ出来たが、それだけだった。

攻撃の全てを凌ぎきられ、黒い力の反動によって起こった肉体能力の低下で真つ向から叩き潰されたのだ。結果は惨敗としか言いようがない。

「あ、そろそろプラネタワーに着きますよ?」

「!?」

(他の女神連中でも一時間は掛かりそうな距離だったにも関わらず、数分で着く……だと……!?)

本格的に可笑しい。

こいつの力の総量自体は間違いなく他の女神連中が犯罪組織に取っ捕まった時と然程の差はない筈だ。

なのに、このタイミングで急激なパワーアップだと……?!

あり得ない! 仮にパワーアップしたとしても、数十倍^そ数百倍のパワー^れアップに相応しいだけの相手は――

「じゃあ、その物騒な剣は没収ですからね?」

——そんな事を考えていた俺だったが、空いている右手を向けて催促するハクによつて思考を中断せざるを得なかった。

「ちっ…：そらー！」

「はい。確かに、預かりましたからね？」

宙吊りでプラネタワーにまで連れて行かれている俺は、大人しくゲハバーンとの同化を解除してハクに渡したのだった。

そのまま地面に降ろされた俺は、ほぼ同時に降り立ったハクと共にプラネタワーへと入って行く。

「では、ここからの事を共に考えましょう？」

やはり、相変わらずのにこやかな表情で俺に話し掛けてくるハク。

とてつもなく忌々しいが、力では正面から叩き潰され、ゲハバーンも剥奪された俺には最早どうしようもない。

「ふん…：好きにしろ」

「ふふっ」

勝手に俺の隣に居座っている微笑んでいるこの女が、俺にはとても疎ましかったのだった。

アナザーとハクが争っている最中、プラネタワーでの事

「ほら、ネプギア…元氣出しなさいよ」

「ギアちゃん、あの2人は最初っからずーっと、あんな感じだったですよ？」

「うう…はい……」

そこでは、アナザーから徹底的に邪険にされてへこんでいるネプギアを残った面々が慰めていた。

「ネプギアさん…落ち込んでいる所悪いのですが、これからの事を話しませんか？」

「ちよ、いーすん？まだネプギア立ち直れてないからね？」

「……お姉ちゃん、私はもう大丈夫だから…こうしてへこんでる時間なんて、ないもんね

……」

「ネプギア……うん。ネプギアがそう言うなら……」

一通り慰めが終わった頃を見計らい、イストワールはネプギアへ今後の展開を決めようを持ちかける。

それに『まだ立ち直れていないから』と待ったをかけたネプテューヌだったが、他ならぬネプギアが『時間が無いからと』言った為に、一応は納得の色を見せて引き下がった。

「では、これからの事です……ラステイション、ルウィー、リーンボックスの順にシェアを集めましょう」

「……はい。まずは近場から、ですよね……」

「うん。わたしもそれで良いと思うよ」

イストワールが最初にシェアを集める場所をラステイションにするべきだと伝えると、ネプテューヌとネプギアは思う所があると云いた気な表情こそしているが、概ね賛同の意を示す。

アイエフやコンパ等の面々もこの采配には文句がないらしく、特に抗議の声が上がる事はなかった。

「さて、問題は……」

「……アナザーのやつ、ですよね……」

『あー……』

イストワールの言葉を引き継いだアイエフがそう言うのと、その場にいたネプテューヌ以外の全員が遠い目をしながら上を見上げる。

「えっ？なんで？アナザーはあれで意外と良い？人……人………鬼だよー？」

「ネプテューヌさん……後でこれまでの事は教えてあげますから、ちよつと黙っていてください」

「(・ω・)」

「でも、アナザーさんだつて犯罪神を倒してゲームギョウ界を守りたいって気持ちは同じ筈ですし……」

「コンパ……本当に、そう思ってるの？」

「……………ごめんなさいです」

ネプテューヌとコンパはそれぞれアナザーを擁護したのだが、イストワールとアイエフの反論によって擁護する事を早々に諦めた。

「とりあえず、あの魔剣はこちらへ引き渡していただくとして……」

「問題は、ストツパーハがどうなったかですね……」

そんなイストワールとアイエフの会議は、ハクがアナザーを伴って帰ってくるまで続

いた。

第七十一話

ここは、機能性を重視した建物がしつかりと区画整理されているラステイションの中でも、特にきつちりと区画整理が成されている大通り

全盛期に比べれば疎らながらも漆黒人機軍のモノ達や教会の職員達の見回りでそれなりに治安も良く、まだまだ人通りが多いこの通りには当然、クエストを受ける為のギルドも存在していた。

「……はい。クエスト完了を確認しました」

そんなギルドの建物の中にあるカウンターでは、受けたクエストの完了をを報告しているネプギアの姿があった。

「…他にクエストは有りますか?」

「申し訳ありません、今ので未消化のクエストは最後なんです」

他のクエストを受けようとネプギアがギルドの受付嬢に話し掛けるが、ギルドの受付嬢からはもうクエストが無いと言われてしまった。

「そうですか……じゃあ、私はこれで」

それを聞いたネプギアは、『ありがとうございました』と言うギルドの受付嬢の言葉を

背に、ギルドの建物から立ち去って行った。

やって来ましたラストイション！ 主人公オブ主人公なわたしの視点！ 広い道をネプギアやアイちゃん達と一緒に歩くわたしは、プラネテューヌの女神ネプテューヌ！ つい最近まで犯罪組織マジエコンヌに捕らわれてただけ、解放されるや否や、何故か早々に復活しちゃった犯罪神マジエコンヌを倒す為、ざっと300年位前に仲良くなったアナザーや、アナザーの友達？ 保護者？ ……まあ、どっちでもいいけど、リオンボックスの女神ベールの妹のハクちゃんも一緒にシエア集めをがんばってたんだよー！

『……………』

……集めてただけどね？

（えっ？ 何この重たい空気……主人公オブ主人公なわたしの視点なんだから、もうちよつと明るい感じじゃないの？）

いやまあ、確かにわたしも、犯罪神に勝つ為に他所の国からシエアを奪って強くな

るってのは思う所もあるんだけどね？

それでも、わたしはネプギアを支えるって決めちゃった訳で……

(だから、もうちよつとネプギアの心に気を使ってくれないかなーって……ダメですか、そーですか)

……ふう

ま、しょうがないよね。わたしだって、停戦協定を結んだ数週間と3年ちよいの人質もとい女神質生活を共にしたノワールやブラン達の敵になるのは思う所があるんだし

いーすんからネプギアの冒険を聞いた限りだとノワールの妹のユニちゃんを中心に仲が良いお友達作ってたみたいだし、仲良くなりたかっただけのわたしよりも思い入れは強いよね。是非もナイネ！

そう、思ってた途中だった――

「これ以上、私の国で勝手な真似はさせないわ！」

「……ああ、やつと来たのか？」

――ノワールが、ユニちゃんと一緒に目の前に立ち塞がったのは………

ノワールとユニが、ネプギア達の前に立ち塞がる数十分前の事だった。

ラストイションの教会の中枢に在る女神ブラックハートの執務室では、部屋の主であるノワール、妹のユニ、教祖のケイの三人が、顔を合わせて話し合いをしていた。

「……やれやれ……随分と、人の国で好き勝手してくれてるようだね。まさかシエアの半分を持って行かれるとは……」

「……そう」

渋い顔をしながら、教祖である神宮寺 ケイはノワールに現状を報告する。

その報告を受けたノワールは、チラリと複雑そうな表情をしているユニを見て一瞬、心配そうな表情をしたものの、即座にラストイションの女神としての顔になって次の行動に移った。

「グロウ！」

「……ああ、彼に用があるのかい？ 確かに、この状況を監督させるにはちようどいい人材だが……」

「あ、じゃあアタシがグロウを呼んで「その必要はないわ」く、る……えっ」

ノワールが唐突にグロウの名を呼ぶと、ケイはこの状況を報告させるのにちようどいいと述べ、ユニは別の場所で書類整理を行っているグロウを呼びに行こうと扉の方へと向かう。

しかし、ノワールは扉の方へと向かうユニを止めた。

「はっ!!」

『えっ……!?!』

それと同時に、急に『すっ』と音も立てずに床が持ち上げられ、グロウが現れた。

そこから素早く出て、外した床も音を立てず元に戻したグロウは、一昔前の王様に仕える騎士のように片膝を着いて頭を垂れた。

それを見たユニとケイは、それぞれ内包した意味合いは違いながらも驚き、ドン引きしたような表情をグロウへと向けた。

「グロウ、あなたに聞きたい事があるの……答えてくれる?」

「はいーなんなりと」

しかし、そんな教祖ケイとユニと妹の事は気にも留めず、ノワールはグロウへと問い掛ける。

またグロウも、己ノワールの主人への過剰なまでの忠誠被支配欲心故か、あくまでも同輩でしかないケイも、あくまでも己の主人の妹でしかないユニの事も（流石にユニに関しては多少は意識を割いていたようだが）気にせず、面を上げて何処までも狂信に曇った眼差しをノワールへと向けながら、ノワールが掛ける問いを待っている。

「……そう、なら聞くわ」

そんなグロウを見たノワールは一瞬だけ不安そうな表情をしたものの、グロウへの信

頼故か、それとも表情には出ていなかっただけで先程のグロウの現れ方にドン引きでもしていたに過ぎなかったのか、直ぐに普段通りの勝ち気な表情に戻り、誰にも気が付かれる事はなかった。

「……ねえ、あなたは、その短い人間の一生を縛られて生きるのと、自由に生きるの、どっちが好き？」

「縛られる方です！ いえ、寧ろ縛ってください！」

『……………』

……即答だった。

ノワールも、一応どんな答えが返ってくるかは予想出来ていたようだが、あまりの興奮具合と即答振りに絶句しているケイとユニ共々、ドン引きしたと言わんばかりの表情でグロウを見るが、ノワールからしか見えないそんな眼差しさえ気持ちいいと言わんばかりのグロウの表情に更にドン引きし、若干表情が引き吊っていた。

「……………ええ、良いわ。なら、縛ってあげる」

しかし、ノワールもノワールで色々と思う所でもあったのか、軽く頭を振って表情をドン引きしたような状態から真面目なものに戻すと、最期の最後まで束縛を望むグロウへと、最後になるかもしれない命令を与えた。

「これから、私はネプテューヌと決着を付けに行くわ」

懐古の念を滲ませながら、ノワールはネプテューヌへの想いを露にする。

「ただ、仮にネプテューヌに勝っても犯罪神には敵わない……犯罪神に直接神器を叩き付けた私は、そう確信しているわ」

それと同時に、犯罪神には敵わないと言う本音を述べる。

「だから……これはもしも私がネプテューヌに負けたらの事だと思つてちょうだい」

『もしも』の部分強調しつつ、ノワールグロウへと、最後になるかもしれない命令を与える。

「もしも、私がネプテューヌに負けたら、あなたは——」

「はい。ノワール様……私は、何があろうともその命を遂行して見せます」

その命令を受けたグロウは、珍しくノワールに対するDM精神全開の状態を押し込めて、極めて真面目な表情でそれを遂行すると誓った。

「ふふっ……それを聞いて安心したわ」

その返事を聞いたノワールは、安心したような表情で微笑みながら扉へと歩き出す。

「それじゃあ、まずはネプテューヌを征伐しに出掛けるわ！後に続きなさい！ユニー！」

「……………はっ!?あ、うん！分かったわ！お姉ちゃん！」

そんな姉妹の様子をまるで目蓋に焼き付けるように、グロウは見ていた。

しかし、誰一人として気が付かない。

その選択では、何も守れず、何も得られないと言う事を

悲愴の果てにあるのは、ただただ破滅、それだけだ。

このゲーム^世ギョウ^界は、救われない。

第七十二話

俺が、ハクに負けた結果、とてつもなく不愉快ながらもハクと（ついでにネプギア達と）共にプラネテユーヌのシエアを集めようと諸国を巡り、手始めにラステイションからシエアを奪っていた最中だった。

「これ以上、私の国で勝手な真似はさせないわ！」

この国の女神、ブラックハートとその妹のユニが現れたのは――

「……ああ、やつと来たのか？」

――だが、俺がそれを気にする事はなかった。

少なくとも、シエアカの大半を失った女神などは俺の敵ではないし、そもそも今のこいつが全盛期だったとしても、一対一なら俺が負ける筈がない。

俺が負けるとすれば、四女神が協力して襲って来た時か、隣に居座るこハいつと争った時くらいだ。

「だが、今更、俺一人にさえ勝てない力しか持たないお前達が来て何ができる？」

「ちよつ、アナザーさん!？」

近くのネプギアが慌てているが、知った事ではない。

今は一刻も早く、犯罪神を倒す力を得なければならぬ。この程度の雑魚共に時間を取られる訳にはいかないのだ。

「言ってくれるじゃない……けど、だからってこの国のシエアを易々とくれてやる訳にはいかないのよ!」

そう言いながら、『キツ』と俺を睨み付けるブラックハート

周囲を見れば、それなりにあつた筈の人影は既になく、どうやら人払いは向こうが済ませたようだった。

これはまあ、なんと言うか……

「くくっ……随分とまあ、気合いが入ってる事で」

そう思ったのだが、どうにもブラックハートは違った思惑で人払いを成したようで――

「あんたに用はない!」

――そう、一括すると共に、俺ではなく、俺の後ろにいるネプテューヌへと剣の切っ先を向けた。

「ネプテューヌ! 私と一対一で戦いなさい!」

「ええっ!?!」

「……………ふん。なんだ、そっちな」

切っ先を向けられたネプテューヌ又は驚き戸惑っているが、そんな事は俺の知った事ではない。

「……ならば、勝手にするといいい」

……つまん。

一方で、ノワールと対峙しているアナザーとネプテューヌから少し離れた場所では、ネプギアがアイエフやコンパ達と共に、ノワールと共に現れたユニと対峙していた。

「ユニちゃん……」

「ネプギア、武器を構えなさい！」

憂いに満ちた表情のネプギアに対して、野郎ぶつ殺してやると言わんばかりの殺る気に満ちたユニは、女神化前ではあるものの、己が武器である武骨な銃口を突き付けて武器を取れと命じる。

「……はあ、やるしかなさそうね」

「……ユニちゃんと戦うことになるなんて思いもしなかつたです……」

それに対して、仕方がないと言わんばかりの表情でアイエフは刀身と持ち手が合体し

たような武器を構え、心底残念そうな表情をしているコンパは謎の液体が入っている巨大な注射器そのものである武器を構えた。

「でも…私はっ…?!」

しかし、ネプギアは女神化する所か、白い筒上の機械であり、内蔵されたエネルギーを消費する事でレーザー状の刀身を形成するビームソードの刀身部分を展開する事すら迷い、躊躇していた。

「ここで諦めるんだったら、良いわ！ アタシが犯罪神を倒してあげる！ あんたの国のシエアも全部奪ってね！」

だが、そんなネプギアに迷うならば死ぬと言わんばかりに、ユニは構えた銃口から『ダアンツ！』と弾を撃ち、ネプギアの頬にカスらせた。

「それは、ダメ…私ができるって決めたんだから！」

「…う、じゃあ、さっさと構えなさい！」

そんなユニの主張に強く反発したネプギアに対して、ユニは一瞬安心したような表情をするが、次の瞬間にはラス^ネテイション^プのシエア^アを奪^達う敵への敵意に満ちた表情をした為に、運悪く誰にも気が付かれる事は無かった。

もしも、この時に気が付く事が出来れば、最悪の結末は回避されたにも関わらず

「……………うん。行くよ…ユニちゃん」

そして、戦いの火蓋は落とされた。

「ネプギア、加勢するわよ!」

「ですう」

是なるは、皮肉にもゲームギョウ界そのものを脅かせし犯罪組織によつて中断された
守護女神戦争の再現である。

「アイエフさん、コンパさん……手を、出さないでください」

「ニンゲンは大人しく引つ込んでなさい!」

故に――

「で、ですけど……」

「黙って見てるだけって訳にもいかないのよ!!」

これは――

「ニンゲン如きが、アタシ^女達の争い^神に首突つ込んでんじやないわよ!!!」

「アイエフさん、危ない!!」

「きやつ?!」

――最早、人間如きには止められない、神々の落陽が始まるのみだ。

第七十三話

女神ブラックハートが人払いを済ませたラストেশヨンの大通り

そこでは、片やラストেশヨンの女神ブラックハートとプラネテューヌの女神パープルハートの二柱が、片や少し離れた位置では、その妹であるパープルシスターとブラックシスターの二柱が、それぞれ戦っていた。

「ハハッ！ あなたと白黒付けられるなら、こうして殺し合うのも悪くないわね！ ネプテューヌ!!」

女神化した事で一見すると特殊な水着の類いにしか見えないプロセスユニットを身に纏い、女神としての力を完全に振るえるようになったブラックハートとパープルハート

「そう……私は残念だわ……ノワール」

ブラックハートがその手に持った神器であり、自身の身の丈程もある巨大な機械剣を自慢の速度で振るうのに合わせ、パープルハートは同じく神器であり、身の丈程もある巨大な機械剣を振るい防衛する。

「アツハハハハハハハハ!!」

「……………」

両者共に宙を舞い、前後左右上下の全方向からとてつもない速さで斬撃を入れようと攻勢に出るブラックハートと、専守防衛と言わんばかりに守勢に回るパープルハート

上位の冒険者程度では微塵に成り果てる程の斬撃の嵐を巻き起こしているブラックハートも、それを捌き切っているにも関わらず息一つ乱していないパープルハートも、現状ではまだどちらも余裕があった。

「行くわよ！　行くわよ行くわよ行くわよ!!」

そんな中、ブラックハートの攻勢は加速的に勢いを増していき、守勢に回るパープルハートも徐々に捌ききれなくなつて傷を負う。

その斬撃の嵐は、仮に英雄と呼ばれるだけの力の持ち主であるグロウが4人居たとしても、何等かの特殊な装備でも無ければ成す術なく鱈斬りにされていた事だろう。

幸いにも、速さに主眼を置いた斬撃の数々は、速さを優先したが故にパープルハートへ致命傷を刻む程の威力は無かった（但し女神基準）が、何度も攻撃を受けては命に関わる事には変わりはない。

「つう!?!　……ヤア!!」

「おっと、危ない危ない」

時折、速いだけの斬撃に混じつて飛んでくる威力を重視した攻撃を刀身の腹で受けた

パープルハートは、その一瞬で力を込めて無理矢理に弾き飛ばした事で、ブラックハートから距離を取って体勢を立て直すのだった。

「つう!? ……ヤア!!」

「おっと、危ない危ない」

そんなやり取りと共に、少しだけ距離を取った両女神

それを見た俺が思った事は、『期待外れも良い所』だった。

(やはり、魔剣を使わなければ犯罪神には勝てそうにもない……)

そもそも、溜め込んだシエアだけ見ても現状の犯罪神に分があるのに、今更シエアを一国に集中させた程度で勝てる筈もないのだ。

仮に今直ぐ犯罪神からもシエアの供給元である信者を全て奪ったとしても、既に送られているシエアまでは奪えない。

ましてや、三年もの間、ゲームギョウ界の半分よりも少ないシエアを更に4つに分割した挙げ句に、捕まっている間も女神化していた所為で溜まる以上のシエアエナジーを

消耗し続けていた四女神と、三年間ずっと、集まるゲームギョウ界の半分を超えるシェアを貯め続けていた犯罪神

どちらのシェアが多いかなど、考えるまでもないだろう。

(分かつてはいたが、案の定とでも言うべきか?)

更に、トドメを刺すかのように長い幽閉生活で素の力^{レベル}まで下がっているのだ。どれだけシェアを集めても無駄と言わざるを得なかった。

(だが……)

だからと言っても、残念ながら魔剣は既にネプギアに渡された後だ。

幸いにも、ネプギアから魔剣を奪い取るのは難しくない。寧ろ、簡単な部類だ。

紛いなりにもプラネテューヌに行動の指針を任せた以上、出来る限りそれを破りたくはないが、犯罪神に勝てない方法に固執するつもりもない。

……まあ、どのみち現状では——

(……せめて、こいつさえ居なければ……)

「……っ？」

——目の前でプラネテューヌの女神とステイシヨンの女神が戦っているのに、何故か態々俺の隣に居座っているこいつ^{ハッ}が居る以上、俺がゲハバーンを使うのは不可能に等しいだろう。

そんな事を考えながら、犯罪神を討伐できる可能性が最も高い第一候補を見ていたのだが、種族柄他者からの視線には鋭いのだろう。

「どうかしましたか？」

ハクがこの状況でも変わらず、能面のように張り付いている微笑みを向けてきたのだ。

「…………いや、何でもない」

俺は、そう答える他になかった。

「そうですか？何かあるなら、早めに声をかけてくださいいね？」

(ある訳ないだろう……仮にあっても、何故お前に声を掛けねばならんのだ)

…………まあ、良いだろう。

残念ながら、期待外れだった第二候補ネプテユースの戦いは十分に視た。

あまり期待は出来ないが、少し離れた場所で戦っている第三候補ネプギアの様子を視るとしよう

(…………せめて、第三候補のネプギアが俺の予想を上回る力を見せてくれれば良いのだがな……)

——そして、俺はネプギアの気配がする場所へと向かうのだった。

一方で、アナザーが、パープルシスターの元へ向かう少し前、ネプテューヌとノワールの戦いを観ている最中の事

「ニンゲン如きが、アタシ達の争いに首突っ込んでんじやないわよ!!!」

一瞬で女神化したブラックシスターは、先程まで持っていた武骨な銃よりも機械的で、明らかに通常の銃とは違う平べったい銃——エクスマルチブラスターを一瞬でアイエフの方へ向けると、『バシユウン!』と言う音を響かせてシエアをエネルギーに変換した光弾を放つ。

「アイエフさん、危ない!!」

「きやつ?!」

幸いにも、ブラックスターがアイエフの足元へ向けて光弾を放った事、あくまでも牽制目的であつた事、アイエフ自身英雄には届かずとも上位の冒険者と呼べる程度にはレベルを上げていた事などの要因が重なって、放たれた光弾がアイエフに直撃する事は

なかった。

「あ、危なかった…」

「アイちゃん!? 大丈夫ですか?!」

しかし、それによってアイエフはネプギアとユニから引き離されてしまい、怪我の有無を確かめる為か、コンパまで離れてしまっていた。

「ふん! やつと邪魔者が居なくなったわね!」

「……ユニちゃん」

邪魔者が居なくなって清々したと言わんばかりのユニと、それを悲しそうに見つめるネプギア

両者の姿は非常に対照的で、近くで今も争っている姉の女神達を彷彿とさせられる光景であった。

「さあ、ネプギア! 武器を構えなさい!」

「……本当に、やるんだね…」

——そうして、開戦の時は訪れた。

「……行きます!」

ネプギアの全身が一瞬光に覆われ、女神化を完了させたのを皮切りに、ブラックスターとパープルスターの激突が始まったのだった。

ブラックシスター様とネプギア殿が争い始めて数分程

街への被害を恐れてか、舞台を上空へと移した二柱は、私でも眼で追うのがやつとの凄まじい速さで目まぐるしく戦っていた。

「ヤアアアアアア!!」

「ハアアアアアア!!」

ネプギア殿が手に持ったピンクのレーザーを刃とする白い機械式の銃剣で接近戦に持ち込もうと近寄るネプギア殿と、そうはさせまいと青白いレーザーを放ちながら距離を取り続けるブラックシスター様

両者共に、人間の領域を超えた力を振るい、眼前の敵を『討ち滅ぼそう／無力化しよう』としており、私やあの辺りの地上で上を見上げるだけしか出来ないアイエフ殿程度では、余程の巧い横槍の入れ方をしなければ邪魔にしかないだろう。

(……無論、死ぬ気で突撃すれば命と引き換えにネプギア殿の腕くらいは奪えるかもしれないが)

しかし、ここから少し離れた場所で戦っておられるノワール様の方は風切り音こそ聞こえるものの、私には最初から動いていない敵のパープルハート殿しか見えないのだ。(あちらでは仮に命を掛けて突撃しても、腕処かノワール様に斬られるのが関の山であらうな……うん? 待てよ……それはそれで……はっ?! いかんいかん)

これ以上ノワール様に微塵に斬られる妄想に耽るのは危険だと思った私は、ギリギリ眼で追えるブラックシスター様の戦いへと意識を集中させようとしたのだが――

(……むっ? あれは――)

ノワール様の闘っている場所の近くにいた筈のアナザーと、何故かリーンボックスに帰る事なくプラネテューヌと行動を共にしているハク殿を見付けた私は、なんとなく嫌な予感を感じた。

「……様子を、見ねばならんな」

そして、私はアナザーの元へと向かった。

第七十四話

ラストイションで女神と女神候補生が争っている最中の事

「……………」

ネプテューヌの弱さに落胆した俺は、元居た場所から離れたネプテューヌの近くからネプギアとユニが争っている地点に向かっていた。

……だが、途中からは本来の目的も忘れ、只々ハクを振り切ろうとする為だけに、ラストイションの大通りも外れ、たまに襲ってくるチンピラを惨殺……はせずに半殺ししながら全力であちらこちらへと動き回った。

だが、それでもハクを振り切れず、無駄に時間と体力を浪費しただけであった。

「……………」
(何故だ)」

「……………」

隣で小首を傾げながら、にこやかに微笑んでいるこの女が煩わしい。

疎ましくて煩わしくて、どうにかなつてしまいたいそうさ。

と言うか、そもそも何故、この女は自分の国に帰らない？

なにか理由があるのか？それとも——

「そこまでだ！」

「……あ？」

——しかし、そこまで考えている時間は俺には無いらしい。

目の前に立ち塞がった珍しく真剣な顔をしているラスステイションの英雄を見た俺は、この国のシエアを奪い尽くしてから、ハクがこれ程までにしつこく俺に付き纏う理由を考えると決めたのだった。

……そんな時間など、存在しないとも知らずに

「そこまでだ！」

「……あ？」

アナザーの眼前に立ったその時、私は確信した。

『この男は危険だ』と

別段、姿形が変わった訳ではない。不機嫌そうな顔さえにこやかならば腰まで伸びた紅い髪も相俟って、女と見間違う程の端麗な容姿も含め、普段通りと言つても良いだろう。

だが、私の本能は、今この場でこの男を討たねば近い未来に災厄を巻き起こすと、そう警鐘を鳴らしているのだ。

何故、今まで気が付けなかつたのか、私には不思議でならないが……いずれにせよ、今この男を見逃しては私がノワール様より承つた最終命令ラストオーダーさえも果たせなくなるのだと、私はそう確信したのだ。

「つたく、何なんですかつての……邪魔をするなら、お前から「ダメですよ？」………チツ」

私の制止を受けたアナザーは、私を睨みながら、退かないなら死ぬと言わんばかりに武骨な四角い両手剣の切っ先を向ける。

しかし、アナザーの隣に立つハク殿がアナザーの左肩を掴み、制止を掛けた事によつて、その両手剣の切っ先は降ろされた。

「それで、私達に何か御用でしょうか？」

そのままアナザーを押し退けて前に出たハク殿は、こんな情勢であるにも拘らず何時もと変わらない、ノワール様が居なければ私でさえ屈服しかねない程の強烈な神性と、

誰からも好かれるだろう柔らかな微笑みを湛えながら、用件を訪ねてくる。

「……なに、大した事ではないとも」

そのままでは自分の姉の国が無くなり、一步間違えばゲームギョウ界さえも滅ぼされかねない現状にも拘わらず、その不変っぷりには流石の私も恐怖を禁じ得ないが、その気持ちの一切を奥底に押し込めた上で、何時もの癖で挿していた刀を鞘から抜き、アナザーに対して向けた。

「ただ、貴様アナザーには今日この時を以て、このゲームギョウ界から退場願いたただけだ」

「えっ」

「……ハア?」

余程、私の宣言が予想外だったのか、心底訳が分からないとでも言いたげなきよとんとした表情を浮かべたハク殿を改めて押し退けて、アナザーは瘴気や邪気の域にまで昇華された落ち果てた、僅かに紅を残した闇のような漆黒の鬨気を撒き散らす。

「……くくく……おいおい、何を寝言を言っている?」

そうして、小馬鹿にするような目で私を見ながら、アナザーは隣に立つハク殿に声をかけた。

「おい! これは俺とアレの争いだ! 手を出すんじゃねえぞ!!」

「まだ話し合えば「知らん」なんとか……って、ちよつと!?!」

引き留めるハク殿の手を掻い潜り、目では追えない速さ——ともすれば、少し離れた場所でも今もお戦っておられるノワール様に匹敵ないし凌駕する程の速さで私の懐にまで潜り込み、振るわれた拳を刀で防げたのは偶然以外の何物でもなかったのだろう。「言うだけあって、流石にこの程度じゃ死なないか……」

「……なん……だと……」

しかし、その拳を防いだ刀は黒い十二かに蝕まれるかのように飲み込まれ、危険を感じて咄嗟に手放した際にぶつかつた壁や道の一部を巻き込みながら、砂のように崩れ去る。

(ノワール様やユニ様の持つ武具ほどの業物ではなくとも、相当な名刀だぞ……?!)

極一部の例外を除いた女神様が生まれながらに保有する、神体に最も適した武装である神器

科学者の中には、原初の女神なる存在が生まれた女神娘に対して贈る唯一の護身武具と
言う説もあるが、実際にどうかは解らない。

だが、実際にそんな説が出るだけの性能ではあるのだ。

この世界のありとあらゆる物質よりも頑強で、例え杖でも伝説に名を列ねた名工が生み出した鉄槌でさえ破壊出来ず

この世界のありとあらゆる物質とも違う……強いて言うならば、シエアクリスタルに

類似した物質で形成されており

当代一と謳われた人間の鍛冶屋が心血を注ぎ誂え捧げた、神器と寸分違わぬ形状の武器でさえ、神器には至れない

そんな神器や神器に限りなく近付けた神器擬きには及ばすとも、先程アナザーに破壊された名刀は店売りで8万はする代物なのだ。刀の耐久値が高くはないとは言え、易々と破壊できるような代物では断じてない。

だが、異常な壊れかたとはいえ、手元の一番良い武器が破壊された事に代わりはない。

「アツハハハハ!! 随分と脆いナマクラだよなアオい!!」

「くっ…の、ばけもの、がア!!」

右、左、上、下、下

わざと私が反応出来るギリギリ速さで振るわれた拳や脚をギリギリで回避し続け、私は思案する。

何故、奴の攻撃は名刀を一撃で破壊——それも、分子崩壊を起こすような異常な破壊が出来たのか

そもそも、何の意味があつて奴は私に手加減を加えるのか

そんな事を考えながら、私は全力を出してアナザーの攻撃を回避し続ける。

「そろそろ、ゴミ箱はアッチだぞっと!!」

「ぐ、…!?!」

叩き込まれた蹴りを紙一重で避わしたにも拘わらず、飛び散ってきた極少量の黒い障気が当たった箇所には激痛が走り、徐々に腐食していく。かすただけでこの威力ならば、直に触れれば即死だろう。

全ての攻撃を完璧に回避せざるを得ない状況に体力は大きく削り取られ、呼吸して得られる以上の酸素の消費によって意識がボヤける。

「アナザーさん！ ダメですって急に早い?!」

「テメエは邪魔だ!!」

「ガ、あアっ?!」

ハク殿のものと思われる声でしたが、何故か一瞬だけ障気を纏わなかったアナザーの蹴りによって一気に大通りの方面にまで飛ばされた私には判別が付けられなかった。

「ハ、ハ、ハ、ハ……」

意識は酸欠で朦朧とし、腹部には先程の蹴りによって刻まれた致命傷ダメージ

そして、直ぐそこではユニ様とプラネテューヌの女神候補生が戦っている気配
状況は最悪であり、増援の宛もなし

間違つてもユニ様を巻き込む訳にはいかない以上、なんとしてもここで奴を食い止めねばならないと言う無理ゲーっぷりである。

だ
っ
た。

第七十五話

「……行きますー！」

そう言つて女神化したネプギアは、赤紫のラインが入った黒い水着のようなプロセツサユニツトと対を成すような、身の丈の半分程のサイズをした刃^Mのない白い機械剣型^Bの神器^Lを顕現させ、刃がある筈の位置に紫色の光を展開し、光の刃と成して構えた。

「さあ、来なさいー！」

そう言いながら、リーンボックスの女神であるグリーンハート並みに露出度の激しいプロセツサユニツトを纏つたユニは、ネプギアへと向けていたその身体と殆ど同じ大きさをした銃^Xの神器^Bから、ラストেশヨンのシエアクリスタルより引き出したシエアの光弾を放ちながら上空へと飛翔し、ネプギアから距離を取つた。

しかし、ネプギアはその光弾を躲すと、上空に飛んだユニを追つて空を翔ける。

「クッ」

「……」

そして、上からの確にネプギアを狙つて放たれる光弾を躲し、時には斬り捨てながら、

ユニの元へと近寄って行く。

この結果は、ネプギアにとつては幸いな事に、ユニにとつては不幸な事に、そして、どちらにとつても皮肉な事に、嘗てラストアクションでアナザーから受けた水弾の弾幕の回避と迎撃の成果が如実に表れていた。

「く、この！ 当たれ!!」

「……………」

ユニが放つ光弾は、着弾した建物や道を貫通し穴だらけにする程に強力なものだった。

しかし、銃口からしか放てないと言う武器の仕様上、アナザーにの放つ水弾の弾幕に比べて圧倒的に密度が足りていない。

「……………」

そんなユニを悲し気な眼差しで見つめながら、ネプギアは空を翔る。

勿論、ユニも上空へと昇っていくが、ネプギアを狙って撃つ関係上どうしても後ろ向きに翔ばねばならず、本来の意味での全速力を出せない。

「……………」

「つ!?!」

故に、そんな状況での鬼ごっこが長く続く筈もなく、高度が数百mを超えた辺りでネ

プギアに近付かれたユニは、ネプギアの神器であるM・P・B・Lの届く距離まで接近を許してしまっていた。

右、下、上、斜め左

M・P・B・Lの紫色の光刃は、比較的初心者でも当て易い胴体へ目掛けて淡々と振るわれる。

「……………」

「い、のお!?」

そんな機械的な動作を回避しながら時折蹴りを繰り出し躲されるユニは、拭い難い疲労を蓄させていた。

ユニの神器は大型の銃であり、暗殺用の小銃ならばまだしも、大型の銃は接近戦で使うものではない。

遠距離から攻撃する為の武器故に近寄られると取り回しが悪くなる神器を持つユニと、遠近両用の銃剣故に近距離では剣に、遠距離では銃に劣るものの、どの距離でも扱える神器を持つネプギア

徐々に高度を下げながら戦う両者の勝敗を別けたのは、そんな武器の差だった。

「きゃあ?!」

当たれば致命傷を負う精神的な疲労から回避をし損ねたユニは上段からの唐竹割り

を叩き込んだネプギアの攻撃を避け切れず、背面にある翼を模したプロセツサユニットの左側を斬り落とされてしまった。

結果、滞空機能を維持することも儘ならなくなり、数十m程の高さから地上へと墜落した。

「く……」

「……………」

幸いにも、紫の女神のお約束程の高度なかつた為に足から墜落したユニが死ぬ事は無かつたのだが、それでも足首を捻挫したらしく、立ち上がるのにも普段の倍近い時間を掛けていた。

そんなユニへと悲しげな眼差しを向けながら、ネプギアも徐々に地上へと降りて行く。

「まだよ！ まだアタシは負けてない!!」

徐々に高度を下げて行くネプギアへと己が神器であるX・M・Bの銃口を向けるユニだが、強気な口調とは裏腹に、ゆっくりと降りているネプギアを狙う銃口は安定せず、小刻みに震えていた。

「……………もう、無理だよ……ユニちゃん」

「うるさい!!」

しかし、地上へと降り立ったネプギアの悲し気な——諦めの滲んだ表情を見たユニは両腕の震えを強引に押さえ付けて、青白いレーザーを何発も放った。

「っ?!——」

その攻撃は、ネプギアの背後で何か出来る事は無いか探るように状況を見ていたアイエフと、何も出来ずに呆然としていたコンパを巻き込み、煙を巻き上げながら何発も何発も叩き込まれていった。

そうして、シエアエナジーが切れたのか、ユニが女神化を維持する事も出来なくなつた事で攻撃は止まったのだった。

「ハア、ハア、……!?!」

手持ちの殆どのシエアエナジーを攻撃に使用した事で、プロセツサユニットを纏つていた姿は普段の黒いワンピースの姿へと変わり、白銀のツインロールは黒のツインテールに戻つたユニ

流石に消耗が激しかったのか最初は肩で息をしていたのだが、自身の攻撃で巻き上げた砂煙が晴れた瞬間、驚きのあまりに目を見開いてネプギアを見た。

「……もう、勝負は付いたみたいだね……」

そう言いながら武器を降ろしたネプギアは舞つた土埃と小さな傷は付いているものの、致命的な傷は負わず、ネプギアの後ろに居たアイエフ達は無傷である。

更に致命的なのは、ネプギアの女神化が維持されている事である。

それはユニと違ってネプギアがまだ戦える事を示しており、その力に多少の損耗はあれど健在であると言えた。

実際、女神にとって女神化の有無は、戦闘能力に桁外れの差を生み出す。

その差は、女神化前の姿を基本とするなら女神候補生で3倍、女神で5倍にも及ぶ。

それ故に、女神は人間を超える力を持つと言われていて、強大な力を持つ上位危険種や吸血鬼の真祖への抑止として機能しているのだ。

「くっ……………ハア」

悔しそうな表情でネプギアを見銃口を持ち上げたユニだったが、溜め息を吐きながら諦めの混じる笑みを浮かべると、ネプギアに照準を合わせた銃口を下ろしたのだった。

「くっ……………ハア」

女神化が解けたユニちゃんは悔しそうな顔をした後、色々と悟ったような落ち着いた表情で愛用のライフルの銃口をそつと下ろした。

これで、きつとユニちゃんも私がこの国のシエアを持つていく事に賛同してくれる……はず

「あくあ、負けよ負け」

そう言いながら、先程まで殺気立っていた雰囲気や纏っていたユニちゃんは、肩を竦めながら『ヤレヤレ』って感じの雰囲気や纏う。

「それじゃあ……」

「ええ、持つていきなさい……と言っても、アンタかアンタのお姉ちゃんがアタシのお姉ちゃんにも勝てたら話だけど？」

そう言ったユニちゃんは、手に持ったライフルを舗装された地面に下ろして両手を上げながら、微妙な違和感を持った笑みを浮かべて立ち上がった。

「やった！ これで、誰も死ななくて「けど！」……え？」

「持つて行くなら、文字通りこの国の全てを持つていきなさい！」

「ユニ……ちゃん……？」

それに喜んでいた私だったが、次の瞬間、ユニちゃんが放った言葉は私の喜びを打ち砕き、混乱と硬直をもたらした。

「アンタ、どうせアイツから渡された剣は持つてるんでしょ？ それでアタシの命と力を啜りなさい！」

「……?!?!」

「……それは、私が誰にも死んで欲しくないと言っ願この選択を選んだ理由の全てを否定する選択でした。

「そんな、なんで!?!」

「やっぱり、持ってたのね」

『ま、当然でしょうけど?』なんて、当たり前のように言いながら、据わった目をしたユニちゃん、思わず見てしまった魔剣をくるんだ布を見て、感情を抑えたような口調で淡々と話し出す。

「お姉ちゃんのおこぼれ程度でも、アタシだってトップのシエアを誇っていたラストイシヨンの女神よ? シエアを集めた結果として得られる力の上昇幅ぐらいいは分かっている」

そう言いながら皮肉気に笑うユニちゃんは、言外に『シエアを集めても犯罪神に勝てない』と言っていた。

「多分、アイツもその辺は分かってたんでしょね……だから、シエア以外の解決手段を求めた」

どうやって知ったのかは知らないけど、なんて眩きながら、ユニちゃんはなんとなく嫌な感じと、なんとなく懐かしさと安心感を感じる方を見ていた。

「アイツの思惑通りつてのも癪だけど……まあ、ネプギアに殺られるなら良いわ。その

剣でアタシを斬りなさい」

「そんな……出来ない……出来ないってば……」

そして、嫌な感じと懐かしさと安心感を同時に感じる方から目を逸らしたユニちゃんは、私が預かった魔剣をくるんだ布を見ながら、魔剣を使ってユニちゃんを殺す事を嫌がる私にトドメを刺した。

「……そう、そんなにイヤだつて言うんなら……良いわ！　アタシがアンタを殺してあげる」

——それがイヤなら、殺しなさい？

そう言いながら、さつきまでの戦いで消耗が無かったのかなって勢いでユニちゃんは私の背後に回り込むと、背中に背負った魔剣をくるんだ布から布を一部だけ剥ぎ取り、刀身の部分を握りながら手元に寄せようと引つ張った。

私も咄嗟に柄を掴んで抵抗するんだけど、血を流しながら物凄い力で引つ張っていくユニちゃんの力には敵わず——ううん、必死に血を流しながら、それでも指を斬り落とさないギリギリを見極めた力で引つ張っていくユニちゃんに気圧されて、上手く力が入らない。

「ユニちゃん?!　このままじゃ、ユニちゃんの指が……!?!」

「アタシの指なんてどうでも良いでしょう?!　そんな事より、この魔剣を使わなきゃこ

人間がパンを食べると同じ感覚で、殺して来たのだ。壊し続けたのだ。覚えていられる筈がなかった。

「ああ、アア……ア” あ”ア”あ”ア”あ”ア”あ”ア”あ”ア”あ!!」

先代のパープルハートであるウラヌスと交わした約束は果たせなかった。

俺では、どう足掻いても人間は守れないし救えないと確信した。これから約束を果たす為に足掻く事も出来はしない。

罅が入ったココロは、それ以上の亀裂が走らぬよう急速に暴走を始め、全身から生命維持に必要な最低限の血を除き放出、体外で逆巻く血液は先程までの黒い力を使う前から黒く染まり、俺がギリギリ人間である言う逆説的な証明であった紅は、吸血鬼やモンスターのような化け物の証である蒼でさえなくなった。

『もしも、この先犯罪神の封印が解いたら——』

『——が、倒してくれるかしら?』

全身が黒に侵され、闇に堕ちて逝く最中

赤紫の髪をした女神との一番重要な約束が頭を過った。

(……ああ、ソウカ)

あはは……そうだよな……ここで壊れる位なら、この力で——

「……………」

—— 犯罪神を殺して、殺して、殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して……殺し続ける装置として、壊れ果てるまで戦えば良いよな？

「ちよつと！ アナザー！ 大丈夫なのあなた！」

視界に紫の髪をした女が映った気がしたが、俺はそれを無視して、よく分からないモノの間に碎けて落ちている魔剣[●]ゲハバーン^片の中でも一番大きな欠片を拾い、挟じ開けた空間からギョウカイ墓場へと跳んだ。

それは、唐突に訪れた。

「あつはははは……はっはっはっ」

「……っ？」

パープルハートに向かって斬りかかるブラックハートは、ガラスが割れたような音を脳裏に響かせながら、突然『何故こんな事をしているのか？』と、とても今更な疑問を抱いた。

パープルハートとの決着を求めて？

シエアエナジーを奪わせない為？

魔劍に命を捧げて、ゲームギョウ界を護る為？

(いいえ、どれも違うわ)

パープルハートとの決着は今着ける必要がない。そもそも犯罪神を倒す前に戦力を消耗するのはバカがする事だ。

シエアエナジーは犯罪神を倒してから再分配すればいい。寧ろ、犯罪神を倒した後に100%のシエアを永遠に維持できるような女神がいない。

信用^アがおけないアイツ^ザが持つてきた眉唾物の魔劍に命を捧げて、ゲームギョウ界を護れる保障がない。

(なら、一体どんな理由で私はこんな事をしていいのか——)

戦闘中ではあるが、思わずと言った感じで止まってしまったブラックハート

これがブラックハートと同等以上に好戦的なホワイトハートや隙を見せたら割りと容赦なく突いてくるグリーンハートであれば、流星にブラックハートも行動の停止まではしなかったらう。

「……ノワール？」

しかし、今ブラックハートの目の前にいるのは、そこまで好戦的ではなく、守護女神戦争の最中でさえ武力抗争は無意味だと訴えてきたパープルハートだ。

故に、ブラックハートは提案するのだ。

「——ねえ、ネプテューヌ……もう一度、確りと犯罪神を倒す方法を話し合ってみない？」

「……え」

普段なら絶対にしない筈の提案ではあったが、今のブラックハートにはそれが最善の解答であると、何故か心の底から感じられたのであった。

第七十七話

「……それで？ 話って何かしら？」

冷やかなルウィーの女神の声が響くプラネタワー最上階

そこには今、プラネテューヌとラストイションの女神が協同で他の二国に呼び掛け、殆ど全ての女神と全ての教祖が再び集まっていた。

「うーん、なんだっけ？ 第七百七十七回、プラネテューヌ漫才コンテスト？」

「違うでしょう！ 犯罪神への対抗策を改めて話し合うのよ!!」

重苦しい雰囲気になんてか耐えかねてかネプテューヌがボケをかます。

そんなネプテューヌのボケを聞かされたルウィーの女神——ブランは、ただでさえ薄い表情を限りなく無に近付けてネプテューヌを睨むが、ネプテューヌにツツコミを入れたノワールの言葉を聞いて、パールと共に意外そうな目を向けた。

「……意外ね。真っ先に突っ込んで真っ先にぶっ飛ばされた貴女が、犯罪神に対抗する為に話し合うだなんて」

「そうですわね。て言うか、貴女そんなキャラだったかしら？」

「うるさい！ 良いから話を進めるわよ!!」

そうやって、脱線した話を強引に本筋に戻したノワールは、『ゴホン!』と、態とらしく咳払いをしてこう切り出した。

「前の話では、最終的にゲームギョウ界のシエアを一人の女神に集中させるって話で決裂したわよね?」

「……ええ、そうね」

「……………うう」

ノワールが前回の話し合いでの話題を出すと、プラネテューヌとラステイションを除く二国からの眼差しがキツいものになっていく。

その空気の重苦しさに、以前その提案をした張本人であるネプギアがお腹を抑えながら蹲るが、心配そうな表情で背中を擦る姉のネプテューヌや、近くを飛ぶイストワール以外はそんな事などどうでも良いと言わんばかりに無視し、話を進めていく。

「あの案を実行するのは反対だと言うのに変わりはないわよ!!」

「……私も、ルウィーが無くなってしまいう事態を招くのには賛同致しかねます」
「……………」

特に反対意見が激しいのはリーンボックスの教祖で、消極的だが明確な否定がルウィーの教祖

ラステイションの教祖もはつきりとした否定こそしないものの、自国の消滅を選んで

いるに等しいノワールを正気かこいつ？　と言わんばかりの目で見ていた。

「……………」

「ネプギアさん?!」

「ちよ、ネプギア?!　誰か!　誰かコンパを呼んできてー!?　メディック!　メ

ディック!!」

……………なお、床に蹲って痙攣し始めたネプギアも居たが、プラネテューヌの面々以外からは相変わらずスルーされていた。

「ふう……………ノワール、急にどうしたんだい?　そんな話をして、拗れるだけなのは目に見えてるじゃないか」

カオスな^そプラネテ^なテューヌ^状又組はさておき、最後にラストイシヨンの教会で別れた——それも、永遠の別れになると覚悟していた神宮寺ケイは、ネプテューヌ達を連れてラストイシヨンの教会に帰還してから様子がおかしいノワールを心配してかそう声を掛けた。

「……………床になりたい」

……………尤も、ケイが心配をしている理由には、隣でノワールの足をガン見しながらケイ以外には聞こえないような声量で相変わらずな事を呟いている変質者を少しでも認識したくないと言った意識が働いていないとは言えば嘘になるのだが……………まあ、そんな事は気にしなくても良いだろう。

……そう、これからノワールが告げる言葉に比べたら、些細な事なのだ。

「どうしたもなにも、気付いたのよ——仮に私達がシエアエナジーを全部失つても、誰もそのシエアを完全には維持出来ないってね」

自虐気味な表情で告げられたその台詞を聞いた教祖達と女神達は、ハツとした表情で今気が付いたと言わんばかりであった。

「……確かに、わたしがゲームギョウ界のシエアを独占しても、リーンボックス辺りの連中は数日も保たずに——」

「わたくしも、ルウイーの国民からのシエアを維持するのは難しいのでした……」

ルウイーとリーンボックスの女神であるブランとベールは、自分の体型を片や不満そうに、片や満足そうに見ながら、真逆の国民性（性癖）を持つ互いの国民を省み——

「あー（納得）……うちはそもそも、ずっとシエアを独占出来るなら万年シエア最下位を張ってないしね！　しょうがナイネ！」

「ネプテューヌさん！　自覚をしておられるのなら普段からちゃんと働いてください
!!」

「いやいーすん?!　今そんな事言ってる場合じゃないから！　今絶賛世界の危機真っ只中だからー!」

ネプテューヌとイストワールは、何故か漫才（片方ガチ）が始まったかと思えば説教

と追いかけてつこが始まっていた。

「……理解できたかしら？」

「ええ……色々と不本意な事はあるけど、わたしやベールじゃあゲームギョウ界の全てのシエアを完全に維持するのが不可能に等しいって事は理解出来たわ」

「仮に維持できたとしても、直ぐに溜まった不満が弾けて崩壊してしまうのがオチですわね」

ノワール、ブラン、ベールの三柱は口々にそう言うと、頭を抱えて悩み始めた。

嫌な話ではあるが、シエアを全て集め短い間でも維持できるのがイストワールに説教されながら追いかけられているネプテューヌとその近くでお腹を抑えながら蹲りプルプルと震えているネプギア

頭を抱えながら悩んでいるノワールと、その近くでオロオロしている指に包帯を巻いたユニ

何故かこの場に居らず、最後に目撃されたのがアナザー失踪の直前にラスティシヨンの路地裏と言うハクの五柱しか居なかったのだ。そりゃあ頭を抱えたくもなるだろう。

……実質的に戦力となるのが、ネプテューヌとノワールしか居なかったのだから

ネプギアは候補生故に女神化時の力が弱く、拳句に精神面が不安定

ユニはネプギアからゲハバーンを奪おうとして指を骨が見えるまで切っており、ゲハ

バーンの力なのか、指の傷は回復魔法では回復しなかった。

ハクに至っては、何処に居るかも分からない始末である。

「……て言うかそもそも、たかがシエアを全部集めた程度の力で犯罪神を倒せる訳ないじゃない……私が何年シエアトップを張ってたと思ってるのよ」

「カハッ……」

「ちよ、ネプギアアアア?!?!」

どうしようもない状況からか、シエアエナジーの独占程度と言ってヤケクソ気味に頭を抱えたノワール

前にユニから聞かされたとは言え、自分が一晩悩み抜いてこれしかないと出した結果、仲違いまでしてしまった結論をたかが程度ととまで言われたネプギアは、折角少しだけ立ち直ったのに吐血し、床に倒れて痙攣を始めていた。

流星に焦ったネプテューヌは、別室で待機して貰っていたコンパを呼びに猛ダツシユをしたのだった。

……なお、これでプラネテューヌの女神は話し合いから一時離脱してしまっているが、実質的な頭脳担当のイストワールが居る為問題は一切なかったりする。それで良いのかプラネテューヌ

「あの時はなんでかあいつが何処からか持ってきた魔剣で勝てると思っていただけ、よ

くよく考えたらあんなやつが持つてきた武器よ？ 信じられる訳ないじゃない……」

「ノワール様……その事なのですが」

そして、ノワールが何故か知りもしない、裏付けも取れていない、持つてきた奴も信用出来ないとなイナイ尽くしの魔剣を使えば犯罪神に勝てると思ひ込んでいた視野奪取つぷりに頭を抱えている中、グロウはなにか言いたげな顔でノワールに声をかけた。

「……なによ？ こんな時にまでくだらない事言つたらぶつ飛ばすからね？」

「後で存分にぶつ飛ばしてください！ ……じゃなくて、魔剣についてなのですが」

『……………』

……ドン引きだった。

即答でぶつ飛ばしてくださいと懇願したグロウに、既に慣れきっているノワールと神宮寺ケイ、運ばれていったネプギア、ネプギアに着いていったネプテューヌ、意味が分かっているロムとラム以外の全員が、うわあ……と言った目でグロウを見ており、ユニは乾いた笑い声を挙げ、ベールと箱崎チカは残念な人を見る眼差しを向け、ブランドに至っては自身の教祖である西沢ミナに目配せして自身の妹であるロムとラムを背後に庇いつつ、地味に物質化したハンマーを構えていた。

「その魔剣の欠片を使って、新たな武器を作つてはいかがでしょう？」

しかし、そんな危機的状況にも拘わらず、グロウは一切動じることなくノワールへと

そう進言したのだった。

第七十八話

犯罪神の復活と共に力を吸い上げられて崩壊しつつあるギョウカイ墓場で、復活を果たした犯罪神から最も遠い地点

「……………」

ラストレイションの空間をゲハバーンの欠片で斬り裂いてそこへ突入したアナザーは、周囲に敵が居ないのを確認した後に死んだ魚のような眼をしながら手に持ったゲハバーンの欠片を視ていた。

「……………」

そして、徐にゲハバーンの欠片を持つ腕を頭上へ掲げ、手首から先を腐らせて苦悶の表情を浮かべながらゲハバーンの欠片に黒い力を纏わせ始めたのだった。

黒い力を纏ったゲハバーンの欠片は、送られてくる力を吸収してその紫の刃を黒く染め上げる。

力を失っていても視たものに禍々しきを感じさせていた魔剣ゲハバーンは、破壊され欠片となり果てても尚、禍々しきを完全に損なう事はなかった。

そして、黒く染められたゲハバーンの欠片であった刃は、魔剣ゲハバーンがその力を

完全に取り戻した——それこそ、全ての女神を斬り捨てた果てに開放される力を凌駕し、禍々しさに至っては単なる人間が視ればそれだけで悪意を刺激され、心が弱ければモラルを失い犯罪行為に走らされるだろう。

「……………」

それから暫く、元紫の禍々しい魔剣にして現黒く禍々しい邪剣が完成したのを確信したアナザーは、何時の間にか治っている腐っていた筈の手を嫌そうな顔で見つめながら、何故か柄まで再生していた邪剣を持ってギョウカイ墓場の奥へと向かうのだった。

——これは女神達が邪剣と対を成すような白く輝く剣を持ち、ギョウカイ墓場へと突入する二日前の話であった。

「……………Code:Darknessの部分解放を確認……………Code:Lightの部分覚醒を完了した後にCode:Bloodの討滅を開始します」

夜遅くのプラネタワーでの事だった。

「……………」

「…………ZZZZ」

夢眠の世界にに旅立就つた姉たのネプテューヌを目の前に、ネプギアは先程の話し合いの結果を振り返りながらカーン、カーン、カーン、と、リズム良く鎚を振るい、シエアの炎で融かした各国より譲り受けたシエアクリスタルを同じく融かした魔剣の欠片と混ぜ合わせて剣の容に形成していた。

「……………」

そうするように提案したグロウ曰く、アナザーがあればほど固執していた魔剣ならば犯罪神を確実に倒せないまでも有効打を与える程度の力はあるのではないのか？ との事で、実際に効果があるのかは分からなかったが……まあ、ネプギア自身も含めてあの場に居た全員がこのまま何の対策も見出だせないよりは良いだろうと言う結論に至った結果、こうしてネプギアが鎚を振るっているのだ。

それに――

(お姉ちゃん……お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん)

——ネプギア自身の精神もまた、かなり限界が近付いていた。

大^大体^体ア^アナ^ナザ^ザの^の所^所為^為度^度重^重なる精神的ダメージに加え、本来ならば精神が成長する為の糧となる出来事もその大半が消え失せた。

代替となる出来事は幾つかあつたが、消えた出来事の質量に比べれば微々たるものであり、本来の数値には一切届いていなかった。

他の皆を生かす為の手段は感情論で全否定を受け、理論でさえも冷静になつたラストエピソードの姉妹に否定された。

本来ならばそれさえ耐えきる程に精神が成長した証であつたプロセスサユニツトの変化は、単なる外的……否、女神と言う存在の内に巢食っている外的要因に依るものしかない。

それでもなお、女神として生まれる際に刻まれた善の性質は歪む事なく機能していたのだが、今となつてはそれすら歪みかねない程の傷を負っている事に変わりはない。

平穏な時を過ごせば自然と修復されるのだが、犯罪神が復活した現状ではそんなものなど望める筈もなく

どうにか表面だけは繕えているものの、もしも後一押しを誰かが、或いはなにかが押ししてしまえば、それを切っ掛けに闇に堕ちてゲームギョウ界を滅ぼす機械に成り果てた

と鎧を振るう。

カーン、カーン、カーン、と、幾度かの金属音が響いた時

「……………」

「……………Zzzz」

黒い靄が全て製作途中の剣に吸い込まれた時点で、ネプギアから憂鬱そうな表情が消え、暗い雰囲気収まった。

また、ネプテューヌは先程までの無表情で無機質な眼差しなどなかったと言わんばかりに眠りこけ、ネプギアを視ていた証拠は机に突っ伏していたのが仰向けに引っくり返っている事だけである。

「……………あ、出来た」

そして、魔剣の残骸とシエアクリスタルは白く輝くシエアの剣としての再誕を果たしたのだった。

———その本来の輝きを失ったまま

「……………ニイ」

第七十九話

出来上がった邪剣を引き摺りながらギョウカイ墓場の奥へ向かう最中、俺は急に戻った記憶の中でも特に大事な事を思い出していた。

今の女神よりも強大な力を誇った女神である真面目なブラツクハーツ、知識を蓄え続けたホワイトハーツ、人々から愛されたグリーンハーツの三柱

そして当時の女神の中で最も弱かったが、国民から慕われ、中でも特に半吸血鬼や今より全体的に強かった冒険者から強く信仰をされていた人望溢れるパープルハーツ

一柱を除き今代女神よりも強かった当時の女神達は、当時の犯罪神の手駒であり、贊でもあった四天王を守護女神戦争の休戦期だった事もあってシエアが削られる前に討ち倒し、ゲームギョウ界にマジエコンが溢れ返る前に犯罪組織としてのマジエコンを一切国同士で協力する事なく壊滅させていた。

………そう、一切協力する事なく壊滅させたのだ。それこそが、決定的な敗北の要因とも知らずに

ウラヌス以外の各国の女神がそれぞれ一対一で滅ぼし、ウラヌスも半吸血鬼や冒険者と共に討った四天王は、犯罪神を構成する肉体となる生け贄だった。

そして、復活した犯罪神は当時の女神さえ凌ぐ力で四柱居た女神の半数を滅し、犯罪神との戦いでは力の差から足手纏いだつた俺を含めた人間や半吸血鬼を置いて残つた女神であつたウラヌスとズニエは協力して戦つたのだが、これまで敵対していた者が組んだ所で即興の同盟が力を発揮できる筈もなく

連携が脆かつた部分を突かれてズニエが滅び去り、最も人望があつたが女神の中で一番弱かつたウラヌスだけが勝機無しとの判断で命からがら逃げ延びて運良く生き残つたのだつた。

最早どうしようも無いと思つたが、それでも希望は残されていた。

知識を蓄え続けたズニエは、犯罪神を打倒する二通りの選択肢を己が教祖へと遺していた。

1つ目は犯罪神を滅する呪われた剣である魔剣ゲハバーン

2つ目はゲームギョウ界の人々の想いを1つに束ねてぶつけると言う攻撃方法

ウラヌス達は2つ目を選び、俺は——否、俺だけが1つ目を選んだ。

ウラヌスだけは最終的に受け入れてくれたが、当時の共に犯罪組織を討伐した仲間とも言える半吸血鬼や冒険者の面々からは女神が信じられないのかと最後まで反対された。

勿論、そんな事はない。俺が信じられなかつたのは想いを束ねるウラヌスではない。

寧ろ、ウラヌスの人望ならば人々の想いだつて束ねられると確信さえしていた。

……だが、俺にはどうしても、想いを束ねられる側である人間達が信じられなかったのだ。

人間は不安定だ。

我慢できず、裏切り、嘘を吐く。

やると言つてやらず、決める事が出来ない。

楽な方へ流され、手を取り合おうと言つた口で騙し、自分の為に誰かを陥れる。

当時儲かるから、楽だから、好き放題欲望のままに振る舞えるからと犯罪組織に流れ、犯罪組織が潰れたら『ああ、女神様、仕方がなかつたのです。どうか御慈悲を下さい』と言つて薄つぺらな懺悔を吐き教会に戻つてきた人間、特に酷い者は、薄つぺらな懺悔さえ無く何食わぬ顔で犯罪組織が現れる前の生活を再開した人間を間近で見るとなつた俺は、当時の犯罪組織討伐メンバーの中で唯一、人間でなければ吸血鬼でもなく、半吸血鬼でなければモンスターでもない俺は種族が誰とも違う事もあつて、人間への強い不信任を覚える事になつた。

流石に殺人や人体実験等の洒落にならない犯罪を犯していた者は処分されたが、少なからず流れてはいたマジエコンの販売員や製造工場で働いていた者、証拠不十分な者は見逃され、市井に流された。

恐らく、当時の裏切り者達の子孫達はそんな事も知らずに今でも能天気生きているのだらうとは思ふ。ひよつとしたらまた犯罪組織に加担していたかもしれないが、だとしたらどうしようもなく救いが無い。

……………まあ、そう言った理由から、ウラヌス以外からの反対を予備の策を求めての事と押し切つて、少なくとも人間の想いを束ねる必要がない犯罪神を滅ぼす剣を求め、ズナニエの遺した資料を頼りにギヤザリング城へと独りで向かった。

——最期にウラヌスと、生き残つた方がゲームギョウ界の平和を維持しようと言ふ約束を交わして

ウラヌス達と別れた俺は、ギヤザリング城を探索し続けた。

ギヤザリング城の敵は、当時の弱かつた俺には手強かつた。

入り口付近でさえヒーリングスライヌのようなモンスターが強大な攻撃魔法を行使し、当然のようにドラゴン系のモンスターが跋扈していたような城だ。今の女神でも、恐らく単独で走破できるのはハクとネプテューヌ位のものだろう。

何度も死にかけたが、死にかけける度に何故か生き残り——今になって思えば、喰われたり焼かれたりして喪失した手足や捌かれた腹とその中身まで再生して邪剣にも使つた黒い力が俺を無理矢理生かしていたのだろう。

脚を喰つた筈のドラゴン系モンスターは何故か腐つていて、腹を穿ち臓腑を焼いた火

球を放ったスライヌは魔力が無くなり青い皮だけを残して蒸発していた。手足を全て千切って苗床にしようとした人面樹は枯れ果て、全身を取り込み溶かしてきた巨大なスライヌは中の液体が濁って腐っていた。

このように、そうでなければ死んでいない方がおかしい状況が多々あるのだ。何故そんな事になっているのかは分からないが……まあ、それは良い。

肝心なのは、魔剣ゲハバーンが見付かった事と、魔剣ゲハバーンを見付ける前に犯罪神とウラヌス達が相討ちになった事なのだから

俺が何度も死に掛けて時間の感覚を失いながら魔剣ゲハバーンを見付け出すまでに、時間が掛かり過ぎていた。

数日の休養と修練を終えたウラヌス達は、当時のイストワールを使ってギョウカイ墓場へと向かい、犯罪神へと最後の戦いを挑んでいた。

詳しい事は分からないが、結果が犯罪神の封印とウラヌス達の死であった以上、相討ちと評するのが適切なのだろう。

女神を全て失った人間はその後100年程、新たな女神が生まれるまで国を失い、新たな女神が生まれるまでの国を維持できただろう前のイストワールはどうやらシェアエナジーが燃料だったらしく、女神を失った事で機能停止に陥っていた。

その仮定で様々な記述や知識を喪失したようだが、詳しい事は知らん。

何せ、その100年の半分近くをギャザリング城で鍛えた力でモンスターを滅ぼし続け、残りの半分を無気力に過ごしていたのだから——ああ、時間か

「……やっと、着いたのか」

槍を持った兎頭の女の姿をした犯罪神を視界に収めた俺は、今まで無理に抑え込んできた邪剣の力を解放し、この身を喰らわんとばかりに侵蝕する黒い力を全身に纏った。

全身を喰われようが腐らせようが知った事か！ 犯罪神^{あの野郎}だけは徹底的に破壊し尽く

してくれるわ!!

とにかく——

『死ねえええええ!!』

呪詛に染まったギョウカイ墓場の黒い大地

普段は死せるモノ達の安寧の場として静寂に包まれているそこは今、怪獣大決戦も真つ青な決戦が始まっていた。

「死ねええええええ!!」

『温い! コノ程度ノ力デ我ヲ倒セルト思ツタカ!?』

犯罪神へと突撃し、黒く禍々しいオーラを纏つて邪剣を振るうアナザーと、全身を完全に顕現させて赤黒いオーラを纏つた神器である槍を振るうマジエコンヌ

両者のぶつかり合いは地を割り空を裂きながら徐々に激しさを増していき、静寂に包まれていたギョウカイ墓場を激しく揺るがしていた。

『コプツ?!』

『ハハハハハハハハッ!!!』

しかし、本来のアナザー自身の力を大きく越えた黒い力は、アナザー自身に由来しない事もあつてその肉体を徐々に蝕んでいき、口から腐り果てて黒く染まつた血と溶けた臓器を吐き、邪剣を持つている左腕を中心に、左半身が黒く溶け出していった。

本来なら死んでいなければ可笑しい程の重傷だが――

『殺スコロすころスK O ロス――!!』

『ホウ……ソレホドマデニ汚染サレテイナガラ、マダ呑マレヌカ』

――そんな状態でもアナザーが生きているのは――否、アナザーを生かしているのは、皮肉な事にアナザーに力を与え、その身を蝕んでいる黒い力そのものだった。

腐つた皮膚が剥がれるとその下からは真新しい白い肌が見え、内臓が液化化した結

果、臓器が減ってへこんだ腹部は再生した内臓でまた膨らんでいる。

しかし、再生と同じ速度で元に戻った白い肌は黒く腐り、復活した内臓は再度液状化して溶け落ちているのだ。

今のアナザーは自身を蝕む黒い力によって強制的に生かされているような状態であり、力の行使を止めた瞬間、崩壊する肉体を抑える事は叶わずに死を迎える事となるだろう。

「俺の為に前を殺す！ だから滅べ!! マジエコヌウウウ!!!」

『クハ、クハハハハハハハ!!』

だが、アナザーは止まらない。

自身の肉体が崩れようと、腐り果てようと、黒い靄そのものに成り果てんばかりに纏う黒の濃度を更に深め、更に力を引き出している。

今のアナザーは、犯罪神を完全に滅ぼすと言う一念だけで動いており、犯罪神を完全に滅ぼすまで止まる事はない。

『アアアアアアアアアア!!』

『無駄ナノダ。貴様ニ我ハ倒セナイ』

……例え、どんな悪手を打とうとも

【……………】

邪剣に負けず劣らずの禍々しさを放つ程に黒を深く纏うアナザーと、空間さえ歪ませる程の赤紫のオーラを纏った犯罪神がぶつかり合う瞬間

【……………a l a …… a a a a a a a a ! !】

輝く金眼と反比例するかの如き灰色の鈍い光を放ちながら、女神達が搜索をしていた行方不明のハクがアナザーと犯罪神の衝突に乱入してきたのだった。

【……………】

ハクは、何時の間にかギョウカイ墓場の上空3000メートルを飛んでいた。

銀色だった髪は女神化で金髪と、何故か毛先から3分の1程が黒く変わり、元より白かった肌は病的な——それこそ、死人の如き白さと成り果てていた。

しかし、飛んでいる事から間違はなく女神化している筈なのに身に纏っているプロセツサ^補ユニツト^助は一切無く、戦闘用に改造されている白かった修道服は纏うシエアの力場によって灰色に染まっている。

見開かれた金眼は物理的に光を放ち、下方で——それも遙かな大地で行われている戦闘を見ているのだ。

〔……………a— a…、 a a a a a a a a!!〕

そして輝く金眼を見開いて雄叫びを挙げながら、ハクは地上で行われている決戦の場に乱入していったのだった。

『邪魔を、するなあああああ!!!』

『ハハハハハハハハハッ!!!』

——その結末が、どんな事になるかも知らず

第八十話

それは、聖劍が完成した日の朝の事だった。

「ねっぷううう!?!」

「え、ちよつま…のわあああ!?!」

四女神や女神候補生達が集まっていた謁見の間——否、プラネタワー処かゲームギョウ界そのものでは、大惨事が起こっていた。

「なん、で! こんなに、揺れて…:きやあ!?!」

「チカ! 私の、そばを、離れては、ダメっ、です…:わよ!」

「は、はい!」

ゲームギョウ界は大きく揺れ、万が一倒壊した時の危険性から女神同士が本気で戦っても崩れないを目標に特別頑丈に造られたプラネタワーこそ健在ではあるが、プラネテューヌの街ではあちらこちらで家屋が崩れていた。

暫くして揺れはある程度落ち着いた時、他の国の教祖達の業務用端末が『pipipi!』と鳴り響き、空中にディスプレイが映し出された。

『申し上げます! ラステイションの工業地帯が先程の地震で爆発しましたア!』

「工業地帯の鎮火を優先しながら生存者の確認と保護をして二次災害に気を付けるんだ！」

工業地帯が爆発したと言う教会職員からの報告に慌てて指示を出す
神宮寺ラステイションの教祖

『チカ、さっきの地震で火山が幾つか噴火を始めたわ！ 急いで近隣住民の避難と救助を行うから、生活物資の備蓄を解放する許可と避難先の手配をお願いしたいのだけど』
 『~~~~ツツ?!?!? こんな時に噴火ですって?!?!?』

慌ただしく動き回っているらしきリーンボックス特命課のケイブからの報告にストレスからか額に青筋を浮かべながら備蓄の解放許可を出し、避難先の手配を行う
箱リーンボックスチカの教祖

『さ、先程の地震で崩れてきた雪と一緒に下位から上位の吸血鬼ヴァンパイアの軍勢が接近中！ 只今一生懸命に魔法騎士団が対処していますが……持ち堪えられません！ 至急ホワイトハート様かホワイトシスター様を——ギアアアアアアア——
 『……っ、ロム！ ラム！ 急ぐわよ!!』
 『?!?!?』』

ルウィーに至っては然り気無く滅びかけており、雪崩と共に雪崩れ込んだ大勢の吸血鬼が昼間から暴れ回る地獄のような惨劇が巻き起こっていた。

その対処の為に女神化したブラン達が大慌てでプラネタワーから飛び立ったが、誰も

咎めるものは居なかった。

「そうですね……はい。では、市民は極力プラネタワーへ集めてください——辺境や村に住んでいる方は、兵達を動員して仮の避難先を設置して——ええ、お願いしますね？」

そんなイストワールの一言を最後に、各国の教祖達の事後処理が一段落つき、飛び立ったブラン達こそ戻らなかったもののどうか話が出来る状況になっていた。

「ざっきの揺れは、なんだったのかしら……？」

ノワールがそう言うのも無理はない。

女神の守護が働いてさえいれば、基本的に地震なんて起こらないゲームギョウ界での規模の地震が起こる事は滅多になく、仮に地震が起こっても雪崩と共に吸血鬼が一人や二人ならまだしも軍勢を成してまで昼間に襲撃を仕掛けてくる事はもつとない。

幾らルウィーが雪国で一年の大半を雲が覆っていようが、太陽が絶対に出ない訳ではないのだ。

上位以下では太陽の光を数秒でも浴びれば死が確定しているのに、そんな危険を犯してまで人間の住んでいるエリア——日が照っている時が比較的多いエリアに向かうようなら、とうの昔に吸血鬼という種族は滅びていただろう。

「……………これはっ!?!」

そんな天変地異の前触れのような事態に、原因を調べようとログを閲覧していたイス

トワールは驚きの声を挙げた。

「どうしたの？ いーすん」

「ネプテューヌさん！ 魔剣を材料にした武器は出来上がっていますか？」

「え？ う、うん。ネプギアが一晩でやってくれたからね」

声を挙げたイストワールを心配してネプテューヌが声を掛けるも、そんな時間さえ惜しいとばかりにイストワールは魔剣を材料にした武器は出来たかと問い掛ける。

それに戸惑いながらもネプテューヌは答えたが、それを聞いたイストワールは慌ててギョウカイ墓場へ転移する為の装置を弄り、同時に空中投影式のコンソールを操作して壁に映像を投影しながらこう言った。

「そんなっ!?!」

「でしたら！ 今すぐにギョウカイ墓場へと行つてください！ このままではハクさんが……!?!」

映し出された映像では、現在進行形で紅い塊となつて暴走しているアナザーと以前ノワールがぶつ飛ばされた時に見たウサギのような上半身と四本の脚の付いている胴体部分には赤い目と牙の生えた巨大な口が開き、更にウサギのような上半身の後ろにはそれとは別に四本の腕と大きな単眼の付いた上半身が付いている、あまりにも禍々しい異形の姿をした犯罪神マジエコノヌと思われる存在に向かつて女神化した状態で向かつ

て行くハクが叩き潰され、ボロボロになっていく姿が映し出されていたのだった。

そして場所は替わり、アナザーと犯罪神とハクの三つ巴が発生しているギョウカイ墓場の奥地

「『しぶてえんだよ!! 良い加減に死ねえええ!!』」

『ハハハ……我ハ死ネン……貴様モ、ソノカラ使ウナラバ覚悟スル事ダ』

雄叫びを挙げながら犯罪神マジエコンヌに向かって邪剣を振るうアナザー

何度も打ち合った結果、緩急が付き始めたそれをあっさりと槍の穂先で受け流し、柄で邪剣の剣身を絡め盗ろうとして即座に諦めながら十数メートル程背後に跳ぶマジエコンヌと同時に、黒い力に馴染んでいるのか腐っている面積が徐々に少なくなっているアナザーも、力の加減までは利かないのか大地を大きく陥没させながら背後へ向かって跳躍し、数十メートル程の距離を瞬時に取った。

アナザーが下がったのと同時に、上空より大樹の如き太さの灰色の光が降り注ぎ、ギョウカイ墓場の大地を融かし貫いた。

『Code:BloodとCode:Crimeの生存を確認……殲滅に失敗、Limiterの上限値を引き上げ、再度殲滅を開始します』

『邪魔だつてんでらうが!!!』

それは最初に本来なら緑色で、何故か灰色になつている神器の大剣で一撃を叩き付けて以来、ずっと上空に浮かんでいるハクからの長距離砲撃だった。

黄金に輝く眼を見開きながらアナザーとマジエコンヌを狙うハクは、その両腕を砲身に見立てるかのようの前に突き出し、灰色の光を集束させる。

それを見たアナザーは、邪剣の恩恵で高められた身体能力で強引に空気を蹴り抜き、ハクの元へと向かつて行く。

『我ニ背ヲ向ケルトハ……随分ト、余裕ダナあ!!』
『ぐあッ?!』

しかし、それを犯罪神が見逃す筈もなく

槍を大地に突き刺して飛び上がって一瞬でアナザーを飛び越し、両手を組んでアームハンマーを叩き付けるのだった。

【充填完了……ファイア】

それを見たハクは人形の如き能面に焦りを浮かばせ、狂ったように灰色の光を放ち続ける。

しかしそれは、ギョウカイ墓場の大地を融かすばかりでアナザーに直接ダメージを与える事は一切無かった。

『……………えっ』

やがて放たれる光が底を付くと共に、訳が分からないとでも言いた気なアナザーが大地に空いた大穴から飛び出してくる。

やはり、その身体には傷処か火傷の1つ、水膨れの1つさえなく、寧ろ自滅で受けていたダメージすらも回復して、これまでより少しだけ毛髪が昏く、肌が白くなっているものの、全快と言っても問題がない状態にまでなっている始末である。

『……………』

『……………』

明らかに自分が喰らえばただでは済まない威力の攻撃が何故かアナザーには効果がない——処か、回復までしている。これには犯罪神マジエコンヌも困惑せざるを得なかったのだった。

第八十一話

ハクに撃ち込まれた灰色の光は、俺の身体を融かす処か焦がす事も叶わなかった。

「……………」

『……………』

大地に空いた穴から無傷で出た俺に、撃った張本人（張本神？）のハクも第三者の犯罪神も押し黙ってしまう。

一体なにが遭った……ハクの放つ光、しかもあの充填時間から逆算した威力なら、仮に普段と速度は変わらないとしても俺一人を蒸発させるには十分過ぎる程の火力が片腕の時点である筈なのだ。

『……………』

なのに、あの光は足場の大地を融かすばかりで俺を蒸発させる事もなく、挙げ句に傷付いた身体を回復させる始末だ。

これまでに一度としてなかったあの女の放つ光の一面に思わず別人か否かと疑うが、そんな事はありません。あの光と大地を融かし穴を開けた熱量は紛れもなくあの女の力であり、感じる気配も多少の違和感は有れどあの女のものとは大差ない。

だが、異能の光で回復こんな真似が出来るのならあの女が仮にも女神である以上は公の場で間違いくやるし、今まで気が付いていなかっただけだとしても片腕の一撃は犯罪神を狙っていた。にも拘らず両方とも回復の力を発揮するだけの理由がない。

そもそも、異能というものは力を応用する事までなら出来ても根本的な在り方を変質させる事はまず出来ない。

現に、端から見れば異能の変質だろう俺の扱っている黒い力を俺自身は自分の力だと感じられないし、これまでの血を操る力の方がその出力はともかく、俺自身の身体には良く馴染んでいる。

あの女の力は徹頭徹尾、破壊にしか使えない。出来ても精々が殺菌や加熱料理位のものか？

どちらにしろ、熱を用いて加工するのが精一杯である以上は再生処か回復さえ夢のまた夢、仮に出来たとしても熱気のみで構成された気体生命体のような炎熱属性を吸収する存在位のものだろう。

そして、俺の足場だった大地が融けている辺り異能の根底に在るだろう属性は変わっていない。

同一ないし類似した異能を持った人物の噂は聞いた事がない故に同一人物であるとは思いますが、ならばこの回復は何故——

「……………ニイ」

「『……………?!』」

予想外の事態によつて戦闘中であるにも関わらずつい熟考してしまつたが、それは突然走つた背筋の寒気によつて中断を余儀なくされた。

「ahaha、ahahaha……!!」

突如大声で笑い出したハクは、何時もの澄まし顔とは程遠い、攻撃的などすら言える凄惨な笑みを浮かべて俺を見る。

「『……………うわあ……………』」

「『……………コレハ酷イ』」

今回ばかりは犯罪神の言葉に全面的に同意せざるを得ない。それぐらいに酷い笑みだった。

ハクの容貌が人外の域で整っているから見れるだけで、毛先から3分の1程の長さが黒くなつてゐる長い金髪を振り乱し、両目を見開き黄金の瞳を物理的にも輝かせ、口元は歪に歪み、頬は興奮からか上気して赤く染まる。

不気味とか不快感とか、そんな領域を通り越してただ純粹に、逃げたい……心底そう思った。

「kyaha! kyahahahaahahaha!!」

と穏やかな気持ちで振り降ろされる大剣を見ていた。

本来ならば既に斬られている事とは思うが、恐らくは走馬灯の如く、死に貧した身体が生き残る為の術を探す為の時間を作ろうと思考速度を加速しているのだろう。

しかし、未練も懸念もなくした俺は、この終わりを享受すべく目蓋を閉じ、考えに耽るのだった。

（犯罪神は倒せなかつたが、あの時の無力感は何ら晴らせた。唯一の懸念と言つても良い犯罪神にしても、今の俺を正面から殺せるのなら倒せるのだろうと思う。肝心なウラヌスとの約束こそ何も守れなかつたが、気に入らないとは言えど新たな世代の女神に殺されるなら……ああ、望んでいた結末とは言い難かつたが、これはこれで悪く——）

——そう、思っていたのだから……

（……………？）

体感時間にして一分、二分と過ぎて行き、何時まで経つても斬られない事を疑問に持った俺は、閉じた目蓋を開いた。

【a、 a a——亞aあ阿A娃鏢a闕鴉痾會ア鏗蛙……………】

……そこには、振り上げていた大剣を放り捨て、頭を抑えながら呻き、何かを探すように周囲を見回すハクの姿があつたのだった。

【蛙、両唾——あつ……………】

そうして暫く呻き続けたハクは、足元に居た俺を見た途端に浮かべていた苦悶の表情を安心感と微笑みに変え、突然バタン！ と、俺の上に倒れて来たのだった。

『……………はっ!?!』

俺は、近くでゲラゲラと大笑いをしている犯罪神を気にする余裕もなくして困惑するしかないのだった。

【kyahaha! kyahahahahahahahaha!!】

ワタシ私は、夢現ゆめうつの境界をさ迷いながら、光輝と暗闇の境界に在りました。

それは私の心を焼き、何か取り返しが付かない事をしているような不安と焦燥感が、私の心を焦がし続けました。

【ahahahahahahahahahaha——!!】

それ故か、ワタシ私はひたすら目の前の黒いナニかへと私の一部である神器を振るいませす。

目の前の黒いナニかは、ワタシ私の光で熔け落ちる事がありませんでした。嬉しいで

その一念だけで最後の力を振り絞り、薄れる視界を動かしながら先程の黒いナニかを
探すと――

【蛙、両踵――あつ………】

――みいつけたあ

第八十二話

「蛙、両唾——あつ……………」

そう眩くと、先程までの身も心も焼き尽くすような不快感と身も心も呑み込み押し潰すような、なのにこれまでも何度か感じたこれ以上は無いと言い切れる安心感を抱く矛盾を抱えた謎の圧力は嘘のように霧散し、ハクは地面に向かつて墮ちていった。

『ハ、ハハハ、ハハハハハハ、ハハハハハハハハハハハツ——』

『ちよっ!?!』

バカ笑いする犯罪神を尻目に、俺はハクが地面に叩き付けられる前に駆け寄って受け止めようとする。

例え守護すべき民衆以外には碌な事をしない光の外道とも呼ぶべきあの女でも、一応は次期統治者なのだ。こんな所で死なせるつもりはないし死なれても困る。

死ぬならせめて、^統リー^ベン^ボックス^四が崩壊してからにして欲しい。

それだけの思いから駆け寄り、黒に染まって上昇している肉体能力で墮ちるハクを受け止めたが——

『ガアツ——?!?!』

『クハッ、ハハハ、ハッハハハハハハハハ——！！！！』
力が墮ちる。

身体から際限なく溢れ出し、攻撃の威力をKあしえた黒い力が引き出せなくなり、黒い力を再生に回す事が出来なくなった結果、残留した残り滓のような量の力が肉体を内側から壊していく。

幸い、残留した力が抜けるも早かったから最小限のダメージで済んだが、後数秒遅ければ自分で使った力で戦闘不能に陥っていた所だった。

「な、なにが……!?!」

相変わらずバカ笑いを続ける犯罪神を気にする余裕もなく、まるで接続の切れたネットワークのように、先程までは手足のように——とは言い難かったが、自分の意思で使える程度には扱えていた黒い力の使い方さえ霧が掛かったように不透明なものになっていく。

『——ハッハハハハハハハハ——ゲホッ、ゲホッ!!!』
「どつ言つ……!?!」

黒い力を得る前、それこそネプテューヌ達が捕まる前後にまで力が下がった影響で笑い過ぎて喉が詰まったのか、勝手に死にかけている犯罪神を倒す事も出来ず、確認の意味合いも兼ねて一度ハクから離れても見たが、それでも喪失した力レベルを含む黒い力やその

使い方の知識や感覚さえ戻る事は無かった。

それでも、黒い力さえ戻れば犯罪神にトドメが刺せる故に、必死になって黒い力を引き出す術を思い出そうと記憶を漁るが――

『――貴様、我ヲ笑い殺ス気ダツタノ力?』

「――っ」

――どうやら、時間切れのようだ。

こちらが黒い力を引き出す術を思い出そうと必死になっている間に犯罪神は咳き込んでいた状態から復帰して、ウサギ頭でニヤリと嘲笑うような表情でこちらを見る。

俺は犯罪神との戦いに黒い力を宛にするのは諦めて、本来の構えとは違うものの、左腕で邪剣を正眼に構える。

この戦いでの勝利は実質的に諦める事にはなるが、今右腕で抱えているハクを安全まで運び、目覚めるまで時間を稼げればもうそれで良い。先程の力さえ發揮出来たなら、ハクは犯罪神を正面から叩き伏せる事も出来ると俺は確信している。

(この場で倒せればそれが最善だとは思うし、約束的にも俺が倒したかったが……まあ、最終的に犯罪神が倒せればどちらでも同じだろう)

そしてこれは勘でしかないが、次の覚醒は先程の歪な気配を孕んだものではなく、ハクの自身の本来の力だと、何故だかそう感じられた。

故に俺は、この場からハクを逃がす為の隙を窺おうと犯罪神を視る。

そうして一挙手一投足を見逃す事のないように犯罪神を視る中、犯罪神は嘲笑うような表情のままゆつくりと槍を頭上へ振り上げると——つ?!

「ガアッ!」

それを辛うじてでも防げたのは奇跡だった。

振り上げられただけの構えもなにもない槍に対して死を感じ、咄嗟に侵蝕の倍率を上げられるだけ引き上げ、更には身体から黒い力が抜けても尚、女神の神器を優に超える程の膨大な力が溢れんばかりに漏れ出ている邪剣で叩き付けるように降り下ろされた槍を辛うじて受け止める。

だが、ハクを抱えて片腕であった事と使い手である俺自身の力が急激に低下していたのが原因で、先程のように力尽くで押し返して逆に斬り掛かる処か受けきる事も叶わず、凄まじい勢いで背中から瓦礫の山に叩き付けられる事となった。

『ドウシタ? コノ程度デ殺ラレルヨウナ貧弱極マリナイ加護デハアルマイ』

「ぐ、ぐ、ぐ……」

犯罪神は槍を向けながら訳の分からない事を言うが、こちらはそれを考えられる状態ではない。

今の一撃で俺の身体は背骨が折れ、肋骨も折れたようだ。衝撃で折れた肋骨が心臓を

含めた幾つもの内臓に刺さり、胸や腹を突き破って飛び出している。

更には、右腕で抱えていたハクも遠くに吹き飛んでおり、別の場所で力なく倒れている。

異常に頑丈なのか血の匂いこそしないものの、内部の状態までは分からない。

(今のは、単なる人間……いや、女神でも死ぬるか)

壊れた内臓の修復は諦めて生来の異能で胸部や腹から流れ出ようとする血液を壊れかけの内臓と共に体内へ引き戻し、折れて好き放題に散らばった骨は操作した血液で諸共に体外へ排出する。

同時に、その骨を含んだ血液を使い遠くで倒れているハクの改造修道服と髪を固め、引き摺るようにして更に遠くへと持ち運ぶ。

「……これで、足手纏いは居なくなったか」

ここには血を薄めて嵩増しする水がなく、流した血を最小限度に留めても尚、気絶したハクを避難させる為に血を使うと攻撃用に使える血液はないに等しくなるが仕方がない。

血の制御を一步間違えば内臓を零れないように抑えている血の膜は失われて零れ落ちるだろうし、破れた血管や心臓の血流を異能で代用している以上、これ以上は血を体外へ放出する事は即ち死を意味する。

血のストックは黒い力の影響で使い物にならないほど腐り果てた以上、現状の残量でどうにかする以外にはないのだ。

『貴様が動力ヌナラ、我カラ行クトシヨウカ』

そう言った犯罪神の姿が掻き消えると共に、首から下の感覚が消えた。

「っ——」

声を出そうにも掠れた音さえ出せず、視界もどんどん下へ落ちていく。

そうして頭から地面に叩き付けられ、自分がどうなっているのかを把握した。

(……ああ、首から下が消し飛んだのか)

首から下にあった穴が開いた胴体も、それに付随していた手足さえ、今の俺には無かった。

血を操作して生命維持を図るにしても、肺が無ければ酸素の供給も儘ならない。

感覚的に邪剣を持っていた左腕だけは何処か遠くに有ると感じられるもの、左腕だけではどうにもしようがない。

『……………ム、マサカ、本当ニコノ程度ダッタノカ?』

「———!!」

何かを言っているらしい犯罪神の声が聞こえる。

しかし、俺が見たのは他総てを塗り潰すような闇と、その闇の中で踊り狂う黒い女だ

けだった。

赤黒い空も、黒く染まった呪われた大地も、幾つも山のように積み上げられたゲーム機やソフトも、捕まっていた当時から比べるとその量も濃度も落ちたと感じるギョウカイ墓場

ネプテューヌの所の人間も、ユニを含む候補生も、ブランも欠けた現女神だけでそこへ突撃した私達は、厄介な足留めを食らっていた。

「ハク！ ハク！！ 起きなさい！！」

「……………」

そうベールは叫びながら、何故かこんな場所に居て、何故か死んだように眠るリーンボックスの女神候補生の身体を揺すっている。

（……………まあ、こんな場所で寝てる理由は分からなくもないのだけど）

明らかにアレが関わっているだろう、骨を含んだ血で髪と服の一部を固定して引き摺るように運ばれていたリーンボックスの女神候補生——ハクを見て、私は慌てて来た原因となった情報との差異に顔をしかめて考える。

(……ダメね、情報が少な過ぎる)

しかし、あまりにも情報は少な過ぎ、考える事が無意味と言う結論にしか行き着けなかった。

私は、この訳がわからない現状で唯一はつきりしている方、つまり、犯罪神の力が感じられる方を見る。

「……犯罪神は、あっちの方みたいね……」

その力は数分程飛ばせば埋まる程度とは言え、離れていても尚恐怖すら感じる程に強大で、聖剣があつても本当に勝てるのかと言う不安が消える事はなかった。

なにせ、亜空間と呼ばれてはいても実質的な繋がりは殆どないギョウカイ墓場からゲイムギョウ界にまで空間を超え、震災と言う形で大きな影響を出した程の力だ。

最低でも空間の壁をぶち破って大きな影響が出せるレベルである事は想定でき、そこまでの力は女神にはなく、そもそも四天王を倒しにいった時よりも戦力は下がっている現状では勝率は非常に低い。

(……いいえ、グロウは勝てないのに勝てると言うほど耄碌も盲信もしてなかったわ)

勝てる訳がないと理性で判断したものの、思い出すのは矢鱈自信満々に私達を送り出した信頼できる副官の事だった。

あいつは踏まれたり過剰な労働を課されたりして悦ぶような変態ではあるが、それだけにそんな現状が失われるような結果になる可能性は徹底的に排除するような奴だ。

(……まあ、ユニ達が連れて来られない以上は考えても仕方ない、か)

正直、今のレベルダウンした私達より戦力になり得るユニ達が連れて来ればとは思うものの、無理なものは仕方がない。

犯罪神の力に影響されたのか、地震が治まったと思えば突然町や村に襲撃してきたモンスター軍勢には無駄に戦力が揃っているプラネテューヌは言うに及ばず、ラストイションだってあいつが集めて鍛えた部下が対応するから上位の危険種以外ならある程度は大丈夫なもの、そこで気絶している候補生がモンスター退治を過剰にやっていたリンボックスには対応できる人材が足りずに幾つかの町が陥落しかけていた。

だから同盟を結び、これから守護女神戦争を終わらせる為の和平を結ぶ関係上仕方なく、リンボックスに貴重な戦力であるユニやネプギアを送り込むしかなかった。

(まあ、その穴埋めは後できっちり請求するとして、問題は犯罪神をどう倒すかね)

そう、一番の問題はそこだ。

感じられる気配からして、犯罪神と候補生を含む私達女神の力には大きな開きがあ

り、女神化した私達が全盛期だと仮定して全員で戦っても十中八九で力負けする。

候補生達に加えて雪崩れ込んだ吸血鬼達に対処する為にブランも不在のこの状況では、頼みの聖剣が役立たずだった時の為にグロウ曰く全盛期の私達四人に近い力を持つらしいリーノンボックスの候補生が目覚めるのを待つ以外の選択肢はない。

そんな事を考えていた時かしら？

「……ん、んう……………?」

「ハキユツ?!」

ベールの妹が目を覚ました——ツツ?!?!

「あばばばばば、ヤバイ! ヤバイよこれ!」

ベールの妹が目を覚ましたと同時に、突然犯罪神の力が爆発的に高まる。

その力は先程の比ではなく、先程を蠟燭の火に例えるなら今は山火事と言った所だと思おう。

「な、なに?! なんなのよ、この力は?!」

動揺して慌てるネプテューヌの隣で思わずヒステリックに叫んでしまうが、それほどにどうしようもない力の差だ。

(さっきまでだつて勝てるかどうか分からなかったのに! こんなのに、勝てる訳ないじゃない!?!)

しかし、悪い事は続くようで

『……………』

「あ、ああ……………」

「もうだめだ……………おしまいだ……………」

犯罪神が、目の前に現れた——

第八十三話

『……………ム、マサカ、本當ニコノ程度ダツタノカ?』

目の前の首だけになった生け贄を見据えて、我は思わずそう呟いた。

目の前の生首からは先程まで感じられた膨大な力は感じられず、魂こそ残っているがこの状態から再生して復活する様子はない。

「……………」

念の為、消し飛ばさないように最小限まで力を絞って槍の穂先で突くが、生首が復活する事はなかった。

『フン…………』

まあ、良い。

これで幕切れだと言うのなら、我にとつてそれはそれで別段構わない。

もう少しこの身体のを思う存分振りたいとは思わなくもないが、ウォーミングアップ程度にはなった。

『……………マア、良い……………ナラバ、我ハ■●トノ契約ヲ果タストシヨウ』

原初の我だった頃からの付き合いである神器の槍を地面に突き刺し、我は祈りを捧げ

る。

本音を言うならば祈りを捧げる等したくないが、あのアバズ——御母様はこうしなければ反応しないし碌な事をしない。

にも拘らず心の中で思つた暴言には必ず反応する辺り、何処かで出待ちしているのは明白だ。

心底腹立たしいが、目的の為には仕方がない事なのだろう。

【クスクス……】

そんな上品な笑い声を上げながら浮かび上がる黒い塊を見据え、我は余計な思考罵倒や感情を切つて頭を垂れた。

『……コレデ、良イノダツタカ?』

【ええ、ご苦労様、とでも言つた所かしら?】

そう、我の問いに答えて、目の前の黒い塊——御母様は、先程仕留めた男の生首に對してまるで情欲に狂つた淫魔の如く矢鱈と卑猥な手付きで撫で回した。

【ツツツツツ——!!!】

ただそれだけの事であるにも関わらず御母様はまるで数日程手足の自由を奪われ、薬や改造で感度を高められて焦らすだけ焦らされ続ける生活を強要された女のように悶えている。黒い塊だから表情は分からないが、顔も淫欲に塗れて相当酷い見せられない

よな有り様だろうか？ 容易に想像できてしまったそれは控え目に言って気持ちわ
 rツ?!

「……あら、勘は良いのね？ それ以上考えてたら壊してたわ」

『……申シ訳アリマセン』

全身を穴だらけにするスレスレで止まった全方位を囲む黒いトゲは私の身体を貫く
 寸前で留まっているものの、考えを止めていなかったら確実に貫かれて魂まで消滅させ
 られていたであろうあり得た未来に我は冷や汗を掻きながら、泥のような威圧感を放つ御
 母様に謝った。

「クスクス……そこで御母様と続けない貴女は嫌いじゃないわ……」

そんな思ってもない事を言つて黒いトゲを消すと、御母様は生首をアレな手付きで撫
 で回す作業を再開した。

『……………』

ああ、御母様は恐ろしい。

先程まで御母様と同じ黒い力を器に纏っていた生首等比較対象にもならない程に恐
 ろしい。

あの生首が幾ら御母様と同じ力を纏おうと、その大部分が与えられた力に耐えきれず
 に自壊し、崩壊と修復を繰り返していた。

挙げ句、まともに扱った経験もないのかその大部分が無駄になり、実際に強化に回せていたのはほんの数%程だったろうか？

(ソレデモ我ヲ滅ボシ得ル力ヲ發揮シタ辺リニ御母様ノホストニ際限ナク貢グ金持チノ如キ入レ込ミヨウガ窺イ知レルガ……イヤ、コレ以上ハ止メテオクトシヨウ)

こちらに飛んでくる視線を感じて考えを打ち切ると、何処となく満足気な雰囲気を感じた御母様は喘ぎ声を挙げながら左手と思われる黒い棒を股間と思われる場所に伸ばして――

『……アノ、ソレ以降ハ我ノ居ナイ所デヤツテクダサイ』

『……あら、まだ居たの？』

最初から居ただろう！ と怒鳴りなくなるのを確実に殺されるからと必死に堪えながら、我は淫行に耽ろうとしていた御母様を制止して後にしてくださいと懇願する。

何が哀しくて同僚の中でも一番年上の我より年上な御母様が高々数百歳程度の遙か年下相手に本気で発情して淫行に耽る姿など見せられなければならないのか……まあ、そこは良い。

『……我ハ契約ヲ果タシマシタ。御母様モ自分デ結ンダ契約ハ果タスベキデハ？』

『……ああ、そう言えばそうだったわね』

ここに御母様を喚び出した本来の目的を告げると、忘れていたと言わんばかりのどう

今は特別頑丈な器である事と、器の素材が御母様由来である事から辛うじて崩壊は免れているのだが、それも長くは保たないだろう。

『ア、グ……ガ、ア、ア、ア………?!?』

そんな崩壊間近の器に無理矢理流し込まれる膨大な力に適應する為か、器が強引な肥大化を始めるが——

【もう、醜いからそう言うのはダメって言うてるでしょう?】

そんな御母様の一言と共に膨れ上がろうとしていた筋肉は削り取られ、竜の首から下に変化しかけていた下半身は元の人型のそれへと押し戻される。

背中から生えそうだった二対の腕は弾け飛び、腹部で縦に開いた大口は熔接されたかのように閉じられた。

『ア、アア——ツツツツツ?!?!』

余りの絶望と逃げ場から強引に戻されて行き場をなくした力による痛みで声にならない声が出る。

無理矢理圧縮しても圧縮しきれない力で肥大化させていた部位を削り取られ、元の状態に戻された結果、力の圧縮も儘ならなくなり放出され、器には大きな亀裂が走り出す。

『ナ、ゼ………?!?』

その一言を絞り出すだけで、モンスターの証である蒼い血が私の全身から噴水のように

に嘖き出し、器の崩壊が加速する。

大量の亀裂が走り物理的に崩壊しかけている器を強引に動かして、未だに力を送り込んでくる御母様へとその真意を問い質すが……

「……何故？ 貴女如きにゲームギョウ界は壊せないからに決まっているでしょう？」

『ソ、N、ナ……WA……ケガ……』

そう、そんな筈がない。

今のゲームギョウ界に於ける最高レベルは現存する女神の400代を除けば
トゥルーヴァンパイア 真祖吸血鬼、それも真祖の中で永く生きた上位Lv6000の個体が2、3体だ。

その真祖は来る日の為に眷族の古代吸血鬼エルダーヴァンパイアに守を任せて眠りに就いている上に、吸血鬼自体が個体差は有れど御母様の側である。

人間の力などたかが知れている事も考慮すれば、女神を正面から殲滅しきれただけの力を持てばゲームギョウ界を滅ぼせる。

にも関わらず、我ではゲームギョウ界を滅ぼせないと宣った御母様に『そんな筈はない』と返すと――

「……はあ？ ゲームギョウ界を壊すなら、最低でもLv1000000はなければダメに決まってるでしょう？」

――そんな、恐ろしい話を聞かされた。

『……………ハ?』

ひやく、まん……………?

なんだそれは……………レベル100万……………?

『ク、狂ッテル……………』

それは我が我になる前、女神だった当時のLv100000を裕に超え、神話や伝承の域に達するものだった。

その神話や伝承でさえ、創世記最期の女神はLv100000が四柱、その先代でLv800000である。

創世記処か数万年前よりも弱いモンスターしか残っていない現代では、例えゲームギョウ界に生きる生物を種族問わずに根刮滅ぼしたとしてもそのレベルに届きはしないだろう。

【……………あらあ? 言わなかったかしらあ?】

『……………ア、——!!』

愉しそうな雰囲気の御母様に聞いてない! と叫ぼうとしたが、空気の掠れた音が鳴るばかりで私の口から言葉が出る事はなかった。

口から出る事はなかったが……………やはり、思った事は読んでいるのだろう。愉しそうな雰囲気が更に深まるのを感じる。

あの様子を見るにこの状況は態となのだろうか。自然と、これまで無理矢理抑え込まれてきた殺意や憎悪が湯水のように湧き出してくる。

(アア、モウ……良イカ……)

最早、我慢などしなくて良いのだと

不満を口に出そうとしただけで驢と称して痛め付けられて数万年

どうせ死ぬなら、²¹最後に言いたい事を好き放題言わせても r 「えるところでいたのか

むら？」

『?!?!?!』

²¹大量に流し込まれていた力が、一斉に暴走を開始する。

それはまるで、燃え盛る焔にガソリンを放り込んだように——

【それじゃあ、最後のお勤め行つてらっしやくい♪】

あのキチガイ B B A の言葉を皮切りに、我は内側から爆発した力によつて吹き飛ばされたのだった。

第八十四話

『……………』

「あ、ああ……………」

空間を轆き千切って黒い闇の中から現れた犯罪神は、何故か毛皮の所々が破れて蒼い血を滲ませ、左腕を炭化させていた。

「……………もうだめだー……………おしまいだー」

だけど、その力は相変わらず健在で、四女神が束になっても勝てなかった彼岸花のような四天王の何万倍も強い力がわたし達を威圧する。

「……………」

「ハ、ハク!?!」

女神化したとしても尚、そんな威圧感だけで殺されそうな圧力の中、ベールの妹のハクちゃんは犯罪神に向かって慈母か何かみたいな微笑みを浮かべながら歩き出す。

慌てたベールが止めようと手を伸ばしたけど、威圧感に曝されて腰が抜けたのか、その手がハクちゃんに届く事はなく、どうにか身体を動かそうと足掻いている数秒の間にハクちゃんは犯罪神の直ぐ目の前にまで辿り着いてしまっていた。

「はいいつ?!」

「なん……だと………」

——そう、単なる威圧が物理的な圧力になって女神さえ寄せ付けなくなってる犯罪神の目の前にまで……

「ねえ、犯罪神さん」

『……………』

そんな異常な光景でも尚、余裕綽々な感じに微笑みを崩さないハクちゃんは、微笑んでいるのに不気味な気配を漂わせてポロポロながらも強大な力を振り撒く犯罪神に声を掛ける。

話掛けられた犯罪神はそんなハクちゃんに反応を返す事なく沈黙を保っていたが、次の瞬間、信じられない一言と共に信じられない光景が目映った。

「どうして——そんな虚偽脅しにしなければならない力を撒き散らしているのかしら?」

『……………?!?!?』

なんと、ハクちゃんの一言を皮切りに、犯罪神は脇目も振らず全力で逃げ出したのだった。

「うふふ……逃げがしませんよ?」

『ガ、アアアアアアアア——?!?!?』

ここからだと思中しか見えないけど普段のネプギアみたいな清楚で大人しそうな雰囲気とは違う、あれで意外となんちやって系お色気枠のベール以上に妖艶で、非常に退廃的な雰囲気漂わせながら、ハクちゃんやんは白い光を全身から放ち檻のように囲んで犯罪神から逃げ場を奪った。

光の檻に直撃した犯罪神は全身を焼かれたのか非常に香ばしい匂いを漂わせながら檻を破壊しようと暴れるが、それでも光の檻は壊れる気配を見せない。

それ処か――

「威圧感が、消えていく……?」

――なんと、犯罪神から感じられた絶望的なまでの力の差からくる威圧感が、光の檻に触れて暴れる度にまるで嘘だったかのように消えていったのだった。

『オ、ノレ――オノレオノレオノレオノレオノレオノレオノレ、オノレエエエエ!!!』

暴れても檻が壊れないと判断したのか、光の檻から離れた犯罪神は地の底から響くような声を上げ激怒するが、既に先程までの暴力的なまでの威圧感を見る影もなく

今もなお、犯罪神が女神わがた一人よりも強い事には変わりなかったが、感じられる力は三年前にわたし達を捕らえた彼岸花のような四天王と比べても弱々しいと感じられるまでに弱体化していた。

「……あの、これやってる間は私も動けませんので、早く犯罪神を倒してくれませんか

？」

「え、ええ……そうね」

「ハク……！ ええ、ええ！ 私、全力で犯罪神をぶちのめして差し上げますわ！」

その極端な変化に戸惑っていると、突然振り向いたハクちゃんからジトーつとした目で見られ、早く犯罪神を倒してと急かされる。

……なお、何故かものすごく目をキラキラさせて興奮している殺る気満々と言った感じのベールは全力で見なかつた事にしつつ気にしない事にした。

(……ええ、これが好機なのは変わりないのだし、犯罪神を倒すなら今しかない……のよね?)

実際、ここを逃せば次はないと思える程のチャンスなのだから……けど、どうしてなのかしら？

さつきからこの状況に激しい違和感を感じ、脳に警鐘が鳴り響くのは

ベールもノワールも、誰も気にしていないように見えるけど、あまりにも現状はわたし達女神にとって都合が良過ぎた。

あの時感じた力からして本来なら絶対に勝てないと感じられる力の差があるのだから犯罪神は、わたしが一人では無理でも四人全員で戦えばどうにかなる程度にまで弱体化し、それだけ弱っているにも関わらずわたし達の前に現れた。

弱体化に関してはアナザーが必死に喰い下がって頑張った結果なのだとしても、どうしてそんな状態の犯罪神がわたし達の前にノコノコと現れるのか……………

「ーヌ！ ネプテユーヌ!!」

「…………えっ？」

「なにをブーツとしていますの?」

「早く聖剣を構えなさい! 行くわよ!」

そんな事を考えていると、ノワール達に声を掛けられ、早く構えろと言われた。

「…………ええ、そうね。ごめんなさい…………少し、ブーツとしていたわ」

「まったく、こんな時になにやってるのよあなたは!」

「さあ! このまま犯罪神を倒してハクとゲーム三昧の日々を送りますわ!」

ノワール達に怒られたわたしは聖剣を構えると、それぞれが武器を構えて犯罪神に突撃する準備が整っていた。

「ごめんなさい…………じゃあ、終わらせましょうか」

わたしは先程までの考えを一旦打ち切ると、まるで全てを諦めたように立ち尽くす犯罪神に目掛けて女神化すると同時に聖剣で斬りかかって行つた。

(…………ええ、難しい事はいーすんやあいちゃんにでも相談して、一緒に考えて貰えば良いわよね…………?)

御母様……いや、もうあんな奴をそう呼ぶ必要もないか……契約を違えたクソババアの手で器を半壊にまで追い込まれ、女神達の前に放り出された我は、忌々しいクソババアの執着していた小僧の同類……否、それ以上に複雑で、絶妙なバランスの元に存在が成り立っている小娘の手で拘束されていた。

『オ、ノレ——オノレオノレオノレオノレオノレオノレ、オノレエエエエエ!!!』

拘束から逃れようと暴れる度に光の檻は我の半壊している器を砕き、あのクソババアに飛ばされる時にその領域からどうにか掠め取り、壊れかけた器を補修するように纏っていた力は霧散する。

器を補修するように纏っていた力が霧散した結果、支えを失った器はまた崩れ出した。

崩れそうな器を気合いと執念で強引に保とうとするが、光は我の器の脆い部分を破壊し、既に破損している箇所も含めて内側に潜り込み、結合から溶かしていく。

「でえええええい!!」

焼却されて剥ぎ取られたクソババアの領域から掠め取った力の残滓を含めた力の殆どを費やしても破れない光の檻によつてこの場から離脱する事は不可能であると判断した我は、最早どうしようもないと、全てを諦めて眼前の女神が振るう剣を受け入れた。

『……ガツ……』

「……………えっ」

胸に深々と突き刺さった白く輝く剣は我を内側から焼き尽くさんとばかりにヤミを溶かし、力を削ぎ落とす。

更には、我の核である魂さえも——ああ、そうか

(あ、ああ……我が、消える……)

クククツ……まさか怒りや憎しみで暴れ回り逃してしまいもう二度と来ないと思っていた好機が、あの時の後悔がこんな形で晴らされるとはな……

眼前の女神達は訳が分からないとでも言いた気な表情で何もせず剣に大人しく貫かれた我を見るが、知った事ではない。

(あれは確か9000年前だったか……あの時の剣が、堕ち果てた光が、我を本r——

——)

——そうして、我はゲームギョウ界から完全に消滅した。

第八十五話

犯罪神が討たれる前の事

「アーツハハハハハ!!」

「不味い! もう一匹イ!!」

「ヤバイ、にギヤアアアアアアア———?!?!」

「ヨツバシー———!!!」

どんよりと曇った空の下、陽光が分厚い雲に遮られているのを良い事に、ルウイーでは雪崩に便乗して山奥から降って来た100を超える数の吸血鬼達が昼間からまるでキノコのような形状の民家を焼き、黒い塔のようなデパートを襲い、兵士達を蹴散らしながら生き血を啜り、逃げ遅れた人々を串刺しにして遊び血と肉を撒き散らしていた。

「弱いなア? ニンゲン」

『G u r u r u———』

「ヒイツ?!」

「ひ、怯むな! 後少しでブラン様達が帰ってくる! それまで何としても耐え凌ぎ市民を守るんガファア!!」

「ぎやはつ、ギヤハハ……アーツハハハハハア!!」

「た、隊長……!!」

狼に囲まれて怯える兵士を鼓舞しようと声を上げる隊長へと凄惨な笑みを浮かべた吸血鬼が一瞬で迫り、腹に腕を挿し込んで直接繋がった血管を傷付ける事なく心臓を抉り出す。

抉り出しても尚、ドクン、ドクン、と鼓動を刻んでいた心臓を持ち主の部下達に見せ付けるようにして吸血鬼の一人は握り潰し、その血をシャワーのように浴びながらゲラゲラと嗤って、次の獲物を品定めするかのような眼差しを残された部下達に向ける。

それはまるで屠殺場の豚を視るような眼差しであり、次はどれにしようかなど、誰を選べば少しでも多く嗜虐的な嗜好を満たせるかを考えている眼差しであった。

「い、イヤダ……死にたくない……死にたくない!」

「たす、助け……助けてください……!」

「……………?!?!」

次は自分達の誰かだ……そう感じた三名は、逃げる意思すら喪つてガタガタと震え続ける。

しかし、そうなるのもやむ終えないのかもしれない。

純粹な吸血鬼の括りに於いて最下位である下位吸血鬼レッジャーアンパイですら人間で言う所の中堅冒

険者——凡そレベル40前後のパーティーと互角に渡り合える。

戦闘の技術やレベル自体が極端に低い場合はもう少し落ちるが、それでもレベル30のパーティー1つ位なら高い身体能力と心臓か頭部を大きく破損しない限り再生し続ける高い不死性で返り討ちにしてしまうのが、最下位の^{レッサイヴァンバイア}下位吸血鬼だ。

「さあ、巻族共！ 削ぎ落とすように喰らい貪れやア!!」

『G A A A A A——!!』

「二」あ、…あああああああ——「二」

ましてや、今兵士達の目の前に居るのは^{グレートタワーヴァンバイア}上位吸血鬼の巻族であり、^{グレートタワーヴァンバイア}上位吸血鬼から

^{ヴァンバイア}吸血鬼としての異能である『変身能力』『巻族作成』『不死性』の中から2つ、『巻族作成』と『不死性』を引き継いだ^{ミドルヴァンバイア}中位吸血鬼だ。

その力は^{レッサイヴァンバイア}下位吸血鬼の比ではなく、最低でも上級冒険者に匹敵する。

根本的に生物としての規格が違う。幾ら厳しい環境や散発的に襲い来る吸血鬼の脅威が常に在るルウイーの兵が精強とは言えど、雪崩で指揮系統を破壊され、下位が多数と言えど100近い数の吸血鬼に襲われれば成す術もないのだ。

「二」——「?!?!?」

そして、声にならない悲鳴を上げながら、三名の隊員達は狼に貪り喰らわれた。

立ての頃、遊び半分で放り込まれた下水道がそんな感じだった）がする脳髓や肉がぶち撒けられていてあまりに酷い悪臭から視界が地味に滲むし大体が雪に埋もれて判り難いが、一部の三角錐の直ぐ下にクリーム色の緩やかなカーブを付けた壁が見える。

あれは確カルウイーの首都で主流のキノコっぽい家だ（と思う）

（かれこれ何百年も前の様式しか知らないが、あれから変わってなければここは……）

「おっ／あっ」

……直ぐそこでばったり会った同胞で人間時代からの幼馴染みのシユア（なお、ちよつと臭い）と顔を合わせたまま、お互いに完全に硬直する。

金髪紅眼で人形っぽい美少女と評判だが割かし感情表現豊かで口数も多いシユアもなんとなくさつきから感じる嫌な予感を感じているのか、唾を飲み込むような音を響かせて普段の能天気そうなアホ面を真顔にして緊張を走らせている。

（おいおいおい、よく見たらご近所さんやお隣の集落の連中がそこらじゅうに……どうなっただよこれ）

俺達は元はその辺の町や村から食糧調達係りだとか身の回りの世話だとか、何かしらの理由で浚われて吸血鬼にされた後、親の上位く中位の吸血鬼が何等かの要因で死んで解放された元人間の中間位く下位の吸血鬼達の集まりだ。

親の吸血鬼は大體人間を家畜以下のゴミとしか思っていない場合も多く、その辺の村が進行方向に在ると俺達に命令して更地にしてから通るなんてのもザラにあった。

その時の悪行から（大體時間が経ち過ぎていて帰る場所は残っていないが）人間の所に帰る訳にもいかず、かと言って生まれながらの吸血鬼——真祖ではなく、三代以上両親が吸血鬼だった連中の事だ——達の中に戻っても居心地が悪い、悪過ぎる。

一応、親無しの扱いはそいつが強ければ相応の地位をくれるし割りとは自由なのだが、弱ければ容赦なく奴隷落ち

人間を浚つて吸血鬼にしたら親がどんな扱いをしていても基本的に干渉は許されず、上位個体から浚つた人間に惨い拷問を加える遊びに誘われたら強制参加

精神を病んで狂つた奴は数知れず、あまりの悲惨な扱いや拷問を加える事に堪えかねて防衛と監視の任務を請け負う形で親無しが集まって人間の近くに集落を作ったのが俺達の集落の成り立ちだ。

……まあ、そんなこんなで今日まで自衛以外で人間を襲わず、集落の中で大人しく生活しながら人間の国の動向を蝙蝠の眷族作成持ちが報告して偶に飛んでくる女神から隠れながら時折来る上からの命令をこなし平和な日々を過ごしていた訳だが——

「……………これ、ヤバくね?」

「……………どー考えても、ヤバイよね?」

あちらこちらから立ち昇る黒煙

たまに聞こえてくる大質量が雪に叩き付けられたような音

ついでに聞き覚えのある複数の高笑い

シユアの顔が引き吊るのが見える。恐らく俺の顔も似たような表情だろう。

背筋から冷や汗を垂らしながら、現状を大体把握しつつある為^に万が一の可能性と言

う名の現実逃避^{希望}に逃げ出しそうになるが――

(…いや、ひよつとしたら極小の可能性で俺等は何もやってない、この惨状は別のモンズ

ターン「アハ、~~あ~~はははははは……アーツハハハハハハハハハハ!!!」――アウトオオオオ

オオオオオオオオ(?!?)

――万が一~~ぬ~~可能性と言う名の現実逃避^{希望}なんて影も形も無かった……

「止めんかこのアホンダラア!!」

「あいたつ!?!」

何をトチ狂ったのか、人間を頭上で八つ裂きにしてシャワーのように降り注ぐ血を浴

びていた知り合いの頭を少し強めに引っ叩いて正気に戻す。

その際少々後頭部が陥没したが、その位ならどうせ数秒で治るからこの際どうでもい

い。

「族長!?! 族長――!?!?!」

今はとにかく、なんとしても族長を見付けて集落の存続を掛けた全力遁走あるのみだ——!!!

「エイト、族長はあっち！」

「おう！ 何としても女神が出張る前に逃げる！ 人（？）生最後の食事があんなドブみたいな代物で堪るかあああああ!!!」

そうしてシユアと一緒に族長を見付けた俺等は、集落の同胞連中と一緒にあって偶に暴走中のバカを張つ倒し、山の方へと全速力で逃げている。

しかしその最中、何故か唐突にふつと頭を過る事があった。

（……そう言やあいつ、今は何処でどうしてんだ？）

昔、一度顔を見ただけだが、不愉快だと俺とシユアの親をぶつ殺し、そのまま肅正に來た古代や上位の連中を皆殺しにして盟主の真祖から名誉真祖の位を貰つてた名前も知らない紅い髪の女を思い出した。

（……いや、まあ、それは後でじっくりと考えりや良いわな）

どうして気になったのかは知らないが、生きてるならどっかで会えるだろ……どうせ、人間と違って吸血鬼魔は殺されるまで死なねーんだし

『なんとしてもここを死守しろ！ 後はもう無いんだぞ!!』

『替えの結界発生装置を持ってきました!』

『そこに配置しろ!』

『クソツッ！ ホワイトハート様達が犯罪組織絡みの騒動で居ないこんなタイミングで……!!』

教会の中からは中の兵士達が結界を張り必死に耐えているのか、時折爆発音を響かせながら吸血鬼達への怨嗟の声を上げている。

しかしそんな抵抗も長く保ちそうになく、教会に取り付いた吸血鬼達の拳や脚が叩き込まれる度に、一部では威力こそ減衰されているものの、波打つように揺らぐ結界を超えて壁に直接触れられていた。

幸いにも、触れて直ぐに弾かれているから指で壁を穿られる事は防げているが、それでもそう遠くない内に結界は破られ、壁を破壊した吸血鬼達が雪崩れ込む事だろう。

「……………えか」

そんな光景を見たブランは、下を向いて拳を固め、肩を震わせる。

「…上等じゃねえかあのヤロウ!!」

そう言ったブランの纏う純白のスクール水着のようなプロセスユニットが黒く変色する。

神器である白く神々しかった戦斧は黒く染まり、より凶悪に、より禍々しい形状に変化してその重量を増す。

同時に纏う力が増大し、可視化する程の灰色の光が小柄な身体から発せられた。

「絶対に許さねえぞムシケラ共が！ 全員まとめてブチ殺してやる!! 一匹も逃がさねえぞ覚悟しろオ!!!」

そうして、怒りの臨界点を越えたブランはどこぞの宇宙の帝王のような事を言いながら激怒し、教会に取り付いている吸血鬼達を瞬く間に皆殺しにしたのだった。

犯罪神が自決した直後の事

「っ、——あア……?!」

ズル、ズル——と引き摺るようにして前に進みながらギョウカイ墓場の黒い大地に焦げ茶色の染みを残し、少し進む度に火花を散らしながら全身から機械の部品をバラ撒いている赤黒い塊があった。

「ギ、イギユ——!!」

この機械と肉の入り雑じった塊は嘗て、犯罪組織マジエコンヌ四天王、ブレイブ・ザ・ハード直属の配下として活動していた。

それがどうしてこうなっているのかと言うと、単純だ。

ブレイブ・ザ・ハードが負ける直前に隠れ家へと逃がしたのだが、そこで敬愛する上司を喪い無気力状態になって脱力した事で治療や修理が遅れ、疲労やダメージが回復して行動が可能となる前に犯罪神とアナザー、そしてハクの戦いの余波をまともに浴びたのである。

余波だけで全身にもう助からないと断言できる程の致命傷を負ったそれは、意識もまともに保てない激痛を感じながらも狂気のような意思と妄執の如き激情故に生き続け、文字通り這いつくばってでも進み続けていた。

「あ……………」

全ては、自分から唯一無二の希望を奪ったアナザーへの復讐の念故だ。

それだけが、今の肉塊——リリスの壊れた肉体を突き動かす力となっていた。

「バ、——ばあつ……ゴブ、ゴフア……?!」

しかし、それも限界が近い。

口からオイルが混じった大量の血を吐くと、前に伸ばした腕がぱたりと地に落ちる。

「……………」

そのままピクリとも動く事はなく、リリスはギョウカイ墓場の奥深くで力尽きた。最早、リリスが活動を再開し、それ以降も命を繋ぎ続ける事はないだろう。

——ある物が飛んで来なければ、だが

突如として凄まじい勢いで飛んで来たそれは、この世の全ての悪意と呪詛を束ねたかのような禍々しい剣……否、剣の容をした邪悪であった。

それは常人が視認すればそれだけでモラルや理性を蒸発させ、英雄と呼ばれる程の逸材であろうとも、恒星にも等しい輝きを放たぬ限りは握った瞬間に悪へ堕ち、二度と醒めぬ狂乱の檻へ囚われるだろう。

「……………がはっ?!?!」

そんな邪悪の権化の如き剣はリリスの胴体と思われる部位に突き刺さる。

その瞬間、ピクリとも動かなかつたりリリスは海老反りになり、ビクン、ビクンと跳ねた。

「ア、あ亞痾極蛙両鉦鏹闕會婀娃聖唾阿吾——!!!」

それに伴い、酷く大きな悲鳴を上げて全身を黒い闇が覆う。

「『……………これ、は——』」

それから暫くして悲鳴が収まり黒い闇が晴れると、そこには生まれたままの姿で立つ女の姿が在った。

女は自分の体を見遣り、その手で全身をペタペタと触り出す。

その髪は金糸のように煌めき、忙しく動く瞳は翠玉の様な翠色をしている。

手足はすらりと長く、括れもあり女性らしい丸みを帯びた豊満な体付きだと言える。

そんなおおよそ一般的に美女と呼べるだけの美貌を持つ女の姿で唯一可笑しいと言えるのは、邪悪の権化の如き剣と同化した左腕だけだった。

『……は、ハハ——』

『……はは、つはは……ハハはハハはハハはつはははハハはハハはハハはははは——』

——!!!

女は唐突にギョウカイ墓場の赤黒い空を見上げて乾いた笑い声を上げると、何もかもが狂っているとやわんばかりに狂った笑みを浮かべ、狂笑を上げる。

そのまま暫く狂ったように笑い続けた女は、両手で顔を掻き筆ると同時に底冷えするような声で呟いた。

『………コロス』

そして左腕と完全に同化している剣を振るい、空間を引き裂くと引き裂いた空間に身を投じたのだった。

第八十六話

犯罪神が自殺してから早数ヶ月

プラネタワールの屋上から復興した街を眺め、わたしは憂鬱な気分でいーすんに話し掛ける。

「……………たくさん、死んじゃったね」

「そうですね……………」

うちとノワールの国は比較的被害の少ない方だったけど、ブランとベールの国は相当酷い事になっていた。

それでも昔はアナザーの狩りを良く見てたからグロ耐性の高い方なわたしでも目を逸らしたくなるようなR20Gまつしぐらな状態のルウィーと、噴火の影響で国土の4分の1がマグマに埋まり、4分の3に火山灰が飛んで農家の人達に影響が出るリーンボックス

それぞれ復興作業を進めてはいるし、早くに復興が終わったプラネテューヌとラスティションもそれぞれ支援協力はしてるけど、ルウィーだけはどうにも上手くいかない。リーンボックスの方は人と作物の被害こそどうにもならなかったけど、巻き上げられ

た大量の火山灰はラステイションの工場地帯に置いてる煙を吸い込む機械を改造した火山灰を吸い込む機械で除去して太陽の光を確保できたし、東側の固まったマグマはうちのロボットと削岩機で3割を撤去し終えた。

ベール達も色々やってみるみたいだからとりあえず来年には回復すると思うんだけど……………

「…………ルウィーは、大丈夫かな？」

「…………きつと、大丈夫だと思います」

ルウィーの方は人や建物の被害が大き過ぎた。

地震で起きた雪崩で指揮系統が混乱してる時に雪崩に紛れて吸血鬼達が一齐に襲い掛かり、兵士の人達は大部分が犠牲になって雪崩から逃げ遅れた民間人を救助して逃がすだけで精一杯

それでも雪崩から逃げ遅れた人達の殆どを教会に逃がしてブランが帰ってくるまでの間、吸血鬼の猛攻を耐えたんだからすごいよね…………

「…………わたしも、頑張らないとダメだよね」

今まで書類仕事はネプギアに任せてあんまりしてこなかったけど、これを知って何もしないなんて——

「…………ネプテューヌさん？ 熱でもあるのですか？ ……まさか、犯罪神と戦った時に

頭を打ったのが今になって——」

「ねぷっ！ ナチュラルに頭の心配された!?」

——つて考えてたらいーすんに頭の心配された!?

「ちよつといーすん！ 流石にそれは酷くない!?」

「いえ……今までのネプテューヌさんを見ていたら当然の反応だと思うのですが……ああ

！ 不貞寝しようとしなくてください！ 謝ります！ 謝りますから——!」

（ふーんだ！ 良いもん！ 明日から本気出すもん!）

いーすんにひどい事を言われたわたしは、無職の人みたいな事を考えながら近くにあ
る椅子に寝転がって猫みたいに丸くなるのだった。

（……そう言えば、あれからアナザーは何処に行ったんだろう?）

まあ、いつか……明日いーすんに聞いてみよつと

……その日わたしは、綺麗だけど寂しい世界の夢を見た。

ここは光の膜に覆われたギョウカイ墓場と同質同系統でありながら、ゲームギョウ界

の地獄であるギョウカイ墓場を超える深く暗い闇の中

『……………』

そこにぼこぼこと泡を立てながら、青白い肌をした銀髪の女の生首は闇に浮かんでいる。

その顔は非常に満足そうであり、未練や不安など微塵もないと言わんばかりの微笑みである。

『ハハハ！ 見ろよ●●●、犯罪神の奴、無様に負けた癖に満足そうに逝ってやがるぜ！』

『……………ああ、妬ましい……………何故、私の時にこうなつてくれなかったのか……………』

そんな女を聖剣で自決した犯罪神と呼び、愉しそうに嗤う蒼い髪の少女と羨望と嫉妬の眼差しを向ける紫銀色の髪の少女は闇の中から浮かび上がる。

『そりゃあ無理な話だな！ 全てはあのあば————と、危ない危ない、お母様がどれだけ個人的な感情を抑えられるかだぜ？』

『……………ええ、分かっています……………』

蒼い髪の少女は、妬まし気な紫銀色の髪の少女を皮肉るように言葉を紡ぐが、ただ一点、アバズレと言いつけ掛けた時に蠢いた闇を見て言葉を改め、誰かにアピールするかのよう強調して『お母様』と言いつけ直した。

紫銀色の髪の少女はそんな蒼い髪の少女を見ながら分かっているとは言うが、あからさまに『私、不満です』と言わんばかりの表情である。

『……では、次は私の番ですのぞ』

しかし時間が押していて不満ばかりも言っていられないのか、今にも舌打ちをしそうな表情を隠しめせずに紫銀色の髪の少女は光の膜に触れて消えていく。

『おう！ 精々気を付けるんだな！』

そう言つて不満そうな表情のまま光の膜に消えていった紫銀色の髪の少女を見送り、蒼い髪の少女は独り眩き始めた。

『しっかし、オレの後輩達もバカばかりだよな……自分達が女神として、人類として滅びる事が出来る最後のチャンスを不意にしちまつたんだから——』

その表情は侮蔑はあれど確かな親しみが感じられた紫銀色の髪の少女へ向けていた複雑な笑みとは違い、侮蔑と否定のみが色濃く出た嘲笑である。

『——まあ、アイツが失敗するまでオレの出番はないんだし、反逆絞り滓逆のオレ鍵を言いくるめる謳い文句と計画の見直しでもして待つているかな……？』

『フフフ——』と笑いながら、蒼い髪の少女は先程の紫銀色の髪の少女と同じく、闇の中へと消えていったのだった。

「——」

……その数秒後、犯罪神と呼ばれた女の生首以外に誰も居なくなつた闇から突然現れた淡い金光が紫銀色の髪の毛の少女が消えた方向とは反対の方向に向かつて光の膜に消えていったのを最後に、闇の中は静寂に包まれた。

犯罪神に殺された俺は、気が付けば何処とも知れない闇の中に囚われていた。

【●●●……】

『……………』

眼前で女が息を吸う度、犯罪神に消し飛ばされて失つた筈の首から下——何故か邪剣を持つていた左腕だけがない——に内側から大量の蟲に喰い荒らされているかのような激痛が走る。

しかし、最近は上半身と下半身を叩き斬られて泣き別れにされたり全身を摂氏数千℃の光熱でこんがり焼かれたり内側から全身の血管が破裂したり全身が腐りながら再生したりと、痛みには事欠かない日々を送っていたが為にそれほどの苦痛ではない。寧ろ

ろ、こうしてものを考える余裕がある位だ。

問題は――

【■◆□◇、??+##%*+||??\$】

(……何をいつているのかがさっぱり分からん)

――目の前の女が何をいつているのかさっぱり分からんと言う現状だ。これではここが何処なのかすら聞けん。

……まあ、厳密には聞くだけなら出来るだろう。それを相手が理解できるかどうかと、返ってきた内容を俺が理解できるかが問題なだけで

(……まあ、先代^ウと今代^ラのプラネテューヌ^スの女神^ネならそれぞれ天然ボケ^{テュー}噛^ヌしながら何故か会話を成立させたり、強引にボケ倒して一方的に話し掛けるのだろうがな)

この変化に乏しい暗い世界の中で何時からか、時間の感覚が薄れる程度には長い時間を束縛され、機嫌の良さそうな笑顔を浮かべ続けている黒い髪の女に意味の分からない言葉を聞かされ続けている現状には疲れた。

現実逃避気味に赤紫^ウの髪^ラをした女と薄紫^ネの髪^ブをした少女^スに会った時の事を思い出して無聊を慰めていると、目の前の女に変化があつた。

【……………●●●――】

……いや、何をいつているのかは相変わらず分からんし外見には然程変わらない。何

故か機嫌の良さそうな笑顔もそのままだ。

ただ……なんと言うか、後ろからバツサリと串刺しにされそうな嫌な予感と全身をズルズルの肉塊されそうな威圧感が放たれているだけだ。

(……いや、それ殺気だよな……)

どう考えてもこうして呑気に考えている場合ではないのだが、脱出しようにも首から下は動かず、表面だけは形を保っているようだがその内側は虫食いだらけで張りぼて同然(だと思う)

どうやってか、この闇で拘束されていなくともまともに動けない以上、慌てても仕方ない……筈だ。

不思議と不安も恐怖も感じず、それどころかそこそこ長い付き合いである筈のネプテューヌやイストワールにさえ感じた事のない安心感とを感じている現状に困惑している、唐突に殺気らしき圧力が収まった。

┌───┐

(……あ、収まった)

少し時間が経って突然殺気が収まると同時に、目の前の女はそれなり以上に豊かな胸元で腕を組むと、うんうん、とでも言いた気に首を縦に振る。

何か機嫌を直すような事でもあったか、それとも殺気を振り撒いていた理由でも無く

なったのか

言葉は分からないが、初対面なのに妙に好意的で友好的な女は俺に手を差し向けると、内側から蟲に喰い荒らされるような感覚が治まった。

(……ああ、こいつが原因だったのか)

何時もなら内側から蟲に喰い荒らされるような感覚を味合わされたらキレて襲い掛かっている筈なのだが、やはりそんな気にはなれない。

何故だ……そう考えていると、目の前の女は突然意味の分からない／分かりたくない行動に出始めた。

【▲▼△▽——】

(えっ)

女は突然服を脱ぎ出し、その白い裸身を晒け出した——

『……………え、ちよ…………?!』

——だけに留まらず、その右半身から黒い触手を大量に生やし、左半身の白い肌には大量の魔法陣を展開した。

その魔法陣からは無数の蟲、そして獣を放出し、俺の周囲を囲んでいる。

しかも、魔法陣から召喚された獣は例外なく狂ったサイズのナニを立たせ、召喚された蟲は股間のナニの形状をしている。

アレ等が自慰用とかでないなら……………

『……………（白目）』

……………なんと言うか……………あー、うん

『もう、どうにでもなれ』

その後、俺は目の前の女の手で全身の穴と言う穴に触手や蟲、獣のナニを無理矢理ぶち込まれ、ズルズルになったり壊れたりした肉や内臓は蟲や獣が食った。

機能不全を起こした内臓やズルズルになった皮膚や肉、欠損した部位はどうやったのか、今までの人生で感じた激痛を全て束ねて数百倍に濃縮したような痛みで意識を失っている間に完全に再生されていたのだった。

Re ; Birth 3編 第一章く呪怨のオーベルテュー
レ

第一話

これは、早朝の事です。

「たあああああ!!」

『G y u a a a a a a a a a a !!』

目の前の翼が生えている私の倍以上の大きさをした茶色い二足歩行のトカゲ……エ
ンシエントドラゴンを以前、犯罪組織との戦いで熔けてしまった大剣よりも更に耐熱性
を上げた大剣で一刃両断して、その骸に光を浴びせて浄化します。

「はあ、はあ——っ」

犯罪神マジエコンヌが滅びて早3年、一時期は噴火で酷い事になった大地は最近やっ
と自然を取り戻しました。

火山灰で覆われていた空は晴れ渡り、(教祖のチカさんに聞いた限りだと)リーンボツ
クスは失った自然の4割を取り戻しました。

私はと言えば、相変わらず民を脅かすモンスターを討伐する日々を送っています。

……ええ、送ってはいるんですが——

「はあ、はあ……足りない……もつと、もつと闘いを——」

——犯罪組織マジエコンヌとの戦い以来、私はどうにも壊れてしまったようです。

少し戦うだけで、それも危険種とはいえ、下位の半ば程度のエンシエントドラゴンを一匹倒すだけで身体は火照り、息は切れ、心臓は激しく脈打っています。

なのに目は周囲にモンスターは居ないかと忙しく動き、スライヌにすら反応してしまいませんし、身悶えが止まりません。

なら戦わなければ良いのでは？ とチカさんや姉さんには言われましたが、戦わないでいると今度は姉さんにその矛先が向きそうです。

……いいえ、姉女神さんならまだいいです。

最悪姉さんに矛先が向いても、姉さんなら私と戦っても軽くあしらってくれる筈です
し

問題は、無力英雄以下な民にそれが向いた時です。

「……はあ、はあ……つ、いけない……」

思わず股間に伸びた大剣を持った左手の手首を右手で掴みます。

ああ、早く、早く強いモンスターと闘わないと……つ、治まりが、効かなく……

「あ、ああ……」

……また、やつてしまいました

あまりの昂りで尿道が弛んだのか、チヨロチヨロと尿を漏らして下着とスカートを濡らしてしまいました。

浄化の光で直ぐに蒸発して乾くのですが、なんと言うか……この年にもなつてお漏らしと言うのは、色々と恥ずかしい限りです。

まあ不幸中の幸いと言うか、それで多少は落ち着いたのですが、所詮は多少多少の快感と共に、それ以上の欲求不満が蓄積されているのを感じています。危険種さえ一撃で滅してしまう私とともに殺り合える相手は中々居ません。

姉さん達女神か、ネプギアさん達女神候補生か、でなければ——

「つ、彼は救済の対象です。彼は教育の対象です。彼は守護すべき対象です。彼は——」

ダメです、アナザーさんはそもそもそう言う対象ではありません。

例えどれだけ強くても、彼は救済の対象であり、教育の対象であり、守護すべき対象です。

……ああ、でも——

「——ああ、でも……今思えばあの日々は、とても素晴らしい日々でしたね……」

頬が吊り上がり、凶悪な笑みを浮かべているのを感じます。

本当に、本当なら人間であるアナザーさんはどれだけ強くても対等の存在ではありません。
せん。

人間彼等は女神私達が守護すべき対象で、何処までいっても慈愛以上の感情は向かない……ええ、向いていません。向いていませんとも

「……ええ、本当に……私は心底自重すべきです」

デモ、ドウシテモアナザーサントタタカイタイトカンガエテイルワタシガソンザイシテイルノモ、タシカナノデシタ

『……随分とまあ、壊れているようですね』

「っ!? 誰ですか!!」

咄嗟に何処かで聞いたような声がした方へ顔を向けると、そこには紫銀色の髪をした女の子の姿がありました。

『私が誰か、なんてどうでも良いですよね?』

「……いいえ、どうでも良くなありません」

女の子は、若いのにまるで生きるのが嫌になったお爺さんみたいな顔で私に話し掛けてきます。

自殺志願者か、でなければ引退して隠居した高位な魔法使いの方かと辺りを付け、私

は女の子に声を掛けます。

「どうされましたか？　ここは最寄りの村から3 Kmは離れた危険地帯ですよ。」

『ええ、あなたに用があります。グリーンシスター』

どうやら女の子は私に用があつたらしいのですが、ものすごく嫌そうな顔をされているのはどうしてなのでしょう？

どうにも、本当なら顔も見たくないのに業務上仕方がないからと嫌々声を掛けたように見えるのですが……私、初対面の方にそんな顔をされるような事はしていませんので……

「どのようなご用でしょうか？　相談ですか？　懺悔ですか？　依頼ですか？」

……まあ、嫌々だろうとなんだだろうと、用があると言うのなら私はそれを聞き、最善の答えと結果を出せるよう尽くすのみです。

……ええ、例えここが懺悔室でなくとも、依頼されたら後ろ暗い内容だと喧伝するようでも、誰にも聞かれたくない悩み位ならば聞き届け、その上でどうするかを決めれば良いのです。

『ああ、単純な話です』

そう言った女の子が唐突に指を『パチン』と鳴らすと、私の視界はぐにやり、と歪み始めるのでした。

「あう……な、なにが——」

『……今から少し、この次元から退去していて欲しいだけです』
……そんな女の子の言葉を最後に、私は意識を失うのです。

第二話

太陽を分厚い雲に覆い隠された日の昼間、ネプギアと一緒にこれからおやつプリンを食べようとした所だった。

『ネプテューヌ!! そちらにハクは来ていないかしら!?!』

突然のベールからの通信は、そんな言葉から始まった。

「……ハクちゃんが行方不明?」

『そうですわ!』

どうにか興奮するベールを宥めて詳しく話を聞くと、どうやら昨日の早朝からモンスター退治に出掛けたハクちゃんが帰って来ないらしい。

それだけなら、偶々泊まり掛けでモンスター退治に出てるだけなんじゃって思うんだけど……

『いいえ! ハクはわたくしに黙ってお外でお泊まりしちゃうような娘じゃありません!!』

「お、おおう……」

……とまあ、こんな感じでベールがすごい怒るから、とりあえず行方不明って事にし

てみた訳なのです。

『とりあえず、あなたも仕事か遊びで外を回るようならハクを探してください！』

あー……本題はそっちか……

「えー……わたし今日、書類関係の仕事をする日なんだけど……」

けど残念、ネプ子さんは今日は書類仕事の日なのです。

『えっ』

「えっ」

……と思っていたんだけど、映像越しのボールからあり得ない事を聞いたような顔をされた件（泣きそうです）

『えっと……ネプテューヌ？ あなた、本当に大丈夫なのかしら？』

「むー、心外だなく……わたしだってあれから結構がんばってるんだよー！」

「お姉ちゃーん！ プリン持ってきたよー！」

あ、ネプギアがプリンを持って来た！

「やつほーい！ プリンだく！！」

『ちよ、ネプテューヌ!? まだ話は終わって——!!』

ボールがまだなにか言ってるみたいだけど、わたしは目の前に差し出されたプリンに釘付けなのです（はーと）

犯罪神が倒れてから、3年の月日が過ぎました。

お姉ちゃんに頼まれたおやつプリンを取って来た私は、自分の分を食べながらプリンを夢中のお姉ちゃんの代わりにペールさんのお話を聞くのでした。

『——と、言う訳ですの』

「そう、なんですか……」

なんでも、ハクさんが昨日から帰って来ないから探すのを手伝って欲しいって話で、他の国も仕事のついでとして探して貰えるよう話が付いているみたいです。

(ハクさんが行方不明?)

ハクさん、同じ女神候補生なのに私とユニちゃん、ロムちゃんラムちゃんが協力して戦っても勝てないあの人——アナザーさんをたった一人で何度も叩き潰した、恐らく女神候補生としての枠内なら最強の女神候補生

あの方が行方不明になる状況は想像が付かないけど、きっとそれが出来るとしたら

.....

『お願いできるかしら?』

「……………あ、はい! 外回りの仕事のついでとしてなら、大丈夫だと思います」

何時の間にか血が出るぐらい握り込んでいた右の拳を開いて、ベールさんの質問に答えました。

(ううん、そんな筈はないよ……………だってアナザーさんは、犯罪神との戦いで命を落としたんだから——)

ハクさんを行方不明——最低でも殺せるだけの力を持っている人は、私の知る限りではもうお姉ちゃん^女達位のもんです。

ええ、きつと何処かで迷子になってしまっているか、でなければ困っている誰かの為に奔走してるのでしょうか。多分

(……………だって、アナザーさんはもう死んだのですから)

……………でないと、私……………

『……………ネプギアちゃん?』

「え?」

『どうしましたの?』

あれ…………? 私、何を…………?

『疲れているのでしたら、無理にハクを探さなくても良いですからゆっくり身体を休ま

せてくださいまし』

「いえ、大丈夫です……とりあえずいーすんさんには話を通しておくので、私とお姉ちゃん二人でモンスター退治をしながら探す事になると思いますがそれで大丈夫ですか？」

『え、ええ……お願いしてもよろしいかしら？』

何故か不安そうなボールさんに『大丈夫、問題ありません』と返して、通信を切りま

す。
そのまま残っていたプリンを食べきると、余韻に浸ってるお姉ちゃんに声を掛けて一緒にいーすんさんの所にまで足を運ぶのでした。

(……ハクさん、あんまり心配は要らないと思うけど、何処に行つたんだろう?)

どうして、こんな事になつたんだろう……

『起きなさい……もう必要な力はあるでしょう？』

プラネテューヌの市街地で大小問わず何人ものアイドルのマネージャーを勤めている大物マネージャー……の、身の回りの世話やアイドルへの伝令、その他諸々の雑用のアルバイトをしていた私は、気が付いたら何処かの森の奥で目の前のアイドルでもやっていけそうな紫掛かった銀髪の女の子に拘束され、良く分からないけどすごく嫌な感じのする黒い……それも、品がある感じの黒じやなくて泥とか汚物とかがぐちゃぐちゃになった感じの黒い光を浴びせられていました。

「アあ、アアあ——!!」

何故、私はこんな目に遭っているのでしょうか？

分かりません……銀髪の女の子はまるでゴミを見るような目を向けてくるだけで質問には何も答えてくれませんでしたし、雇い主のマネージャーやその事務所とアイドルはともかくとして、私自身はこんな事をされなきゃいけないような怨みは買ってない……と思います。

お金だつて忙しいのに連絡ミスや買い物の間違いとかが、色々な失敗も多くて最低賃金よりも少ない金額しか貰えてないから余裕がないですし……?!?!

「アあアあアアあアあアあ——?!?!」

痛い痛い痛い痛い、恐い恐い恐い恐い、痛い痛い痛い痛い恐い恐い恐い恐い——!!?!?
『全く、どうして私がこんな事までしなければならないのか……』

【アハハハハハ!!】

女の子の言葉が全く耳に入らなくなるほどの激痛と恐怖が際限なく湧き上がり、周囲が暗くなると同時に内側から私のものと思われる、なのに私と違って慢心とも思える程の絶対の自信に満ちた笑い声が響き始めました。

【これがアタシい？ まアた随分とくつだらな、ゴミみたいな人生送ってんのねエ!】

内側から響く声はそう言つて私の人生を全否定して嘲笑いました。

どうしてか、私の意識を苛み続けていた痛みと恐怖は治まりましたが、これまでのダメージからか一言も喋れそうにありません。

「……………」

【けエどお! これからはこのアタシがアンタみたいなの価値もない屑を価値のあるモノにしてあげるから、泣いて喜んで従いなさい?】

図らずとも黙りを決め込んだ私に対して一方的に酷い事を言うその声は、こう言いました。

【あんたの身体は私のもの、さあ、全てを明け渡して、さっさと眠つてろツてーのオ!!】
そんな言葉と同時に、後頭部をゴン! と殴られたような衝撃が走つて、私の意識はそのまま泥のような場所に沈んでいったのでした。

【アハハ、あははははは……アーツハハハハハハハハハハ!!】

そんな私が最後に見て聞いたのは、そんな悪意と傲慢さに塗れた醜い笑い声と、そんな笑い声を上げて醜く顔を歪めた……私と良く似た顔の露出が激しい女の人なのでした。